

よし たけ

吉武遺跡群

XV

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 9

福岡市埋蔵文化財調査報告書第775集

—西区金武古墳群吉武S群3～28号墳等調査報告—

2003

福岡市教育委員会

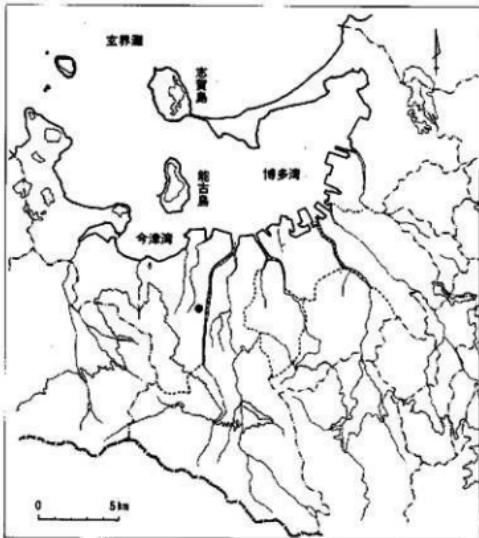
吉武遺跡群

XV

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 9

—西区金武古墳群吉武S群3~28号墳等調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第775集



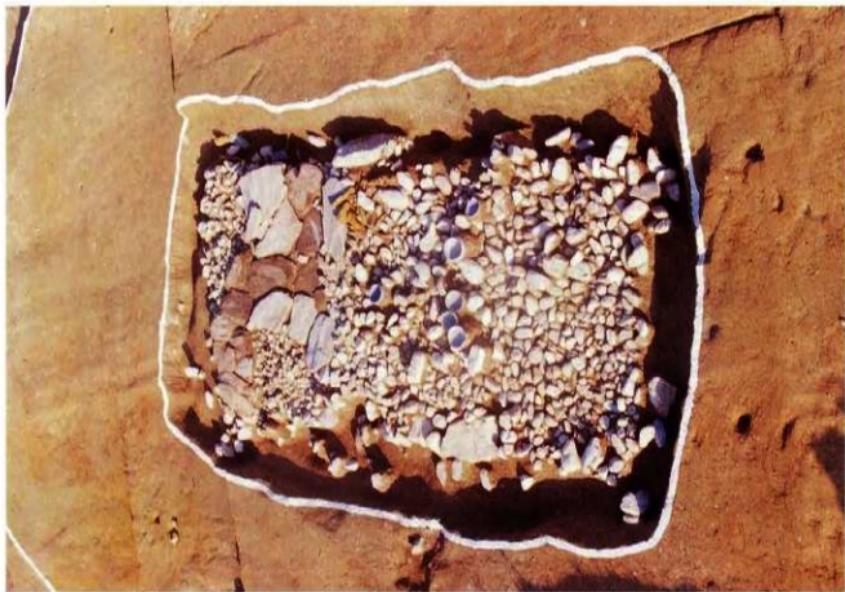
遺跡略号 YST4・6・9
調査番号 8335, 8416, 8535

2003

福岡市教育委員会



吉武M・N地区古墳出土状況全景（南から）



1. S-27号埴石室出土状況（南西から）



2. S-27号埴石室出土状況（南から）



S9号墳出土金鋼製素環頭龍文太刀

序

古来より大陸との交渉の門戸であった福岡地域には、各時代の文化交流を示す数多くの遺跡が残されています。

これらのうち市の西部に位置する早良平野にある吉武遺跡群は、主に弥生時代から平安時代にかけての密度濃い遺構が分布する遺跡として知られています。

本遺跡群では、昭和56年度から飯盛・吉武地区圃場整備事業が計画され、この事業によって失われる埋蔵文化財について、事前に記録保存のための発掘調査が必要となり、事業が完結する昭和60年度まで発掘調査を継続して行いました。

そして調査の結果、旧石器時代～古代の豊富な遺構や遺物が見つかっています。

これらの遺跡は、旧石器時代後期、紀元前2世紀に遡る弥生時代前期末から中期初頭期の特定集団墓地や大型掘立柱建物群、紀元前後に造営された墳丘墓、古墳時代中期の帆立貝式古墳や円墳群および同時期の集落跡、奈良時代末から平安時代中期の官衙又は寺院などです。

さて、以上の調査成果につきましては、これまで8冊の報告書を刊行してまいりましたが、今年度は古墳時代円墳群についての報告を行います。

本書が市民の方々の埋蔵文化財についての理解と認識を高める手助けとなり、さらに学術研究や生涯教育の分野において有用なものとなれば幸甚です。

最後になりましたが、本調査から報告書刊行に関わった飯盛・吉武地区土地改良組合の方々、発掘作業員の方々、整理作業員の皆様に対し、心から感謝を申し上げます。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例　言

1. 本書は、福岡市西区「飯盛・古武地区土地改良事業」(圃場整備)に伴い、昭和56年から60年度に発掘調査を実施した『吉武遺跡群』および『金武古墳群古武S群』についての調査報告書である。
2. 発掘調査で検出した各遺構は、種類別に略号を付し、土壙をSKもしくはSH、溝遺構をSD、竪穴住居跡をSC、据立柱建物をSB、小柱穴をSP、弥生時代壙棺墓をK、石棺墓をSS、土壙墓SXとして扱っている。
3. 本書に使用した遺構実測図は、調査担当者の他に別記の調査員が行った。また、山上遺物の実測図作成は調査担当者の他に本課、長家　伸、藏富士　寛、屋山　洋、比佐陽一郎、平川啓治、緒方俊輔（現高千穂町教育委員会）、坂本真一、小田裕樹（九州大学）、古澤義久（九州大学）、大澤元裕氏の協力で行った。
4. 本書に掲載した遺物の復元作業は、整理作業員の小森佐和子、土堺崎つや子、安野　良、副田則子、木村厚子、国武真理子、芦馬恵美子が行った。
5. 本書に使用した実測図面類の整図およびトレースは、調査担当者の他に整理作業員安野　良、副田則子、井上加代子が行った。
6. 本書に使用した遺構写真的撮影は、下村　智（現別府大学助教授）、常松幹雄が行い、遺物写真は加藤良彦、横山邦維が行った。
7. 本書で使用した方位は、全て磁北である。なお、真北は西偏6度21分である。
8. 本書の執筆は横山、加藤で分担して行い、編集は加藤と協議のうえ横山が行った。
9. 発掘調査で出土した遺物や図面・写真類は、『収蔵要項』について活用できるよう整理を行った後、埋蔵文化財センターに搬入し、収蔵・保管する予定である。
10. 表紙題字は、杉山悦子氏（元埋蔵文化財センター）にお願いした。記して感謝いたします。

本文目次

第一 章	はじめに	
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
第二 章	遺跡の立地と環境	5
第三 章	発掘調査の記録	
	調査概要	9
第一 節	古武S群L・M・N地区の調査	
	概 要	11
1.	S群3号墳	11
2.	S群4号墳	11
3.	S群5号墳	19
4.	S群6号墳	22
5.	S群7号墳	27
6.	S群8号墳	33
7.	S群9号墳	35
8.	S群10号墳	49
9.	S群11号墳	66
10.	S群12号墳	71
11.	S群13号墳	82
12.	S群14号墳	84
13.	S群15号墳	88
14.	S群24号墳	89
15.	S群25号墳	94
16.	S群26号墳	96
17.	S群27号墳	99
18.	S群28号墳	101
第二 節	吉武S群D・E・F地区の調査	
	概 要	115
1.	S群16号墳	119
2.	S群17号墳	119
3.	S群18号墳	121
4.	S群19号墳	125
5.	S群20号墳	127
6.	S群21号墳	127
	小 結	129
		129

第三 節 吉武S群F・G・H10~12地区の調査	
概 要	130
1. S群22号墳	131
2. S群23号墳	132
第四 節 古墳時代土壙墓・石棺墓・甕棺墓などの調査(6次調査)	
概 要	135
1. SX01土壙墓	136
2. SX02土壙墓	140
3. SX04土壙墓	144
4. SX05土壙墓	144
5. SX06土壙墓	144
6. SX07土壙墓	145
7. SX08土壙墓	145
8. SX09土壙墓	146
9. SX10土壙墓	146
10. SX12石棺墓	147
11. SX13石棺墓	148
12. SX14甕棺墓	148
13. SX15甕棺墓	149
14. SX16甕棺墓	151
15. SX17甕棺墓	151
16. SX18甕棺墓	152
17. SX19甕棺墓	153
18. SX22	154
19. SX23	155
第五 節 試掘調査出土の遺物	157
第四 章 おわりに	163

挿 図 目 次

Fig. 1	吉武古墳群位置図(1/50,000)	5
Fig. 2	飯盛山山麓周辺古墳群分布図	6
Fig. 3	吉武古墳群古武S群分布図	8
Fig. 4	吉武古墳群古武S群調査区図	9
Fig. 5	吉武S群L・M・N地区古墳出土状況全体図(折込み)	
Fig. 6	吉武S群3号墳出土状況実測図(1/100)	12
Fig. 7	吉武S群3号墳山上状況横断面実測図(1/100)	13
Fig. 8	吉武S群3号墳埋葬施設実測図(1/40)	14
Fig. 9	古武S群3号墳出土土器実測図(1/4)	15
Fig. 10	古武S群3号墳出土鉄器実測図(1/2・2/3)	17
Fig. 11	古武S群3号墳出土装身具実測図(1/1)	18
Fig. 12	吉武S群4号墳出土状況実測図(1/100)	19
Fig. 13	吉武S群4号墳出土状況断面実測図(1/100)	20
Fig. 14	吉武S群4号墳出土土器実測図(1/4)	21
Fig. 15	吉武S群4号墳・祠出土鉄器実測図(1/1・2/3)	22
Fig. 16	吉武S群5号墳出土状況実測図(1/100)(折り込み)	
Fig. 17	吉武S群5号墳埋葬施設実測図(1/40)	23
Fig. 18	吉武S群5号墳出土土器実測図(1/4)	24
Fig. 19	吉武S群5号墳出土鉄器実測図(1/2)	25
Fig. 20	吉武S群6号墳出土状況実測図(1/100)	27
Fig. 21	吉武S群6号墳出土状況断面実測図(1/100)	28
Fig. 22	吉武S群6号墳埋葬施設実測図(1/40)	29
Fig. 23	吉武S群6号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)	30
Fig. 24	吉武S群6号墳山上土器実測図(1/4)	31
Fig. 25	吉武S群6号墳出土鉄器実測図(1/2)	32
Fig. 26	吉武S群6号墳出土装身具実測図(1/1)	32
Fig. 27	吉武S群7号墳出土状況実測図(1/100)	33
Fig. 28	吉武S群7号墳埋葬施設実測図(1/40)	34
Fig. 29	吉武S群7号墳出土土器実測図(1/4)	34
Fig. 30	吉武S群8号墳出土状況実測図(1/100)	35
Fig. 31	吉武S群8号墳出土状況断面実測図(1/100)	36
Fig. 32	吉武S群8号墳埋葬施設実測図(1/40)	37
Fig. 33	吉武S群8号墳副葬遺物出土状況実測図(1/25)	38
Fig. 34	吉武S群8号墳出土土器実測図(1)(1/4)	39
Fig. 35	吉武S群8号墳山上土器実測図(2)(1/4)	41
Fig. 36	吉武S群8号墳出土鉄器実測図(3)(1/4)	43
Fig. 37	吉武S群8号墳出土装身具実測図(1/3・1/4)	45
Fig. 38	吉武S群8号墳山上装身具実測図(1/1)	46

Fig. 39	吉武S群9号墳出土状況実測図(1/100)	49
Fig. 40	吉武S群9号墳出土状況断面実測図(1/100)	50
Fig. 41	吉武S群9号墳埋葬施設実測図(1/40)	51
Fig. 42	吉武S群9号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)	52
Fig. 43	吉武S群9号墳周溝南側遺物出土状況実測図(1/20)	53
Fig. 44	吉武S群9号墳出土土器実測図(1)(1/4)	54
Fig. 45	吉武S群9号墳出土十器実測図(2)(1/4)	56
Fig. 46	吉武S群9号墳出土土器実測図(3)(1/4)	58
Fig. 47	吉武S群9号墳出土土器実測図(4)(1/6)	60
Fig. 48	吉武S群9号墳出土鐵器実測図(1/1・1/2・1/3・1/4)	62
Fig. 49	吉武S群9号墳出土装身具実測図(1)(2/3)	63
Fig. 50	吉武S群9号墳出土装身具実測図(2)(2/3)	64
Fig. 51	吉武S群10号墳出土状況実測図(1/100)	66
Fig. 52	吉武S群10号墳出土状況断面実測図(1/100)	67
Fig. 53	吉武S群10号墳埋葬施設実測図(1/40)	67
Fig. 54	吉武S群10号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)	68
Fig. 55	吉武S群10号墳出土十器実測図(1/4)	69
Fig. 56	吉武S群10号墳出土鐵器実測図(1/2)	70
Fig. 57	吉武S群10号墳出土装身具実測図(1/1)	70
Fig. 58	吉武S群11号墳出土状況実測図(1/100)(折込み)	
Fig. 59	吉武S群11号墳出土状況断面実測図(1/100)	71
Fig. 60	吉武S群11号墳埋葬施設実測図(1/40)	72
Fig. 61	吉武S群11号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)	73
Fig. 62	吉武S群11号墳出土土器実測図(1)(1/4)	74
Fig. 63	吉武S群11号墳出土十七器実測図(2)(1/4)	76
Fig. 64	吉武S群11号墳出土土器実測図(3)(1/4)	78
Fig. 65	吉武S群11号墳出土土器実測図(4)(1/4)	79
Fig. 66	吉武S群11号墳出土鐵器実測図(1/2)	80
Fig. 67	吉武S群11号墳出土装身具実測図(1/1)	81
Fig. 68	吉武S群12号墳出土状況実測図(1/100)	82
Fig. 69	吉武S群12号墳埋葬施設実測図(1/40)	82
Fig. 70	吉武S群12号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)	83
Fig. 71	吉武S群12号墳出土土器実測図(1/4)	84
Fig. 72	吉武S群13号・14号墳出土状況実測図(1/100)	85
Fig. 73	吉武S群13号墳埋葬施設実測図(1/40)	86
Fig. 74	吉武S群13号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)	86
Fig. 75	吉武S群13号墳出土十器実測図(1/4)	87
Fig. 76	吉武S群13・14号墳出土鐵器実測図(1/2)	87
Fig. 77	吉武S群14号墳埋葬施設実測図(1/40)	88
Fig. 78	吉武S群14号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)	88

Fig. 79	吉武S群15号墳出土状況実測図(1/100)	89
Fig. 80	吉武S群15号墳埋葬施設図(1/40)	90
Fig. 81	吉武S群15号墳副葬遺物出土状況実測図(1/25)	91
Fig. 82	吉武S群15号墳出土土器実測図(1/4)	92
Fig. 83	吉武S群15号墳出土鐵器実測図(1/3)	93
Fig. 84	吉武S群24号墳出土状況実測図(1/100)	94
Fig. 85	吉武S群24号墳埋葬施設実測図(1/40)	94
Fig. 86	吉武S群24号墳出土土器実測図(1/4)	95
Fig. 87	吉武S群25号墳出土状況実測図(1/100)	96
Fig. 88	吉武S群25号墳出土土器実測図(1/4・1/6)	97
Fig. 89	吉武S群25号墳出土装身具実測図(1/1)	98
Fig. 90	吉武S群26号墳出土状況実測図(1/100)	99
Fig. 91	吉武S群26号墳出土上器実測図(1/4)	100
Fig. 92	吉武S群27号墳出土状況実測図(1/100)	101
Fig. 93	吉武S群27号墳副葬遺物出土状況実測図(1/30)	102
Fig. 94	吉武S群27号墳出土土器実測図(1/3)	103
Fig. 95	吉武S群27号墳出土鐵器実測図(1)(1/2)	104
Fig. 96	吉武S群27号墳出土鐵器実測図(2)(1/2)	105
Fig. 97	吉武S群27号墳出土装身具実測図(1/1)	106
Fig. 98	吉武S群27号墳出土鐵滓実測図(1/2)	106
Fig. 99	吉武S群27号墳周溝内土器出土状況実測図(1/80)	107
Fig. 100	吉武S群27号墳周溝内土器実測図(1)(1/3)	107
Fig. 101	吉武S群27号墳周溝内土器実測図(2)(1/3)	109
Fig. 102	吉武S群27号墳周溝内土器実測図(3)(1/3)	110
Fig. 103	吉武S群27号墳周溝内土器実測図(4)(1/3)	111
Fig. 104	吉武S群27号墳周溝内土器実測図(5)(1/3)	112
Fig. 105	吉武S群27号墳検出時土器実測図(1/3)	113
Fig. 106	吉武N14地区 1号配石造構出土状況実測図(1/25)	113
Fig. 107	吉武N14地区 1号配石造構出土土器実測図(1/3)	114
Fig. 108	吉武S群28号墳周溝出土土器実測図(1)(1/3)	116
Fig. 109	吉武S群28号墳周溝出土土器実測図(2)(1/3)	117
Fig. 110	吉武S群27・28号墳検出面出土土器実測図(1/3)	118
Fig. 111	吉武S群27・28号墳出土繩文土器実測図(1/3)	118
Fig. 112	吉武S群D・E・F地区占墳・土壤出土状況全体図	119
Fig. 113	吉武S群16号墳出土状況実測図(1/100)	120
Fig. 114	吉武S群16号墳出土状況断面実測図(1/100)	121
Fig. 115	吉武S群16号墳出土土器実測図(1/4)	121
Fig. 116	吉武S群17号墳出土状況実測図(1/100)	121
Fig. 117	吉武S群17号墳埋葬施設実測図(1/40)	122
Fig. 118	吉武S群17号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)	123

Fig. 119 吉武S群17号墳出土土器実測図(1/4)	124
Fig. 120 占武S群18号墳出土状況実測図(1/100)	126
Fig. 121 吉武S群18号墳埋葬施設実測図(1/40)	126
Fig. 122 占武S群18号墳出土土器実測図(1/4)	126
Fig. 123 吉武S群19号墳出土状況実測図(1/100)	127
Fig. 124 占武S群19号墳出土土器実測図(1/4)	127
Fig. 125 吉武S群20号墳出土状況実測図(1/100)	127
Fig. 126 吉武S群20号墳出土土器実測図(1/4)	127
Fig. 127 吉武S群21号墳出土状況実測図(1/100)	128
Fig. 128 吉武S群21号墳出土状況断面実測図(1/100)	129
Fig. 129 吉武S群21号墳出土土器実測図(1/4)	129
Fig. 130 吉武S群F・G・H10~12地区古墳出土状況全体図	130
Fig. 131 吉武S群22号墳出土状況実測図(1/100)	131
Fig. 132 吉武S群22号墳出土土器実測図(1/4)	132
Fig. 133 吉武S群23号墳出土状況実測図(1/100)	133
Fig. 134 吉武S群23号墳出土土器実測図(1/4)	134
Fig. 135 吉武遺跡群6次調査土壤群出土状況全体図	135
Fig. 136 6次調査SX01土壤墓出土状況実測図(1/30)	136
Fig. 137 6次調査SX01土壤墓出土鐵器実測図(1/1)	136
Fig. 138 6次調査SX01土壤墓出土装身具実測図(1)(1/1)	137
Fig. 139 6次調査SX01土壤墓出土装身具実測図(2)(1/1)	138
Fig. 140 6次調査SX02土壤墓出土状況実測図(1/30)	140
Fig. 141 6次調査SX02土壤墓出土装身具実測図(1)(1/1)	141
Fig. 142 6次調査SX02土壤墓出土装身具実測図(2)(1/1)	142
Fig. 143 6次調査SX04土壤墓出土状況実測図(1/30)	144
Fig. 144 6次調査SX05土壤墓出土状況実測図(1/30)	144
Fig. 145 6次調査SX06土壤墓出土状況実測図(1/30)	145
Fig. 146 6次調査SX07土壤墓出土状況実測図(1/30)	145
Fig. 147 6次調査SX08土壤墓出土状況実測図(1/30)	146
Fig. 148 6次調査SX09土壤墓出土状況実測図(1/30)	146
Fig. 149 6次調査SX10土壤墓出土状況実測図(1/30)	147
Fig. 150 6次調査SX12石棺墓出土状況実測図(1/30)	147
Fig. 151 6次調査SX12石棺墓出土土器実測図(1/4)	147
Fig. 152 6次調査SX13石棺墓出土状況実測図(1/30)	148
Fig. 153 6次調査SX13出土土器実測図(1/4)	148
Fig. 154 6次調査SX14甕棺墓出土状況実測図(1/30)	148
Fig. 155 6次調査SX14甕棺実測図(1/4)	149
Fig. 156 6次調査SX15甕棺墓出土状況実測図(1/30)	150
Fig. 157 6次調査SX15甕棺実測図(1/4)	150
Fig. 158 6次調査SX16甕棺墓出土状況実測図(1/30)	151

Fig. 159	6次調査SX16甕棺実測図(1/4)	151
Fig. 160	6次調査SX17甕棺出土状況実測図(1/30)	152
Fig. 161	6次調査SX17甕棺実測図(1/4)	152
Fig. 162	6次調査SX18甕棺墓出土状況実測図(1/30)	152
Fig. 163	6次調査SX18甕棺・副葬土器実測図(1/4)	153
Fig. 164	6次調査SX19甕棺墓出土状況実測図(1/30)	153
Fig. 165	6次調査SX19甕棺実測図(1/4)	154
Fig. 166	6次調査SX22出土状況実測図(1/30)	154
Fig. 167	6次調査SX22出土器実測図(1/4)	155
Fig. 168	6次調査SX23出土状況実測図(1/30)	156
Fig. 169	6次試掘調査出土遺物実測図(1)(1/4)	158
Fig. 170	6次試掘調査出土遺物実測図(2)(1/4)	159
Fig. 171	6次試掘調査出土遺物実測図(3)(1/4)	160
Fig. 172	6次試掘調査出土遺物実測図(4)(1/4)	162

図 版 目 次

P1. 1	吉武S群M・N地区古墳出土状況全景(西から)
P1. 2	1. 吉武S群M・N16地区古墳出土状況全景(東から) 2. 吉武S群3号古墳石室出土状況(西から)
P1. 3	1. 吉武S群5号古墳出土状況(西から) 2. 吉武S群5号古墳石室出土状況(東から)
P1. 4	1. 吉武S群6号古墳出土状況全景(南から) 2. 古武S群6号古墳石室出土状況(南から)
P1. 5	吉武S群7号古墳出土状況全景(東から)
P1. 6	吉武S群8・12号古墳出土状況全景(東から)
P1. 7	吉武S群8号古墳石室出土状況(南西から)
P1. 8	1. 吉武S群8号古墳石室奥壁部副葬鉄器出土状況(南東から) 2. 吉武S群8号古墳石室奥壁部副葬鉄器出土状況(南東から)
P1. 9	1. 吉武S群8号古墳石室副葬須恵器出土状況(南から) 2. 吉武S群8号古墳石室副葬鉄鎌出土状況(南西から)
P1. 10	吉武S群9号古墳出土状況全景(北東から)
P1. 11	1. 吉武S群9号古墳石室出土状況(西から) 2. 吉武S群9号古墳石室発掘状況(南から)
P1. 12	1. 吉武S群9号古墳石室内副葬遺物出土状況 2. 吉武S群9号古墳石室内副葬遺物出土状況
P1. 13	1. 吉武S群9号古墳石室内副葬龍文太刀出土状況 2. 吉武S群9号古墳石室内副葬鉄刀・轡出土状況
P1. 14	1. 吉武S群9号古墳石室内副葬龍文環頭太刀出土状況

2. 吉武S群9号古墳石室内副葬玉類出土状況
P1.15 1. 吉武S群9号古墳石室内副葬遺物出土状況
2. 吉武S群9号古墳石室内副葬遺物山上状況
P1.16 1. 吉武S群9号古墳周溝内遺物出土状況(P18)
2. 吉武S群9号古墳周溝内遺物出土状況(P1~24)
P1.17 1. 吉武S群9号古墳周溝内土師棺出土状況(P18)
2. 吉武S群9号古墳周溝内土師棺人骨山上状況(P18)
P1.18 1. 吉武S群9号古墳周溝内遺物出土状況
2. 吉武S群9号古墳周溝内遺物出土状況
P1.19 1. 吉武S群9号古墳周溝内遺物出土状況
2. 吉武S群9号古墳周溝内遺物出土状況
P1.20 1. 吉武S群10号古墳山上状況全景(南から)
2. 吉武S群11号古墳出土状況全景(南から)
P1.21 1. 吉武S群11号古墳出土状況全景(北東から)
2. 吉武S群11号古墳石室副葬遺物出土状況
P1.22 1. 吉武S群12号古墳石室山上状況(南から)
2. 吉武S群12号古墳石室出土状況(南から)
P1.23 1. 吉武S群13号古墳副葬遺物出土状況
2. 吉武S群15号古墳出土状況全景(東から)
P1.24 1. 吉武S群17号古墳石室山上状況(西から)
2. 吉武S群17号古墳副葬須恵器出土状況(西から)
P1.25 1. 吉武S群17号古墳副葬須恵器出土状況(東から)
2. 吉武S群22号古墳出土状況全景(南から)
P1.26 1. 吉武S群23号古墳出土状況全景(南から)
2. 吉武S群24号古墳石室出土状況(北から)
P1.27 1. 吉武S群25号古墳石室出土状況(北から)
2. 吉武S群26号古墳石室出土状況(北から)
P1.28 1. SX01土壤墓山上状況(北東から)
2. SX01土壤鐵器・玉類出土状況(南西から)
P1.29 1. SX02土壤墓出土状況(北から)
2. SX02土壤墓玉類出土状況(南から)
P1.30 1. SX04土壤墓山上状況(南西から)
2. SX06土壤墓出土状況(北から)
P1.31 1. SX10土壤墓出土状況(北東から)
2. SX12石棺墓山上状況(西から)
P1.32 1. SX13石棺墓出土状況(北から)
2. SX15甕棺墓出土状況(北東から)
P1.33 1. SX17甕棺墓出土状況(東から)
2. SX18甕棺墓山上状況(北東から)
P1.34 1. 吉武S群27号墳出土状況全景(南から)

2. 吉武S群27号墳石室出土状況(南から)
- P1. 35 1. 吉武S群27号墳石室内副葬遺物出土状況(南東から)
 2. 古武S群27号墳石室内副葬土器出土状況(南から)
 3. 吉武S群27号墳石室内副葬鉄器出土状況(西から)
 4. 古武S群27号墳周溝内遺物出土状況(北から)
- P1. 36 1. 1号石組み出土状況(南東から)
 2. 1号石組み出土状況(北から)
 3. 1号石組み出土土器
- P1. 37 S27号墳出土土器類
- P1. 38 S27号墳出土鉄器類
- P1. 39 S28号墳周溝内出土土器類
- P1. 40 1. S3号墳出土土器類
 2. S4号墳出土土器類
- P1. 41 1. S5号墳出土土器類
 2. S6号墳出土土器類
- P1. 42 S3・6・8号墳出土土器類(1)
- P1. 43 S3・6・8号墳出土土器類(2)
- P1. 44 S8号墳出土土器類(3)
- P1. 45 S9号墳出土土器類(1)
- P1. 46 S9号墳出土土器類(2)
- P1. 47 1. S9号墳出土土器類(3)
 2. S10号墳出土土器類
- P1. 48 S11号墳出土土器類(1)
- P1. 49 S11号墳出土土器類(2)
- P1. 50 1. S12号墳出土土器類
 2. S13号墳出土土器類
 3. S15号墳出土土器類
- P1. 51 1. S15号墳出土土器類
 2. S17号墳出土土器類
- P1. 52 1. S18号墳出土土器類
 2. S19号墳出土土器類
 3. S20号墳出土土器類
 4. S22号墳出土土器類
 5. S23号墳出土土器類
- P1. 53 1. S24号墳出土土器類
 2. S25号墳出土土器類
- P1. 54 1. S26号墳出土土器類
 2. 試掘調査出土土器類(1)
- P1. 55 試掘調査出土土器類(2)
- P1. 56 試掘調査出土土器類(3)

- P1.57 1. 試掘調査出土土器(4)
 2. SX13棺内副葬土器
 3. SX14甕棺使用土器
 4. SX15甕棺使用土器
- P1.58 1. SX16甕棺使用土器
 2. SX17甕棺使用土器
 3. SX18甕棺使用土器および副葬土器
- P1.59 1. SX19甕棺使用土器
 2. SX22出土土器
- P1.60 吉武S古墳群出土鉄器類(1)
- P1.61 吉武S古墳群出土鉄器類(2)
- P1.62 吉武S古墳群出土鉄器類(3)

表 目 次

Tab. 1 吉武遺跡群調査一覧	4
Tab. 2 古武S群8号墳出土装身具一覧	47
Tab. 3 吉武S群9号墳出土装身具一覧	65
Tab. 4 M・N16地区SX01土壤墓出土装身具一覧	139
Tab. 5 M・N16地区SX02土壤墓出土装身具一覧	143

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

吉武遺跡群は、昭和44年に行われた九州大学考古学研究室が行った分布調査とその後行われた市教育委員会による分布調査によって弥生時代～古墳時代の遺物が散布していることが知られていた。

しかし、本遺跡の本格的調査の開始は、昭和55年(1980)年6月11日付で計画が明らかとなった「飯盛・吉武両地区営圃場整備事業」の施工であった。当時の教育委員会文化課と農林水産局農業構造改善部農業土木課とはこの事業計画について試掘調査などによる遺跡遺存の状況を把握するための試掘調査などの必要な事項について事前の協議を進めた。

当初の事業計画は、総対象面積46.4haで、昭和55年度3.6ha、昭和56年度9.0haで、昭和57年度以降33.8haを順次整備していく計画であった。

この事業に伴う発掘調査は、各年度の規模が膨大であることと、当然ながら工事施工と調査が面的に時間的に重複するため、各年度の事業規模を設計変更などによって最低に絞り込むための定期的な協議が土地改良組合理事・農業土木担当者・文化課担当者の三者によって続けられた。

そして実際の発掘調査は、昭和56年度8.3haの内1.2ha、昭和57年度7.9haの内2.1haの調査を行ったが、調査の着手時期が刈り入れ後の秋から始まる状況であり、また遺構密度も非常に濃いこともあって作業は年度末まで継続することとなった。

続く昭和58年度は、対象10.1haの内2.5ha、同59年度2.6ha、同60年度2.8haの発掘調査を行った。

調査では、弥生時代前期末～中期初期の壺棺墓地、古墳時代中期の堅穴住居跡群・掘立柱建物・土塙群からなる集落跡と中期から後期に及ぶ前方後円墳・方墳・円墳群などが検出された。この中では特に帆立貝式前方後円墳である櫛渦古墳(金武古墳群吉武S群1号墳)や隣接する方墳(同2号墳)が特徴的であるが、この他主に対象地南西側で見つかった円墳群は封土は全て失われていたが、石室構造や副葬された鉄斧や鉄鎌などの鉄器に特徴が見られる。

2. 調査の組織

(昭和58年度)

【調査委託】 農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調査主体】 福岡市教育委員会 教育長 西津茂美

【調査統括】 文化財部長 中田 宏、文化課長 生山征生、埋蔵文化財第2係長 折尾 学

【調査庶務】 埋蔵文化財第1係 岡島洋一、古藤國生

【発掘調査】 下村 智・横山邦雄、田中寿夫(試掘調査)

【発掘・整理補助員】 田中克子、緒方俊輔(現高千穂町教育委員会)

【発掘作業】 村本健二、溝口武司、中山 寧、牧 茂幸、川田 初、橋 哲也、大賀敏明、青柳貴子、青柳弘子、青柳陽子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上キヨ子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上麻智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、岸田 浩、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光イワ子、倉光スマ子、倉光ナツ子、倉光信子、倉光初江、小柳和子、斎藤邦子、柴田憲子、柴田タツ子、柴田春代、滝 良子、高松美智子、筒井ひとみ、堤 直代、上斐崎つや子、富崎栄子、富崎フミ子、富永ミツ子、鳥飼タキ子、永井鈴子、中島栄子、

中西ヒデ子、中西美由紀、中牟田チエ子、中山サダ子、西島美千代、西原春子、野下久美子、花畠照子、原 幸子、原口マサ子、平田節子、平田美絵子、三角清子、溝口博子、宮原富代、宮崎泰子、矢富富士子、柳井順子、柳浦八重子、山口タツエ、結城千代子、吉岡朱美、吉岡津幾子、吉積ハル子、吉積 フサノ、横溝恵美子、横溝チエ子、脇坂マキノ

【整理作業】 花畠照子、溝口博子、安野 良、副田則子、伊藤美紀、鳥飼悦子、室以佐子、酒井 香代子、持原良子

(昭和59年度)

【調査委託】 農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調査主体】 福岡市教育委員会 教育長 西津茂美

【調査総括】 文化財部長 中田 宏、文化課長 生田征生、埋蔵文化財第2係長 折尾 学

【調査庶務】 埋蔵文化財第1係 間島洋一、松延好文

【発掘調査】 常松幹雄、下村 智・横山邦雄、田中寿夫(試掘調査)

【発掘・整理補助員】 口田克子、岩本陽児、溝口孝司(九州大学)、矢野健一(京都大学)、緒方俊輔(現高千穂町教育委員会)、樋口秀信・進藤敏雄(早稲田大学)

【発掘作業】 村木健二、松田定実、溝口武司、池上 宏、山下清作、平川謙一、沖 浩人、吉岡勝美、辻繁一郎、川田 初、橋 哲也、亀川照義、北園 諭、小路永智明、末松一馬、藤島博明、青柳貴子、青柳弘子、青柳洋子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上キヨ子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上磨智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、甲斐美佐江、川口シゲノ、岸田 浩、木村厚子、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光信子、倉光初江、小林恵美子、小林ツチエ、小柳和了、斎藤邦子、坂田セイ子、柴田常人、柴田タツ子、柴田春代、白坂フサヨ、末永鶴子、高田マサエ、滝 良子、高松美智子、田中カヨ子、筒井ひとみ、富崎栄子、富田マチ子、富水ミツ子、舎川春江、水井鉛子、中島栄子、中牟田チエ子、中山サダ子、西山ヒデ子、能美須賀子、原ハナエ、西原春子、野下久美子、原 幸子、原口マサ子、平田節子、平田美絵子、三角清子、宮原富代、宮崎泰子、矢富富士子、柳井順子、柳浦八重子、山口タツエ、結城千代子、吉岡朱美、吉岡津幾子、吉積ハル子、吉積 フサノ、横溝恵美子、横溝チエ子、脇坂マキノ

【整理作業】 花畠照子、溝口博子、安野 良、副田則子、伊藤美紀、十斐崎つや子、小森佐和子、鳥飼悦子、室以佐子、酒井香代子、持原良子

(昭和60年度)

【調査委託】 農林水産局農業土木課、飯盛吉武地区土地改良組合

【調査主体】 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎

【調査総括】 文化財部長 河野清一、文化課長 柳田純孝、埋蔵文化財第2係長 飛高憲雄

【調査庶務】 埋蔵文化財第1係 間島洋一、松延好文

【発掘調査】 力武卓治、下村 智・常松幹雄、加藤良彦

【発掘・整理補助員】 山中克子、岩本陽児、溝口孝司(九州大学)、矢野健一(京都大学)、緒方俊輔(現高千穂町教育委員会)、樋口秀信・進藤敏雄(早稲田大学)

【発掘作業】 村木健二、松田定実、溝口武司、池上 宏、山下清作、平川謙一、沖 浩人、吉岡勝美、辻繁一郎、川田 初、橋 哲也、亀川照義、北園 諭、小路永智明、末松一馬、藤島博明、

青柳貴子、青柳弘子、青柳洋子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、
井上キヨ子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上磨智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、
甲斐美佐江、川口シゲノ、岸田 浩、木村厚子、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、
倉光信子、倉光初江、小林 恵美子、小林ツチエ、小柳和子、齐藤邦子、坂田セイ子、柴田常人、
柴田タツ子、柴田春代、白坂フサヨ、末永鶴子、高田マサエ、滝 良子、高松美智子、田中カヨ子、
筒井ひとみ、土斐崎つや子、富崎栄子、富田マチ子、富永ミツ子、舍川春江、永井鈴子、中島栄子、
中牟田チエ子、中山サダ子、西山ヒデ子、能美須賀子、原ハナエ、西原春子、野下久美子、花畠照子、
原 幸子、原口マサ子、平田節子、平田美絵子、三角清子、宮原富代、宮崎泰子、矢富富士子、
柳井順子、柳浦八重子、山口タツエ、結城千代子、吉岡朱美、吉岡津幾子、吉積ハル子、吉積フサノ、
横溝恵美子、横溝チエ子、脇坂マキノ

【整埋作業】花畠照子、渋口博子、安野 良、副田則子、土斐崎つや子、小森佐和子、
島飼悦子、室以佐子、酒井 香代子、持原良子



S27号墳調査風景

Tab. 1 吉武遺跡群調査一覧 (平成15年3月現在)

番号	調査番号	次 数 名	所 在 地	調査期間	調査面積(㎡)	当 者	報 告 書
1	8102	国場整備第1次	西区大字飯盛字本名地内	1981.11.01～ 1982.03.15	12,000	二宮忠司・小林義彦 山中秀夫	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第437-514-580-600-650-675集
2	8234	国場整備第2次	西区大字飯盛地内	1982.09.01～ 1983.02.15	21,000	二宮忠司	第437-514-580-600-650-675集
3	8235	田・飯盛塚第1次	西区大字飯盛字・竹地内	1982.09.22～ 1983.02.12	5,200	山崎雅雄	第127集
4	8335	国場整備第3次	西区大字吉武字桜町110地内	1983.09.12～ 1984.03.24	25,000	横山邦雄 下村 春	第143-461-514-580-600-650-731 775集
5	8415	田・飯盛塚第2次	西区大字飯盛地内	1984.04.15～ 1984.05.31	1,600	浜石哲也	第194集
6	8416	国場整備第4次	西区大字吉武字高木194地内	1984.07.01～ 1985.03.20	26,000	横山邦雄・下村 春 常松幹雄	第143-461-514-580-600-650 775集
7	8426	野方・金武塚第2次	西区大字吉武三十六146地内	1985.03.26～ 1985.05.31	2,300	横山邦雄 下村 春	第195集
8	8518	国場整備第5次	西区大字吉武字高木地内	1985.07.02～ 1985.07.24	470	横山邦雄	第143-461-514-580-600-650集
9	8535	国場整備第6次	西区大字吉武字人石地内	1985.08.01～ 1986.03.31	28,000	力武卓治・下村 春 常松幹雄・加藤良康	第143-461-514-580-600-650- 731-775集
10	8650	国場整備第7次	西区大字吉武字大石36地内	1986.11.16～ 1987.02.27	5,000	力武卓治 常松幹雄	未 判
11	8662	野方・金武塚第6次	西区大字飯盛地内	1986.03.01～ 1986.05.10	23,000	二宮忠司 佐藤一郎	第303集
12	8714	野方・金武塚第7次	西区大字飯盛字トイ地内	1987.09.01～ 1987.09.09	2,810	二宮忠司 佐藤一郎	第303集
13	8752	国場整備第8次	西区大字吉武地内	1988.03.01～ 1988.03.31	1,000	力武卓治 常松幹雄	未 判
14	8838	国場整備第9次	西区大字吉武高地内	1988.07.25～ 1988.09.16	724	山崎雅雄	未 判

第二章 遺跡の立地と環境

金武古墳群古武S群は、福岡市西部に広がる早良(さわら)平野西部に位置する古墳時代中～後期の古墳群である。

この地域は、早良平野を北流して博多湾西部の今津湾に注ぐ室見川の中流左岸にあたり、南の背振山地から派生した支脈上にある飯盛山(標高382m)の東側に広がる扇状台地(標高25～30m)上に古墳群を含んだ吉武遺跡群が展開する。

丘陵上では、旧石器時代後期包含層・縄文時代後期財蔵穴群などの集落遺跡を始めとして、中世期まで続く遺跡が密度濃く分布している

特に弥生時代前期後半からはこの地域に本格的な集落が定着し始めたものと考えられ、堅穴住居跡などの生活跡やこれに共存する墓地の形成が弥生時代前半から遺跡群北部を中心に確認できる。



Fig. 1 吉武古墳群位置図(1/50,000)

- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|-------------|
| 1. 吉武S古墳群 | 6. 野方古墳群 | 11. 当帰古墳群 | 16. 宮内南古墳群 | 21. 重留古墳群 |
| 2. 飯盛古墳群 | 7. 金武古墳群 | 12. 長峰古墳群 | 17. 鶴丸古墳群 | 22. 宮内方面古墳群 |
| 3. 明椎戸古墳群 | 8. 西山古墳群 | 13. ニノリ古墳群 | 18. 稲瀬古墳群 | 23. 有留古墳群 |
| 4. 田代戸古墳群 | 9. 馬込古墳群 | 14. 広石南古墳群 | 19. 楠平古墳群 | 24. 墓古墳群 |
| 5. 野方堅穴住居跡 | 10. 田代戸古墳群 | 15. 高崎古墳群 | 20. 三野丸古墳群 | |

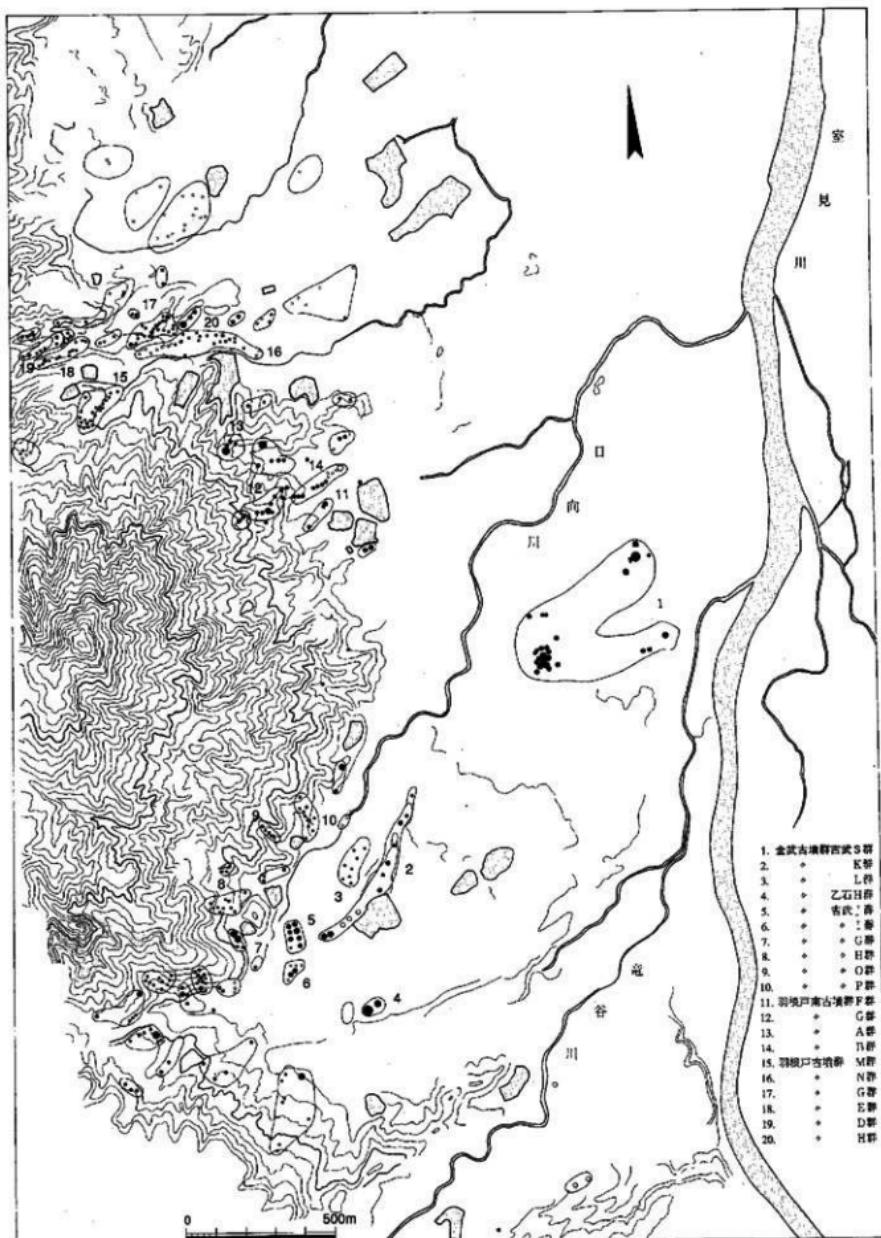


Fig. 2 飯盛山山麓周辺古墳群分布図

弥生時代前期末～中期初頭では、遺跡群の北端部・南端部を中心として大型の金海式壺棺を使用する墓地が大きく3地点に形成される。これらの地点はその後弥生時代を通じて集落の中核墓地となっていく。この時期では吉武高木地区や吉武大石地区では副葬品を多く出土する「特定集団墓」が成立したと考えられ、朝鮮半島製青銅武器（細形の銅劍・銅戈・銅矛）や多鈕細文鏡・円環系銅劍・翡翠勾玉・碧玉製管玉・ガラス小玉などが出土する木棺墓や大型壺棺墓が墓域を限って営まれるようになる。また、この後金海式壺棺を初原とする弥生墓地は面的にも広がって行き、中期中葉頃になると遺跡群中央付近で「弥牛墳丘墓」を形成している。

この墳丘墓は、後期初頭期まで引き続いて使用されているが、初葬（中期中葉）の壺棺には銅劍が主で、これ以後になると前漢鏡や朝鮮半島を経由した鉄製武器が副葬されるようになり、韓に交代した漢文化の影響を強く見ることができる。

また、遺跡群内では北部地区の集落がそれほど拡大しないのに対して、中央部から南部の集落は拡大化したと考えられ、墓地は両区域の墓地が北東から南西方向に450m以上つながった「壺棺ロード」とも言べき広がりとなっている。しかし、後期前葉以降には日立った集落遺構や墓地を見ることは困難となる。

古墳時代になると中期から後期にかけての集落・墓地の遺構が数多く見つかるようになる。

当時の地形については、調査によって明らかになった成果から考えると、中期段階では遺跡群全体にわたって自然流路が南西から北東方向に數多く走っていたことが分かる。

このうち集落はこの網目状の小河川を伴う平坦地に立地している。方形堅穴住居跡群、1×2間・2×2間規模の倉庫群、不定形の土壙群などは遺跡群の中央部以南で数多く検出されている。

また、4本の土柱穴を持つ大型の堅穴住居跡に2×2間や複数の柱間の總柱建物が伴う例も南部の集落では見ることができ、今後整理を進める段階で明らかになっていくと思われる。

中～後期集落の遺構に伴う遺物類は、自然流路・堅穴住居・不定形土壙（廃棄用か）などから大量に出土している。

自然流路では、多くの初期須恵器・韓半島から招来された陶質土器・土師器とともに木器の出土量が多く、又鍬・平鍬・鋤・エブリなどの農具、各種の轍や木製軸・鍔などの馬具、津構造船のミニチュア、木鍤（？）などが出土している。

また、不定形土壙では土器ととともに初期須恵器や韓半島から招来された陶質土器、韓半島に類例の多い算盤玉形の陶製紡錘車なども数多く出土している。

このように吉武遺跡の古墳時代集落については現在整理作業中であるが、確認することのできた出土遺物の構成などから考えることは、この集落が韓半島からの渡來民と非常に関わりの深い集落であろうということである。

また、古墳は、遺跡群中央部に造営された5世紀前葉と考えられる帆立貝式前方後円墳（吉武S1号墳）を最古として、これよりやや遅れる時期の方墳（S2号墳）、さらにS群内で3支群に分かれる5世紀末～6世紀初頭を初源として6世紀後半まで続く円墳群29基を知ることができる。

吉武S群を含む飯盛山山麓の古墳群は、羽根戸南古墳群中のG-2号～G-3号など木棺墓を内部主体とした小形前方後円墳を最古の古墳として大半は6世紀後半を最盛期として築造された群集墳である。墳丘規模は10～20m程度で、横穴式石室を内部主体とする小円墳群である。副葬品の中には後期群集墳に通有の製品の他に鉄滓を 義道・玄室に副葬する例が多く見られる。

羽根戸南古墳群の北側に位置する羽根戸古墳群は、規模の上でも群規模が大きく、谷を挟んだ小丘陵を単位にして多くの支群を形成している。

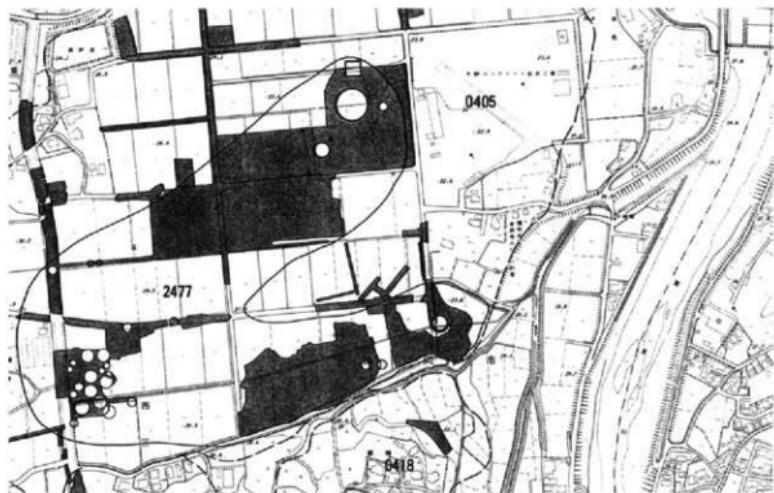


Fig. 3 金武古墳群吉武S群分布図

また、北側の叶ヶ岳にのびる長垂丘陵の裾部に沿って野方古墳群・広石古墳群・高崎古墳群・草場古墳群・長垂古墳群などの小規模の円墳群が海岸近くまで見ることができる。

また、羽根戸南古墳群の南側には、飯盛古墳群や最大の支群をもつ金武古墳群があり、6世紀末～7世紀初めの巨石墳である夫婦塚1・2号墳(乙石H群)や福岡市内で2例しかない装飾古墳の1つである吉武K群などの特徴ある支群が知られる。

また、黒塔古墳群・西山古墳群などの小規模古墳群が早良平野の最奥部にも確認することができる。

一 関連古墳調査報告書

- ①「金武古墳群—吉武K群—」(重要遺跡確認調査報告書1) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第68集 福岡市教育委員会 1991年
- ②「羽根戸遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集 福岡市教育委員会 1988年
- ③「羽根戸古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第198集 福岡市教育委員会 1989年
- ④「羽根戸古墳群2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第345集 福岡市教育委員会 1992年
- ⑤「羽根戸古墳群3」福岡市埋蔵文化財調査報告書第346集 福岡市教育委員会 1993年
- ⑥「羽根戸古墳群4」福岡市埋蔵文化財調査報告書第347集 福岡市教育委員会 1993年
- ⑦「羽根戸南古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集 福岡市教育委員会 2001年

第三章 発掘調査の記録

概要 飯盛・吉武地区圃場整備事業に伴った発掘調査では、第3・4・6次調査地点で今回報告を行う円墳群等が検出されている。

第3次調査区（昭和58年9月～同59年3月調査）では、切り土を行なう圃場部分・水路・道路部分を含めた約25,000m²の調査区内で前方後円墳1基（吉武S群1号墳）・方墳1基（同2号墳）・円墳2基（同22・23号墳）が検出され、他に古墳時代中期竪穴住居跡群・同掘立柱建物群・土壙群・旧河川などの遺構が密度濃く見つかった。このうち円墳2基は、封土や土体部を失い、周溝を残すのみであるが、周溝内から当該期の土器類が僅かに出土している。

第4次調査（昭和59年7月～同60年3月）は、第3次調査区の南側に第6次調査区を挟んだ調査区で

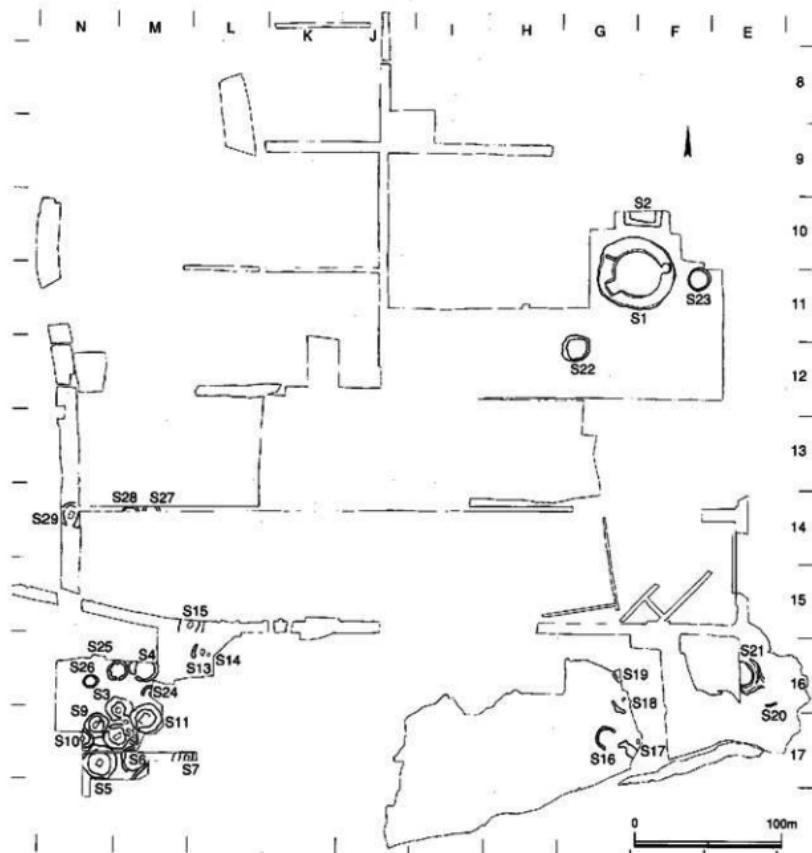


Fig. 4 金武古墳群吉武S群調査区図

大きく2地点に大別して考えることができる。

それは調査区の南西端一帯にあたるL・M・N地区と調査区の南東側一帯のE・F地区に分布する2群の古墳群である。

南西側に位置するL・M・N地区の一群は、弥生時代の甕棺の集中する「甕棺ロード」の延長上に位置し、前期末～中期末までの甕棺墓が重複して検出されることから一部には意図的に甕棺墓地を外して古墳造営を行った可能性がある。また、この地区的南側には浅い谷が造営当時あったと考えることができ、古墳造営はこの渓谷の縁辺部を境として形成されたと考えることができる。

古墳群は東西方向の計画道路である1号幹線道路で検出された円墳(S15号墳)や切り土工事にかかる圓場部分12基(S3・4・8・9・10・11・12・13・14・24・25・26号墳)及び南端の計画水路部分にかかる3基(S5・6・7号墳)の円墳など計15基の古墳で構成される。

これらの古墳は、ほぼ100m四方の区域にひしめく様に分布している。このため外部施設の周溝が切り合う様相となっており、これは古墳群の南端部区域で最も顕著である。

各古墳の規模は、最小のS26号墳で周溝外径約10m、S5・11号などの大型墳で外径20m程度のものである。周溝には内部への出入り口のための陸橋を伴うものも見られる。

また、内部主体は削平のため壇丘とともに腰石以上の上部施設を失っているものが多く、耕作の障害となる石材を意識的に除去した結果、石材を据えるための並列する長方形の土壙のみが残る形状のものも多い。この中で比較的石室の保存が良好なのは第8号墳とこれの西側に隣接する第9号墳である。これらは何れも石室の長・短規模が4.5×2m、4×2m規模の平面長方形を呈し、8号墳では奥壁に向かってやや開き、バチ形をなす特徴を持ち、石障と考えられる板石を奥壁近くに立てている。しかしながら両石室を含めて残る石材は腰石の1石のみで上部の構造がどのようになるのかは不詳である。

また、各古墳に伴う副葬遺物では、石室内と周溝内からそれぞれまとまって出土している古墳もある。特にこのS8・9号墳では石室内で数多くの副葬遺物が出土しており、須恵器・土師器等の土器類と共に鉄製農具・工具・武器が見られる。特に大小の組み合わせを持つ鍛造の袋状鉄斧や鍛造鉄斧、鉄鎌などは共通する鉄器であり、他にS3・6・10・11・14・15号墳でも単独或いは複数での副葬例が知られる。鉄刀ではS9号墳から韓國嶮南地方に類例の求められる類例金銅製龍文素環頭太刀が出土している。さらに同墳からは鉄製環状鏡板付き巻などの馬具も伴って出土している。

各古墳の周溝内からは須恵器を中心として大量の土器が出土しており、特にS11号墳等では大型器台を含む多器種の須恵器・土師器の出土が目立っている。

次に調査区東側のF・G地区でも古墳と考えられる遺構は5基(S16～21号)が確認されている。

このうち土体部の存在するのは2基(S17・18号墳)である。他は周溝かその一部しか残っていない。S17号墳は腰石のみを残す長方形の石室で奥壁近くに須恵器甕・櫛形ハソウ・マリ2・平底土師器甕、入り口近くに須恵器ハソウの副葬があり、これらの土器類から吉武S群の中では最も古い石室墳であった可能性がある。

第6次調査区(昭和60年8月～61年3月調査)は、第4次調査区の北側に位置し、計画水路にかかる2基(S27・28号墳)が見つかっている。このうちS27号墳はS8・9号墳と共通する長方形石室を備えた小形円墳である。石室内からは鉄鎌2・鍛造鉄斧2・鐵錐8以上・鉄刃・刃子・馬具・不明鉄器・精錬滓4以上などが出土しており、前の第4次調査の各古墳と共通する副葬品の構成となっている。

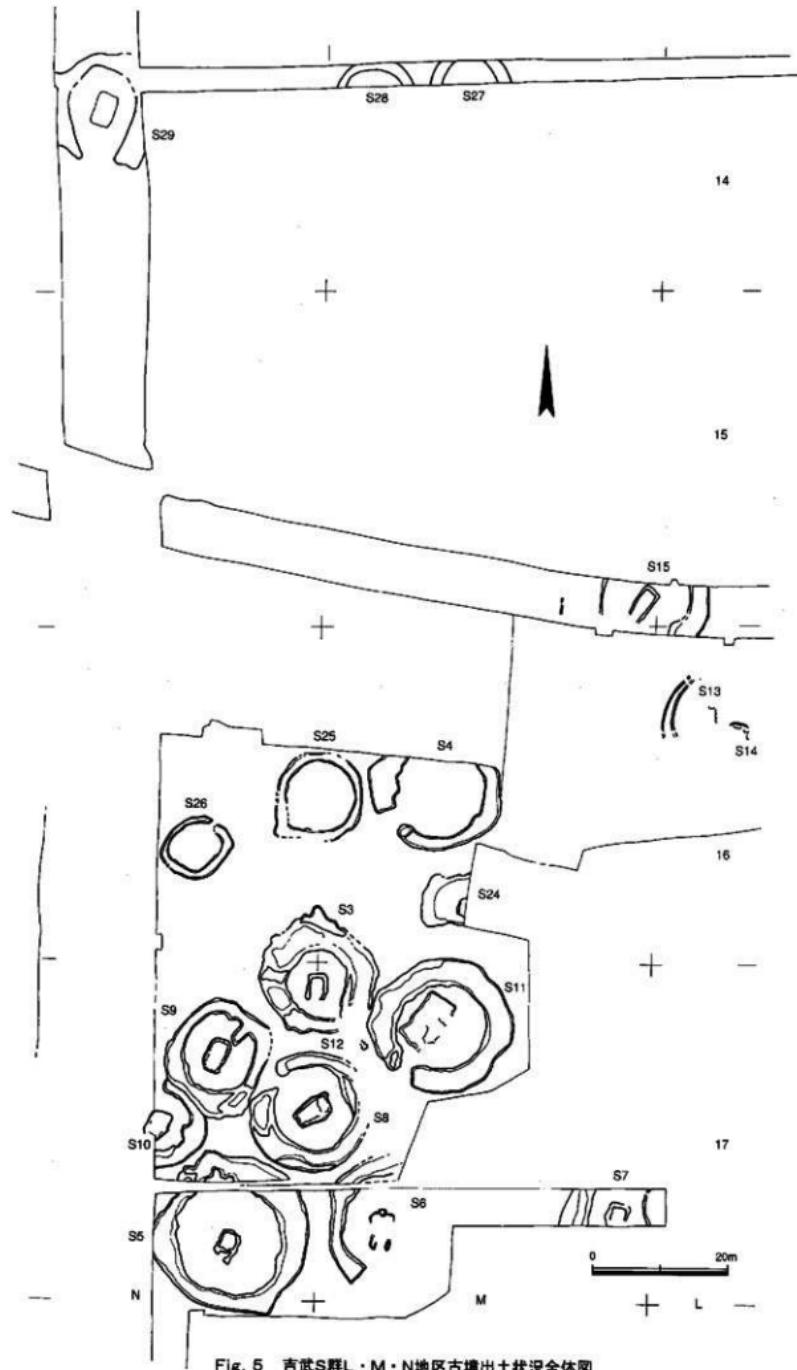


Fig. 5 吉武S群L·M·N地区古墳出土状況全体図

第一節 吉武S群L・M・N地区の調査

概要 L・M・N地区は、吉武S古墳群の南西端に位置し、最も集中的に調査が行われた地区である。本地区には古墳造営以前の弥生時代窓棺墓地が南東から北西方向に列をなして形成されており、古墳築造の際にも当然窓棺墓が目撃されたと考えられ、墳丘を持つ古墳の位置は一部これらから外されたと考えられる。また、本地區の南側には浅い谷が認められることから古墳築造は浅谷の縁辺部を境として形成されたと考えることができる。

調査では切り土工事の箇所部分・計画道路・同水路部分を含めて18基の円墳が見つかった。これらは何れも過去の農地化事業によって墳丘部や内部主体の殆どを失っている。また、各古墳に伴う周溝の規模はS10号墳の外径10mからS5・8・12号墳等の20m程度のサイズである。

石室腰石が比較的残っている古墳は、S8・9号墳などがあるが、他は腰石の一部や石材埋置のための掘り方のみを残す古墳が殆どである。

古墳の造営・使用時期を示す副葬・供獻遺物類は、石室内及び周溝内で数多く見つかっている。このことはこれら古墳の破壊が本来盗掘目的でなかったことを物語っていると考えられる。石室内ではS8・9号墳を中心と鉄製農具(鉄鎌)・工具(鍛造・鋸造斧・ヤリガンナ・刀子)・武器(刀・鉢・鎌)馬具(轡)やガラス小玉・碧玉製勾玉等の装身具などの副葬品が出上している。

また、須恵器等の土器類を中心とした副葬・供獻遺物は主として各古墳の周溝内から多量に出土しており、須恵器大型器台(S11号墳)や横瓶・提瓶・高杯・蓋杯・有蓋脚付き壺・短頸壺・ハソウ・大壺・高台付き杯など殆どの器種があり、他には土師器高杯・マリ・甕等が伴出している。

1. S群3号墳 (Fig. 6~11, Pl. 2)

S3号墳は、調査区中央に位置する小形円墳である。墳丘は全く遺存せず、内部主体も徹底した破壊を受けている。

① 周溝 (Fig. 6・7)

平面形は隅丸方形に近い不整な円形を呈し、比較的保存の良好な東西径で17m、南北約16mを測り、幅は3~4mと不揃いである。また、残存する深さは0.5m程度で、底面はレベルをあわせた均一な掘り方ではなく、凹凸のある形状となっている。南北方向に走る溝状遺構やS12号墳と重複する部分があつて、周溝の南北端部分でII状を失っている。明確な出入りの通路である陸橋は認められないが、周溝西側に浅い部位があり或いはこれが相当するものか。

② 内部主体 (Fig. 8, Pl. 2)

本古墳の石室はほぼ完全に破壊されていると考えられる。石室は南側に開口していたものと考えられる。しかし遺存は悪く、石室入り口部分の腰石が3個残されているのみで他の腰石材は全て取り払われている。

また石室内部の床面には径2~10cm程度の主として花崗岩圓礫が敷かれていたと考えられるが、奥壁側のほぼ1/3にあたる部分は削半のため完全に失われている。

石室の腰石を埋置した掘り方は、小口部がやや狭いもののほぼ長方形に近い「コ」字形を呈し、内法長辺3.3m・短辺1.8m、外法長辺3.6~3.7m・短辺2.8m程度の規模を測る。また、横断面は基本的に「コ」字であるが、埋置する腰石材の形状によって必要な窓穴を掘削している。

このような遺存状況から石室の平面規模については正確には復元することができないが、散石の残る石室掘り方の内法を最大規模と考えると、長辺3.3m・短辺1.7~1.8mの長方形石室が想定できよう。

また、石室の構築時期を知ることのできる土器類や副葬された遺物類は殆ど出土しなかった。このため周溝より出土した多くの遺物が時期を測る大勢の資料であろう。

③ 出土遺物 (Fig. 9~11, Pl. 40・42・43)

本古墳より出土した遺物類は、前述したように石室の破壊状況から埋葬施設に原位置で伴う遺物は殆ど無く、石室が破壊されて流れ込んだ遺物や墳丘に供獻された土器類が周溝内に落ち込んだ土器が殆どであると言うことができる。

ここで出土遺物の主な位置と種類について記しておくこととする。

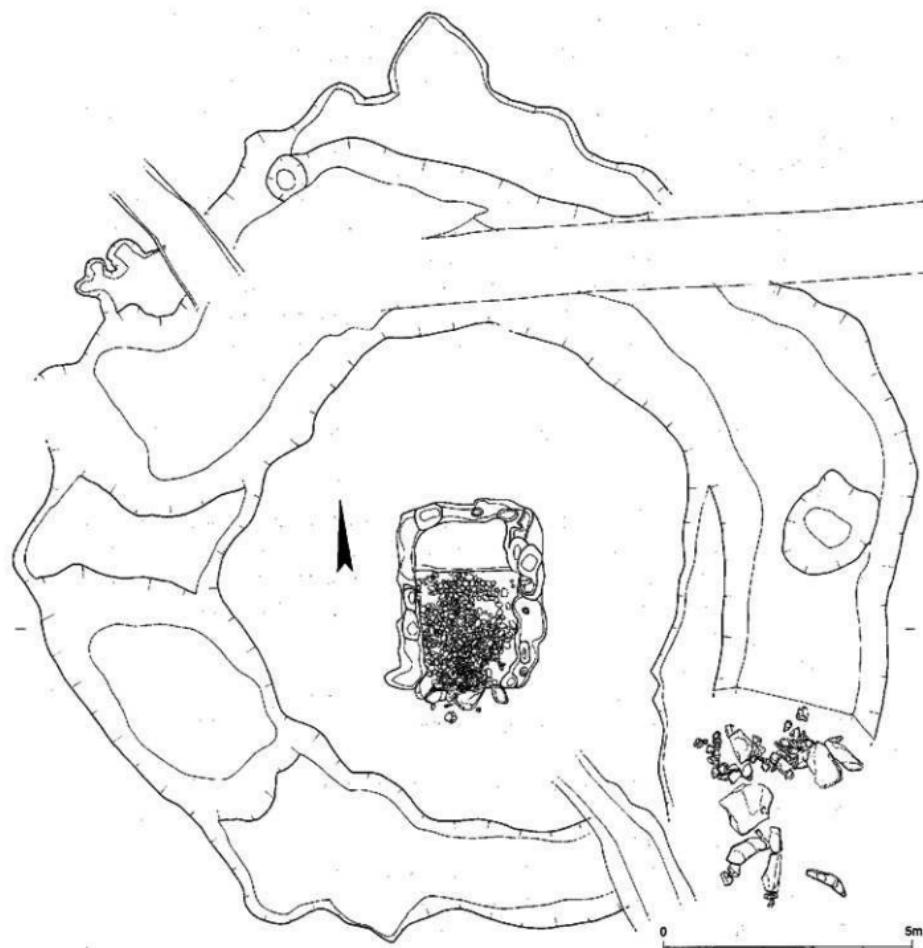


Fig. 6 吉武S群3号墳出土状況実測図 (1/100)

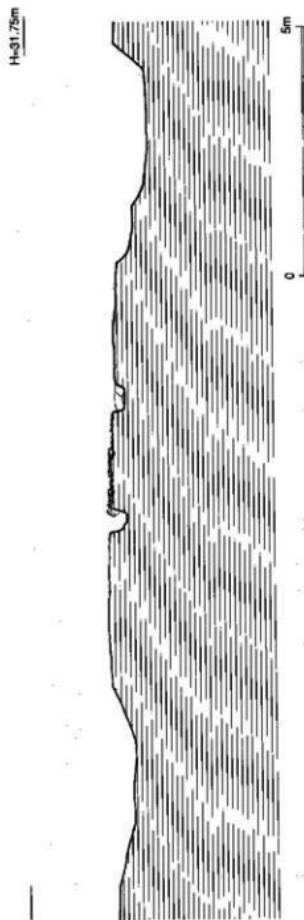


Fig. 7 古武S群3号墳出土状況調査面実測図(1/100)

まず石室外の旧墳丘部分で袋状鉄斧1個、石室南側の小口外で碧玉製管玉1個が出土している。

この他の大半の土器類等は、周溝の南・東側を中心に出上している。

周溝内では周溝南側で須恵器壺(P11・05041)・ハソウ(P12・05042)・高杯(05048)・杯身(05043・05047)・杯蓋(05044・05046)などがあり、十師器甕(05045)も見られる。

また、周溝内の東側では須恵器甕(P13・05049)や瓶(05050)・直口壺(05051)が出土した。

また、周溝内の西側では、高杯(05052)が出土しており、その他周溝内では甕(05053)・平底杯(05054)・ハソウ(05056)・大型器台(05057)・高杯(05055・05058・05059・05060)などが知られており、須恵器を主に蓋杯・高杯などの割合が多く、加えて大型器台などの出土上が特記されよう。

また、同周溝内では土器以外で鐵鏃片1点、不明鉄器(小形石突か)1点が出土した。

(出土土器類) (Fig. 9)

須恵器杯蓋 05031は、石室内から出土した唯一の土器である。全体に器高の低い器形で、直立する口縁部は内端部が薄くなり、口縁端部は尖る。

天井部との境は明瞭に段をなし、継をなしている。器面調整は、外面口縁部がヨコナデで、天井部には全面にヘラ削りを施す。クロロ回転は時計回りである。

また、内面は磨滅のため調整不明である。

器色は、外面が黒褐色～暗褐色を呈し、内面は淡褐色となる。胎土は密で、焼成は軟質である。生焼けの製品か。口径部径13.2cm、器高4～4.1cmを測る。05035は、周溝内南側から出土した杯蓋(P4)である。

天井部を主に焼けひずみが見られる製品である。口縁部は外側に開きながらほぼ直立し、天井部との境は鋭い棘状の段をなす。また、口縁端部は削りを加えて薄く仕上げ、内面に明瞭な小さい段を有する。

器面調整は、外面口縁部がヨコナデで、天井部との境をなす棘状突起からほぼ1cm程上がった位置以上にヘラ削りを施す。クロロ回転は逆時計回りである。内面はヨコナデ調整である。

器色は外面が黒灰色、内面が暗灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅敏である。口径は13.2cm、器高は4.8cm程度と考えられる。

(須恵器高杯蓋)

05034は、中くぼみのつまみを持つ大型の蓋である。

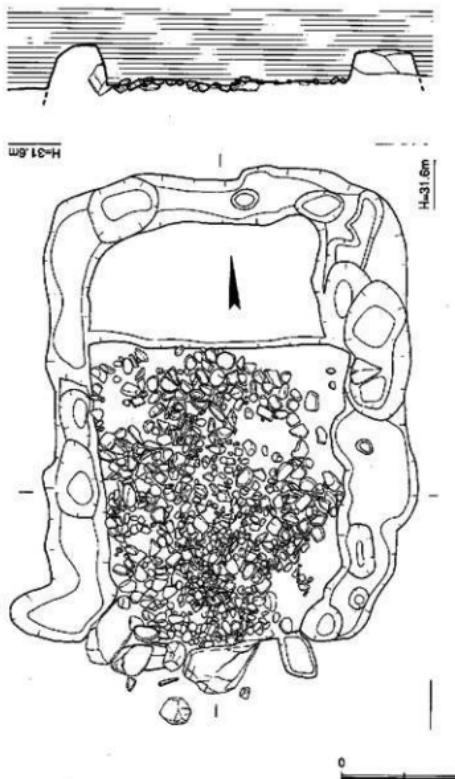


Fig. 8 吉武S群3号填埋葬施設実測図(1/40)

緒である。口径16.5cm、器高6.3~6.6cm、つまみの径4.4cmを測る。

(須恵器杯身)

05038は、周溝内南側から出土した小形の杯身である。全体に浅い器形で、器壁も厚めでシャープさに欠ける製品である。口縁部は内傾化が著しく、受け部の張り出もし弱い。また、口縁端部は削りを加えて小さい段をなす。

器面調整は、内面および外面口縁部がヨコナデで、底部には受け部より約1cm程下がった位置より以下に比較的丁寧なヘラ削りを加える。ロクロ回転は逆時計回りである。

器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。胎上は密で、焼成は堅緻である。口径10.6cm、器高4.1cmを測る。

05040は、周溝内南側で出土した杯身(P10)である。口縁部のつくりに比べると底部の器壁が厚い製品である。口縁部は緩やかに内傾し、端部内面には削りを加えて緩い段をなす。

器面調整は、内面および外面口縁部・受け部端より2cm程下がった位置までヨコナデを加え、外面

天井部・つまみを主に全体が焼けひずんでおり、やや器上部が左へ傾いている。

口縁部は外方にやや開き気味で、天井部との境は比較的鈍い突起をなす。また、端部内面には削りを加えて小さい段をつくり出している。

器面調整は、外面口縁部がヨコナデで、天井部は棘状突起から約8mm程上がった位置以上にヘラ削りを加える。また、内面は全面にヨコナデ調整を施している。器面調整後には口縁部上端から2cm程上がった位置に原体による幅1cm程度の連続押圧文帯をめぐらす。器色は、外面口縁部~天井部までが黒灰色で、つまみは暗灰色を呈する。また、内面は暗灰色を呈する。胎上は、密で粗砂を多く混入する。焼成は堅緻である。

胎上は、密で粗砂を多く混入する。焼成は堅緻である。

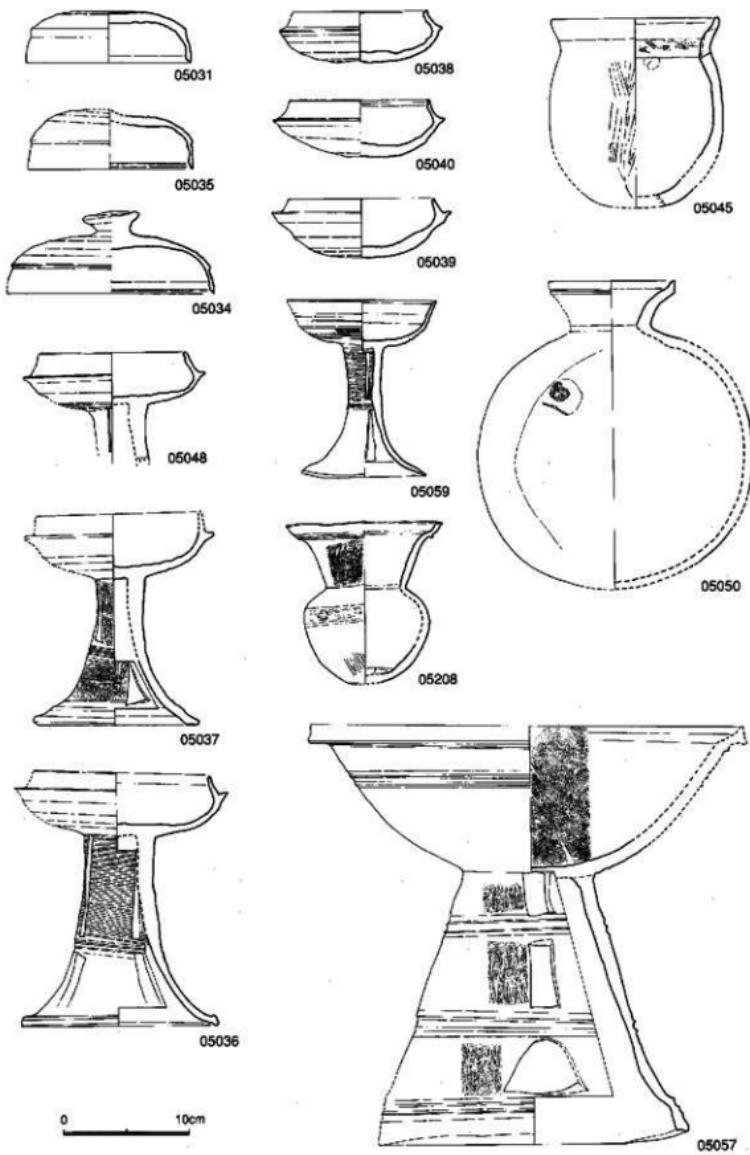


Fig. 9 吉武S群3号墳出土土器実測図(1/4)

底部には幅広いヘラ削りを施す。器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。胎土は密で、粗めを多く含む。焼成は堅緻である。口径11cm、器高4.5cmを測る。

05039は、周溝内南側で出土した杯身(P9)である。受け部以下の外面が灰かぶりの製品である。内傾する口縁部は短く、各部位がシャープさに欠ける。

器面調整は、外面底部のヘラ削り範囲が小さく、底部から1cmに満たない範囲に限られている。また、内面および外面の大半はヨコナデを施しているが、底部内面には一部アテ具痕が残る。

器色は、内外面ともに淡灰色を呈する。胎土は、やや粗で、焼成もやや軟質である。全体の約2/3を残す。口径11.6cm、器高4.7cmを測る。

(須恵器高杯)

05048は、周溝内南側で出土した有蓋高杯である。口縁部を除く底部・脚部に灰をかぶる。脚部は部分以上を欠失している。杯部は浅く、全体に薄いつくりである。また、脚部の透かしは3ヶ所にタテ方向に器壁の途中まで切り取るのみで、内部までは貫通していない。

器面調整は、内面がヨコナデ後に底部を一部ナデ、外面の杯部下端付近にカキ日状の調整を施す。

器色は、内面および外面口縁部が暗灰色で、他は淡灰色を呈する。胎土は、密で、焼成も堅緻である。口径11.7cm、残存器高8.7cmを測る。

05037は、周溝内の南側で出土した有蓋高杯(P6)である。杯部は比較的均整なつくりであるが、脚部が焼けひずみしている。脚部を上にして焼成した模様で、脚部内面は灰をかぶっている。杯部は、口縁部を欠き、受け部以下を残す。器面調整は、内面がヨコナデで、底部にアテ具痕が残る。また、外面は、受け部より1.5cm以下にヘラ削りを加える。

次に脚部は円筒状の上部が下方に從って大きく開き、端部は丸く、底面の巻み付きの部分が大きい。脚部の中位には2条の沈線をめぐらし、これ以上には細かい波状文を施した後に長方形透かし3個、これ以下にも細かい波状文を施した後に三角形透かし3個を切り出している。

器色は、外面が脚端部付近で黒灰色である以外は淡灰色、内面は淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。杯部口径は、13.3cm(復元)、器高17.1~16.7cm、脚径13.3cmを測る。

05036は、周溝内の南側で出土した有蓋高杯(P5)である。大振りの杯部と高く円筒部径の比較的大きい脚部を持つ製品である。

杯部は比較的浅く、口径が大きいものである。口縁部は内傾しながら立ち上がり、端部でやや起きる。器面調整は、内面がヨコナデ後に底部に一部ナデを加える。また、外面は受け部から1cm強下がった位置以下にヘラ削りを加える。

次に脚部は、円筒部が比較的長いもので、下端は脚が開き端部は肥厚して盛り上がる。また、脚の中位よりかなり下がった位置に2条の沈線をめぐらしている。これ以上では丁寧なカキ日を施し、この後に長方形透かしを3ヶ所穿つ。また、これ以下では非常に細かい波状文を施した後、やはり長方形透かしを3ヶ所にわたって切り出している。

器面調整は、脚外面上半部以外ではヨコナデを施す。器色は、脚外面が淡灰色、内面暗灰色を呈する。また、杯部の内面および外面口縁部は淡灰色、他は黒灰色を呈する。胎土は、やや粗で石英粗砂を多く含み、焼成はやや軟質である。口径14.2cm、器高20~20.4cm、脚径15.8cmを測る。

05059は、周溝内(SD02)で出土した無蓋高杯である。全体に非常に薄いつくりで、浅い杯部に裾開きの細い脚を付ける製品である。

杯部は、内外面ともにロクロによる器面調整が顕著である。杯外面下端部近くには2条の細い沈線をめぐらし、これ以上に幅5mmほどの原体圧痕を右下がりの方向にめぐらしている。また、内面は

灰かぶりであるが、中位以下にはヨコナデ以前のアテ具痕が残る。

次に脚部は、中位から次第に外開きとなる形態で、端部は焼けひずみがある。脚のほぼ中位に不整な2条の沈線をめぐらし、これ以上にカキ目を施した後、細目の長方形透かしを3ヶ所切り出す。また、中位以下ではヨコナデ後にやはり長方形透かしを3ヶ所に施す。

器色は、杯部内面の灰かぶり部分以外は全て黒灰色を呈する。胎土は密で、焼成も非常に堅緻である。口径11.8cm、器高14.1cm、脚径9.9cmを測る。

(須恵器ハソウ)

05208は、北東側の石組み遺構から出土したハソウである。口縁部付近は焼けひずみが全体に見られる。半球状の胴部に外方に開く口縁部を有し、頸部径が大きい特徴をもつ。また、底部は緩い小さな平坦面となる。頸部から延びる口縁部は反転するように外方に開き、内面端部には明瞭な段を有する。

器面調整は、内面全面および頸部付近が灰かぶりのため不明な部分も多いが、胴部の最も膨らんだ部分に強いヨコナデが残るほか胴部下半の一部に斜めのハケメが残る。また、内底部にヘラ削りを加えている。口縁部突帯下には器面調整後に波長幅が短く、上下長の大きい細かい波状文をめぐらす。

器色は、外面が暗灰色～明灰色を呈し、内面は灰かぶりのために淡灰色となる。

胎土は密で、焼成も堅緻である。口径12.5cm、器高13cmを測る。

(須恵器提瓶)

05050は、東側の羨群で出土した中型の提瓶である。球形胴に外反するしっかりした口縁部を有する精良な製品である。底部付近の一部を失する。

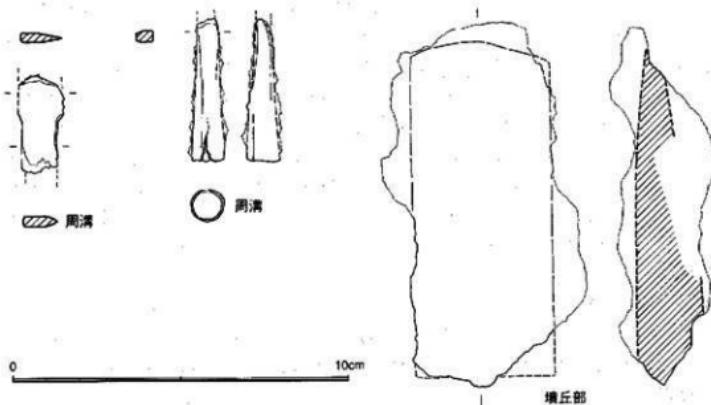


Fig. 10 吉武S群3号壇出土鉄器実測図(1/2・2/3)

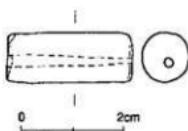


Fig. 11 吉武S群3号墳
出土装身具実測図(1/1)

外面は全て薄い灰をかぶっている。胴部の上位には2個一対の耳が付けられており、現在は剥落しているがその耳の間隔は8cm程である。

胴部の器面調整は、丁寧なヨコナデが施され、胴部縁辺部付近には同心円状に稜をなす部分も見られる。

また、口縁部は一部を欠失するが、太くしっかりしたつくりで、端部が立ち上がり内面は跳ね上げの形状となる。器色は、外面が淡灰色を呈し、内面はやや暗い灰色となる。胎土は、粗で、焼成は堅敏である。口径10.2cm、頸部径7cm、胴部最大径22.2cm、器高24.6cmを測る。

(須恵器器台)

05057は、周溝内(SD02)で出土した中型の器台である。大きな杯部に裾の開く比較的短い脚部を特徴とする製品である。脚部はかなりの焼けひずみを起こしている。焼成時は正立の状態で置かれたもので杯部内面は灰かぶりとなっている。

杯部は、口縁内面の端部が跳ね上げ状となるシャープなつくりで、口縁部直下に1条の低い三角突帯をめぐらしている。また、この突帯より2cm程下がった胴部に2条の低い三角突帯をめぐらす。

また、器面調整は、内面上半部は強いヨコナデ調整で、下半から内底部にかけては荒いアテ具痕(青海波文)が残る。また、外面の下半部は擬格子タタキを廻し、上下2ヶ所に幅2cmと0.5cmのカキ目が施されている。さらに胴部2条突帯の上部には上下動の大きい擬幅の狭い波状文を下部には振幅の大きい斜め方向の波状文をそれぞれめぐらしている。

次に脚部は、脚の付け根から3cm程下がったところとほぼ脚の中位それから裾部端近くに2条の低い三角突帯を都合3ヶ所めぐらしている。また、脚付け根から3段の突帯・脚端部の間にそれぞれ波状文を施している。付け根の波状文は上下動の大きい幅狭のものである。この下部の上部突帯と中位突帯の間の波状文は2段で、器面に丁寧なカキ目を施した後まず下段の波状文、続いて上段の波状文の順に施文する。キャンバスの大きいせいか付け根の波状文と同一の手法であるが、やや粗放である。さらに中位と下部の間の波状文もやはり2段で、初めに上段の波状文その後に下段の波状文を施文している。また、脚端部にもこれらと同型で小さい波状文をめぐらしている。これらの波状文施文後に付け根と中段に長方形透かし、下段に三角形を彷彿させる不整な半円状の透かしを何れも3ヶ所ずつ切り出している。内面はヨコナデが残る。器色は、杯部外面が黒灰色で、脚部内外面は暗灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅敏である。口径34.5cm、器高34cm、脚径24.7cmを測る。

(土師器臺)

05045は、周溝内の南側で出土した甕である。内湾気味に外方に聞く口縁部をもつ。口縁内外面はヨコナデで、胴部外面が縱方向のヘラナデ、内面は底部からのヘラ削りである。器色は外面赤橙色、内面暗赤褐色を呈する。胎土は粗で焼成堅敏である。口径12.8cm、器高15.1cmを測る。

(碧玉製管玉) (Fig. 11) 暗緑色を呈し、長さ24.5mm、直径9.3~9.5mm、孔径1~2.5mmを測る。石室南側前庭付近出土。

(袋状鉄斧) (Fig. 10) 全長11.5cm、刃部幅10.0cm、袋部幅11.5cmを測る。旧墳丘部出土。

(不明鐵器) (Fig. 10) 全長10.8cm、幅20.1cmを測る。小形石突か。周溝内出土。

2. S群4号墳 (Fig. 12~15)

S4号墳は、調査区北側のS25号墳の東側に隣接して築かれた古墳中ではやや大型の円墳である。

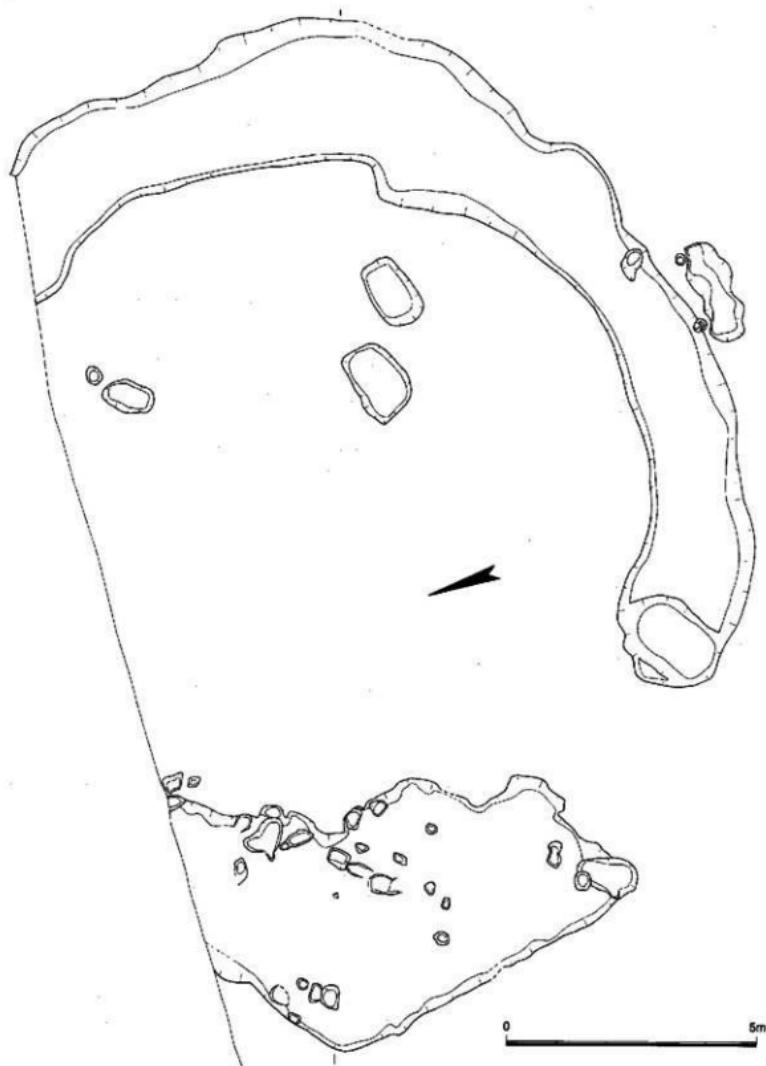


Fig. 12 吉武S群4号墳出土状況実測図 (1/100)

Fig. 13 古武S群4号墳出土状況断面測定図 (1/100)

北側の1/3程が調査区外であった。主体部は完全に破壊されており、腰石などの石材も全く確認することはできなかった。ただ西側の周溝内に石室床面に敷き詰められていたと考えられる小砾群が落ち込んだ状態で出土した。

① 周溝 (Fig. 12)

S4号墳の周溝は、北側が調査区外であるが、外径が20m程度の不整な円形を呈し、南西側に出入口の陸橋を設けている。

また、周溝は東側で幅2~3mを測り、比較的整った形状であるが、陸橋を挟んだ西側では幅が3~4mとなり、緩く皿状に窪む形状となっている。

削平の影響で周溝の深さは10~20cm程度を残すにすぎない。

周溝内からは、須恵器人型破片や小形丸底壺などが少量出土した。

② 内部主体

S4号墳では石室の痕跡を示す石材の発見はなく、また石室掘り方の土壌なども確認できなかった。他の古墳においては石室の配置は周溝のほぼ中央であることから完全に痕跡を残さず削平されたと考えられる。

③ 出土遺物 (Fig. 14~15, Pl. 40)

S4号墳では内部主体が失われているために遺物が出土したのはほぼ周溝内に限られている。

周溝内では、須恵器大甕口縁部破片5点(05068~05072)、周溝内東側で小形丸底壺2点(05073・05507)が出土している。また、検出時に須恵器甕口縁部・頸部2点(05066・05067)が出土した。

他に周溝内からは不明鉄器(楔状)2点が出土している。

(出土土器類) (Fig. 14)

(須恵器甕)

05066は、遺構検出時に出土した大甕である。

口縁端部は、小さく立ち上がり、上端は丸味を帯び平坦となる。また、内面はくびれて段をなしている。

外面は、口縁部下端に1条の沈線をめぐらし、この直下には波長の長い細かい波状文を施している。また、これ以下には2条の平行沈線をめぐらし、以下に上下に波長の大きい細かい波状文を施している。

また、内面には強いヨコナデが見られ、灰かぶりのため自然釉が付着している。

器色は内外面ともに灰白色を呈し、胎土は密で、焼成は堅緻である。

復元口径30.5cm、残存高8.6cmを測る。

05068は、周溝内で出土した大甕口縁部破片である。

口縁端部が短く内側に立ち上がり、やや肥厚する。外面はやや痩む。また、口縁端部の直下には2条の低い突帯をめぐらし、さらにこれ以下にも鈍い1条突帯を2本配し、これら突帯間に左右の波長の短い波状文をめぐらしている。調整は、内外面とともに丁寧なヨコナデである。器色は内外面ともに灰白色を呈し、断面は暗赤色を呈する。

胎土は、石英粗砂を若干含むが、密で、焼成は堅緻である。

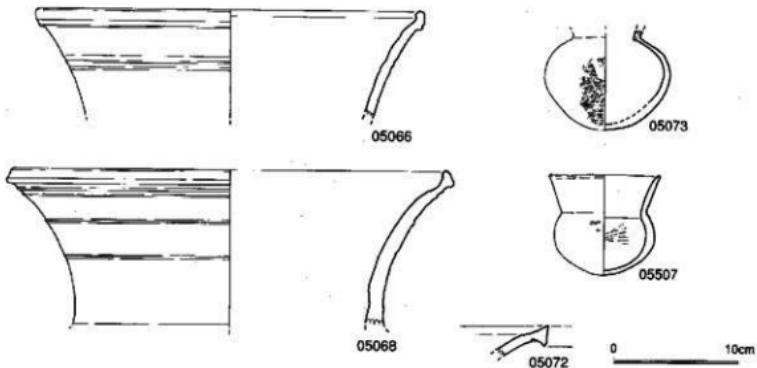


Fig. 14 吉武S群4号墳出土土器実測図(1/4)

復元口径34.6cm、頭部復元径24.9cm、残存高12.6cmを測る。

05072は、周溝内で出土した壺口縁部破片である。

口縁部端は、嘴状に跳ね上がり、シャープな仕上がりの製品である。口縁外端の直下に鋭い1条の突帯をめぐらし、これ以下に波長の短い細かい波状文を施す。

調整は、丁寧なヨコナデである。器色は、内外面ともに灰白色を呈する。胎土は、粗い石英砂を多く含み、やや粗である。また、焼成は堅緻である。残存高2.5cmを測る。

(土器)

05073は、周溝東側で出土した小形丸底壺である。

口縁部を欠失するが、半球状の胴部を有し、口縁部は直線的に外方に開く形態となろう。また、頸部内面には口縁部との粘土接合部の突出が見られる。

器面調整は、外面の頸部付近に丁寧なヨコナデを残す。また、胴部の上半に細かい斜め方向のハケメ、下半部に従って横方向の細かいハケメを施す。また、内面は丁寧なヘラ削りを施している器色は、内外面ともに淡褐色を呈し、外面に黒斑が見られる。

胎土は、緻密で、焼成も堅緻である。頸部径が5.4cm、胴部最大径10.1cm、残存高8cmを測る。

05507は、周溝内から出土した小形丸底壺である。完器で、全体に器面の磨滅が著しい。

口縁部は直線的に外方に開き、底部はやや尖り気味の特徴を有する。

器面調整は、口縁部外面がヨコナデで、頸部には強いヨコナデが施されており緩く斜む。また、胴部は一部に細かい横・斜め方向のハケメが残るが、他は丁寧なヨコナデ調整である。

また、口縁部内面は、ヨコナデで、胴部は斜め・横方向の細かいヘラ削りが残る。

器色は、内外面ともに赤褐色を呈する。胎土は、密で、焼成も堅緻である。

復元口径は、8.8cm、同頸部径6.9cm、器高8cmを測る。

(出土鉄器) (Fig. 15)

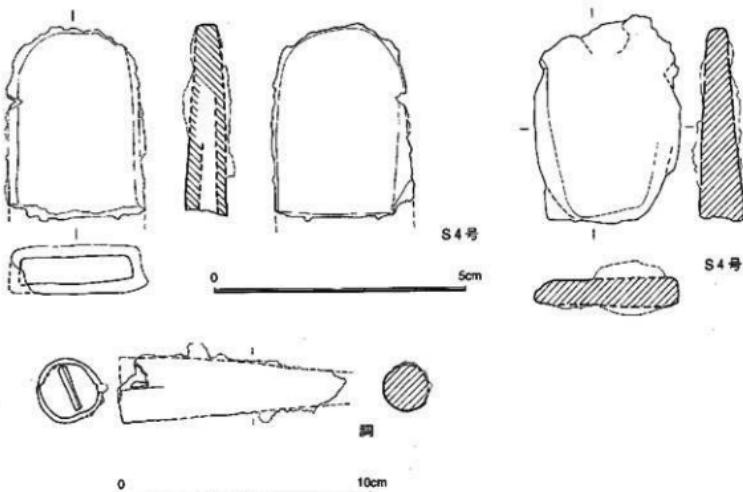


Fig. 15 吉武S群4号墳・調出土鉄器実測図(1/1 · 2/3)

3. S群5号墳 (Fig. 16~19, Pl. 3)

S5号墳は、古墳群南端にあたるL・M地区最南端に位置する円墳である。農地化による過去の削平によって主体部は完全に破壊され、殆ど石室掘り方のみがかろうじて残っている。

また、周溝の形状はいびつで、削平によって10cm単位の深さとなっている。造営時期を示す土器などの副葬土器は周溝内で多く出土し、石室掘り方内では少量の遺物が出土した。

① 周溝 (Fig. 16)

S5号墳の周溝は、西側の一部が未調査であるが、南北外径22.5m・東西外径30m、南側の幅2.2m・東側幅4m・北側幅3m程度の規模である。また、平面形は東南側がコーナーになり、全体に幅員の変化が著しくいびつな円形を呈する。周溝の残存する深さは全体に20cm程度で、北側部分がより低くなっている。

周溝内では、東～北東側で須恵器などの上器類の出土が目立っている。

② 内部主体 (Fig. 17)

S5号墳の内部主体は、長方形をなす石室と考えられ、側壁の最奥部にあたる位置に一石が残っているが原位置をとどめた腰石ではない。

また、石室は南側に開口していたと考えられ、主軸はN-30°-Eと磁北よりやや東に振れている。

石室は掘り方のみを残している。右側壁に相当する東側の掘り方は、内径の長さ3.4m・幅0.4mの規模で、この掘り方内にあった腰石の位置にさらに長径50～80cm程度の長円形ピットが見られる。また、掘り方内の上面には扁平小砾が落ち込んだ様に残っているが、これらは石室内の床面に敷き詰められていた石材の可能性が高い。

また、左側壁に相当する西側の掘り方は、内径の長さ3.4m、幅30～40cmの規模で、6～7個の石材を使用していたと考えられる。何れも深さは20cm規模である。



Fig. 16 吉武S群5号墳出土状況実測図(1/100)

さらに奥壁にあたる掘り方は、内径の長さ2.4m・幅0.2m規模の溝状のもので、深さは現状で10cm強残っている。この掘り方は西側ではコーナーをつくって曲がる。東側では独立したピットとなっており、長・短径が40×30cmを測る長方形のピットで深さは10~20cm弱を測る。

これらの石室掘り方の規模から石室のⅢ状を推定すると、両側壁は長さ3.4m、奥壁側長さ2.4m・小口側2m前後と考えられ、平面形は奥壁に向かってやや幅広くなる長方形となろう。

③ 出土遺物 (Fig. 18・19, Pl. 41)

S5号墳からの出土遺物は、主体部掘り方内と周溝の東および北東側からの出土品が殆どである。須恵器などの上器類が多く、他にⅢ石室の位置で不明鉄板が出土した。

まず主体部掘り方内では、須恵器中型壺(05074)・同杯身(05075)・同杯蓋(05076)・同高杯脚(05077)など4点が出土した。また、東側掘り方の礫群内で鉄滓が1点出土している。

次に周溝内では、周溝北東側で須恵器壺口縁部2点(05093, 05094)、須恵器器台脚部破片(05095)、土師器甕(05096)、土師器大型甕2点(05097, 05098)などが出土している。

周溝東側では、須恵器大甕破片(05103)、土師器高杯3点(05099~05101)などが出土した。

また、他に周溝内から須恵器長頸壺(05078)、須恵器杯身(05079)、須恵器杯蓋2点(05081, 05082)、須恵器無蓋高杯(05080)、須恵器中型壺(05084)、須恵器大型壺3点(05085~05087)、須恵器有蓋高杯(05088)、須恵器中型壺(05089)、須恵器脚台(05090)、須恵器直口壺(05091)、土師器甕2点(05083, 05092)などが出土した。

また、石室内部の位置で器種の不明な鉄板1点が出土している。

(出土土器類) (Fig. 18)

(須恵器杯蓋)

05082は、周溝内出土(P5)の杯蓋である。

直立する口縁部と平坦な天井部をもつ製品である。

口縁部の一部には灰をかぶる。口縁部は短く、ほぼ直立し、縁部内面は緩い段をなす。

また、天井部との境には1条の沈線をめぐらしている。

天井部のヘラ削りは小さく、ほとんど上端部付近のみである。ヘラ削り時のロクロ回転は逆時計回りである。

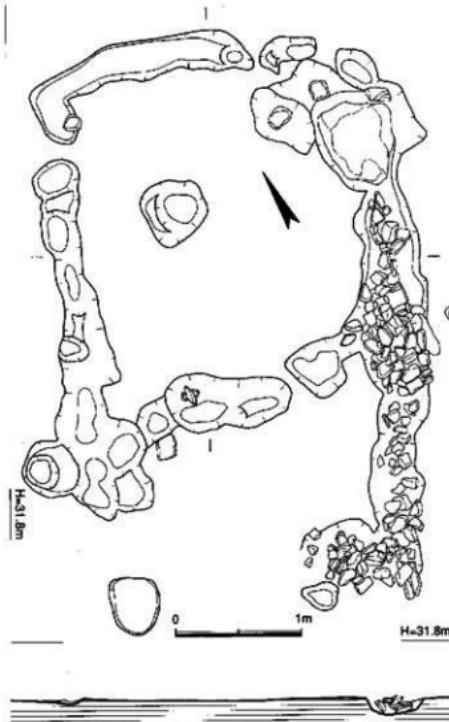


Fig. 17 吉武S群5号墳埋葬施設実測図(1/40)

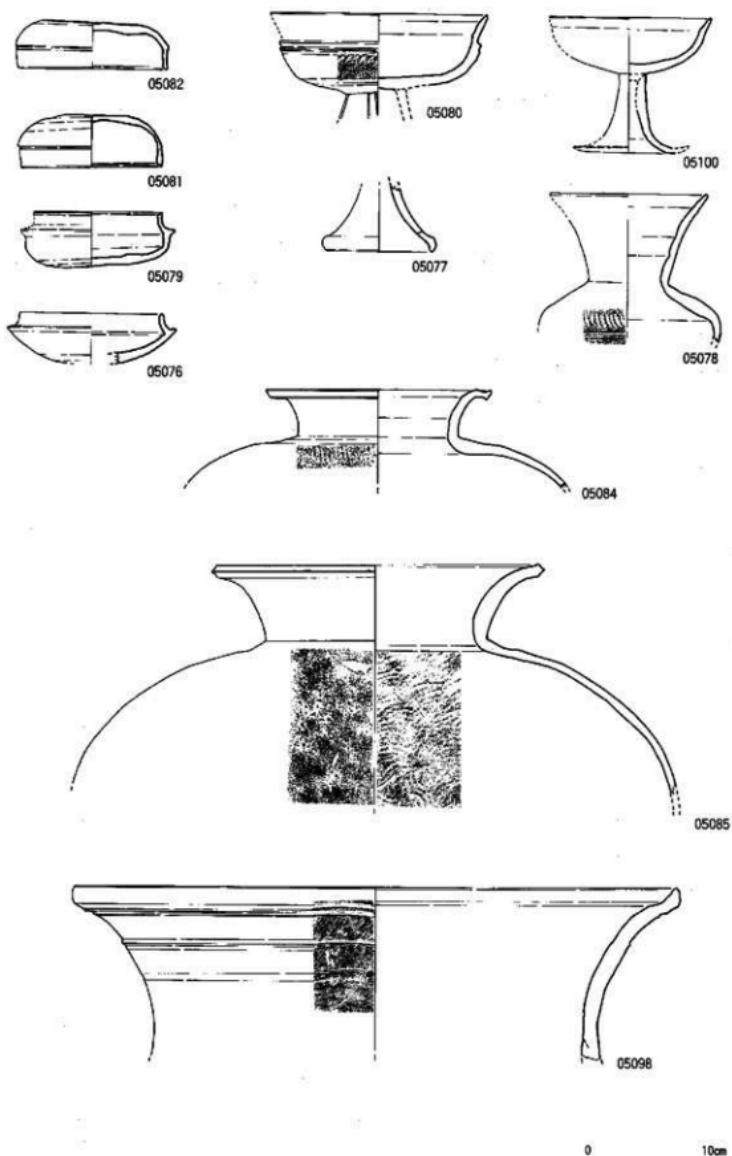


Fig. 18 吉武S群5号墳出土土器実測図(1/4)

器面調整は、外面の天井部下半部・口縁部および内面にヨコナデを施す。

器色は、外面が黒灰色、内面は暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径12.2cm、器高3.6~3.8cmを測る。

05061は、周溝内から出土した杯蓋(P4)である。

全体的に薄づくりの製品である。口縁端部のつくりはシャープで、天井部は丸味をもっている。

直立する口縁部は端部にしたがって器厚が厚く、内面は明瞭な段を有する。

器面調整は、天井部のほぼ上半部に回転ヘラ削りを施す。削り時のロクロ回転方向は時計まわりである。他の天井部および内面はヨコナデが残る。また、天井部内面はヨコナデ後にナデを加えている。

器色は、外面が暗灰色~黒灰色で、内面は暗灰色を呈する。

胎土は密で、焼成も堅緻である。口径11.4cm、器高4.2cmを測る。

(杯 身)

05079は、周溝内から出土した須恵器杯身(P2)である。

立ち上がりの内傾化が顕著な製品である。受け部は平坦面をなし、直下の体部は丸味をもって底部へ移行する。また、口縁部は端部近くで立ち上がり、上端部内面は明瞭な段を有する。

器面調整は、底部付近の小さい範囲に回転ヘラ削りを加える。ロクロ回転は時計回りである。

器色は、外面が黒灰色、内面暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径10.3cm、器高4.5cmを測る。

05076は、石室掘り方内から出土した須恵器杯身である。

立ち上がりが小さく、器高の低い製品である。体部が受け部からくびれることなく直線的に底部へ移行する形態となる。

器面調整は、体部下半より小さい範囲に回転ヘラ削りを施す。削り時のロクロ回転は、時計回りである。他の体部上半・口縁部および内面は丁寧なヨコナデである。

器色は、外面体部が黒灰色、口縁部および内面が淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径11.4cm、器高4.2cm以上を測る。

(高 杯)

05080は、周溝出土の須恵器無蓋高杯(P3)である。脚部の殆どを欠失する。

外反する薄い口縁を有する杯に長方形透かしを施した外開きの脚をもつ製品である。内面は灰かぶりとなっている。杯部は、口縁部に比較すると分厚く、口縁部の直下に鋭い2条突帯をめぐらし、この直下に波長の小さい波状文を施す。また、脚部は残りが悪いが、脚付け根から裾に向かって3方向に長方形透かしを施す。

器面調整は、杯部下端近くに回転ヘラ削りを施す。削り時のロクロ回転は時計回りである。他は灰かぶりのため不詳である。

器色は、外面が黒灰色を呈し、杯内面には輪状に淡灰色となる部分が見られる。焼成時に別個体を重ねたものか。胎土は密で、焼成も堅緻である。

口径17.2cm、残存高8.4cm以上を測る。

05077は、石室掘り方内から出土した須恵器高杯である。杯部を欠失する小形の製品である。

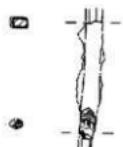


Fig. 19 吉武S群5号墳出土鉄器
実測図(1/2)

脚の裾部は、端部で肥厚して立ち上がる。また、脚には長方形透かしを施す。

器面調整は、内外面ともに丁寧なヨコナデを施す。器色は、外面が暗灰色で、内面淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。脚裾部径8.4cmを測る。

(壺)

05078は、周溝内から出土した須恵器壺(P1)である。半球状の胴部にラッパ状に外方に開く口縁部をもつ製品である。口縁部内面および外面の一部が灰かぶりである。胴部の最大径の部分に原休刺突文、この直下に2条の平行沈線文をめぐらす。器面調整は、内外面ともに丁寧なヨコナデである。器色は、外面が黒灰色で、胴部内面は淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径12.7cm、残存高11.8cmを測る。

(壺)

05084は、周溝山上の須恵器小形壺である。球状の胴部に端部が反転する短い口縁を有する製品である。外面胴部・内面口縁部が灰かぶりである。口縁端部の内面は跳ね上げ状に産む特徴がある。

器面調整は、外面胴部に粗い擬格子タタキが見られ、他は全て丁寧なヨコナデである。器色は、外面が淡黄灰色、内面黒灰色～淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径17.8cm、残存高7.7cmを測る。

05085は、周溝内で出土した須恵器中型甕である。短く、外方に開く口縁部が特徴である。

外面胴部や内面口縁部は灰かぶりとなっている。

器面調整は、胴部外面に細かい縱方向の擬格子タタキ後にヨコナデを加える。口縁部内面は丁寧なヨコナデを施す。

また、胴部内面は粗い青海波文が残る。器色は、外面胴部が淡灰色で、口縁部は黒灰色を呈する。また、内面は淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径25.2cm、残存高18.5cmを測る。

05098は、周溝内北側で出土した須恵器大甕である。内面および外面の一部が灰かぶりとなる。

緩やかに外方に開く口縁部は、端部で肥厚して玉縁状となり小さく立ち上がる。

外面の口縁下端部の直下に幅広く緩い突帯と低く鋭い突帯を2条めぐらし、この下に波長の短い波状文を施す。さらにこの下部に2条の低い突帯をめぐらし、この間を同様の波状文で埋める。

器面調整は、内外面ともにヨコナデである。器色は、外面が淡灰色を呈し、内面も灰かぶりのために淡灰色にちかい。生地色は淡紫色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径48cm、残存高13.4cmを測る。

(土師器高杯)

05100は、周溝内東側で出土した高杯である。浅い杯部に口縁部が緩く反転する口縁部がつき、細身の脚部は裾部で跳ね上がる。杯部は器面の荒れが著しい。脚円筒部には縦のヘラ削りが見られる。外面は丹塗りの痕跡が認められる。器色は、外面が淡赤褐色で、脚内面は淡褐色を呈する。胎土は密で、焼成は軟質である。口径13cm、器高10.8cm、脚径9.3cmを測る。

(出土鉄器) (Fig. 19)

石室内出土の鉄鎌である。先端部を欠失する。

頭部断面は長方形をなす。矢柄を茎に装着した後に櫻皮を巻き付けている。残存全長は、4.7cm、頭部長3.5cm、茎部長1.2cmを測る。

4. S群6号墳 (Fig. 20~26、Pl. 4)

S 6号墳は、S 5号墳の東側に隣接して営まれる。周溝は西側半分を残すのみである。古墳の北側および東側では周溝の延長を確認できず、削平によって失われたものと考えられる。

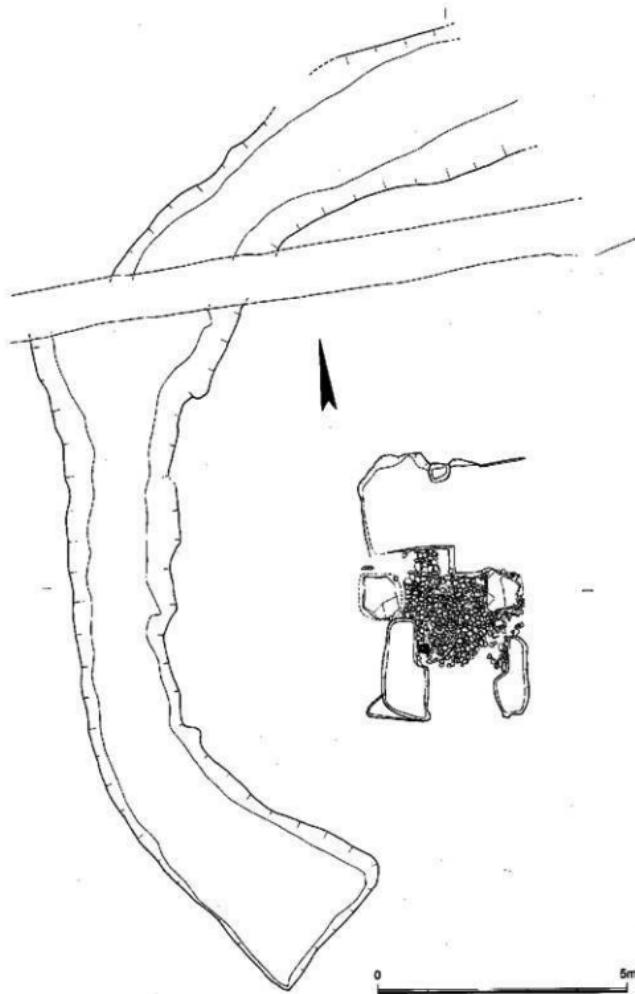


Fig. 20 吉武S群6号墳出土状況実測図(1/100)

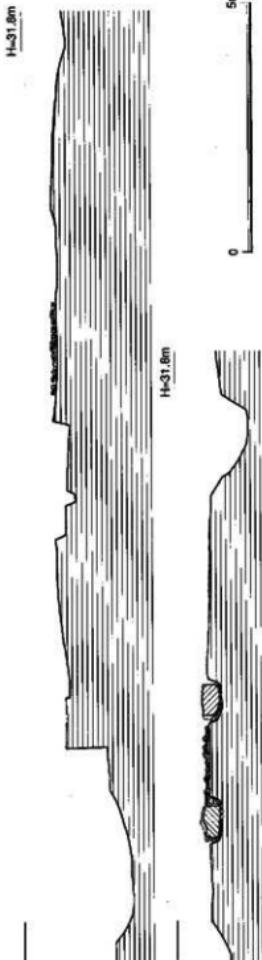


Fig. 21 吉武S群6号墳出土状況断面実測図(1/100)

周溝の遺存状況も悪く、深さ25~50cm程度である。

また、内部主体の石室も腰石の一部と石室床面の敷石を残すのみで、石室周辺部全体にわたって削平を受けている。

出土遺物では、石室内で須恵器杯蓋・壺・鉄斧・鉄矛・管玉が出土し、他に周溝内からは須恵器を主に土師器などの各器種が出土している。

① 周溝 (Fig. 20・21)

周溝は、東半部分を削平によって失っているが、外径は20m前後の規模と考えられる。遺存する地表面のレベルは周溝内側の石室側の方が外縁に比較して僅かに高い。

また、周溝幅員は、北側2.5m・西側2m・南側2.5mを測り、南側に内部への出入り口である陸橋部の一端が残る。

周溝の残存する深さは、北側で0.3m、西側で0.5m前後、南側で0.4m前後で、周溝の地点によって底面の掘削程度が異なっている。

周溝内からは底面より20~30cm浮いたレベルで須恵器を中心とする土器類が出土した。

② 内部主体 (Fig. 22)

S6号墳の内部主体は、その平面形を推定するために必要な北側部分を失っているために十分に規模などを明らかにできないが、側壁の一部と考えられる腰石が対向する位置に残されており、この2石間に小形の扁平礫を敷き詰める形態から石室構造であったと考えることができる。

また、周溝の陸橋部が南側にあいていることから石室は南側に開口していたと推定できる。

石室側壁の腰石と考えられる石材は、東側壁で長・幅・厚さが0.85m・0.6m・0.35mを測る扁平な角礫である。

また、西側壁のものは、長・幅・厚さが0.85m・0.7m・0.4mを測る扁平な角礫である。

また、この他に石材の埋置のための掘り方が両側壁で確認できる。東側のものは南北長1.6m・東西幅0.5~0.7m・深さ0.1~0.2mを測る長方形の浅い土壙で、形状から2石が埋置されていた可能性がある。次に西側のものは、南北長2m・東西幅1~0.6m・深さ0.15m前後を測る長方形土壙で、形状

からこちらも2石が埋置されていた可能性が高い。このようにS6号墳石室は、破壊が著しいためにその規模・形状を十分に知ることができないが、僅かに残る側壁石材と石室床面に残る敷石からこの部分での石室幅は1.45m程度と考えることができよう。

石室内では原位置を保つ遺物として右側壁の腰石に接して鋳造鉄斧があり、左側壁の掘り方に接して須恵器壺破片が出土した。また、この他に石室内から鉄矛・須恵器杯蓋・管玉などが出土しているが、奥壁部にあたる部分を失っているために出土点数は多くない。

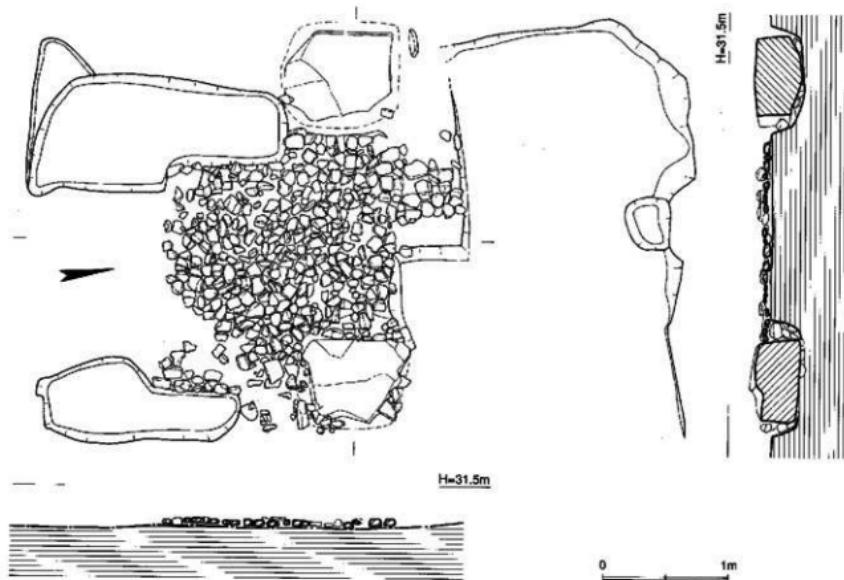


Fig. 22 吉武S群6号墳埋葬施設実測図(1/40)

③ 出土遺物 (Fig. 24～26, Pl. 41・42・43)

S 6号墳から出土した遺物類は、須恵器・土師器などの土器類を主にしており、周溝内山上のものが多い。

石室内では、須恵器杯蓋 2 点(05104・05105)、鍛造鉄斧、鉄矛、凝灰岩製管玉が出土した。

また、周溝内では、土師器壺 4 点(05106・05110～05112)、須恵器杯蓋 2 点(05107・05108)、須恵器高杯脚(05109)、須恵器ハソウ(05113)、須恵器無蓋高杯(05114)、須恵器壺口縁 2 点(05115・05116)、横瓶口縁(05117)などが出土した。

次に古墳西側の検出面では、須恵器杯蓋(05118)、壺口縁(05119)、高杯脚(05120)などが出土した。
(出土土器類) (Fig. 24)

(須恵器杯蓋)

05107は、周溝内出土の杯蓋である。やや外側に開く口縁部は高く、端部は尖る特徴を持っている。口縁端部の内面は沈線状となり、緩い段をなしている。

また、口縁部と天井部との境は緩く沈線状に窪み、段をなしている。

器面調整は、天井部の 1/3 程度に回転ヘラ削りを加えており、他は内外面ともにロクロ回転によるヨコナデ調整となっている。器色は、内外面ともに灰白色を呈する。胎土はやや粗で、石英細砂を多く含む。また、焼成は堅密である。復元口径 14.3cm、器高 5.4cm を測る。

05104は、石室内埋土から出土した杯蓋である。口縁部は丸味を帯び、端部は鋭いつくりとなる。

口縁端部内面は、沈線状に窪み、明瞭な段をなしている。



Fig. 23 吉武S群6号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)

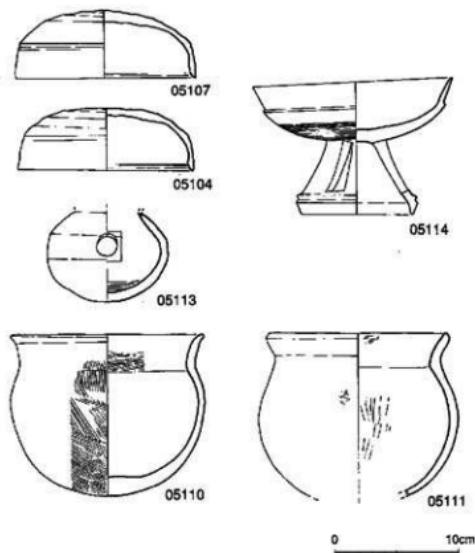


Fig. 24 吉武S群6号墳出土土器実測図(1/4)

(ハソウ)

05113は、周溝内から出土した須恵器ハソウである。器は口縁部を失っている。半球状の胸部の最大径部に1孔を穿つ。

器面調整は、外面胸部の上半2/3を回転ヨコナデ、これ以下をナデで仕上げるが、胸部中位は強いヨコナデによって平坦面をなしている。また、内面は回転ヨコナデで、内底部にはアテ具痕が残る。

器色は、内外面ともに灰白色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。頭部径5.3cm、胸部最大径9.7cm、残存高7.4cmを測る。

(無蓋高杯)

05114は、周溝内から出土した須恵器無蓋高杯である。浅く、伸びやかに外方に開く杯部と短く、やや厚手のつくりの胸部とをもつ製品である。

杯部口縁は、体部に比較して薄づくりで、その境は平坦な、明瞭な段をなしている。また、脚部は、三方に長方形透かしを施す短脚で、外面端部付近で屈曲して下端部で鈍く尖る形状となる。屈曲部には緩い2条の突帯をめぐらす。

器面調整は、杯部下半にカキ目を施し、他は回転ヨコナデである。器色は、内外面ともに灰白色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復元口径16cm、器高10.2~11cm、脚の基部径4.9cm、脚幅部径8.9cmを測る。

(土師器臺)

05110は、周溝内から出土した壺である。口径に比較して器高の低い特徴を持つ丁寧なつくりの製品である。器は、ふくらみの少ない胸部から小さく反転する短い口縁部をもつ。

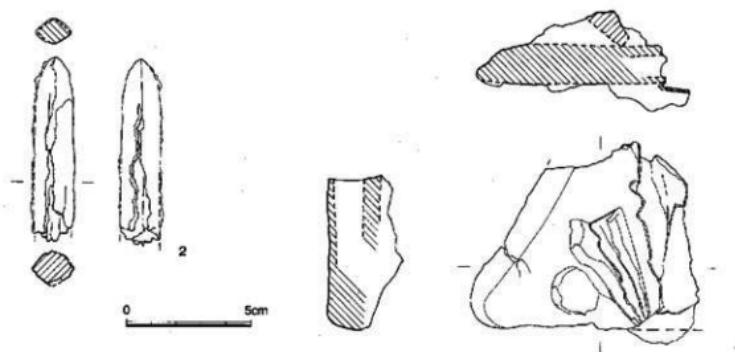


Fig. 25 吉武S群6号墳出土鉄器実測図(1/2)

器面調整は、外面頸部以下に縦・斜め方向の比較的荒いハケメを施し、口縁部内面下半にも横方向のハケメを施している。また、この後内面の胴部・口縁部上半および口縁部外面には丁寧なヨコナデを施す。器色は、内外面ともに暗褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復元口径15.3cm、胴部最大径15.5cm、器高12.9cmを測る。

05111は、周溝内から出土した上師器である。全体に器面の磨滅が著しい。やや絞まった頸部から屈曲して外方に開く口縁部を有する。器面調整は、外面口縁部付近にヨコナデで、胴部には一部に斜めハケが残る。また、内面は口縁部で横ハケ後にヨコナデを加えており、胴部は細かいヘラ削りとなっている。器色は、内外面ともに暗褐色を呈し、外面に黒斑が見られる。胎土は密で、石英粗砂などを多く含む。焼成はやや軟質である。復元口径14.3cm、胴部最大径16.1cm、残存高13.1cmを測る。(管 玉) (Fig. 26)

管玉は、石室内で1点が出土している。淡緑色を呈する凝灰岩製と考えられるもので、長さ27.7mm、直径8.8~9mm、孔径1~2.5mmを測る片面穿孔の製品である。

(鉄 器) (Fig. 25)

鉄造鉄斧

1は、嘴状の最も大きい平面を占める部分が、鉄造鉄斧である。袋部の上端を欠くために全体は不明であるが、残存部長7.3cm、袋部幅2.1cmを測る。

この鉄斧の周辺には、2個以上の複数鉄器が銹着しており、鉄斧についても形状を十分に明らかにできない。

鉄矛

2は、横断面形が分厚い内錐形をなすことから矛先端部と考えられる。

縁辺は銹化が著しく、器面の亀裂も全体に見られる。現存長は7.44cm、幅1.7cm、刃部の厚さ1.6mmを測る。石室内の様下から出土した。

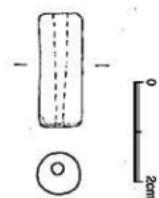


Fig. 26 吉武S群6号墳出土装身具実測図(1/1)

5. S群 7号墳 (Fig. 27~29, Pl. 5)

S 7号墳は、L・M地区の南端を東西に走る計画水路の調査区で検出された古墳である。

古墳は、計画水路の掘り方幅5.5mの範囲で主体部および周溝の一部が確認できた。

しかしながら本墳もまた他の古墳と同様に開墾による徹底した破壊を受け、内部主体の石室は主要な石材を全く残していない。また、古墳造営に関わる副葬遺物類も極端に少なく、周溝内で数点が出土したにすぎない。

① 周溝 (Fig. 27)

S 7号墳の周溝は、主体部の東西側で短い延長が検出された。このうち西側の周溝は、主体部の掘り方軸線とほぼ並行する方向に走る。幅員が4.5~3.5mで、南側から北に幅狭くなる。また周溝の深さは南側で40cm前後、北側で20cm前後と変化している。一方東側の周溝は、主体部の掘り方方向とは関係なく寧ろ弧状に食い込む形状となっている。この東西の周溝のちがいは他の古墳と同様に不整な周溝形状の一端であろうかとも考えられるが、限定された調査範囲ながら周溝内壁間が約8mと非常に短く、別の未調査古墳との重複の可能性も考えて置かなければならないであろう。

遺物類は、東西の周溝内から、須恵器杯蓋・同子持ち土器の子やハソウロ縁部破片などが出土している。

② 内部主体 (Fig. 28)

S 7号墳の内部主体は、前述のように石材が全く残っていないため、その形状や規模を述べることができないが、他の古墳と同様に石材を埋置するための掘り方が残っており、石室であったことが十分に想定できるものである。

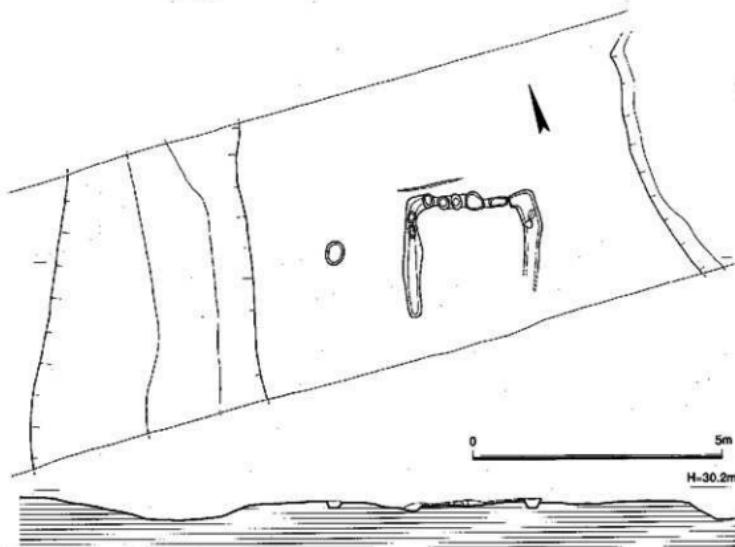


Fig. 27 吉武S群7号墳出土状況実測図(1/100)

石室の掘り方は、平面形が「コ」字形をした構造遺構である。この構造遺構は、主軸を磁北より東に16度ほど振る方向にとるもので、東側側壁部の一部を失っているが、全体としてその規模を確定することができる。

現状で規模を挙げると、東側壁の内辺長2.3m以上、西側壁の内辺長4.1~4.2m、奥壁側の内辺長4mを測るものである。

また、掘り方の幅は0.6m~0.7m程度で、深さも0.1mにすぎない。

また、掘り方では奥壁部に5個のピットがあり、西側側壁の奥壁に近い部分に2個のピットが見られ、これらはそれぞれ腰石の位置と数を示すと考えてよからう。この点では入り口に近い両側壁側には比較的埋置しやすい石材が用いられていたものと考えられる。石室規模は、この掘り方内辺に収まるものである。

③ 出土遺物 (Fig. 29)

(須恵器)

05122は、東側の周溝内で出土した子持ち須恵器の子かと思われる須恵器である。杯部の下に三方に長方形透かしを施した胴張りの器を接続し、さらにこれに三方に長方形透かしを施した脚部をくっつけている製品である。脚部にはカギ目が見られる。器色は、淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。残存高5.5cmを測る。

05121は、西側周溝内から出土した杯蓋である。丸井部は丸く、口縁部は小さく畳曲して外側に開く。器色は、外面は灰かぶりで、内面淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径10.6cmを測る。

05123は、東側周溝内から出土したハソウロ縁部破片である。口縁部内面は沈線状に壅み、段をなす。頸部との境には1条の沈線をめぐらし、この直上に波長の短い波状文を施す。器色は、外面が黒灰色で、内面暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。

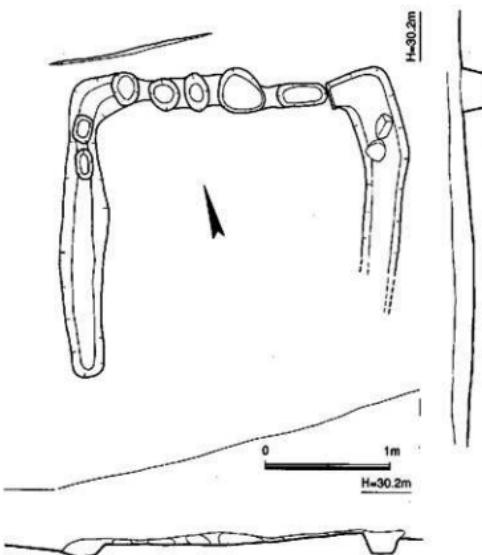


Fig. 28 吉武S群7号墳埋葬施設実測図(1/40)



05122



05121



05123



Fig. 29 吉武S群7号墳出土土器実測図(1/40)

6. S群8号墳 (Fig. 30~38、Pl. 6~9)

S8号墳は、L・M地区の古墳群の中央部分に造営された円墳である。全体に他の古墳と同様に削平を受けているが、平面的には周溝がほぼ完全に残り、内部主体の石室も奥壁と右側壁の一部を除いて良く残り、石室プランや構造もよく把握することができる。また、石室の右側壁に接する部分や奥壁に近い左側壁などでは埋葬時の副葬遺物が原位置近くに残されているものが見られる。

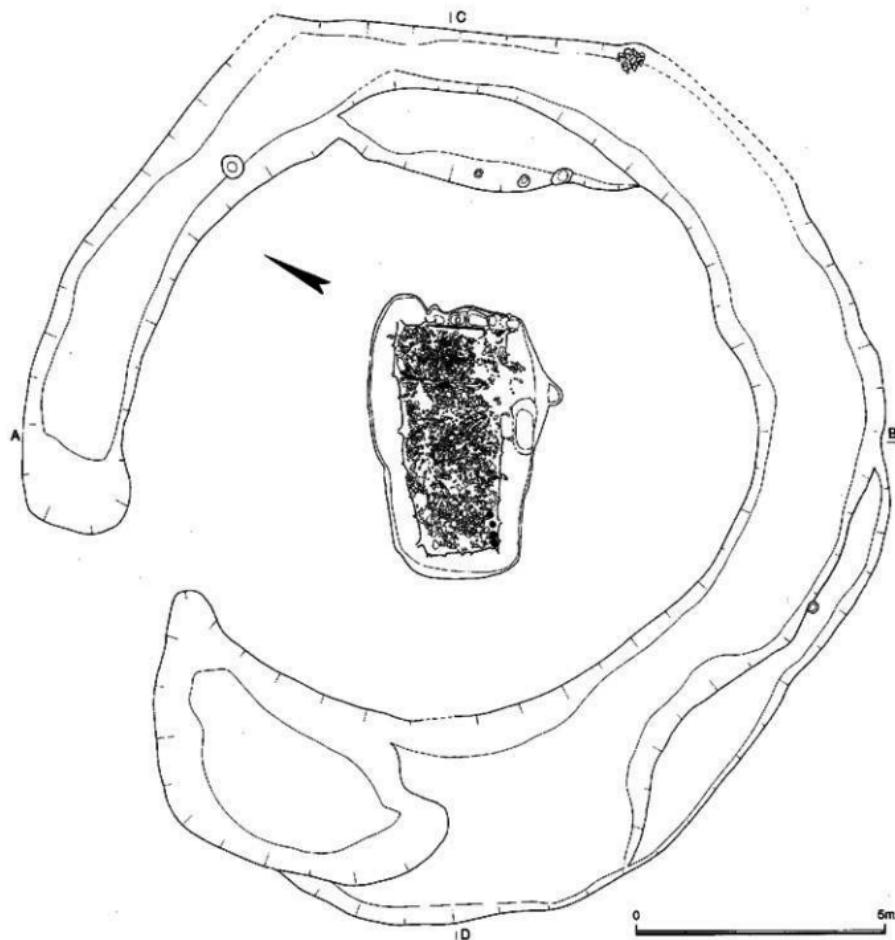
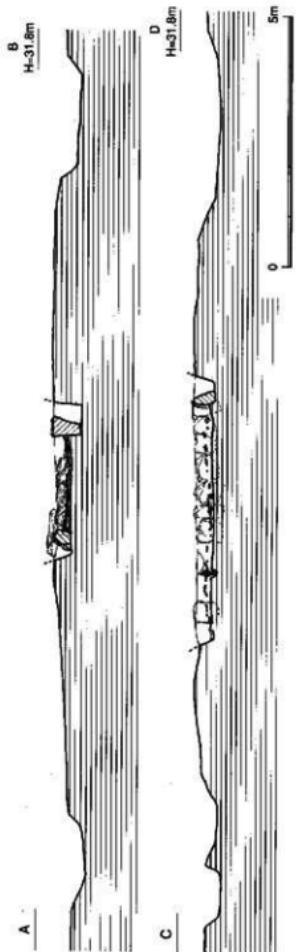


Fig. 30 吉武S群8号墳出土状況実測図(1/100)



吉武S群8号墳出土状況断面実測図(1/100)
Fig. 31

① 周溝 (Fig. 30・31)

S8号墳の周溝は、北東側外周の一部を他の溝状遺構との重複で失っているが、ほぼその規模を知ることができる。

周溝は、南北の外径で16.7m、東西外径17.5mを測り、ほぼ円形を呈する。出入り口の陸橋部は西側に開口し、幅1.8mが掘り残されている。また、幅員は、北側2m、南側2.8~3m、東側2.5m前後、西側3.5m前後となり、西側を除くと比較的幅員の近い整った形状となる。残存する深さは、周溝の西側の一部で0.6mを測る以外は殆どが0.2~0.3m程度である。

周溝内からは須恵器を主として土師器などが大量に出土した。

② 内部主体 (Fig. 32・33)

S8号墳の内部主体は、人り口に比べて奥壁側の幅が広くなる平面バチ形プランの石室である。石室は主軸を磁北から東へ60度振った方向に向ける。

石室は、右側壁の一部と奥壁の腰石が取り残されているが、石材を埋置するための掘り方がよく残っている。このため石室規模は入り口の小口部で1.4m、奥壁部で2.2m、右側壁で4.4m、左側壁で4.65m程度を測ることができる。また、奥壁に平行して恰も石障の様に板石が立てられ、奥壁との幅1.1m、左右2.2m強の長方形の空間が現出されている。

また、石室上部の構造については、左側壁の一部に2石目まで残っている部分があるが、それほど小口部分をせり出させている状態ではなく、使用した石材のサイズとあわせて天井高はそれほど高くないと推測される。

(副葬遺物の配置状況) (Fig. 33)

まず石室の奥壁と板石で仕切られる1.1m×2.2mの空間では、奥壁に沿って全長111cmを測る大型鉄刀(F-1)が置かれている。また、東側隅には袋状鉄斧(大小)・鉄鎌・轆・ヤリカシナが鏡着した鉄器群(F-2)がある。右側壁側には馬具(轡片)(F-13)がある。また、板石に接して鉄鎌(F-3)がある。

また、西側の板石に接してF-4(不明鉄板)、F-5(鉄鎌)、短刀・刀子・鐵鎌鋸着)、F-6(馬具-引手)、F-7(鉄鎌)、

F-8(鉄鎌)、F-9(鉄鎌)、F-10・11(馬具-轡・引手)、が集合して置かれている。また、左側壁の近くにF-34(鉄鎌)、F-26(刀子)が知られる。次にこの空間では管玉・ガラス小玉などの装身具が殆ど出土しており、頃部を西に向かた埋葬場所として考えて差し支えなかろう。

次に右側壁に沿った壁際の中程に一群の鉄器群がある。F-14(馬具-轡片)、F-15(鉄鎌)、F-16(鉄鎌)、F-17(袋状鉄斧)、F-18(鉄刀・鉄鎌)、F-19(鉄鎌)、F-20(鉄鎌)、F-21(鉄鎌)、F-22(鉄鎌)、F-23(不明鉄器)、F-24(鉄鎌)、F-25(鉄鎌)、F-27(鉄鎌)、F-28(鉄鎌)、F-29(鉄鎌)、F-30・31(不明棒状鉄器)、F-32(鉄鎌)である。

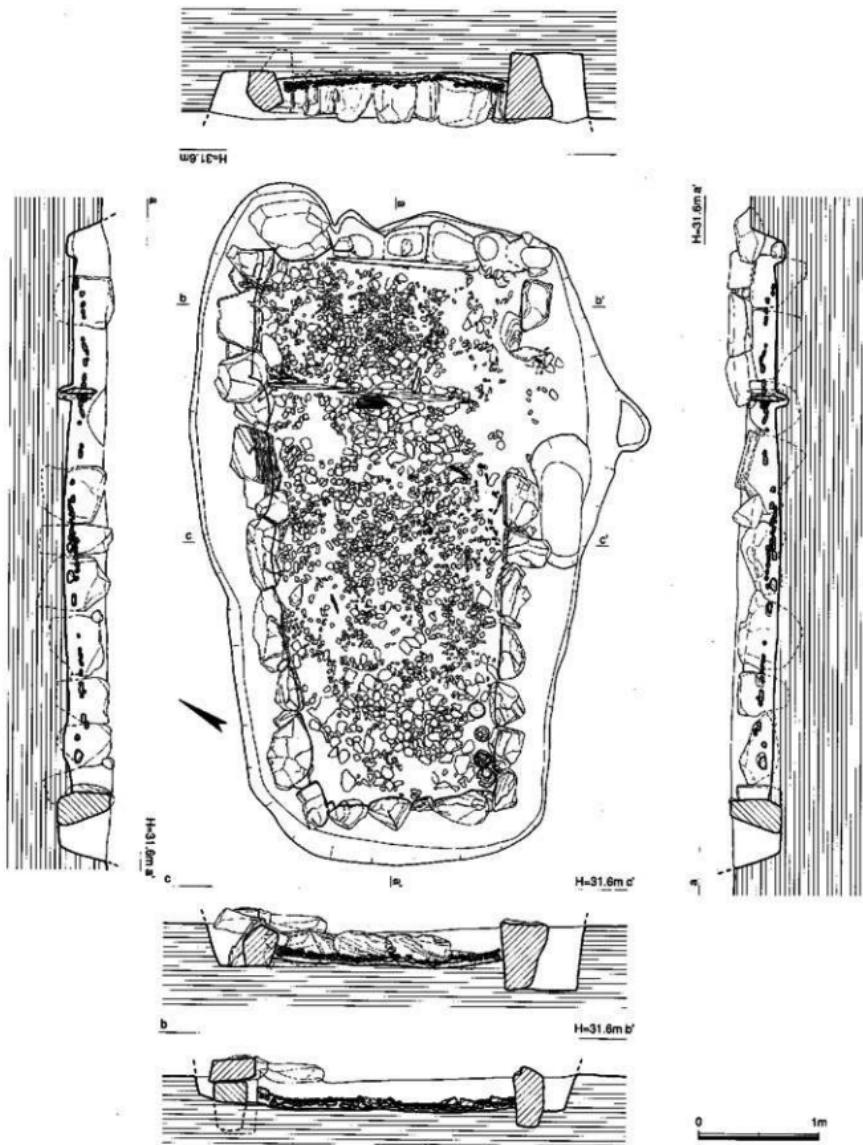


Fig. 32 吉武S群B号填埋施設実測図(1/40)



Fig. 33 吉武S群8号填副葬物出土状况实测图 (1/25)

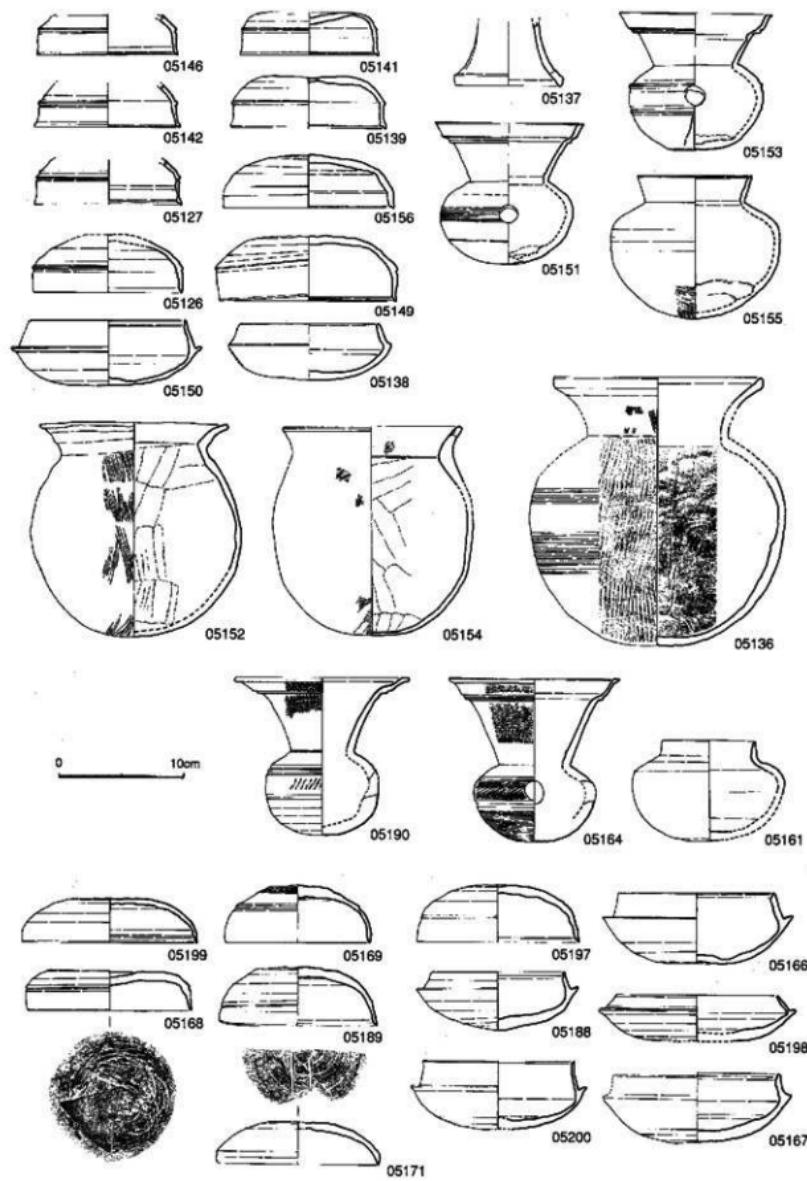


Fig. 34 吉武S群8号墳出土土器実測図(1)(1/4)

また、この鉄器の一群の西側にP-8(須恵器杯蓋)がある。それから左側壁近くのF-12は不明工具(鑿?)である。石障状の板石に接して少なくとも23本以上の鉄鋸が置かれている。

また、右側壁の壁際にP-7(須恵器杯蓋)があり、これに付着して鉄刃(?)破片がある。さらに入り口の右側には土器が掘え置かれている。奥から須恵器杯蓋(P-6)、須恵器壺(P-5)、土師器壺(P-4)とこれに容れ子になった須恵器ハソウ(P-3)、土師器壺(P-2)とこれに容れ子になった須恵器ハソウ(P-1)が知られる。

以上のように本墳では鉄器の出土が目立っている。特に石障内では東側で袋沢鉄斧をはじめとする鉄製農工具のセットがあり、西側では馬具がまとまっている。また、右側壁の一群の鉄器でも馬具・袋状鉄斧・鐵などがまとまっている。

次に土器類は原位置を保つものは少ないが、石室入り口の右側壁で見られた杯・壺やハソウと土師器壺の組合せは葬送具のセットとして貴重な例であろう。

③ 出土遺物 (Fig. 34~38, Pl. 42~44)

(出土土器類) (Fig. 34~36)

土器類はその出土量が膨大であるため確実に遺構に属するものを優先的に図化し、可能な限り各器種が網羅できるように選別して行った。

ア、石室内出土土器

05146は、石室床面出土の杯蓋である。直立する口縁は端部内面が明瞭な段を有する。また、天井部との境は鋭い沈線で区切られる。内外面ともにヨコナデが残る。器色は、外面黒灰色で、内面暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径11.2cm、残存高3.2cmを測る。

05142は、石室床面出土の蓋杯である。口縁部はやや外側に踏み張る形で、内端部は沈線状に伸び段をなす。天井部との境は鈍い丸味を持った突帯をめぐらす。内面ヨコナデを残す。器色は、外面黒灰色、内面淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径11.6cmを測る。

05127は、石室床面出土の杯蓋である。口縁部は直立し、内端部には緩い段を有する。内面にヨコナデが残る。器色は、外面黒灰色、内面淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径11.8cm、器高4.6cmを測る。

05126は、石室内埋土出土の杯蓋である。天井部は丸味を帯び、口縁部も直立するが内端部の段は顕著ではない。天井部との境の突帯の直上から回転ヘラ削りを加える。器色は、外面淡灰色～黒灰色、内面淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径11.8cm、器高4.6cmを測る。

05141は、石室床面出土の杯蓋である。口縁部は高く、ほぼ直立し、低い天井部へとつながる。天井部との境の突帯は鋭く、口縁内端部は明瞭な段をなす。天井部上端にヘラ削りが残る。器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径11.2cm、器高3.4cmを測る。

05139は、石室床面出土の杯蓋である。天井部は灰かぶり。口縁部内端は明瞭な段をなす。天井部の上半部に回転ヘラ削りを加える。器色は、外面口縁が黒灰色、内面暗灰を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径13.5cm、器高4.1cmを測る。

05156は、石室床面出土の杯蓋である。全体にメリハリのない製品である。天井部と口縁部との境が不明瞭で、口縁内端部は緩く窪む。天井部内面にアテ具痕が残る。器色は、内外面ともに淡灰色を呈する。胎土密で、焼成はやや軟質である。口径13.7cm、器高4.25cmを測る。

05149は、石室床面出土の杯蓋である。やや薄づくりの製品である。口縁部内端は明瞭な段をなす。また、天井部との境は低く、鋭い突帯となる。天井部中位以上にヘラ削りを加える。器色は、外面淡配色、内面暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径14cm、器高5.1cmを測る。

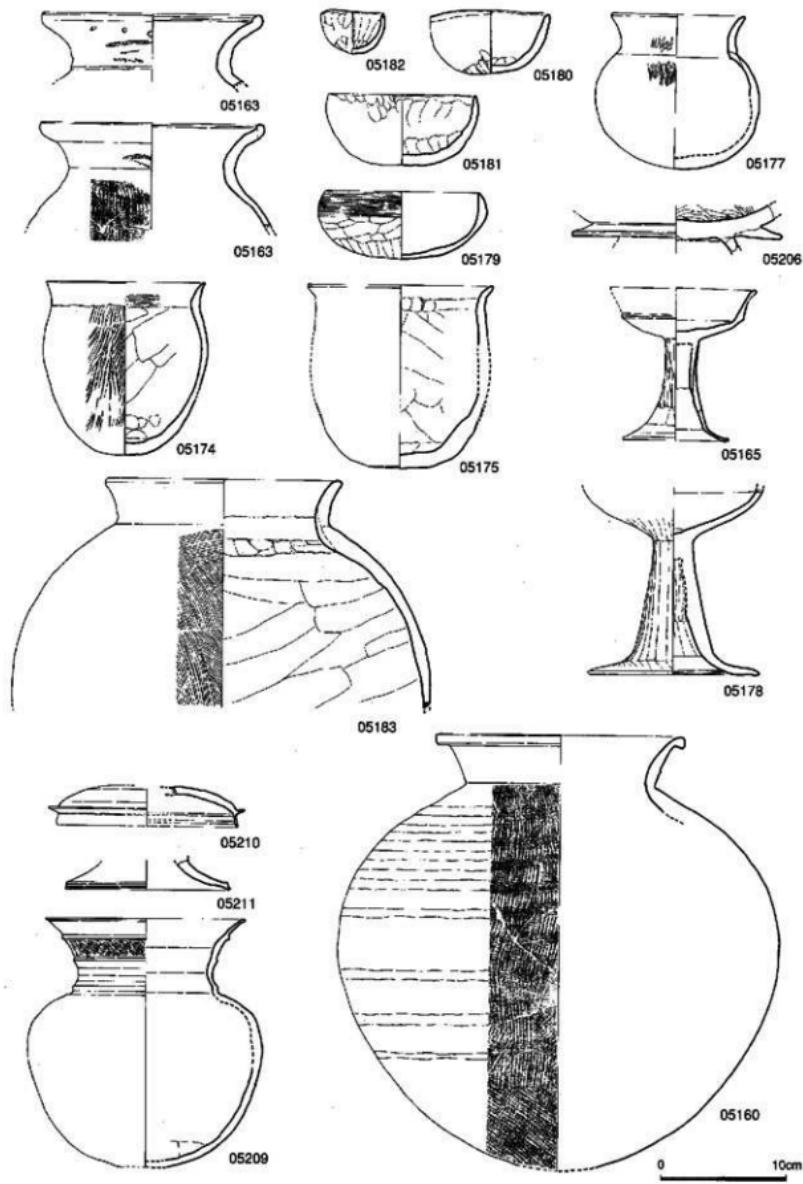


Fig. 35 吉武S群8号填出土土器実測図(2)(1/4)

05150は、石室床面出土の杯身である。全体に薄づくりの製品である。やや内傾する立ち上がりは内端部で緩い段をなす。体部中位以下に回転ヘラ削りを施す。内底部にはアテ具痕が残る。器色は、内外面とも暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅敏である。口径12.3cm、器高5.2cmを測る。

05138は、石室埋土出土の土師器杯身である。殆ど平坦面のない受け部から緩く短い立ち上がりとなる。内外面ともに黒色顔料を塗布している。内・外面の体部は丁寧なヘラナデで、他はヨコナデである。胎土は密で、焼成は軟質である。口径11.1cm、器高4.5cmを測る。

05137は、石室床面出土の高杯脚部である。脚端部は喇叭状に屈曲する。脚には一部に灰かぶりが認められ、五方に長方形透かしをめぐらす。器色は、外面暗灰色、内面淡灰色を呈する。胎土は非常に密で、焼成も堅敏である。脚部径8.4cm、残存高5.2cmを測る。

05151は、石室右側壁出土のハソウ(P1)である。05152の土師器甕(P2)とセットである。頸部径の大きい製品で、内面は灰かぶりとなっている。頸部に波長の上下に大きい波状文をめぐらし、胸部最大径部に斜めの原体刺突文を施す。また、この下部には幅1cm強のカキ目を残す。器色は、外面黒灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅敏である。口径11.9cm、器高11.3cmを測る。

05153は、石室右側壁出土のハソウ(P3)である。05154の上部器甕(P4)とセットである。こちらも頸部径の大きな製品である。口縁部および頸部に波長の小さな細かい波状文をめぐらす。また、胸部中位には2条の突帯をめぐらし、この間を縦の原体刺突文で埋めている。器色は、内外面ともに淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅敏である。口径12.3cm、器高11cmを測る。(P42)

05155は、石室右側側壁出土の壺(P5)である。短く外方に開く口縁部は、内邊が僅かに窪む。口縁から肩部にかけて灰かぶりである。胸部最大径部は横ヘラナデで、底部には細かい斜めの平行タタキが残る。また、内底部はヘラ削りが残る。占色は、外面黒灰色、内面淡灰色を呈する。口径9.2cm、器高11.4cmを測る。

05152は、石室右側側壁出土の土師器甕(P2)である。05151の須恵器ハソウとセットである。やや絞まった頸部から「く」字に屈曲する口縁をもつ丸底土器である。外面は頸部付近まで火に遭っており、内面にも焼けこげた痕跡が見られる。外面は胸部に粗い縦ハケメ調整で、口縁部はヨコナデを施す。また、胸部内面は粗いヘラ削りが見られる。胎土はやや粗で、焼成は軟質である。口径15cm、器高17.1cmを測る。

05154は、石室右側側壁出土の土師器甕(P4)である。05153の須恵器ハソウとセットである。

底部は小さい平底をなし、頸部は肥厚して「く」字形口縁につながる。器面の磨滅が大きく、外面には一部に細かい縦ハケメが残る。胸部内面は粗いヘラ削りを施す。器面は小黒斑が多く、器色は暗赤褐色を呈する。口径14.4cm、器高15.7cmを測る。

05136は、石室床面出土の須恵器中型壺である。外反する口縁部は端部が玉縁状に肥厚する。外面は擬格子タタキ後、胸部中位以下にカキ目状の平行なナデを加える。また、内面の青海波文はナデ調整で痕跡的となっている。器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅敏である。口径16.6cm、器高21.7cmを測る。

イ、周溝内出土土器

05190は、周溝内出土ハソウ(P6)である。頸部径はやや小さく、口縁端部も丸味を帯びる。口縁部・頸部に波長の小さい、細かい波状文をめぐらす。また、胸部中位には2条の突帯をめぐらし、この間を斜めの原体刺突文で埋める。また、胸部下半にはヘラ削りを施す。器色は内外面ともに淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅敏である。口径14cm、器高13.7cm、頸部径10cmを測る。

05164は、周溝内南西側出土の須恵器ハソウである。口縁部に比べて胸部がやや小さい製品である。

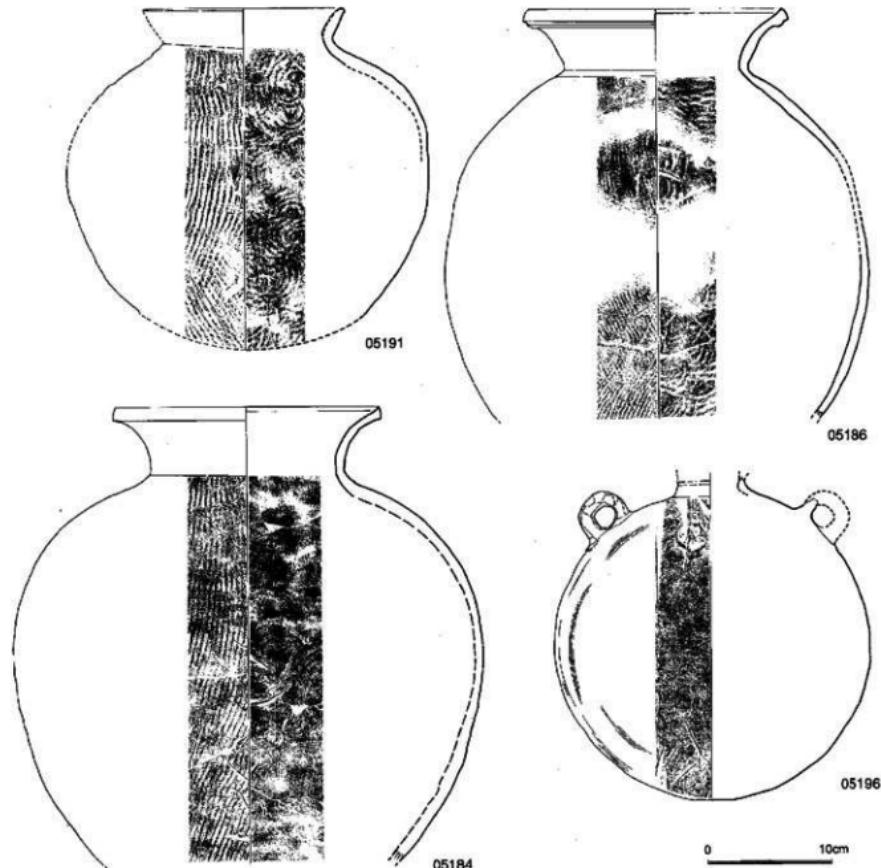


Fig. 36 吉武S群8号墳出土土器実測図(3) (1/4)

口縁部・頸部上半部に上下動の小さい、細かい波状文をめぐらす。また、胸部中位には2条の沈線をめぐらし、この間を斜めの原体刺突文で埋める。胸部下半は全面カキ目となる。器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径13.6cm、器高13.1cmを測る。

05161は、周溝内南西側出土の直口壺である。頸部に固着した蓋の一部が残る。肩部から底部にかけては灰かぶりとなる。外面と口縁部内面はヨコナデを施し、胸部内面は回転ヘラ削りが残る。器色は、黒灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径7.4cm、器高8.1cmを測る。

05199は、周溝内出土の杯蓋である。器高が低く、薄づくりの製品である。口縁端部は細く收める。また、天井部との境は明瞭でなく、天井部の殆どに回転ヘラ削りを加える。内面はヨコナデである。器色は、外面黒灰色、内面暗灰色を呈する。口径13.8cm、器高3.5cm前後を測る。

05168は、周溝内出土の杯蓋である。天井部は灰かぶりとなる。天井部は焼けひずみのためややいびつで、緩い突帯を境に短い直立する口縁部とながる。天井部内面には大きなアテ具痕が残る。器色は、外面黒灰色、内面淡灰色を呈する。口径13cm、器高3cm前後を測る。

05169は、周溝内南西側出土の杯蓋である。外面は灰かぶりとなる。天井部との境は緩い段をなし、ヘラ削りは頂上部に限られる。内面はヨコナデを施す。器色は、淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径11.5cm、器高4.6cmを測る。

05197は、周溝内出土の杯蓋である。丸味を持った製品で、口縁部と天井部の境は1条の沈線となる。口縁端部は緩く壅む。天井部の2/3にヘラ削りを加える。また、天井部に「X」のヘラ記号が残る。器色は外面暗灰色で、内面淡灰色を呈する。胎土は非常に密で、焼成も堅緻である。口径13.2cm、器高4.6cmを測る。

05189は、周溝内出土の杯蓋(P5)である。口縁部は薄く、天井部にしたがって器厚を増している。

天井部と口縁部との境は低く、緩い突帯となる。天井部の2/3にヘラ削りを加える。器色は、内外面とともに暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成は軟質である。口径12.5cm、器高4.5cm前後を測る。

05171は、周溝内南西側出土の杯蓋である。全体に器高が低く、口縁部の小さい製品である。天井部の1/2程にヘラ削りを加える。また、天井部に「ニ」のヘラ記号を刻む。内面はヨコナデ調整である。器色は、黒灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径13cm、器高3.4cmを測る。

05188は、周溝内出土の杯身(P4)である。やや内傾する立ち上がりは内面がやや壅み、段をなす。

また、体部は2/3にヘラ削りを加える。内面はヨコナデ調整である。器色は、内外面ともに明灰色を呈する。胎土は密で、焼成は軟質である。口径10.5cm、器高4.7cmを測る。

05200は、周溝内出土の杯蓋である。立ち上がりは高く、薄づくりで、端部が段をなす。体部の約1/2にはヘラ削りを加える。内面にはヨコナデを施す。器色は、外面体部黒灰色で、口縁部および内面は淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径12.2cm、器高5.5cm前後を測る。

05166は、周溝内南西側出土の杯身である。立ち上がりはやや内傾し、端部に緩い段を有する。また、体部に比べて口縁部の器壁は厚い。体部の約1/2にヘラ削りを加える。器色は、外面体部で黒灰色、口縁部明灰色、内面暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径12.8cm、器高5.7cmを測る。

05198は、周溝内出土の杯身である。器高が低く、立ち上がりが異常に内傾化している。体部の殆どにヘラ削りを加える。器色は、外面がやや赤味を帯びた暗灰色、内面暗赤褐色を呈する。

胎土は密で、焼成も堅緻である。口径12.6cm、器高3.75cmを測る。

05167は、周溝南西部出土の杯身である。受け部は丸く、立ち上がりは短くシャープさに欠ける製品である。体部中位以下にヘラ削りを施す。また、内底部に大きいアテ具痕が見える。器色は、内外面

ともに淡灰色を呈する。胎上は密で、焼成は軟質である。口径13.2cm、器高5.5cmを測る。

05163は、周溝内南西側出土の須恵器小形壺の小破片である。口縁端部を肥厚させ、丸く收める。頸部にはタクキ板の端部が当たった様な鉗齒状の工具痕が残る。

器色は、内外面ともに黒灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径17.2cm、残存高5.4cmを測る。

05163も前壺と同様の口縁部形態をとる壺である。頸部には同様の鉗齒状の当たりが残る。外面は平行のタクキで、内面上部はヘラナデを施し、下部は青海波文をなで消す。器色は、黒灰色を呈する。胎土はやや粗で焼成も軟質である。口径17.6cm、器高8.3cmを測る。

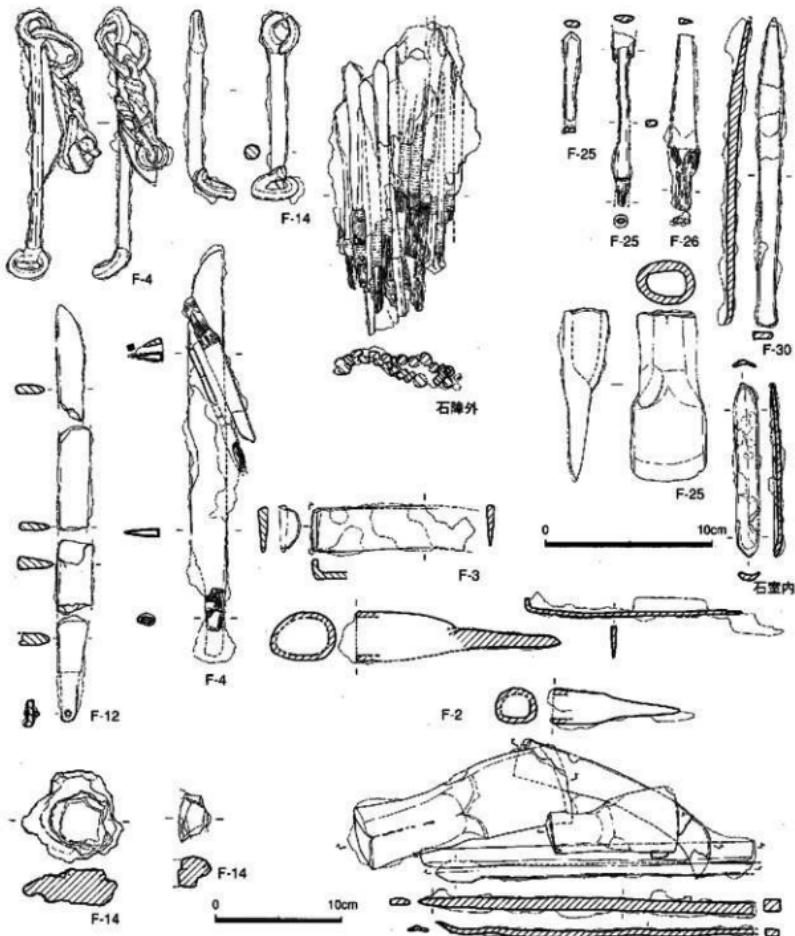


Fig. 37 吉武S群8号墳出土鐵器実測図(1/3・1/4)

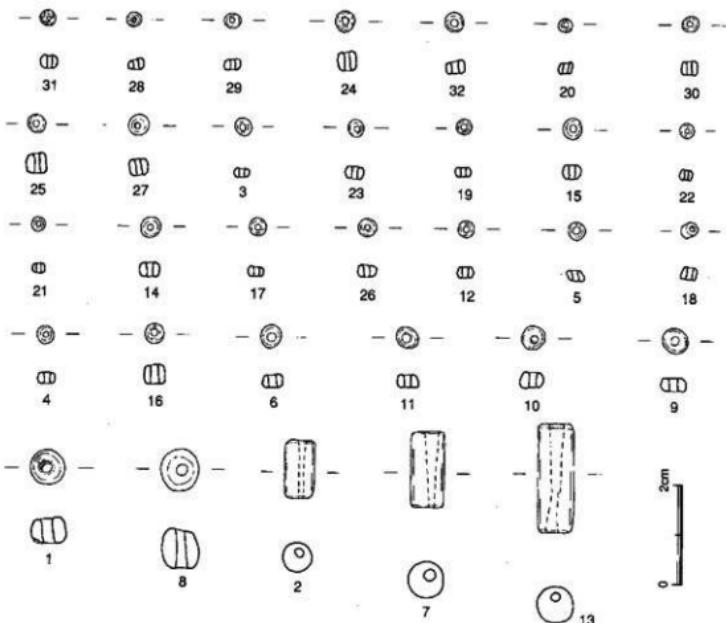


Fig. 38 吉武S群8号墳出土装身具実測図(1/1)

05174は、周溝内南西側出土上の土師器壺である。よくしまらない頸部から緩く開くに縁を有する。

胴部外面に粗いハケメを施し、内面は粗いヘラ削りを行う。器色は暗灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅敏である。口径12.8cm、器高13.8cmを測る。

05175は、周溝内南西側出土の土師器壺である。緩い平底の底部と小さく開く口縁部を持つ。外面は赤褐色を呈し、火に遭ったため器面の剥落がある。胴部内面はヘラ削りを施す。胎土は粗で、焼成は軟質である。口径14.8cm、器高14.7cmを測る。

05182は、周溝南西側出土の手捏ね土器である。外面に指頭痕を多く残す。器色は暗赤褐色を呈する。口径5cm、器高3.5cmを測る。

05181は、周溝内南西側出土のやや大型の手捏ね楕形上器である。内外面に指頭痕が多く、器色は暗赤褐色を呈する。胎土は粗で、焼成もやや軟質である。口径11.8cm、器高5.6cmを測る。

05180も周溝内南西側出土の上器師壺である。外面は底部ヘラ削りで、上部はヘラナデである。器色赤褐色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅敏である。口径9.6cm、器高5cmを測る。

05179は、周溝内南西側出土の土師器壺である。口縁部は内湾気味で、外面上部に横ハケメ、下部に手持ちのヘラ削りを施す。内面は横方向のヘラミガキか。内外面とも黒色顔料を塗布する。口径12.4cm、器高5.4cmを測る。

05177も周溝内南西側出土の土師器壺である。半球状の頸部に緩く外反する口縁を有する。

外面上部に粗いタテハケメ、下部がヘラミガキを施す。胴部内面はヘラ削りか。器色は暗褐～黒褐色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅敏である。口径10.7cm、器高10.3cmを測る。

05206は、周溝内出土の土師質不明土器である。杯部と脚部分との間に鈎をめぐらす。器色は、外面

赤褐色を呈し、杯部内面はヘラナデである。口径17cm。胎土は非常に密で、焼成軟質である。

05165は、周溝南西側出土の須恵器無蓋高杯である。浅い杯に長方形透かしを三方に施した細い脚を持つ薄づくりの製品である。脚部外面には縦ヘラ削りを施す。器色は、黒褐色～暗灰色を呈する。口径11.8cm、器高12cm前後を測る。

05178は、周溝南西側出土の土師器高杯である。杯部は椀状の形態で、外側ヘラナデである。脚は、長脚で、裾部は低い。外面は縦のヘラ削り、内面は横ヘラ削り調整である。器色は、赤褐色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。脚径13.8cm、残存高15cmを測る。

05183は、周溝東側出土の短い外反する口縁をもつ土師器壺である。口縁部内外面がヨコナデで、外面は荒いハケメ調整である。胴部内面には、大きいヘラ削りを施す。器色は、淡黄褐色で、下半部はススが付着する。胎土は粗砂を多く含み、焼成は堅緻である。口径18.8cmを測る。

05160は、周溝南西側出土の壺である。球状胴部に短い外反する口縁部をもつ製品である。外面は、斜めの撚格子タタキ後、頸部よりやや下がった位置から指による平行なナデ調整を施している。内面のアテ具はかなり大型のものを使用している。外面は暗灰色、内面黒灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径20cm、器高34.5～34.8cmを測る。

05191は、周溝内出土の須恵器壺である。口縁内面と外側肩部に厚い灰をかぶる。短い外反する口縁が特徴である。外面は、荒い撚格子タタキで、内面には半円状のアテ貝痕が残る。胎土は、粗砂を多く含み、焼成はやや粗である。口径16.2cm、器高24.6cm前後を測る。

15186は、周溝内出土のやや長脚となる中型の甕(P3)である。器面調整は、口縁部ヨコナデで、外側肩口までは縦方向の撚格子の平行タタキで以下は交叉する不定方向のタタキとなっている。また、内

No	形状	出土位置	法量(mm)			材質	色調	穿孔法	備考
			長さ	直径	孔径				
1	丸玉	石室内	5.3	7.5	2.2.5	ガラス	コハルアター	/	
2	管玉	石室内13	12	5.5	0.8-1.3	海灰岩	ライトブルー	片面	
3	小玉	石室石壇内	2	3.5	1.0	ガラス	淡緑色	/	
4	小玉	石室石壇内	2.2	3.8	2.0	ガラス	深水色	/	
5	小玉	石室石壇内	2	3.5	1.5	ガラス	コハルアター	/	
6	小玉	石室石壇内	2.5	4.5	1.5	ガラス	深水色	/	
7	管玉	石室石壇内	15.7	7.0	1.2-2.4	海灰岩	淡緑色	片面	
8	丸玉	石室石壇内	7	8.5	1.3	ガラス	コハルアター		8号-2
9	小玉	石室石壇内	2.5	5.2	1.5	ガラス	深水色	/	
10	小玉	石室石壇内	3.2	4.8	1.5	ガラス	淡水色	/	
11	小玉	石室石壇内	2.5	4.5	1.4	ガラス	深水色	/	
12	小玉	石室石壇内	2.5	3.5	1.0	ガラス	黄色	/	
13	管玉	石室石壇内	22	7.2	2-2.5	海灰岩	淡緑色	両面	
14	小玉	石室石壇内	2.2	3.5	1.3	ガラス	淡水色	/	
15	小玉	石室石壇内	3.8	3.5	1.0	ガラス	深水色	/	
16	小玉	石室石壇内	3.0	4.2	1.3	ガラス	コハルアター	/	
17	小玉	石室石壇内	2.0	3.5	1.4	ガラス	淡水色	/	
18	小玉	石室石壇内	2.8	4.0	1.0	ガラス	深水色	/	
19	小玉	石室石壇内	2.0	3.4	1.0	ガラス	黄色	/	
20	小玉	石室石壇内	2.2	2.8	1.0	ガラス	コハルアター	/	
21	小玉	石室石壇内	1.8	3.3	1.0	ガラス	淡緑色	/	
22	小玉	石室石壇内	2.2	3.2	1.0	ガラス	コハルアター	/	
23	小玉	石室石壇内	2.0	3.0	1.2	?	赤色	/	
24	小玉	石室内	2.0	4.0	1.0	ガラス	黄色	/	玉類一括
25	小玉	石室内	4.0	4.0	1.2	ガラス	深水色	/	玉類一括
26	小玉	石室内	2.2	3.8	1.0	ガラス	深水色	/	玉類一括
27	小玉	石室内	3.5	4.2	1.0	ガラス	深水色	/	玉類一括
28	小玉	石室内	2.5	3.5	0.8	ガラス	淡緑色	/	玉類一括
29	小玉	石室内	2.5	3.5	1.0	ガラス	淡緑色	/	玉類一括
30	小玉	石室内	2.2	3.5	0.8	ガラス	深水色	/	玉類一括
31	小玉	石室内	2.0	3.0	0.8	ガラス	淡黄緑色	/	玉類一括
32	小玉	石室内	2.9	4.0	0.8	ガラス	深水色	/	玉類一括

Tab. 2 吉武S群8号墳出土装身具一覧

面はかなり大振りの青海波文が残る。器色は、暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成はやや軟質である。口径20.4cm、残存器高32.5cmを測る。

15184もやや長胴の中型壺(P1)である。緩やかに外反する口縁端部は嘴状に跳ね上がる。口縁内面・胴部外面上部は灰かぶりである。器面調整は、外面は大振りの擬格子タタキで、内面には比較的小型の青海波文を残し、その大半がナデで消される。また、その下部は荒いヘラ削りを残す。

器色は、黒灰色で、内面暗灰色である。口径21cm、器高36.4cmを測る。

05196は、周溝内出土の提瓶である。両側に角張った円形の把手、中央にも1個の把手痕跡がある。外縁部には小さいへこみが多い。器面調整は、平行タタキ後に同心円状の回転ナデを施す。器色は明灰色を呈する。表面片面と裏面は灰かぶり。胴部最大径25.4cm、残存高26cmを測る。

ウ、検出面出土土器

05210は遺構西側出土の蓋である。低い器高で、天井部との境は斜め外方に笠状に開く薄づくりの製品である。内外面ともに淡灰色を呈する。口径14.4cm、器高3.3cmを測る。

05211は、遺構西側出土の須恵器器台である。長方形透かしを6個配する。器色は淡灰色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。脚径13.2cmを測る。

05209は、遺構西側出土の壺である。肩の張る胴部に伸びやかに外方に開く口縁部を有する。肩部に灰かぶり。口縁部には鈍い突窓3条を配し、中央部分に端正な波状文を描く。調整は、外面胴部が横方向のヘラナデで、内底部にヘラ削りを加える以外は、丁寧なヨコナデである。器色は、外面黒灰色、内面淡灰色を呈する。胎土は非常に密で、焼成も堅緻である。口径16cm、器高19.8cmを測る。

(出土鉄器類) (Fig. 37)

鉄器は、石室内で鐵鎌61点、鐵刀6点、弓金具(?)1点、刀子5点、鑿1~2点、袋状鉄斧3点、ヤリカンナ2点、鎌2点、鉄滓1点などが出土している。このうち石室の石障内東側の鉄器群D2では袋状鉄斧2点(大小)・鐵鎌・鑿・ヤリカンナが銹着しセットをなして出土している。

また、この石障内の銹着セットに見られるような組み合わせ例は袋状鉄斧の場合他の幾つかの古墳で見られる。また、石障奥壁に沿って置かれた刀は、長刀(全長111cm)である。

また、石室内出土の鉄滓は椀形の鐵治滓である。

出土鉄器の主要な製品については図に示したので、形態・法量については実測図を参照されたい。

(出土玉類) (Fig. 38)

石室および石室石障内を合わせて、凝灰岩製管玉3個、ガラス小玉29個が出土した。このうちの大半は、石障内出土(管玉2点・ガラス小玉19点)のものである。管玉は全て淡緑色を呈する凝灰岩製で、ガラス小玉も通常のコバルトブルー色以外に赤・黄色などが少量混じる。また、ガラス玉は厚さ2.5mm前後、直径4mm前後のものが多く見られる。詳細はTab. 2に計測表を掲載しているので参照されたい。

7. S群9号墳(Fig. 39~50, Pl. 10~19)

S9号墳は、8号墳西側に隣接して造営された円墳である。全体に削平の影響を大きく受けているが周溝および石室最下部は旧状をほぼとどめている。

内部主体の石室はほぼ南北方向に向き、小口・奥壁の幅もほぼ等しい長方形のプランとなる。石室内部南半部の床面敷石の空白部分は、調査当扁平な花崗岩礫があり、側壁或いは天井石が転落しているものとして取り上げたが、実際には床面に据えられた石材であった。

副葬遺物類は、石室内の北半部に集中しており、特に東側側壁には刀や鐵鏃と共に耳環や玉類が集中しており、少なくとも一体の埋葬位置を示すものであろう。また、これの西側床面にもガラス小片類の集中する部位があり、複数埋葬を想定できる。周溝は他の古墳のように出入り口の陸橋がないが、

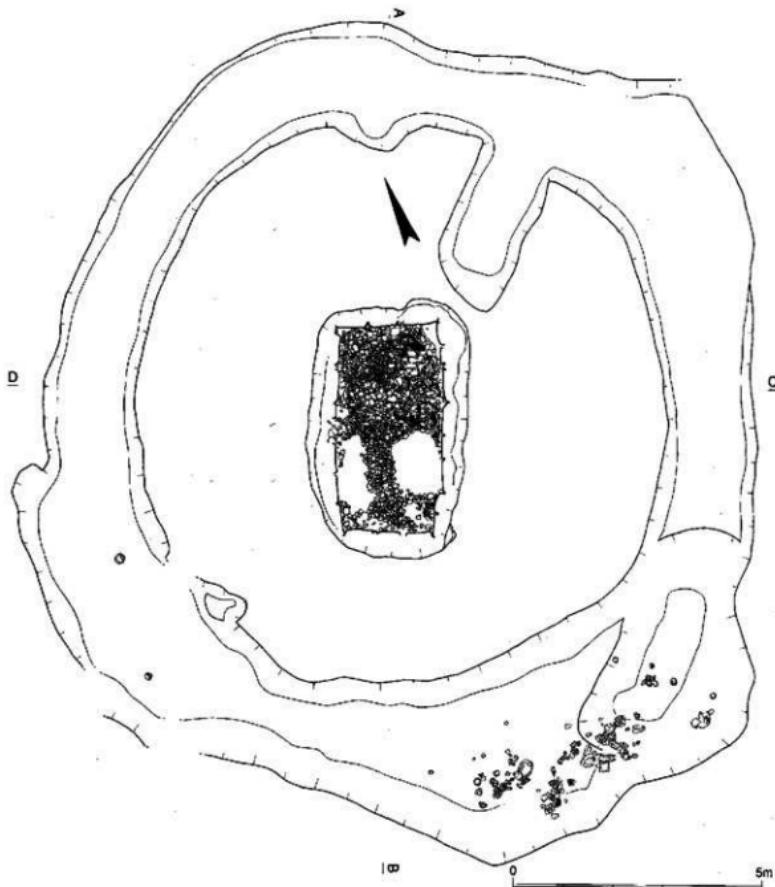


Fig. 39 吉武S群9号墳出土状況実測図(1/100)

石室北東部に接して周溝が湾入する部位があり、これが出入り口に相当する可能性がある。また、南側周溝内には石棺墓SX13がある。

① 周溝 (Fig. 39, 40)

S 9号墳周溝は、南北長15.8m、東西長14.1mを測り、東側幅1.7m、西側幅1.9m、北側幅2.6m、南側幅2.6mを測る。また、南西側・南東側幅2.9~3.5mとやや広がって不整な円形を呈する。S 8号墳に比較してやや小形の周溝である。

周溝の深さは、東側で0.3m、西側0.4m前後、北側0.2m、南側0.2m程度が残存する。周溝内部の北東側では、内壁から幅1.5m、奥行き3m程の溝状の湾入部が認められる。溝底のレベルは他の床面と変わることは無い。

周溝内では、北東側や南東側で須恵器を主として土師器などの土器類が多く出土する地点が認められ、特に南東側は溝底がやや低く、土壤状をなしており、須恵器を主として花崗岩石材などが集中して出土している。

② 内部主体 (Fig. 41)

S 9号墳の内部主体は、石室腰石のほぼ全周を残し、小口長1.75m、奥壁長1.8~1.9m、東側壁4.2m、西側壁4.05m程度を測る長方形石室である。床面には花崗岩円礫~扁平礫を主とする敷石が施されているが、前記のように敷石空白部には大型の花崗岩礫がおかれており、石室石材の転落したものとして除去したが、これらは何れも敷石と同目的で床面に敷き置かれたものである。

石室は、南北長5~5.2m・東西長3.2mを測る長方形土壙内に小口部3石、奥壁部3石、右側壁8石、左側壁7~8石の石材を使用して平面形を構築している。

(副葬遺物の配置状況) (Fig. 42)

S 9号墳の副葬遺物は、前記のように石室の奥壁側半分に集中して出土している。特に集中するのは東側壁に沿った床面である。その主なものを挙げると奥壁側に長さ0.3m・幅0.15m程度の長円礫が置かれ、この東に隣接して金環があり、この周辺にガラス小玉類が散らばり、その先端に勾玉が見られることからこちらが頭部にあたり、脚部を小口側に向いているものと考えられる。また、この玉群の小口側1m付近には鉄刀、鐵鎌片が集中して出土した(F1・2・4・5・7・9・18など)が、この中には鉄製環状鏡板付轡が含まれる(F20)。頭部から1.5~1.7mにあたる足辺部には副葬須恵器4点(P1~4)が置かれている。P1は直口壺(05212)・P2杯身(05213)・P3杯蓋(05214)・P4ハソウ(05215)である。また、これらの西側にもP5須恵器直口壺(05216)が出土した。

F20の西隣のF17は大型の袋状鉄斧である。また、頭部西側には、F27があり、鐵鎌束・轡などとともに袋状鉄斧・鋳造鉄斧2点および鎌が銹着してセットをなして出土している。

また、これらの西側に位置する床面にも全体としてのまとまりは少ないが、ガラス小玉や管玉の集合する部位があり、埋葬の複数であった可能性が考えられよう。

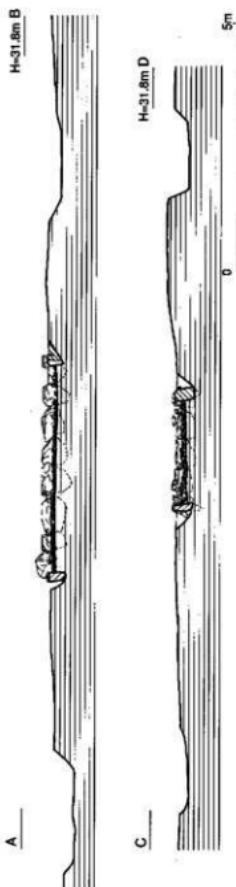


Fig. 40 吉武S群9号墳出土状況断面実測図(1/100)

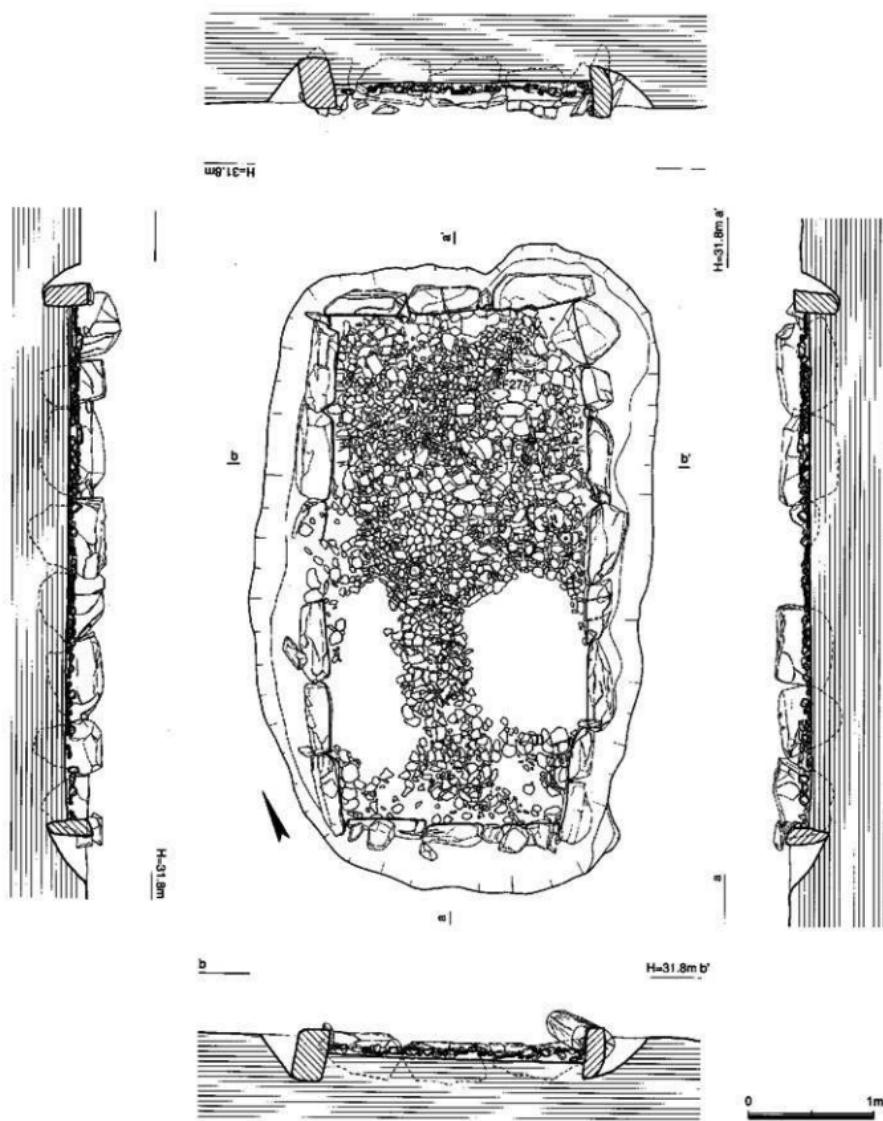


Fig. 41 吉武S群9号埋葬施設実測図(1/40)



Fig. 42 吉武S群9号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)

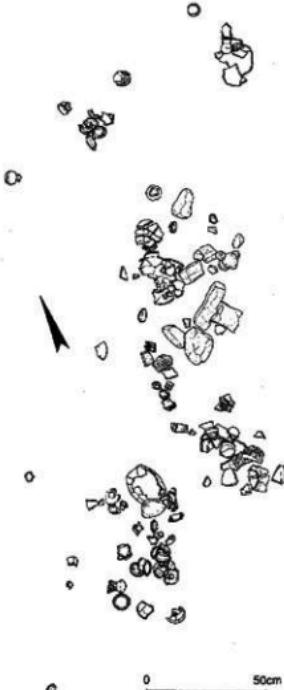


Fig. 43 吉武S群9号墳周溝南側
遺物出土状況実測図(1/20)

削りを施す。口縁部および内面はヨコナデである。器色は、外部外面は黒灰色・口縁部淡灰色を呈する。また、内面は暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。

口径12.4cm、器高4.2cmを測る。

05216は、石室出土の須恵器直口壺(P5)である。

不整な胴部にはほぼ直立する短い口縁部をもつ。外面は、口縁部および胴部がヨコナデで、外面の肩部以下をロクロ逆時計回りで、比較的幅広い回転ヘラ削りを施している。器色は、蓋をかぶったままの焼成であったために口縁部・胴部内面は淡灰色で、胴部外面は黒灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径8.4cm、器高8~8.4cmを測る。

05215は、石室出土の須恵器ハソウ(P4)である。頸部径が大きく、口縁部もしっかりしたつくりである。頸部に鉄器の一部が付着する。口縁端部は緩く段をなす。口縁下部および頸部に波長幅の小さい波状文をめぐらす。また、胴最大部に低い突帯と浅い沈線をめぐらし、この間に斜めの原体刺突文を施す。胴部下半は回転ヘラ削りを施す。器色は、黒~黒灰色を呈する。口径14.6cm、器高15.3cmを測る。

イ、周溝内出土土器 (Fig. 44~47)

05250は、周溝南側出土の須恵器直口壺(P35)である。やや外方に開く口縁部は内端部で細くなり、段をなす。天井部との境は鋭い段となる。天井部は全て灰かぶりであるが、そのほぼ全面をろくろ時計回りのヘラ削りを施す。天井部のつまみは低く、中央部は瘤む。器色は、内面が淡灰色を呈する。口径9.9cm、器高4.4~4.65cmを測る。

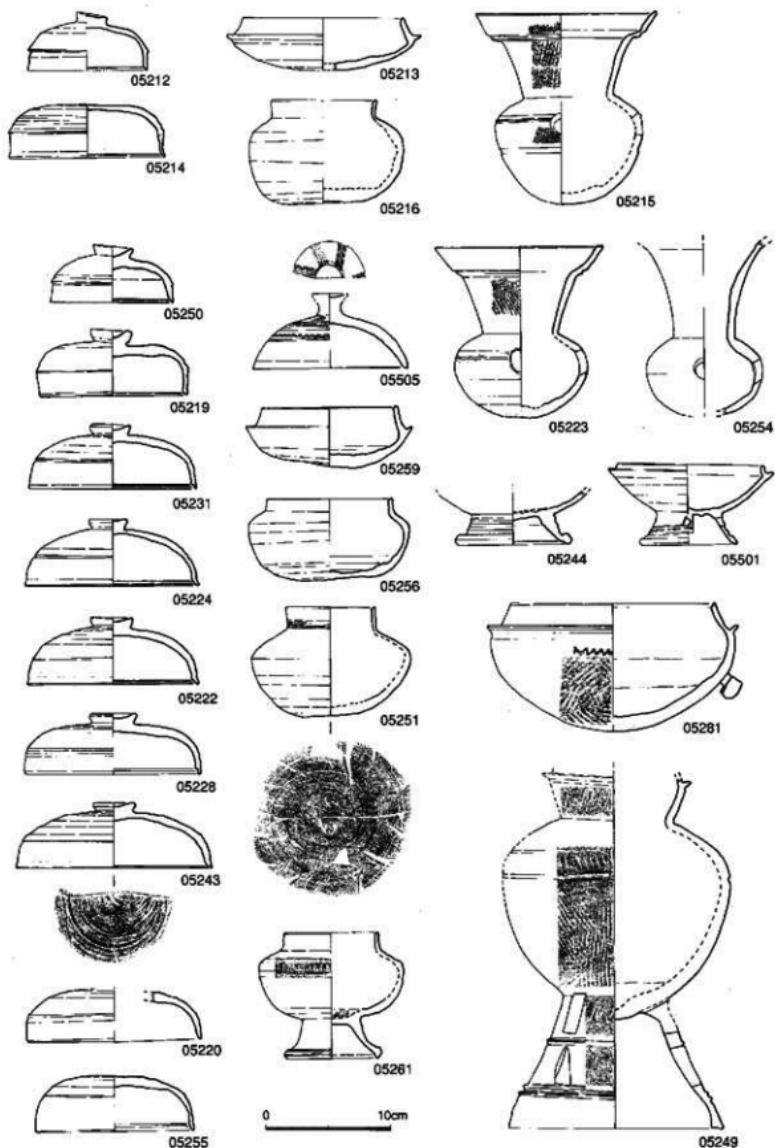


Fig. 44 吉武S群9号墳出土土器実測図(1)(1/4)

05219は、周溝南側出土の須恵器蓋(P1)である。焼けひずみのためかややいびつである。ほぼ直立する口縁部は内端部が小さな段をなす。天井部との境の段は低く、頂上部近くに回転ヘラ削りを施す。内面はヨコナデである。天井部のつまみはやや厚手のつくりで、中央部が瘤む。器色は、口縁部外面が黒灰色である以外は内外面ともに淡灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径11.8cm、器高5.1~5.4cmを測る。

05231は、周溝南側山上の須恵器蓋(P14)である。器高が低く、均整のとれた作品である。口縁端部は緩い段をなす。天井部との境は沈線である。また、天井部は全面ろくろ時計回りのヘラ削りを施し、一部がカキ目状となる。天井部つまみは中央部が浅く瘤む。器色は、外面黒灰色、内面暗灰色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径15.4cm、器高5.1cm前後を測る。

05224は、周溝南側出土の須恵器蓋(P6)である。口縁部は端部が外方に開く形態で、天井部との境は沈線となる。天井部のつまみは中央部が緩く瘤む。また、天井部ヘラ削りは、中央部付近がカキ目状となる。天井部内面はアテ具痕を残す。器色は、外面黒灰色で、内面淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径13.8cm、器高5.3cm前後を測る。

05222は、周溝内南側出土の須恵器蓋(P4)である。口縁部は端部が外方に開き、内面が段をなす。天井部との境は細い沈線となる。頂上部のつまみは比較的大型である。また、天井部のヘラ削りは約1/2程度である。器色は、天井部付近が暗灰色、口縁部および内面が淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径13.6cm、器高5.3cm前後を測る。

05228は、周溝内南側出土の須恵器蓋(P10)である。口縁部はほぼ直立し、内端部は沈線状となる。天井部との境は緩い段をなす。また、天井部のつまみは比較的大型である。調整は、天井部のヘラ削りが約1/2程度で、他はヨコナデを施している。器色は、外面黒灰色で、内面暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径13.9cm、器高4.85cmを測る。

05243は、周溝内南側出土の須恵器蓋(P28)である。口縁部は緩く外方に開き、内端部は段をなす。天井部との境は細い沈線となる。天井部つまみは低いが、サイズにあつた均整なものである。天井部は殆ど逆時計回りのヘラ削りを施す。また、天井部内面には大型のアテ具痕が残る。器色は、外面黒灰~暗灰色で、内面淡灰色を呈する。胎土密で、焼成堅緻である。口径15.6cm、器高5.2cmを測る。

05220は、周溝内南側山上の杯蓋(P2)である。天井部の一部を失う。口縁部はやや外方に開き、端部は丸く仕上げる。天井部との境は、浅く沈線状に窪み、段をなす。内面は、ヨコナデを施す。外面は一部灰かぶり。器色は、外面黒灰色、内面明灰色を呈する。胎土密で、焼成も堅緻である。口径13.8cm、器高4.1cm以上である。

05255は、周溝内南側山上の杯蓋(P40)である。口縁部は内端部が面取りで緩い段をなし、天井部との境は細い沈線状の段となる。天井部はクロクロ時計回りのヘラ削りで、約2/3程度を削る。口縁部・内面はヨコナデである。器色は、内外面ともに淡灰色を呈する。胎土密で、焼成は堅緻である。口径12.7cm、器高4.5cmを測る。

05505は、周溝内南側で出土した蓋形土器である。やや分厚いつくりで、浅い体部に伸び上がるような中窪みのつまみを付す形態である。つまみ裾には6方向に4本単位の櫛描き文を施す。また、この下に浅い沈線文3条をめぐらし、この間を細い波状文で埋めている。内外面ともに灰かぶりで、自然の釉がかかる。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径12.4cm、器高6cmを測る。韓半島南部の製品の可能性がある。

05259は、周溝内南側から出土した杯身(P45)である。体部のいびつな杯身で、立ち上がりは比較的高く、立っている。体部は灰かぶりで、1/2程にヘラ削りを加える。他は口縁部・内面ともにヨコナ

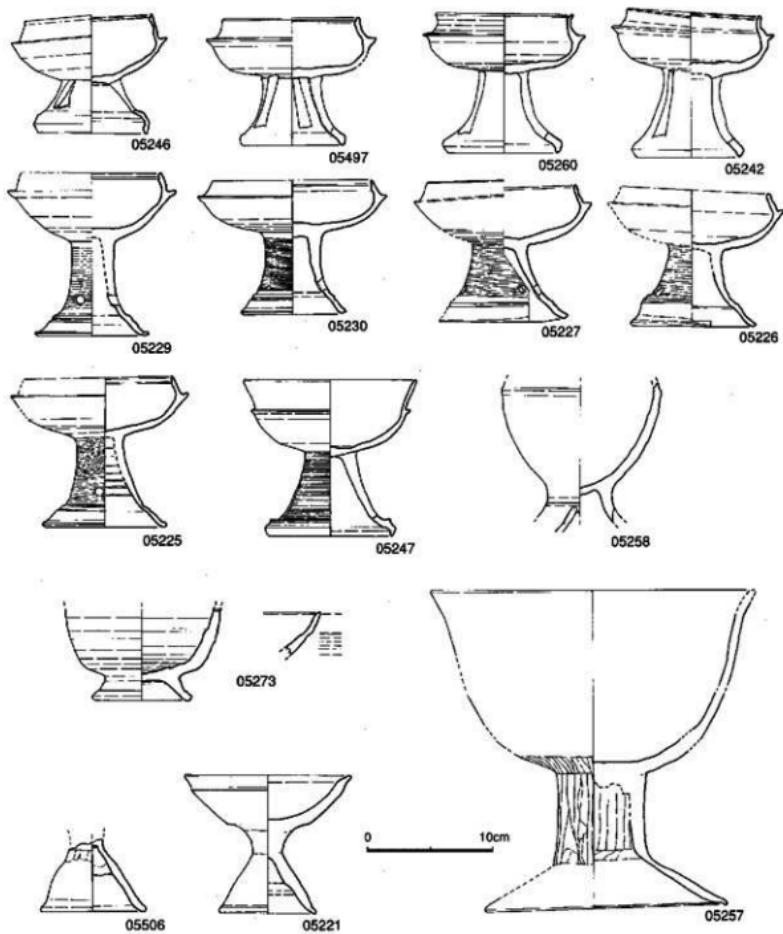


Fig. 45 吉武S群9号墳出土土器実測図(2)(1/4)

デを加える。器色は、口縁部・内面が暗灰色で、体部明灰色を呈する。胎土は密で、器色も堅緻である。口径10.8cm、器高4.8cm前後を測る。

05256は、周溝内南側出土の直口壺(P41)である。広い不整な底部に直立する口縁を有し、口縁端は小さい段をなす。蓋かぶりのまま焼成していた痕跡がある。底部下端付近にヘラ削りが残り、上部はヘラ削り後にヨコナデを加えており、特に肩部付近はカキ目状となっている。外面胴部は黒灰色で、

内面は暗灰色を呈する。胎土密で、焼成も堅緻である。口径10cm、器高6.4cm前後を測る。

05251は、周溝内南側出土した直口壺(P36)である。肩の張る胴部に直立する口縁を付する。口縁内端部は、小さく段をなす。胴部下半は回転ヘラ削りを施し、口縁部および内面はヨコナデであるが、頸部付近はナデがカキ目状となる。底部に短直線のヘラ記号を施す。外面に蓋の一部が付着する。器色は、外面が暗灰色、内面淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径7.2cm、器高8.7cmを測る。

05261は、周溝内南側出土の脚杯直口壺(P47)である。やや肩の張る壺に外開きの短い脚を付する。焼成時は蓋かぶりのままと考えられる。胴部の最大径部に縦の原体刺突文をめぐらす。また、底部に僅かにヘラ削りを加える。他はヨコナデである。器色は胴部が黒灰色、他が淡灰色を呈する。胎土は非常に密で、焼成も堅緻である。口径7cm、器高10cmを測る。

05223は、周溝内南側出土の須恵器ハソウ(P5)である。胴部は口縁部に比較するとやや小形化した形態である。頸部に非常に細かい振幅の小さい波状文を施す。また、胴最大径部にカキ目が残る。胴部下半には回転ヘラ削りを加える。器色は、内外面ともに淡灰色を呈する。胴部の孔の周辺は使用のためか破損している。口径13.4cm、器高13.1cm前後を測る。

05254は、周溝内南側出土の須恵器ハソウ(P39)である。扁球状の胴部に大きく外方に開く口縁を付する。胴部下半に回転ヘラ削りを施す。これ以上はロクロによるヨコナデを加える。器色は、淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。頸部径5.1cm、胴部径9.4cmを測る。

05244は、周溝内南側出土の脚台付き有蓋の蓋杯(P29)と考えられる。脚部外面はロクロによるナデによって多条の凹凸となっている。また、端部は玉縁状に肥厚する。杯内面は剥落が著しい。胎土はセピア色を呈する。器色は、外面および杯内面が暗灰色、脚内面は赤褐色を呈する。胎土は非常に密で、焼成も堅緻である。脚径8.8cm、残存高4.1cmを測る。韓半島産製品か。

05501は、周溝内南側山上の脚台付き有蓋杯である。非常に薄いくつりである。脚に菱形の透かし孔3個を施す。脚は裾部面で多条の凹凸となり、端部はやや膨らんで玉縁状断面をなす。また、杯部下端はカキ目状のナデとなる。器色は、杯部外面黒灰色で、内面淡灰色を呈し、中央部は黒灰色となる。脚部内面は暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径11.8cm、器高6.2~6.6cm、脚径7.5cmを測る。韓半島の陶質土器である。

05281は、周溝内北側出土の須恵器把手付き有蓋壺である。内傾度の高い立ち上がりを有し、胴部中位よりやや上部に平たい断面のブリッジ状把手を付ける。2個1対であろうと考えられる。受け部直下には細い波状文1条をめぐらす。これ以下胴部は不定方向の擬格子タタキが残り、内面には底部にアテ具痕が一部に残る。器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。復元口径16.6cm、器高10.2cmを測る。

05249は、周溝内南側出土の脚台付き有蓋壺(P34)である。立ち上がりの端部を失う。膨らみ気味に外方にのびる頸部には波長幅の短い波状文を施し、この上に大きい平坦な受け部を付し、口縁立ち上がりは内傾気味である。また、胴は肩部が張り、2条の平行沈線の間に斜めの原体刺突文をめぐらす。また、脚台は、踏ん張るタイプのもので下端は平坦となる。脚には上部1段、下部2段の突帯間に上下幅の大きい波状文をめぐらす。また、脚上部には3方の長方形透かし、下部には3方の三角形透かしを施す。胴部下半は、縦・斜め方向の擬格子タタキを残す。器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。頸部径9.2cm、残存器高18.6cm、脚径17.3cmを測る。

05246は、周溝内南側山上の短脚の有蓋高杯(P31)である。全体に薄づくりの製品である。

長方形透かしを3方に施す脚部は、端部が屈曲して弧状をなす。杯部は深く、立ち上がりは内傾度

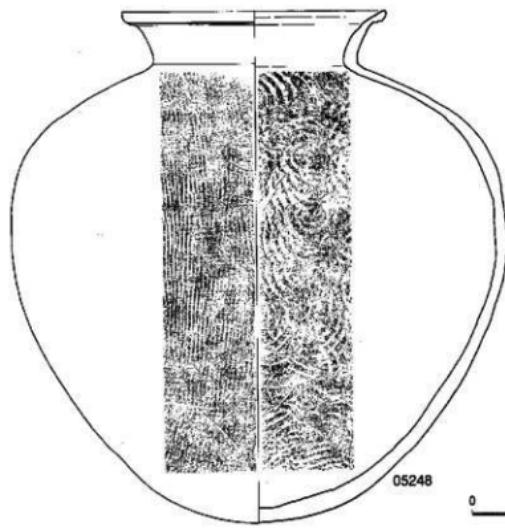
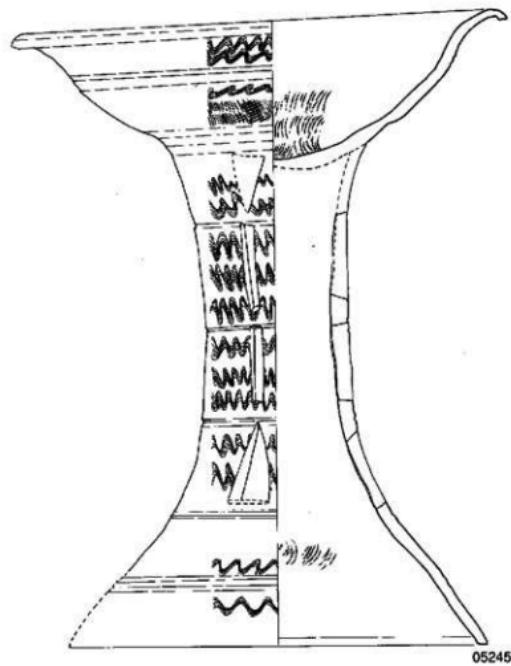


Fig. 46 吉武5群9号填出土土器实测图(3)(1/4)

が少なく、内端部は段をなす。体部の約1/2にヘラ削りを加える。また、これ以外の内面および口縁部・体部上半はヨコナデである。胎土は粗砂の混入多く、焼成は堅緻である。杯部口径10.2cm、器高9~9.4cm、脚部径8.7cmを測る。

05497は、周溝内南側出土の須恵器有蓋高杯である。端部が玉縁状に肥厚する脚は、4方向に長方形透かしを施す。杯部は、底部が平坦をなし、受け部も平坦であり、全体に浅い印象を受ける。また、下半部に回転ヘラ削りを施す。他は内外面ともにヨコナデである。器色は、外面および脚内面が暗灰色で、杯内面は明灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径17cm、器高10.2cm、脚部径8.2cmを測る。

05260は、周溝内南側出土の有蓋須恵器高杯(P46)である。杯部の特徴は、底部が平たく、立ち上がりの上端部が反転して内面に段を持つ形態である。また、脚部は、長方形透かしを4方向に施し、端部が肥厚して、疊み付きが嘴状に尖るものである。調整は内外面ともに全てヨコナデで、内底部に一部ナデが残る。器色は、脚外面・杯内面が淡灰色、杯外脚・脚内面が暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。杯径10.9cm、器高11.2cm、脚径8.8cmを測る。

05242は、周溝内南側出土の有蓋高杯(P27)である。この高杯も底部が平らで、口縁立ち上がりの端部が途中から変化する特徴がある。脚部は長方形透かしを施し、端部は疊み付きが小さい。体部の下半にヘラ削りを施す。胎土は密で、焼成は堅緻である。杯径10.8cm、器高11.3~11.9cm、脚径8.2cmを測る。

05229は、周溝内南側出土の須恵器有蓋高杯(P19・11)である。内湾気味に立ち上がる口縁部と円筒部が長く、裾部の開きに特徴を持つ。また、脚は円筒部にカキ目を残し、下部に円形透かしを3方に施す。杯底部と脚内面は灰かぶり。器色は、脚裾が黒灰色、杯内面が暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。杯径11.4cm、器高13.1cm、脚径9cmを測る。

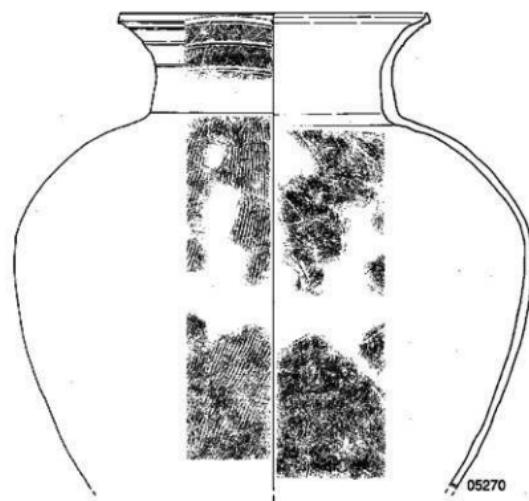
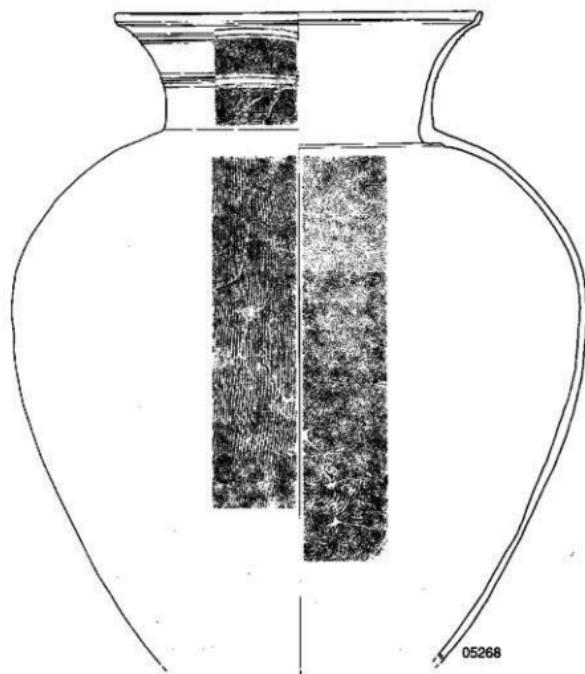
05230は、周溝内南側出土の須恵器有蓋高杯(P12・13)である。浅く、口縁立ち上がりの小さい杯部と短い脚部を特徴とする製品である。杯部のヘラ削りは下部の半分に加えられている。脚円筒部にはカキ目調整が残る。円形透かし孔3個を施す。外面・脚内面は暗灰色で、杯内面は淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。杯径12.8cm、器高10.75cm、脚径8.8cmを測る。

05227は、周溝内西側出土の須恵器有蓋高杯である。05230高杯と同様の形態であるが、やや脚の広がりが急である。脚の透かし孔は円形3個で、外面から切り出し、内部に押し込んで粘土を外しているため、内面の器壁周辺が剥がれている。外面のカキ目は杯下端から円筒部におよぶ。器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。杯径10.3cm、器高11.1cm、脚径は10.3cmを測る。

05226は、周溝内南側出土の須恵器有蓋高杯(P8)である。焼けひずみで脚部の変化が大きいが、裾部近くで屈曲して開く。杯部は浅く、口縁立ち上がりも鈍い。杯部の下半にヘラ削りを施し、脚円筒部には荒いカキ目調整後に3個の透かし孔を穿つ。杯体部と脚内面は灰かぶりである。器色は口縁外面が青灰色で、これ以外は黒灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。杯径復元口径12cm、器高10.6~11.3cm、脚径9.7cmを測る。

05225は、周溝内南側出土の須恵器有蓋高杯(P7)である。これまでの高杯と同様の形態である。受け部および脚裾部に灰かぶりが見られ、状況から蓋をして正立で焼成されたと判断できる。脚部カキ目はのちにナデ調整されているので条線がそれほど顕著ではない。器色は、外面黒灰色、内面淡灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。杯径11.7cm、器高12cm前後、脚径10cmを測る。

05247は、周溝内南側出土の須恵器無蓋高杯(P32)である。口縁部外面および内面が灰かぶりである。



0 20cm

Fig. 47 吉武S群9号墳出土土器実測図(4)(1/6)

薄づくりで、脚円筒部にカキ日を施し、楕部には突帯をめぐらし、端部は嘴状に屈曲して巻み付きが小さい。器色は暗灰色である。胎土は密で、焼成堅緻である。杯径13.8cm、器高12.5cm、脚径9.8cmを測る。

05258は、把手付きの脚台付きのジョッキ形土器(P44)である。口縁部・脚台端部を失う。脚部に三角形透かしを施す。把手は比較的大型のようである。調整は、内外面ナデである。外山は漆黒色、内面淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。脚付け根径5.5cmを測る。

05273は、周溝内東～南東部で出土した高台付き碗形土器である。口縁部は残さないが、図に示した口縁が同一個体であろう。高台は外に踏ん張るしっかりしたつくりである。碗内面の調整はロクロ回転しながらの強い削りである。器色は、暗灰～黒灰色である。胎土には多くの粗砂を混入し、焼成は堅緻である。底部径8cmを測る。

05506は、周溝内南側出土の土師器高杯脚部である。付け根が細く紋まり、ヘラ削りが残る。器色は、外面黒褐～赤褐色である。胎土粗で、焼成は軟質である。脚径8.3cmを測る。

05221は、周溝内南側出土の土師器小形高杯(P3)である。全体に器壁が厚く、調整はヘラによる。器色は、暗赤褐色を呈する。胎土密で、焼成堅緻である。杯径13.3cm、器高11cm、脚径7.3cmを測る。

05257は、周溝内南側出土の土師器脚付き鉢(P43)である。非常に密な生地を使用した焼きの良い土師器で、鉢・脚部は全面ヘラ削り調整で、内面は丁寧なヘラナデ調整である。類例の少ない器形である。また、外面は、全面丹塗りである。口径26cm、器高25.2～25.8cm、脚径19cmを測る。

05245は、周溝内南側で出土した須恵器大型器台(P30)である。口縁部が半転するたらい形の杯部に楕広がりの脚を付する。杯部は、中央部に沈線による緩い突帯を挟んで上部に2段の幅広波状文、下部に波長の長い波状文をめぐらす。そしてこれ以下は擬格子のタタキが重複して残る。内面は下半部に青海波文を残す。脚部は、付け根以下から楕部を沈線で仕切り、上部から2条波状文、3条波状文、3条波状文、2条波状文を施し、楕部にも細い波状文を1条ずつめぐらしている。また、施文後に上部から三角・長方形・長方形・三角・三角(最下段は千鳥式)の透かし孔を3方向に穿っている。脚内面には、アテ具痕が一部残る。器色は、暗灰色～淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成はやや軟質である。杯径40cm、高さ50cm前後、脚径33.6cmを測る。

05248は、周溝内出土のやや尖り気味の底部をもつ壺(P33)である。外面擬格子タタキ後にカキ目調整、内面は荒い青海波文が残る。口径21cm、器高41cmを測る。

05268は、周溝内東側で出土した大型壺(P1)である。全体に薄づくりである。口縁下に低い2条づつの突帯を2ヶ所にめぐらし、この間を全面細かい波状文で埋める。頸部以下底部にしたがって縦方向の擬格子タタキを全面に施す。内面は口縁部がヨコナデで、これ以下が小形の青海波文である。胎土密で、焼成堅緻である。口径44.5cm、器高79.3cm以上である。

05270は、周溝内東側出土の須恵器大壺(P2)である。肩部は灰かぶり。口縁下に突帯を挟んで振幅の少ない波状文をめぐらす。頸部以下は荒い擬格子タタキを全面に施す。内面のアテ具痕はかなり大振りである。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径37cm、残存高58.5cmを測る。

ウ、出土鉄器 (Fig. 48)

鉄器類は、副葬遺物の項で前述したように石室の東側壁に沿って多くが出土しており、特に鉄器群F27は鉄鎌束・馬具(轡片)とともに鍛造袋状鉄斧・鍛造鉄斧2点・鎌がセットをなして出土している。

また、東側壁では鉄刀5片があり、この中には金銅製龍文素環頭太刀や馬具5片の内に環状鏡板付き轡などの馬具がある。また、刀子・鉄鎌などの資料についても可能な限り図化を行ったが、紙数の制約もあって全てを掲載することはできないために上記した鉄器類を中心に行った。

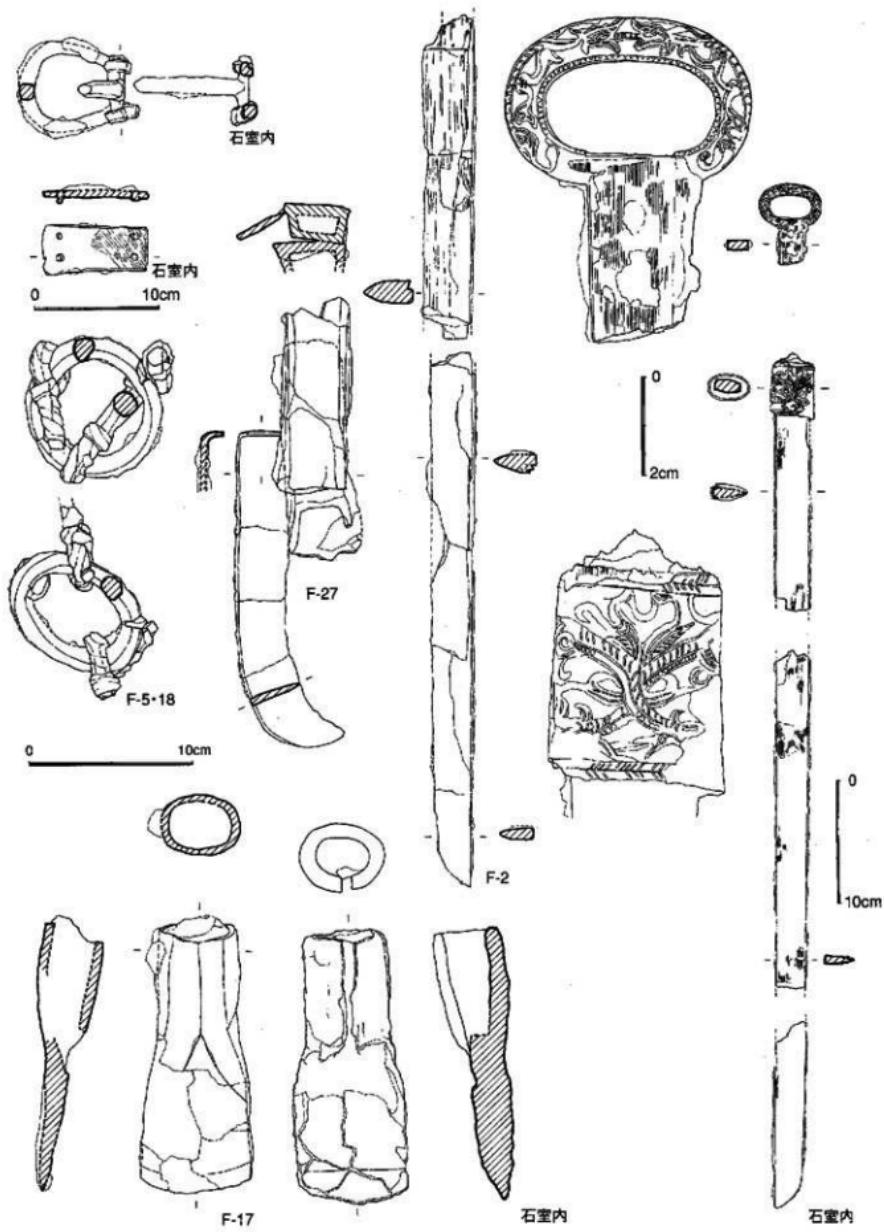


Fig. 48 吉武S群9号填出土铁器实测图(1/1·1/2·1/3·1/4)

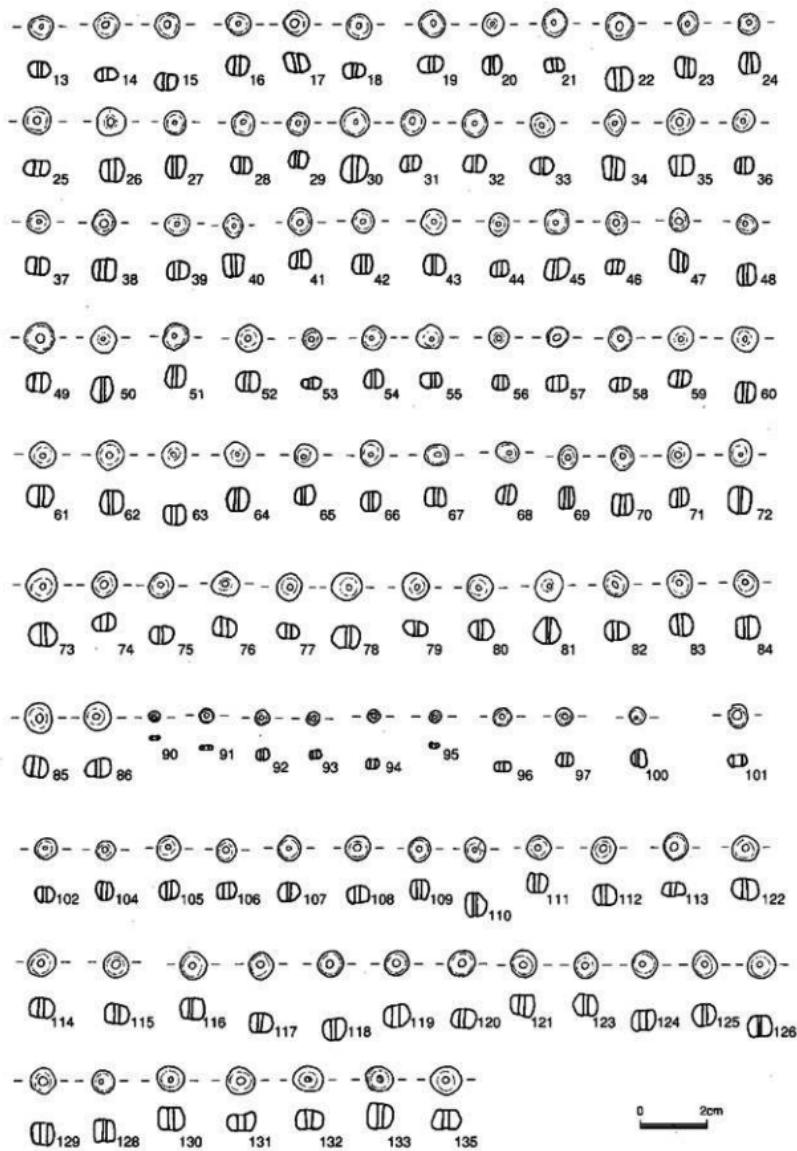


Fig. 49 吉武S群9号墳出土装身具実測図(1)(2/3)

工、出土装身具 (Fig. 49・50)

装身具類は、東側側壁で見つかった耳環類(金製2・銀製1・銅製1)や、翡翠製小形勾玉1点、碧玉製管玉19点、コバルトブルー色のガラス小玉・丸玉類170点などの玉類が190点見つかっている。全てが図化できないが、図中には一覧表と同一番号を振って対照できるようにした。

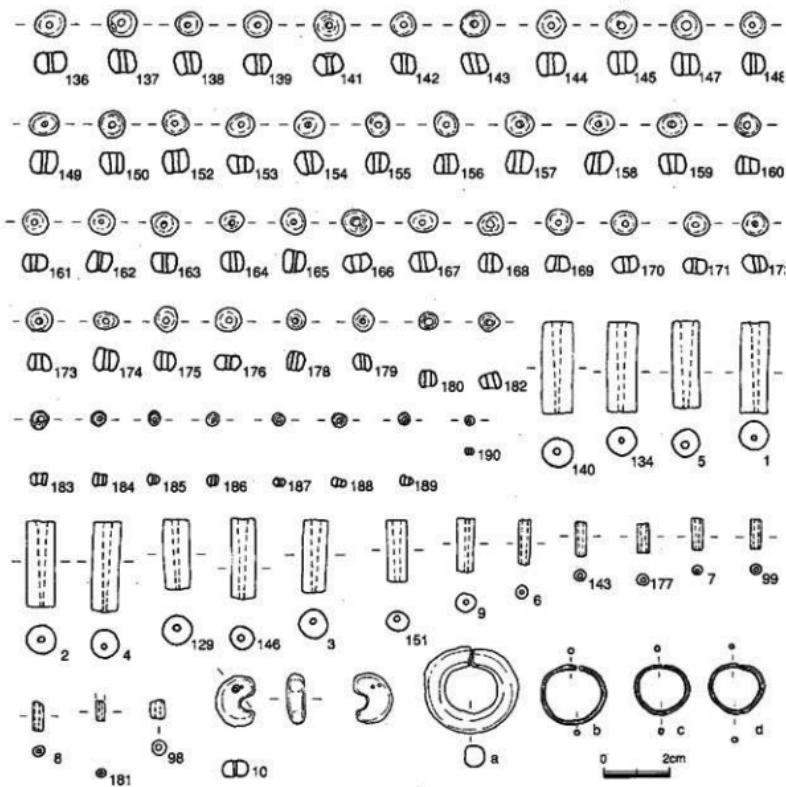


Fig. 50 吉武S群9号墳出土装身具実測図(2)(2/3)

器号	形狀	法量(cent)		66	丸玉	5.8	7.2	1	133	丸玉	7.9	7.5	2.3	
		長	直径											
1	管玉	28	9	0.8-2.5	67	丸玉	5.4	8	2.2	134	管玉	26.8	9	0.8-2.6
2	管玉	26	8.5	0.8-2.5	68	丸玉	6	7.5	1.2	135	丸玉	6.2	9	2.5
3	管玉	22.3	8.5	4-1	69	丸玉	5.8	8	2	136	丸玉	6.7	8.8	1.8
4	管玉	27	9	0.8-2.2	70	丸玉	6.3	7	1.2	137	丸玉	7.2	8.5	1.2
5	管玉	26.5	8.8	1-2.5	72	丸玉	8	7.8	1.5	139	丸玉	6.2	8.5	1.5
6	管玉	13.6	4.5	1-2.3	73	丸玉	8	9.5	2.5	140	管玉	27.3	9	0.8-2.6
7	管玉	9.2	3.8	1.5	74	丸玉	5.5	8	2.5	141	丸玉	6.5	9.5	1.2
8	管玉	8	3	1.2	75	丸玉	5.2	8.2	1.5	142	丸玉	5.8	7.8	1.8
9	管玉	16.5	6.2	0.8-2	76	丸玉	6.2	8.5	2	143	丸玉	6	8	1.5
10	勾玉	19.5	5	0.8-2	77	丸玉	5	7.5	2	144	丸玉	6.5	8.5	1.8
11	小玉	-	-	-	78	丸玉	6.5	9.2	2	145	丸玉	6.8	9.5	1.8
12	小玉	-	-	-	79	丸玉	4.8	9	1.8	146	管玉	24.2	7.3	0.8-2.2
13	丸玉	4.8	7.3	1.5	80	丸玉	6	8.2	2	147	丸玉	7.8	8.3	2.4
14	丸玉	4.2	7.5	1.2-2	81	丸玉	7.8	8.8	2.5	148	丸玉	6	7.8	1
15	丸玉	5.5	1.5-	1.5-2.3	82	丸玉	5.2	8.2	1.8	149	丸玉	6.5	8.2	1.2
16	丸玉	5.8	7.3	1.5	83	丸玉	6.5	8.2	2	150	丸玉	6.5	8	1.5
17	丸玉	5.8	7.5	1.5	84	丸玉	6.4	9	1.8	151	管玉	18.3	7	0.8-2.5
18	丸玉	4.5	7.5	1.5	85	丸玉	5.8	8.8	2.5	152	丸玉	7.2	8	2
19	丸玉	5	7.5	1.5	86	丸玉	5.5	8.5	1.8	153	丸玉	5.5	8	1.5
20	丸玉	5.8	7	1.2	87	丸玉	-	-	-	154	丸玉	7.2	8.9	1.5
21	丸玉	4.2	7.5	1.5	88	丸玉	-	-	-	155	丸玉	6	7	1.5
22	丸玉	6.5	8.8	3	89	丸玉	-	-	-	156	丸玉	6.2	7.7	1.5
23	丸玉	6.2	7.5	1.5	90	小玉	1	2.8	1.5	157	丸玉	6.5	8	1.8
24	丸玉	6.5	7	1.5	91	平玉	1.8	4.2	1.5	158	丸玉	7	8.5	1.5
25	丸玉	5	8.2	2.4	92	小玉	3	4.2	1.2	159	丸玉	5.3	8.8	2
26	丸玉	7	8.5	2	93	小玉	2.5	4.4	1.2	160	丸玉	5.8	7.2	2
27	丸玉	6.5	7	1.4	94	小玉	3	4.4	1.2	161	丸玉	5.2	7.4	2
28	丸玉	5.2	6.8	1.2	95	小玉	2	3.8	1.2	162	丸玉	6.2	7.5	1.2
29	丸玉	5	6.5	1.4	96	小玉	3.2	5.5	1.2	163	丸玉	5.5	8.2	2
30	丸玉	7.8	9	1.8	97	小玉	4	6.2	1	164	丸玉	6.3	7	1.2
31	丸玉	5.2	8	1.5	98	管玉	6	5	2.5	165	丸玉	7	7.5	1.4
32	丸玉	5.5	8.2	1	99	管玉	9	8.2	1.8	166	丸玉	5.4	8.3	1.4
33	丸玉	5	7.8	1.5	100	小玉	5.5	5.5	1.8	167	丸玉	6.2	8	1.2
34	丸玉	7.2	8	1	101	丸玉	3.8	7.3	3.8	168	丸玉	6	7.5	2.2
35	丸玉	5.5	8.5	2	102	丸玉	4.8	7.3	1.8	169	丸玉	4.6	7.5	2.2
36	丸玉	5.5	7.5	1	103	管玉	11	3.5	1.2-2	170	丸玉	5.4	7.6	1.5
37	丸玉	5	7.5	1.5	104	丸玉	5.8	7	1	171	丸玉	5.3	7.5	1.5
38	丸玉	5.6	7.8	2	105	丸玉	7	7.5	1.5	172	丸玉	5.5	7.2	1
39	丸玉	5.2	7.5	1.5-2.3	106	丸玉	5.3	7	1.8	173	丸玉	5	7.5	2
40	丸玉	8	7.5	1.5	107	丸玉	5.5	8	1.8	174	丸玉	6.4	7.2	1.2
41	丸玉	5.5	7.5	1.5	108	丸玉	5.5	8.5	1.5	175	丸玉	5.7	7.2	1.5
42	丸玉	5.5	7.5	1.5	109	丸玉	6.2	7	1.8	176	丸玉	4.3	7.5	1.8
43	丸玉	5.5	7.5	1.5	110	丸玉	7	7	1.5	177	管玉	9	4	1.5
44	丸玉	4.5	7	1.7	111	丸玉	6	8.5	1.8	178	丸玉	5.3	6.2	1
45	丸玉	6	8	1.5	112	丸玉	6	8	1.8	179	丸玉	5.2	6.5	1.5
46	丸玉	5.2	6.5	2	113	丸玉	4.5	8	3.5	180	丸玉	6	5.9	2.5
47	丸玉	6.5	6.5	2.5	114	丸玉	5.5	8.2	1.8	181	管玉	6+8	3	1.5
48	丸玉	6.5	6.5	1.5	115	丸玉	5.5	8	1.8	182	丸玉	5	5.8	1.5
49	丸玉	5.5	9.2	3	116	丸玉	6.5	8	1.6	183	丸玉	3.5	5.5	1.5
50	丸玉	7.5	8.2	1.5	117	丸玉	6.3	8	2	184	丸玉	3.8	4.9	1.2
51	丸玉	7	8	2	118	丸玉	7.5	8.5	2	185	小玉	3.3	4.2	1
52	丸玉	6.5	8	2.2	119	丸玉	6.2	8	2	186	小玉	3.2	4.3	1
53	丸玉	4	6.5	1.2	120	丸玉	5.5	8.2	2	187	小玉	2.4	4	1.3
54	丸玉	5.5	7.5	1.5	121	丸玉	7	8.4	2.2	188	小玉	2.4	4.5	1.5
55	丸玉	5.5	8	1.2	122	丸玉	5.2	8.5	1.5	189	小玉	3.2	3.8	1.8
56	丸玉	5	6.5	1.5	123	丸玉	6.3	8	1.5	190	小玉	2	3	1.2
57	丸玉	4.5	6.5	1.5-2.5	124	丸玉	5.5	7.8	1.2					
58	丸玉	4	7.5	1.5	125	丸玉	6	8	1.2					
59	丸玉	5.5	8	1.6	126	丸玉	5.5	8.5	1.2					
60	丸玉	6.5	8	1.5	127	丸玉	6.3	8.3	2.8					
61	丸玉	6	9	1.5	128	丸玉	6.5	7.3	1.5					
62	丸玉	7	9	1.5	129	管玉	21	8	0.8-2.5					
63	丸玉	5.5	8	1	130	丸玉	6.8	8	1.8					
64	丸玉	7.2	8.5	1.2	131	丸玉	5.2	9.3	2.8					
65	丸玉	6.5	7.5	2.2	132	丸玉	6.5	8.5	1.8					

Tab. 3 古武S群9号出土裝身具一覽

8. S群10号墳 (Fig. 51~57, Pl. 20)

S10号墳は、S9号墳の南側に隣接して造営された円墳である。他の古墳と同様に削平による改変が著しい。周溝は、幅員が不揃いで、西側半分が調査区外にあるため未調査となっている。

また、石室は、磁北から30度程東に振れる方向に主軸をとるもので、南側の腰石の一部を除いて他の全ての腰石は抜き取られている。両側の側壁も殆ど失われているが、他の古墳石室の構築に類似して奥壁部の腰石が5~6個と小形の石材を数多く使用している点で南側に残る腰石は奥壁に当たる可能性がある。

副葬遺物は、石室内・周溝内から少量ではあるが、須恵器・土師器などの土器類、鍛造鉄斧・鑄造鉄斧などの鉄器類、ガラス玉などの玉類が出土している。

① 周溝 (Fig. 51・52)

S10号墳の周溝は、前記のように西側半分が調査区外である。周溝の規模は、南北方向の外径で13m、東西方向は未掘であるが、調査された東側部分から石室中央ラインを反転すると約14mの数値となる。また、幅員は、北側1.5~1.7m、南側2.3m、東側約3m程度でこの周溝東側の内壁から石室側に幅2m・奥行き1m程の湾入部分が認められる。なお、残存する深さは0.05~0.1m程度と浅いものである。

② 内部主体 (Fig. 53)

S10号墳の内部主体は削平の影響を強く受けており、石材が少ないために平面プランを十分に明らかにできない。また、上部構造についても推定することは困難である。

石室の腰石で原位置をとどめている石材は、南側に残る7石のみであり、他は石材を埋置した不連続に並列する長円形のピット群である。

このピット群は、西側で3個、北側で3個が認められるが、ピット内の凹面によって埋置された石材数を推定し、さらにとぎれたピット間に埋置されたと思われる石材を想定すると、西側側壁で6~7石・東側壁で6~7石・北側壁で6石となる。

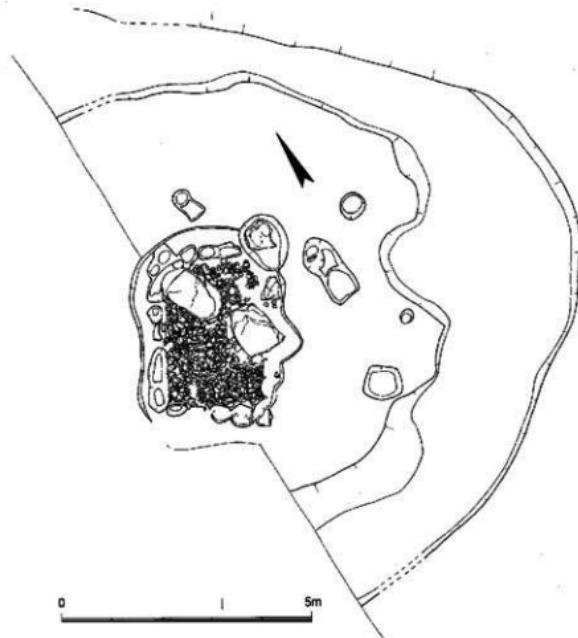


Fig. 51 吉武S群10号墳出土状況実測図(1/100)

H=32.5m



Fig. 52 吉武S群10号墳出土状況断面実測図(1/100)

これらから石室規模を想定する。墓壇は、南北4m強・東西3m程度の浅いものである。南側の腰石と腰石掘り方は、南壁で1.8m、西側壁相当の内側延長2.8m前後、東側壁相当の内側延長2.8m強、北側壁1.8m前後となり、小口・奥壁長1.8m、両側壁長2.8m程度の長方形石室が想定できよう。

また、石室内床面には1.3×0.8m程度の大型扁平磚を2個北側に据え置き、周辺部を扁平な砾で埋めている。このような大型磚を使用する古墳は8・9・11号などでも認めることができる。

③ 出土遺物 (Fig. 55~57, Pl. 47)

(土器類)

S10号墳で出土した土器類は、石室内・周溝内のものが少量出土している。

石室内では、土師器マリ(05293)、須恵器杯蓋5点(05294・05295、05297~09299)、須恵器甕頸部片(05296)、須恵器高杯脚部(05300)などが出土した。

また、周溝内では須恵器ハソウ(05301)などが出土している。

05295は、石室内出土の須恵器杯蓋でやや分厚いつくりである。大井部を失う。口縁部は内端部に削りを加えて段をなしている。

天井部との境は緩い沈線状となり、小さな段をなす。

内外面ともに一部が灰かぶりとなる。調整は、

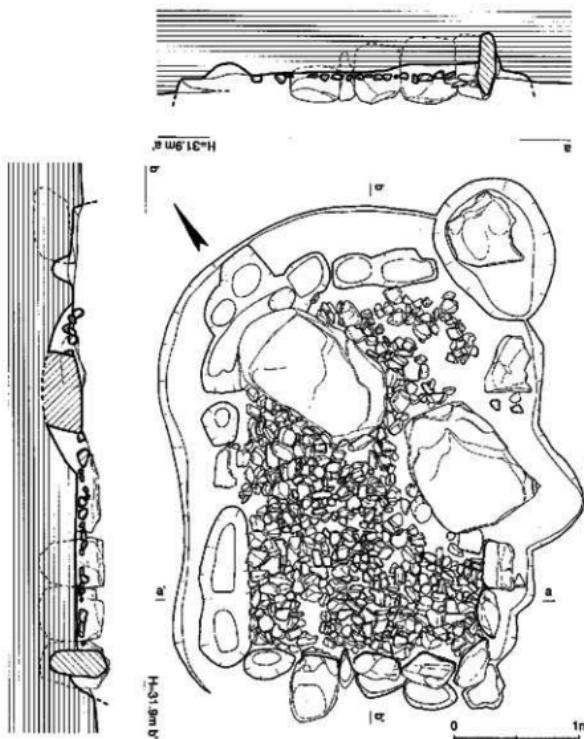


Fig. 53 吉武S群10号墳埋葬施設実測図(1/40)

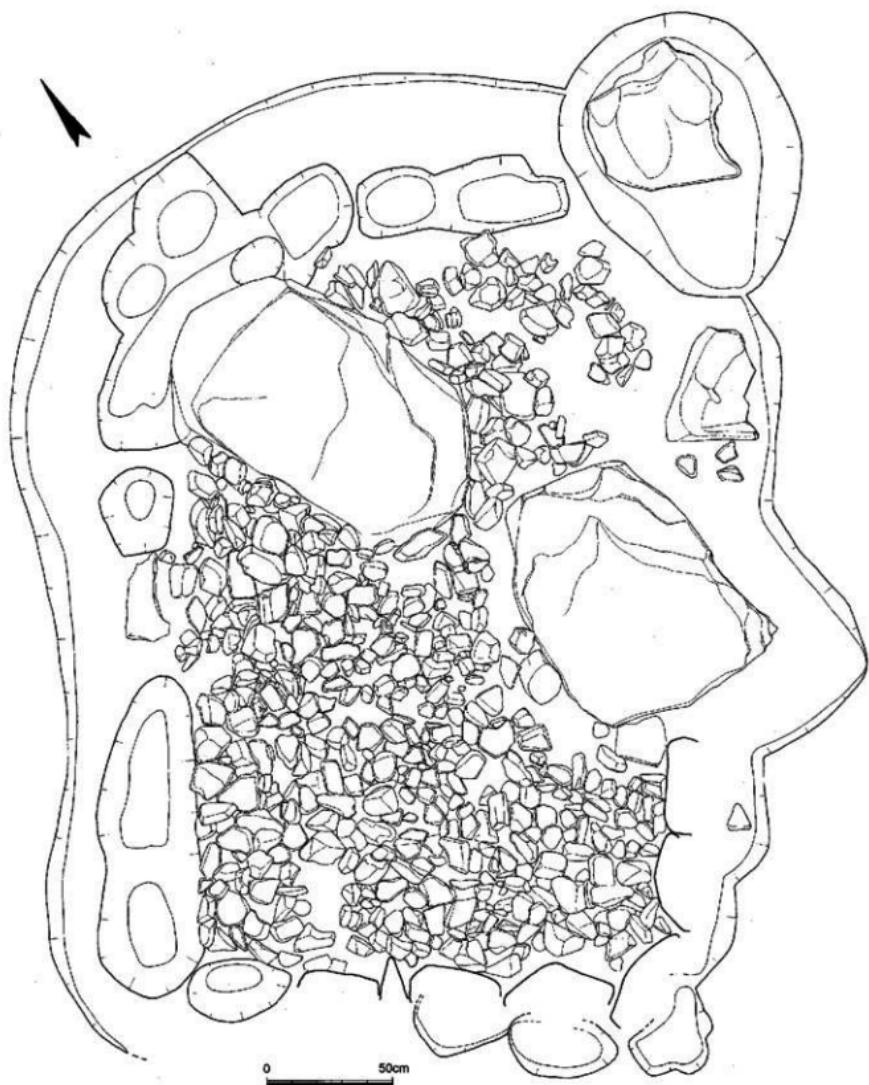


Fig. 54 吉武S群10号填副葬物出土状况実測図(1/20)

内面にヨコナデを加える。器色は、天井部および内面が淡灰色、口縁外面が黒灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径13.4cm、残存器高3.8cmを測る。

05299は、石室内出土の須恵器杯蓋である。天井部を失うが、比較的高い形態であろう。全体にややシャープさに欠ける製品である。

口縁部はやや外方に開き、内端部では低い段をなす。また、天井部との境は不明瞭な段をなす。

器面調整は、口縁部・内面ともにヨコナデである。器色は、外面が暗灰色、内面が淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成はやや軟質である。口径12.6cm、残存高3.2cmを測る。

05298は、石室内出土の須恵器杯蓋である。天井部を失っている。全体に薄づくりの製品である。

口縁部は直口し、緩やかに外方に開き、天井部との境は僅かに隆起する程度で、特に区別されない。

器面調整は、内面がヨコナデで、外面天井部にロクロ逆時計回りのヘラ削りを施す。

器色は、外面が黒灰色、内面淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成はやや粗である。口径16.2cm、残存高3.1cmを測る。

05294は、石室内出土の須恵器杯蓋である。非常に器壁の薄いつくりの製品である。

口縁部は外開きで、端部でさらに小さく開く。内端部は小さく壅み、段をなす。天井部との境は沈線状に壅み、低い段をなす。器面調整は、内面がヨコナデで、外面天井部の1/2程度がヘラ削りである。器色は、外面が暗灰色で口縁の一部が黒灰色となる。また、内面は淡灰色である。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径14.4cm、残存器高3.3cmを測る。

05293は、石室内出土の土師器マリである。底部を欠失する。

口縁部は、半球状にすぼまり、内端部には直線的にヘラナデを加える。また、器面調整は内外面ともにヘラによるナデ或いはミガキ調整と考えられるが、器面の荒れが著しいために不詳である。

器色は、内外面ともに暗褐色を呈する。胎土は砂質で、密である。焼成は軟質である。口径11cm、残存器高4.1cmを測る。

05296は、石室内出土の須恵器壺頸部片である。頸部付け根と口縁端部近くを失う。

口縁部直下には1条の細い突帯をめぐらし、これよりやや下がった位置に2条の低い突帯をめぐらしている。この突帯の間に上下動の少ない非常に細かい波状文を施す。

器色は、外面が黒灰色、内面が灰かぶりとなっており黄灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。

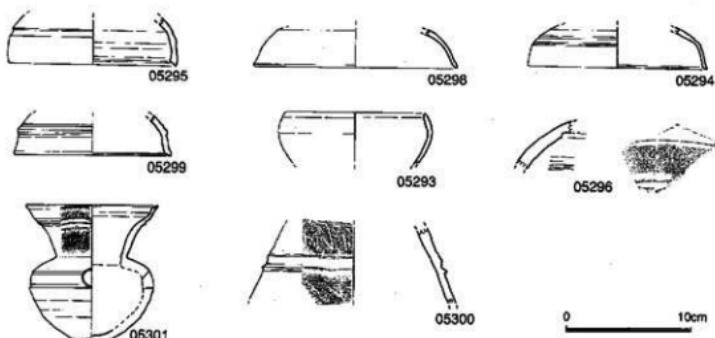


Fig. 55 吉武S群10号墳出土土器実測図(1/4)

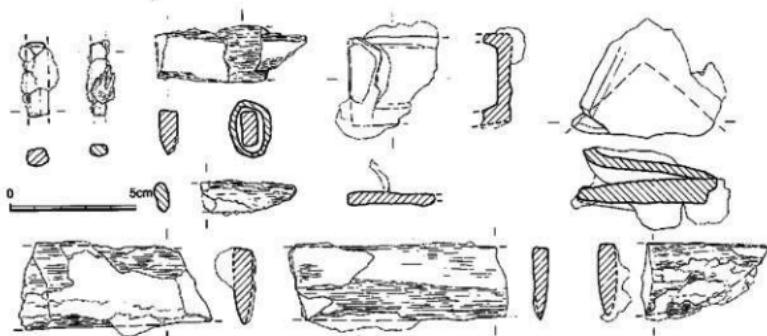


Fig. 56 吉武S群10号墳出土鉄器実測図(1/2)

05301は、周溝内出土の須恵器ハソウである。均整のよくとれた製品である。胴の肩部が高く、底部はやや尖る形態である。また、口縁部は頸部との境が緩い段をなし、端部は段状に緩く窪む。内面および外面の一部が灰かぶりである。口縁部には緩い振幅の波状文、頸部に上下の波動が大きい波状文を施す。また、胴部肩にも平行沈線をめぐらし、この間を細かい波状文で埋める。胴部の下半はヘラ削りを施し、底部付近に一部タタキ目を残す。器色は、外面黒灰色で、内面暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径10.5cm、器高10.9cmを測る。

05300は、石室出土の須恵器脚台である。形状から有蓋壺の脚台の可能性がある。

両端部を失うが、外方に向かって開き、端部が平坦面をなす形態となろう。

外面は灰かぶりである。2条の不整な直帶をめぐらし、上下ともに振幅の大きい粗雑な波状文をめぐらし、上段の波状文は沈線を挟んで2段となっている。

器面調整は、内面にヨコナデが残る。器色は、外側が淡灰色、内面が暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。突帯部径17cmを測る。

(鉄器類) (Fig. 56)

S10号墳からは石室内の中央部付近から鉄器類が少量出土しているが、原位置にあるものは少ないと考えられる。それらは、鉄鏃1点、刀子1点、鐵刀5点、鎌(?)1点、不明棒状鉄器1点、鋳造鉄斧(小形)1点、鍛造袋状鉄斧2点などがある。これらのうち、図化の可能な製品について掲載した。

(装身具類) (Fig. 57)

S10号墳出土の装身具は、石室内埋土から出土したガラス玉と碧玉製管玉である。

ガラス玉は、コバルトブルー色のやや径の大きい製品4点である。そのサイズは、直徑7.5~8.5mm、厚さ5~6.8mm、孔径0.8~2.5mmを測る。

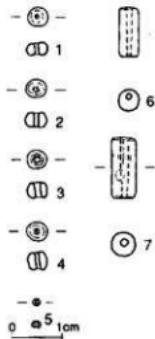


Fig. 57 吉武S群10号墳出土装身具実測図(1/1)

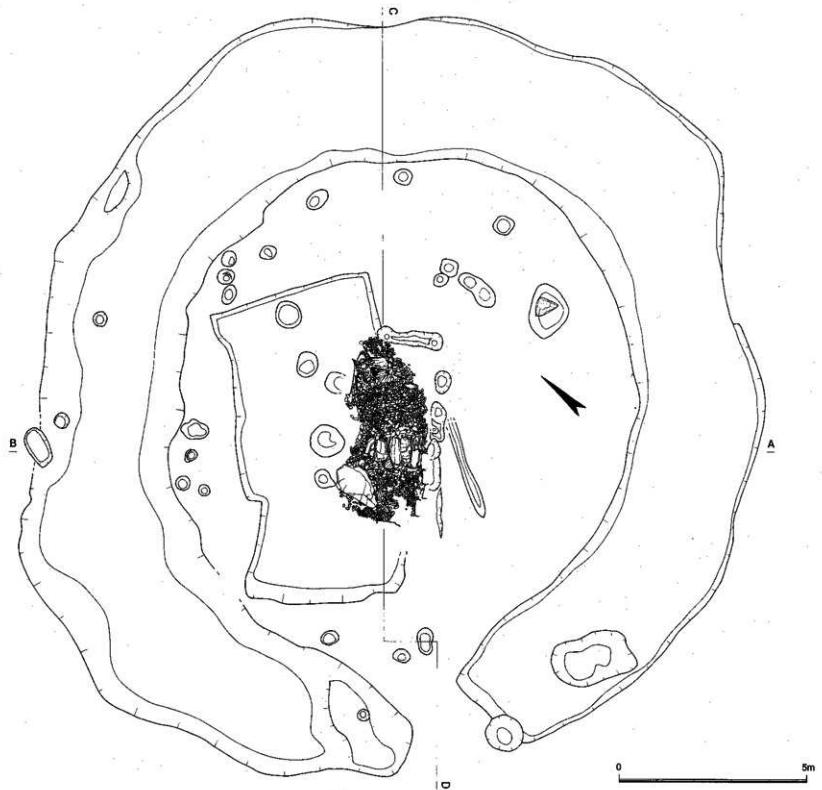


Fig. 58 吉武S群11号坑出土状况实测图 (1/100)

9. S群11号墳 (Fig. 58~67、Pl. 20・21)

S11号墳は、S3号墳の東側に隣接して造営されてた円墳である。

墳丘規模ではS4・S5号墳に匹敵する規模と考えられる。周溝は、南西側に陸橋部を備え、外周の形状は屈折が多いが、古墳群の中では比較的整っている。石室は、腰石を殆ど抜き去られているが、内部床面の残りは比較的良好であり、一部に残る腰石と石材埋置のための土壙からほぼ長方形のプランをなすものと考えられる。

副葬遺物は、石室内で須恵器蓋杯のセットが出士した程度で、土器類の殆どは周溝内で出土した。周溝内の上器類では、大型器台や横瓶・提瓶それに大型壺などが特徴的である。

また、石室内では鍛造袋状鉄斧や鍛造鉄斧それにU字形鉗先などの鉄器、ガラス玉・碧玉製管玉などが出土している。

① 周溝 (Fig. 58・59)

S11号墳の周溝は、外径の南北長19.5m、東西長21.5mの規模で、南西側に幅2mを測る出入り口のための陸橋を設けている。

また、周溝の幅員は、北側で3.8m、南側3.5m、東側4m強、西側3.5m程度を測る。残存する深さは、北側0.5m、南側0.3m、東側0.4m、西側0.6m前後を測るが、これらは最深の場所であり全体的には浅い。

周溝では、南側の陸橋部西側付近の溝内で須恵器大壺・杯・ハソウ・索や土師器壺などがまとまって出土している。また、周溝の北西側溝内では須恵器大型器台2点や提瓶・ハソウ・高杯などが出土している。

② 内部主体 (Fig. 60・61)

S11号墳の内部主体は、石室の腰石は殆どを抜き取られているが、陸橋部が南西側に設けられていることから石室は南側に開口していた可能性が高い。このようであれば残存する腰石は小口部1石、東側壁4石、西側壁1石が残っていることになる。

東側壁に近接して、平行する掘り方の一部が残り、石室の掘り方は長方形であったと考えられる。

東側壁では、小口側の4個の腰石の延長上に4個の長円錐上端が配置されており、これらは失われた腰石の位置を示すものである。

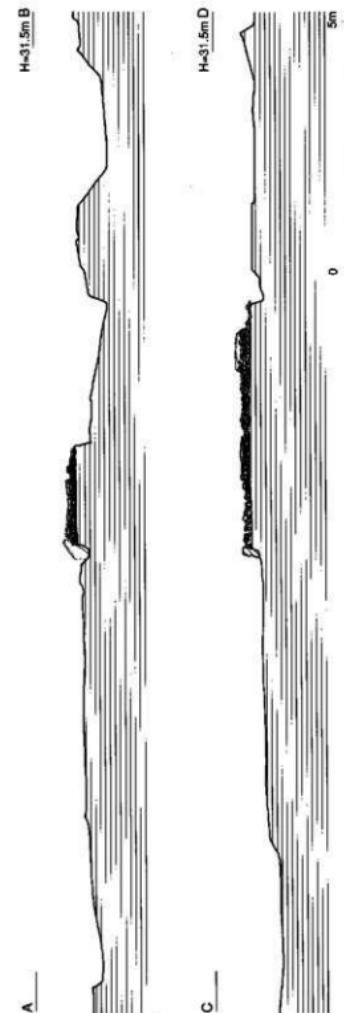


Fig. 59 吉武S群11号墳出土状況断面実測図 (1/100)

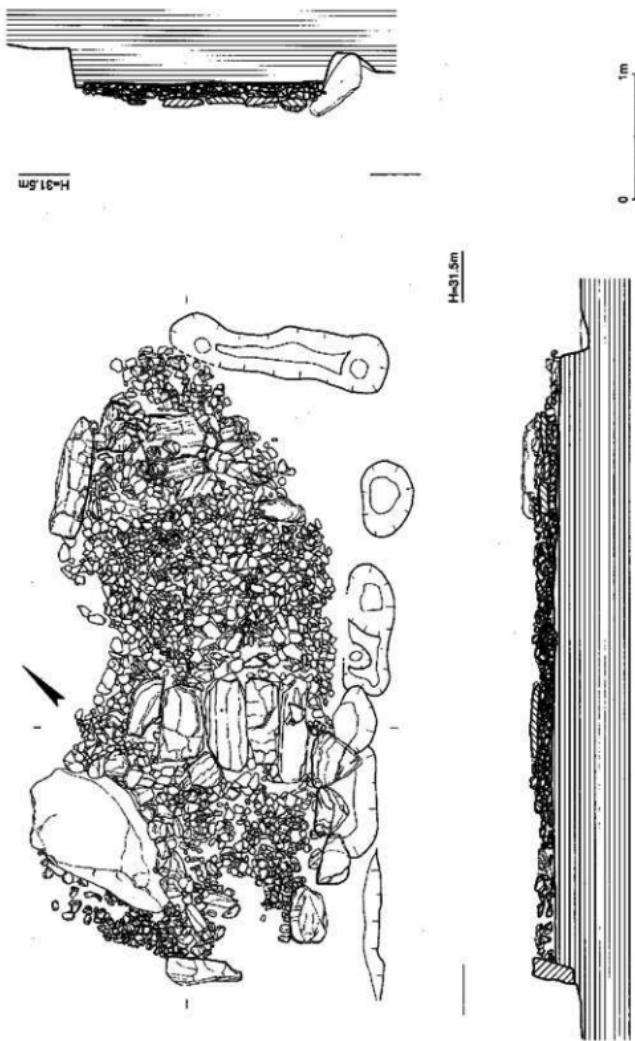


Fig. 60 古武S群11号墳埋葬施設実測図(1/40)

また、奥壁にあたる部位にも長さ1.8m、幅0.4m程度の溝状の土壤があり、底面の凹面から少なくとも2石以上の石材が用いられていたと考えられる。

西側壁では1石のみが残り、小口側の掘り方などが削平で失われているが、この腰石と東側壁の掘り方とを合わせてこの右室の幅が2.2m前後であると推定することができる。

これらから右室の規模と形状を考えると、小口から奥壁までの長さ4.5m程度、小口幅2.3m前後、奥壁幅2.3m前後の規模の長方形プランとなる。

石室床面は、小形の花崗岩転石を全面に敷き詰めて床面としているが、本古墳でも小口部西側で 1.4×0.8 m程度の扁平な花崗岩砾を床面に据えて敷石の一部として使用している部分が認められる。

また、石室内に

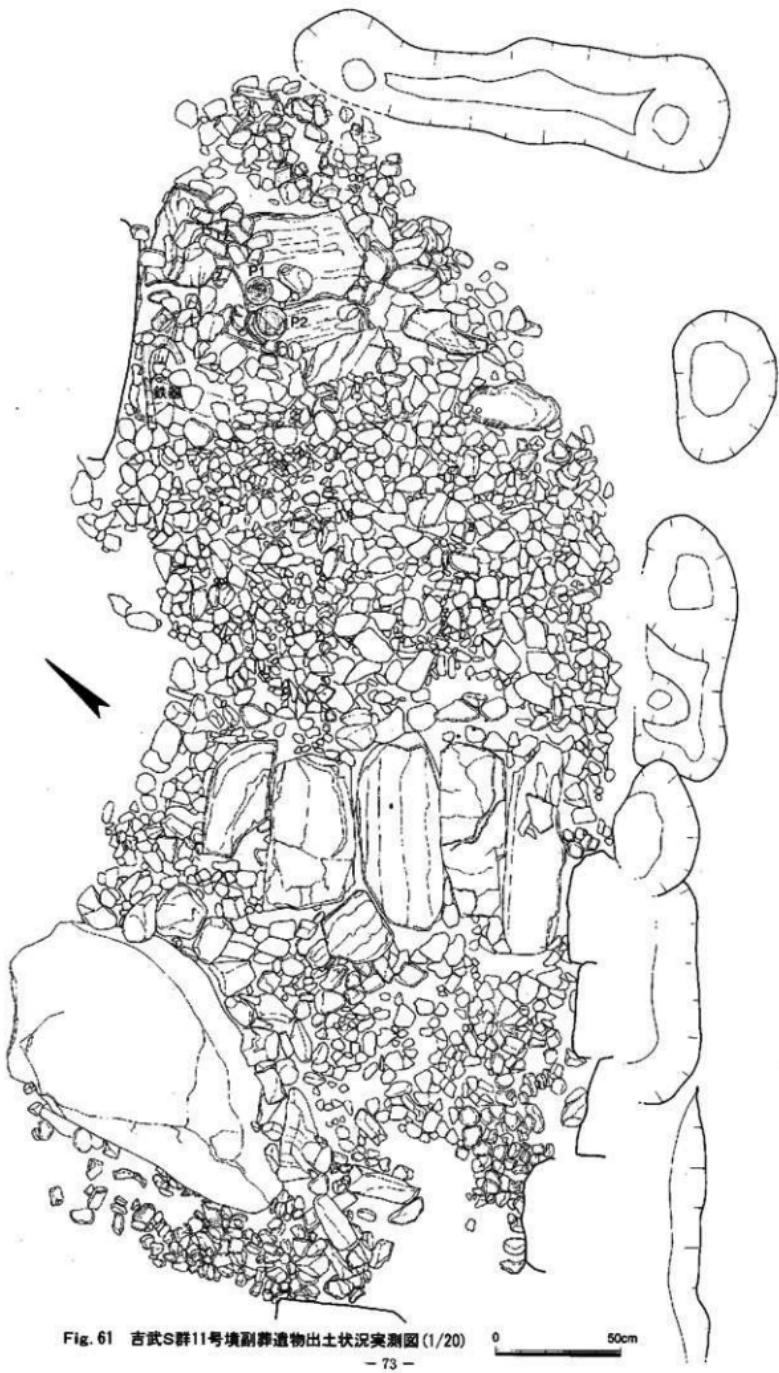


Fig. 61 吉武S群11号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)

0 50cm

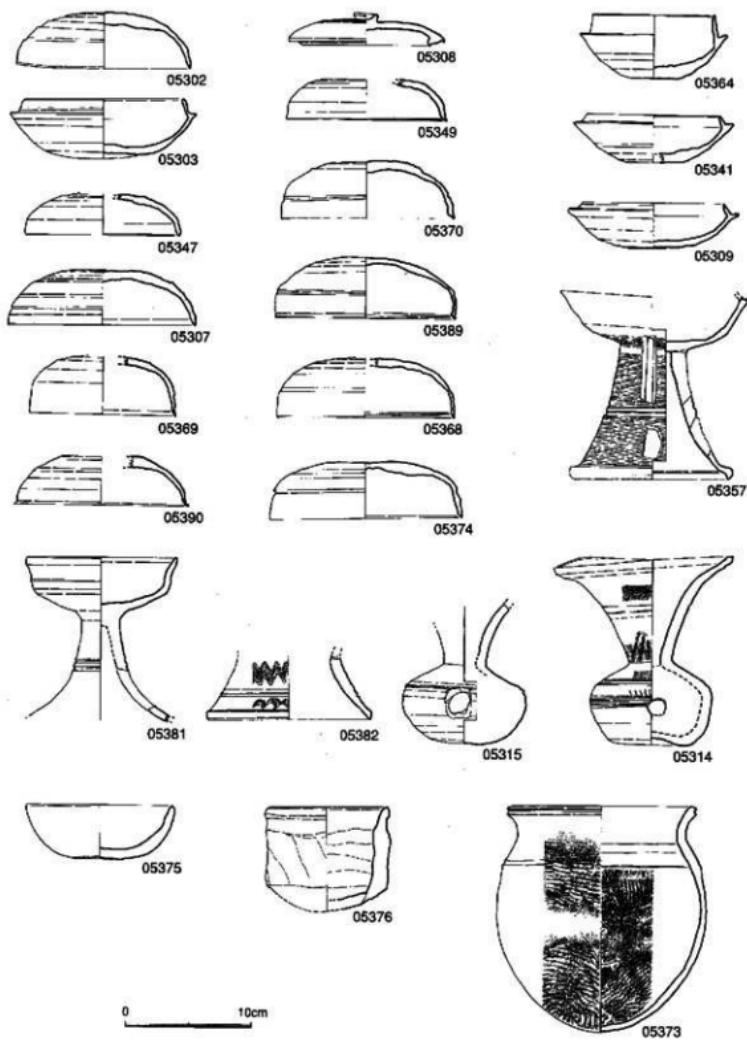


Fig. 62 吉武S群11号墳出土土器実測図(1)(1/4)

は屍床と考えられる施設が2ヶ所に見つかった。このうち1ヶ所は、南側小口部から1.5mほど入った場所に石室軸線に直交する方向に長さ1.2m以上、幅0.7mの範囲に5枚以上の変成岩板石を使用して、屍床としたものである。この施設上でガラス玉6点が出土している。

2ヶ所目は、擾乱のために西側の半分しか遺存しないが、奥壁に沿って設けられた施設である。やはり幅が0.9m程度、長さ1.5m以上の規模の屍床で、変成岩板石を使用している。長さは奥壁長と同一サイズと想定される。この奥壁部の施設では、西側の側壁部近くで蓋杯セットと鉄製じ字形鋒先1点・刀子1点・鋳造鉄斧1点が副葬位置で出土した。

また、石室内では小口側の玉類以外でも、ガラス小玉31、管玉6点(凝灰岩・碧玉)、滑石製平玉3点、鳥形石製品などが出土した。

③ 出土遺物 (Fig. 62~67, Pl. 48・49・62)

ア、土器類 (Fig. 62~65, Pl. 48・49)

05302(P1)・05303(P2)は、石室奥壁出土の蓋杯セットである。全体に薄づくりである。蓋・身ともに天井部・底部の1/2をヘラ削りする。大きさは、蓋が口径12.8cm・器高4.4cmで、身が口径12.75cm・器高4.7cmを測る。器色は外面が何れも明るい灰色で、内面黒～暗灰色を呈する。

05347は、周溝西側出土の杯蓋である。天井部の2/3にヘラ削りを施し、頂部に矢印形のヘラ記号が残る。器色は、外面黒灰色、内面淡灰色である。口径12.4cm、器高3.3cmを測る。

05307は、周溝西側出土の杯蓋(P1)である。天井部の1/2弱にヘラ削りを加える。内外面ともにヨコナデである。器色は外面暗灰色、内面淡灰色を呈する。口径15cm、器高4cmを測る。

05369は、周溝北西側出土の背の高い杯蓋である。天井部に明瞭なヘラ削りを残す。器色は内外面ともに暗赤褐色を呈する。内面はヨコナデ後に天井部内面になで調整。口径11.7cm、器高4.7cmを測る。

05390は、墳丘部出土の杯蓋である。口縁部は薄く、端部で外側に聞く。天井部は頂部が平坦となり、約1/2にヘラ削りを施す。器色は外面灰かぶり、内面淡灰色を呈する。口径13.8cm、器高4cmを測る。

05308は、周溝西側出土の蓋(P2)である。低いつまみに特異なかえりを持つ。外面暗赤褐色を呈する。天井部はカキ目を施す。焼成はやや軟質である。口径12.5cm、器高2.5cmを測る。

05349は、周溝西側出土の杯蓋である。天井部のヘラ削りは小さい。他は内外面ともにヨコナデである。外面は灰かぶりで、内面は暗灰色を呈する。口径12.8cm、器高3.3cmを測る。

05370は、周溝北～北西出土の杯蓋である。天井部は段をなし、頂部にヘラ削りを加える。器色は外面暗赤褐色、内面淡灰色である。天井内面にアテ具痕が残る。口径14cm、器高4.6cmを測る。

05389は、墳丘部出土の杯蓋である。全体に薄づくりである。天井部との境・口縁内端部は低い段をなす。天井部は1/2がヘラ削りである。器色は外面淡灰色、内面暗灰色である。口径14.4cm、器高1.9cmを測る。

05368は、周溝北～北西側出土の杯蓋である。外面灰かぶり。天井部の1/2にヘラ削りを加える。口縁端部・天井部との境に段をもつ。内面は淡配色を呈する。口径14cm、器高4.8cmを測る。

05374は、周溝北側検出面出土の杯蓋である。天井部の殆どにヘラ削り調整。口縁端部・天井部との境に段をもつ。器色は内外面ともに淡灰色を呈する。口径15.4cm、器高4.5cmを測る。

05364は、周溝北～北西側出土の杯身である。径が小さく、立ち上がりが高く、底部は平坦となる。底部のヘラ削りは深い。器色は内外面ともに淡灰色を呈する。口径9.8cm、器高5.5cmを測る。

05341は、周溝北西側出土の杯身である。立ち上がりは低い。底部は平坦で、ヘラ削りも狭い。器色は外面黒灰色である。底部に「二」のヘラ記号あり。口径10.8cm、器高8.8cmを測る。

05309は、周溝西側出土の浅い杯身(P3)である。立ち上がりは内傾して低い。底部ヘラ削りは約1/

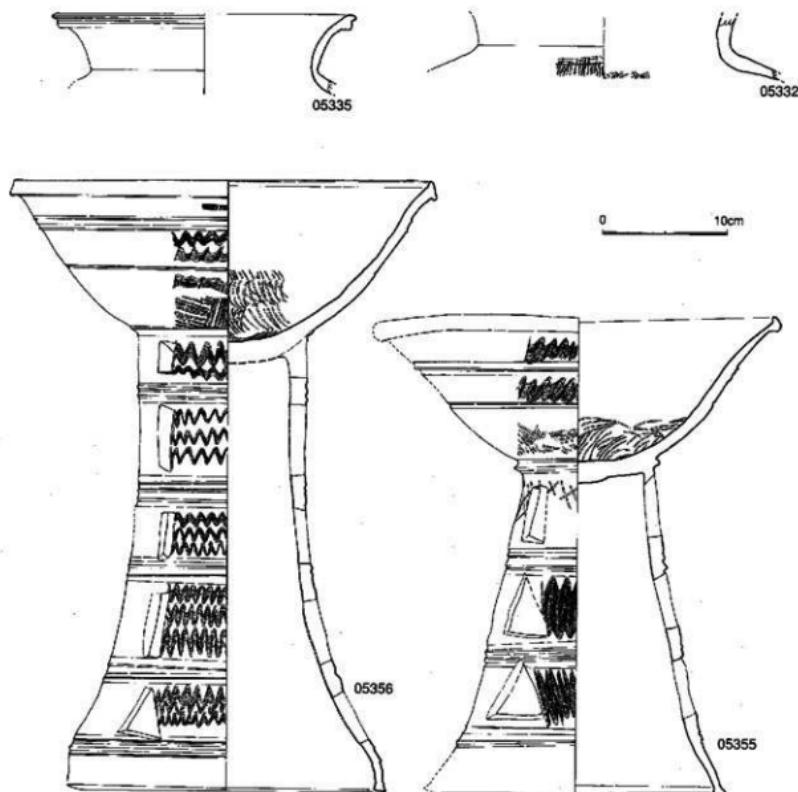


Fig. 63 吉武S群11号墳出土土器実測図(2)(1/4)

2程度である。底部に鉄器の銷付着。器色は暗赤褐色である。口径11.4cm、器高3.5cmを測る。

05357は、周溝北側出土の有蓋高杯(P13)である。杯部下端はヘラ削りを施す。脚円筒部はカギ目調整後に長方形透かしを2段に穿つ。器色は暗灰褐色である。脚径12.2cm、残存器高15cmを測る。

05381は、周溝内出土の無蓋高杯である。浅い杯に、細く、裾が大きく開く脚を付す。杯部内面は灰かぶりである。器色は内外面ともに黒灰色を呈する。口径12cm、器高12.7cm以上である。

05382は、周溝内出土の器台か。脚幅部に低い突帯を挟んで波長の短い波状文をめぐらす。外面に鉄が付着する。生地はセピア色を呈する。器色は暗灰色である。脚部径13cmを測る。

05315は、周溝内出土のハソウ(P10・14)である。外面灰かぶり。底部にヘラ削りが残る。穿孔部は使用によるもののか外側が破損する。器色は黒灰色を呈する。残存器高12.2cmを測る。

05314は、周溝西侧出土のいびつなハソウ(P8・13)である。口縁下に細かい波状文をめぐらす。頸部にはヘラ記号あり。肩から胴部には突帯を挟んで原体刺突文を施す。器色は黒灰色を呈する。口径14.4cm、器高14~15cmを測る。

05375は、北側遺構検出面出土の土師器マリである。外面不定方向のヘラ削り、内面ヘラミガキである。器色は淡褐色を呈する。口径11.8cm、器高4.3cmを測る。

05376は、北側土壙出土の手捏ね上器鉢である。内外面ともに指によるナデ調整を施す。器色は外面暗褐色、内面淡褐色を呈し、底部に黒斑がある。口径10cm、器高8.4cm程度を測る。

05373は、周溝北～北西部出土の土師器甕である。肩部以下底部までは擬格子タタキで、胴部内面は細いアテ具痕が残る。口縁端部は須恵器に似る。器色は淡赤褐色である。口径15.2cm、器高18cmを測る。擬須恵土師器である。

05335は、周溝内西側出土の甕である。内面は灰かぶりである。緩やかに開く口縁は端部が肥厚して僅かに折れる。頸部外面はカキ目状のヨコナデである。器色は黒灰色である。口径24.4cm、器高5.5cm以上である。

05332は、周溝西側出土の須恵器甕である。口縁部は玉縁状に肥厚する。外面は擬格子タタキで、内面にアテ具痕が残る。器色は淡灰色を呈する。口径24.4cmである。

05356は、周溝北側出土の大型器台(P12)である。浅い杯部に大径の脚部を付する。脚端部は平坦となる。杯部は突帯で区切り波状文を施す。外底は擬格子タタキ後にヨコナデ、内底に青海波を残す。脚は4段の長方形透かしの下に三角形透かし1段を穿つ。波状文は上下のものが2列、中間のものが3列となる。器色は黒灰色である。口径33.2cm、器高49cm、脚径25.5cmを測る。

05355は、周溝北側出土の大型器台(P11)である。浅い杯部に裾が外方に開く脚を付する。脚付け根には高い突唇をめぐらす。杯部は突帯で区切りこの間をいっぱいの波状文で埋める。外底には擬格子タタキ、内底に荒い青海波が残る。脚部は、突帯により4区に区切り上部が斜格子文後に長方形、下部2段が三角形透かしを穿つ。外面黒灰色を呈する。口径33cm、器高38cm、脚径24.2cmを測る。

05379は、東側の遺構検出面出土の須恵器提瓶である。胴部の大半を失する。短い口縁部は、端部が嘴状にとがり、下端に突帯1条をめぐらす。口縁部の内外面がヨコナデで、胴部は同心円状のカキ目調整を残す。器色は、胴部外面が暗灰色で、口縁部が黒灰色を呈する。また、内面は黒灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径8.6cm、残存高10cmを測る。

05359は、周溝内東側出土の提瓶(P15)である。肩部付近に2個一対のしっかりした環状把手を付す。口縁部は緩く外開し、下端部が段をなす。器面調整は、口縁部内外面が丁寧なヨコナデで、胴部は同心円状のカキ目が全面に残る。器色は、全体的に淡灰色を呈するが、胴部に暗灰色を呈する部分が見られる。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径7.4cm、器高21.6～22cmを測る。

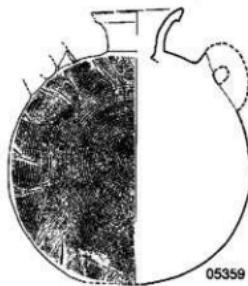
05378は、周溝内東側で出土した中型甕である。口縁部が緩く外開し、肩部の位置が高く、底部がやや尖り気味の製品である。全体に薄づくりである。器面調整は、口縁部内外面がヨコナデで、頸部以下から平行の擬格子タタキを施し、底部付近ではタタキが交叉する。また、胴部タタキ後に平行する幅広いカキ目を施す。内面は荒いアテ具痕が残る。口径17.3cm、器高30.1cmを測る。

05311は、周溝内西側出土の横瓶(P5)である。扁円の胴部に短い外開する口縁部を付する。口縁部は薄手で、シャープなつくりである。器面調整は、口縁部内外面が丁寧なヨコナデで、胴部は精緻な擬格子タタキを全面に施し、このあとに縦方向に幅1cm程度のカキ目を数条めぐらす。胴部内面は、荒い青海波文にナデを加える。器色は黒灰色～暗灰色を呈する。口径13.7cm、器高24cmを測る。

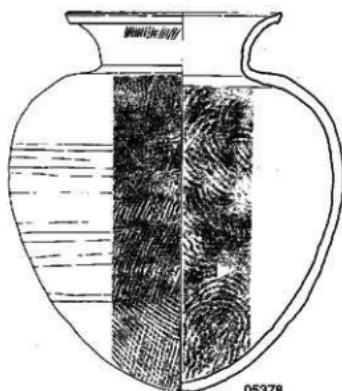
05310は、周溝内西側出土の横瓶(P4)である。長大な扁円形の胴部に短く外開する口縁部を付する。胴部は調整が良好で器壁が薄い。器面調整は、口縁部内外面が丁寧なヨコナデである。また、胴部外表面は細かい擬格子タタキを全面に加えた後、縦方向のカキ目を数条めぐらす。胴部内面は、頸部以下でアテ具痕が全面に残る。復元口径11.8cm、器高28.3～28.8cm、胴部最大径35.2cmを測る。



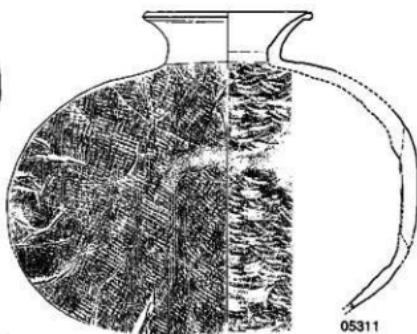
05379



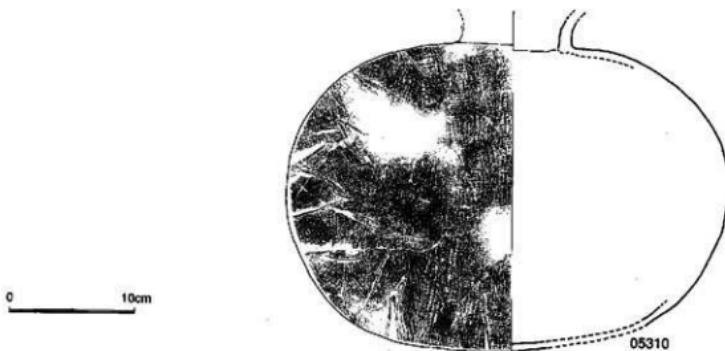
05359



05378



05311



05310

0 10cm

Fig. 64 吉武S群11号填出土器実測図(3)(1/4)

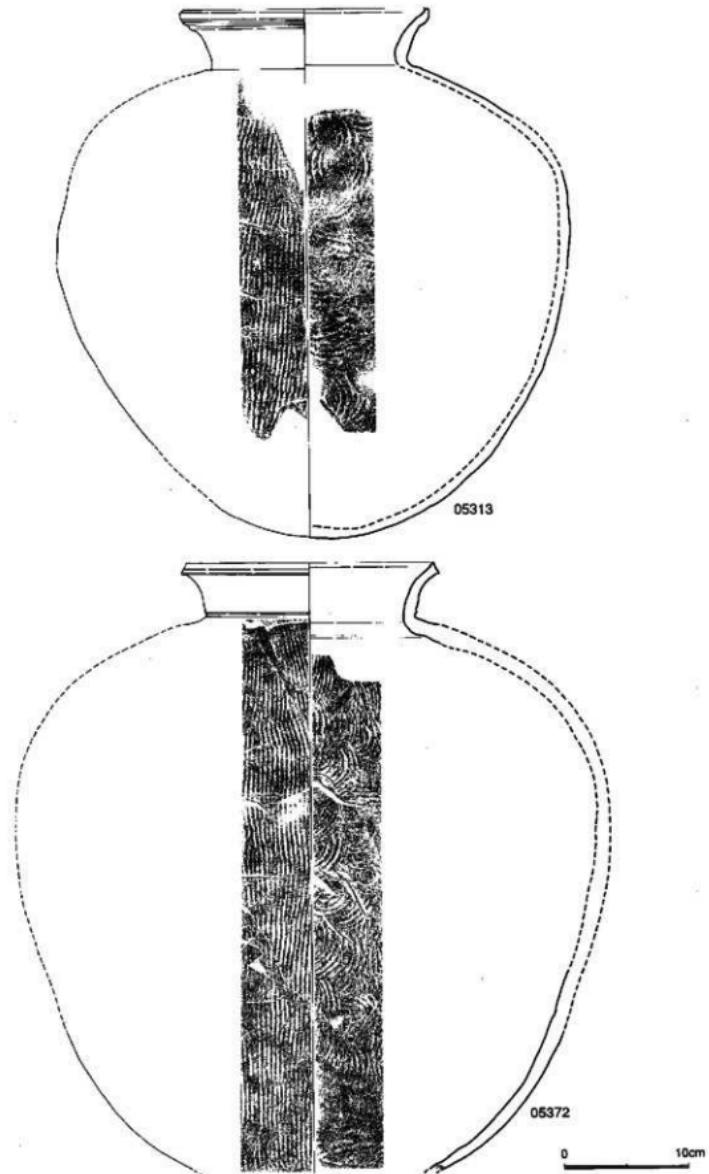


Fig. 65 吉武S群11号墳出土土器実測図(4)(1/4)

05313は、周溝南側出土の中型甕(P6)である。緩く張る肩部に短い外開する口縁部を付する。口縁端部は肥厚して玉縁状となる。器上部は灰かぶり。器面調整は、口縁部内外面ヨコナデである。胴部は細目の擬格子タタキを全面に施し、底部付近はタタキが交叉する。胴部内面は粗大な青海波文が残る。器色は内外面ともに暗灰色である。口径19.6cm、器高42.4cmを測る。

05372は、周溝北～北西側で出土した甕である。底部を失う。肩部が大きく膨らむ胴部に低い外開す

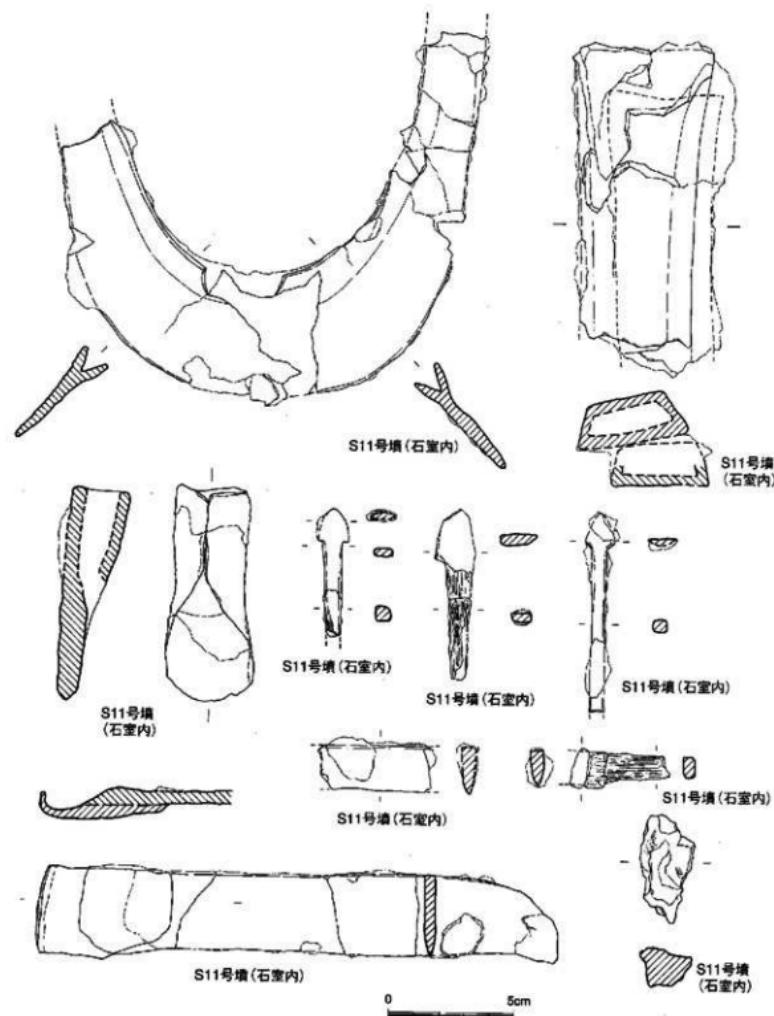


Fig. 66 吉武S群11号墳出土鉄器実測図(1/2)

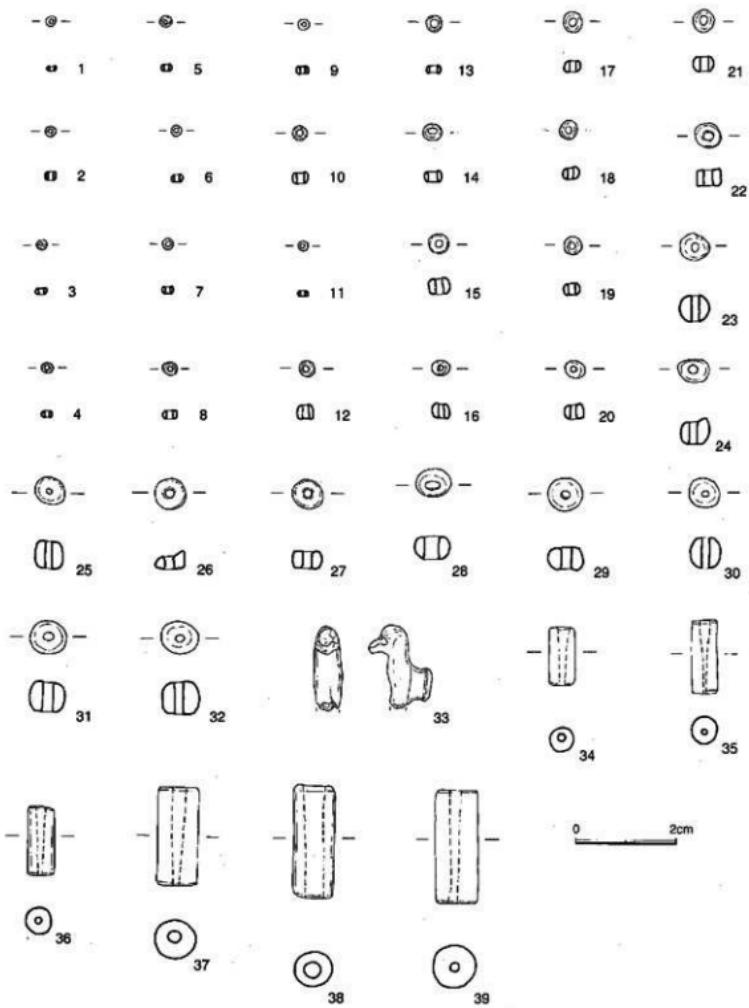


Fig. 67 吉武S群11号墳出土装身具実測図(1/1)

る口縁を付する。口縁部は外端部の中央がやや腫む。器皿調査は、口縁部内外面に丁寧なヨコナダを施す。また、胴部外面は、細かい撚格子タタキ後に横方向のカキ目を下半部近くまで施す。底部付近はタタキが交叉する。胴部内面は、大振りな青海波文が全面に残る。器色は、胴部上面が黒灰色で、中位が淡灰色、下部が黒灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径19.6cm、残存器高48.7cmを測る。

イ、鉄器類 (Fig. 66, Pl. 62)

鉄器は、石室内より鉄鎌(1点)・鉄刀(5点)などの武具と鎌(?1点)・刀子(1点)・不明棒状鉄器(1点)・小形鋸造鉄斧(1点)・鍛造袋状鉄斧(2点)などが出土した。今回はこれらのうち図化にたえうる中心的な鉄器について掲載した。

ウ、装身具 (Fig. 67)

S11号墳では、石室内からガラス小玉31個、凝灰岩(36)・碧玉製管玉5個(34・35, 37~39)、滑石製平玉3個(22・25・26)それに水鳥形をした異形製品(33)の計41個が出土した。

ガラス玉は、コバルトブルー色を主に赤・黄色・グリーン色のものが見られ、サイズの上で大・小が区別できる。また水鳥形の製品は淡緑色の滑石に似た石材を使用し、首をもたげた状態で背部に垂直に穿孔している。

10. S群 1号墳 (Fig. 68~71, Pl. 22)

S12号墳は、北側にS3号墳、東側にS11号・南側にS8号墳がそれぞれ隣接する位置にあり、特にS11号墳の西側周溝に接している。

古墳は、磁北から西へ48度ほど主軸を振る小形の石棺に似る石室である。墳丘は存在しない。

① 周溝

本古墳に伴う周溝などの外部施設は検出することができなかった。本来存在していなかった可能性が高い。

② 内部主体 (Fig. 69・70)

S12号墳の内部主体は、前述のように磁北よりかなり西側に主軸をとる小石室であろう。

石室の構造は、東西の側壁に3石の腰石、南側に1石以上を使用した長方形プランである。規模は、長辺が1~1.1m、短辺0.6~0.7mの不整なものである。石室の西側には花崗岩の扁平な角槓を主とした集石が見られる。これらは平面的には周辺に敷き詰めたように見えるが、意図的に水平に積まれたものではなく、乱雑に置かれた状態であり、或いは他の古墳石室の石材が積み重ねられたものであるかも知れない。

石室外の北側に接して、土師器甕底部がつぶれた状態で出土した。また、石室外の西側に接して須恵器杯など散点が出土した。

③ 出土遺物 (Fig. 71, Pl. 50)

S12号墳の石室内で原位置をとどめて出土した遺物はない。周辺の石材集積部分などから須恵器杯身(05395)、同杯蓋(05396・05398)、同蓋つまみ(05397)、土師器マリ(05399)、同甕底部(05103)などが出土した。05397は、須恵器杯蓋のつまみである。

石室内の出土である、天井部の一部が残るが、焼けひずみのためか、伸び上がっている。中央部は

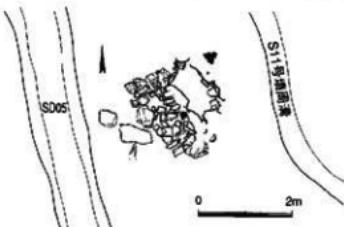


Fig. 68 吉武S群12号墳出土状況実測図(1/100)

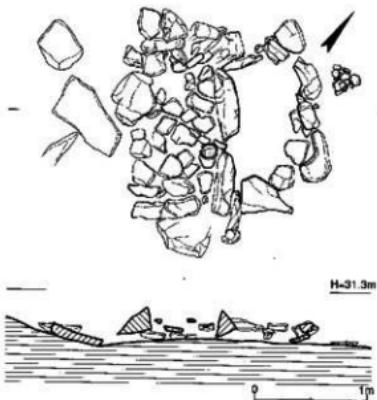


Fig. 69 吉武S群12号墳埋葬施設実測図(1/40)

Fig. 70 吉武S群12号墳断面実測図(1/40)

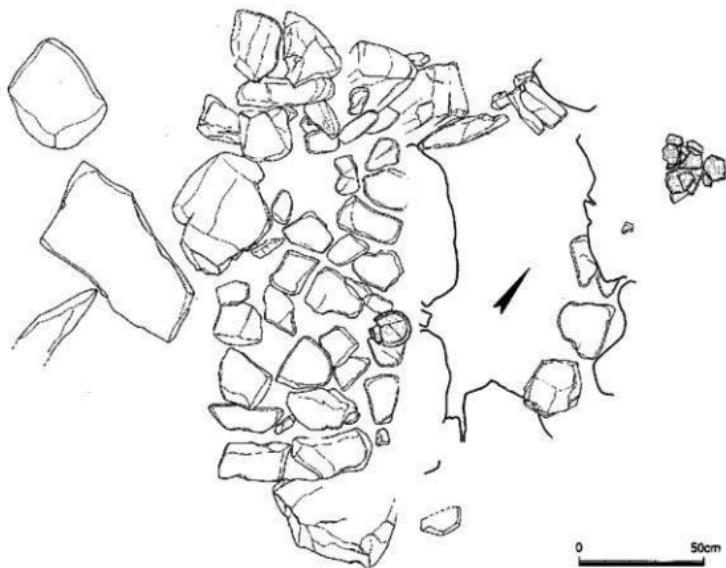


Fig. 70 吉武S群12号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)

中くぼみで、全体に薄づくりである。外面灰かぶりである。器色は、外面が淡灰色で、つまみ内面は半分が黒灰色を呈する。

胎土は密で、焼成は堅緻である。つまみ径3.5cm、残存高3.3cmを測る。

05396は、石室内出土の須恵器杯蓋である。器高の低い器形である。やや踏ん張るように外方に開く口縁は、端部が緩く窪んで段をなす。天井部との境は、低い段となっている。

器面調整は、外面天井部にロクロ時計回りでヘラ削りを2/3程施し、他はヨコナデである。また、内面は丁寧なヨコナデである。

器色は、外面黒灰色を呈し、内面は淡灰色である。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径14.5cm、器高4cmを測る。

05398は、石室内で出土した天井部を欠く杯蓋の小破片である。外面の天井部は全体に灰かぶりである。

口縁部は、丸味を持ってすぼまり、端部は小さく窪んで段をなす。天井部との境はそれほど明瞭ではなく、浅く沈線状に窪んで段となっている。

器面調整は、内外面ともにヨコナデで、外面は灰かぶりのため天井部のヘラ削り範囲は不詳である。

器色は、外面口縁部が黒灰色を呈し、内面は淡灰色である。

胎土は密で、焼成はやや軟質である。口径12.4cm、器高3.3cmを測る。

05395は、石室内で出土した杯身である。

全体に薄づくりの製品である。受け部が小さく、立ち上がりが内傾しており、低い形態である。

口縁内面端部は、体部に向かって切れ込むように直線的な形態となる。

器面調整は小範囲で、体部の下半にあたる約1/2の範囲にロクロが時計回りの回転ヘラ削りを加えて

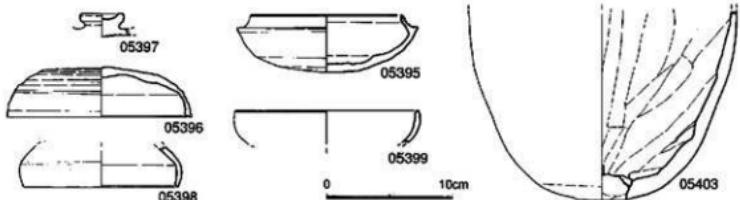


Fig. 71 吉武S群12号墳出土土器実測図(1/4)

いる。また、これ以上の体部および口縁部内外面には丁寧なヨコナデを施している。内底部には粗めのアテ具痕が残り、器面の凹凸が著しく、調整が不十分である。

器色は、内外面ともに淡灰色を呈する。

胎土は密で、焼成も堅緻である。口径12.2cm、器高4.6cmを測る。

05399は、石室内で出土した土師器マリの口縁部破片である。内湾する胴部に直口する口縁をもつ。器面調整は、外面が横方向の丁寧なヘラミガキ調整、内面も不定方向のヘラミガキ調整を施している。器色は、淡赤褐色を呈する。胎土は非常に密で、焼成も堅緻である。口径14.4cm、残存器高2.7cmを測る。

05403は、石室東側に近接する位置で出土した土師器壺である。口縁部を欠失する。

底部は、緩い平底で全体に器面の磨滅が著しい。また、外底からの二次穿孔がなされている。

器面調整は、外面がハケメではないヘラ状のもので縦方向になでおろし、内面が荒いヘラ削りで、底部から削り上げている。

器色は、外面が暗赤褐色を呈し、内面は淡赤褐色となる。

胎土は、粗で、焼成は堅緻である。残存器高17cmを測る。

11. S群13号墳 (Fig. 72~76, Pl. 23)

S13号墳は、L・M地区の北東部に位置し、この地区の中では最も削平が著しい部分にあたる。

また、弥生時代豪棺墓地とも重複しており、周溝を含めた関連遺構の遺存は良くない。

遺構は、周溝の一部と石室の東側壁および北壁の一部を残すのみである。

また、副葬遺物は、石室内より須恵器、鐵鏟、刀子それに銅環が出土している。

① 周溝 (Fig. 72)

S13号墳にともなうと考えられる周溝は、石室の西側でその一部が検出された。

その位置は、石室中心から西側へ6.5mのところにあり、南北方向に延長8m程度の円弧が認められる。

周溝の残りは、地山面の上昇するにしたがって悪く、南側で幅員2.3m、北側になると1m程になっている。また、深さは約20cm前後が残る。

残存する周溝からその規模を推定すると、内径で13m、外径で16.5m程度の円墳を想定することができよう。

また、周溝内からの出土遺物では特徴的なものは無かった。

② 内部主体 (Fig. 73・74)

S13号墳の内部主体は、腰石の一部を残した石室である。石室の主軸は、磁北から東へ7度ほど振った方向にとっており、ほぼ南北方向に向いていると言える。

石室の残存状態は極めて悪く、東側側壁の腰石4石と北側壁の腰石1石のみが残っているにすぎない。東側壁の腰石は、最南部のもので長・幅・厚が $0.3 \times 0.3 \times 0.2$ m、その北側の腰石が $0.55 \times 0.4 \times 0.3$ m、さらに北側の腰石が $0.55 \times 0.4 \times 0.45$ m、そして最北のものがやや小形で $0.25 \times 0.2 \times 0.15$ m程度のいずれも花崗岩角礫を使用している。

また、北側壁では腰石1個のみであるが、その長・幅・厚が $0.65 \times 0.25 \times 0.5$ mを測る花崗岩角礫を使用している。この北側壁にある腰石が本来の石室奥壁であった可能性がある。

また、石室内床面には長径が10~15cm、厚さ5~8cm程度の花崗岩を主体とする敷石が残るが、西側および南側の腰石を失っているためにその範囲は、南北2.6m、東西1.1~1.5mを測る。

このような石室の遺存状態から本来の石室規模を復元することは困難であるが、腰石および石室内に敷石の状態から推定すると、石室南北長は、東側側壁などから2.15m以上、北側壁は1.5m以上の規模と考えて良い。また、各腰石の埋置はやや内側に倒れる傾向にあり、これが上部への石積み法と関連するものかも知れない。

(石室内遺物出土状況) (Fig. 74)

石室内では、北側壁より正面南側に40cmの床面敷石上に推定11本以上の鐵鐵塊が認められる

また、東側壁の北東隅にも鐵鐵3本が出土した。北側壁から南へ1.1m程度の床面敷石上の、やや側壁に近い部分に土師器マリの破片が出土しているが、全体に副葬のものを含めた出土品は少ない。

③ 出土遺物 (Fig. 75・76, Pl. 1, 50)

S13号墳では、前記のように石室内から須恵器・土師器などの土器類、銅製耳環、鐵鐵・刀子などの鉄器が少量出土した。

(土器類) (Fig. 75)

石室内で出土した上器類のうち土師器マリは細片となり、実測に耐えないために他の石室内出土の

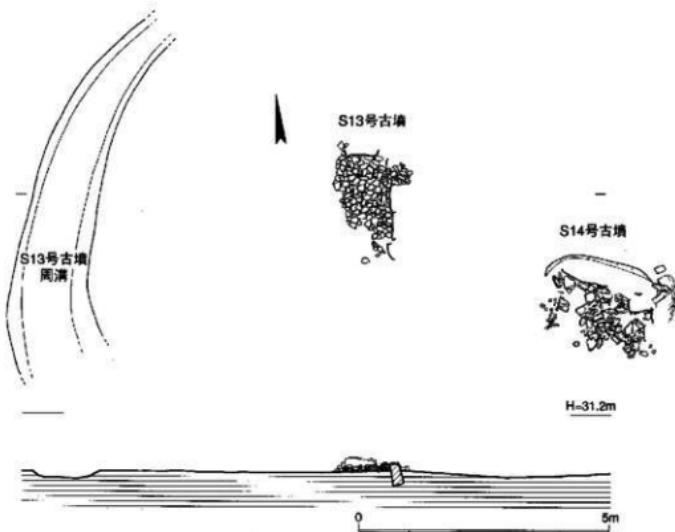


Fig. 72 吉武S群13号・14号墳出土状況実測図(1/100)

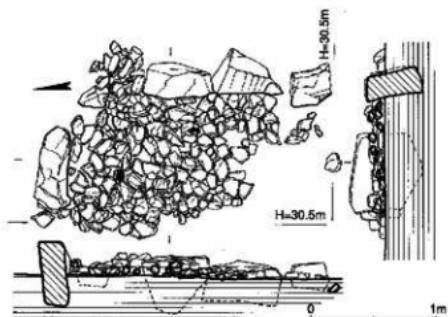


Fig. 73 吉武S群13号墳埋葬施設実測図(1/40)

土器類について記述する。

05404は、石室内出土の須恵器短頸壺である。良く膨らんだ胴部に外開する短い口縁部を付する製品である。口縁部内外面と胴肩部は灰かぶりとなる。

口縁部の外端は短く引き出して、やや垂れる。また、口縁部から胴部内面は極端な屈曲部がなく、なめらかな曲線となる。

器面調整は、口縁部外面および胴部内面が丁寧なヨコナデで、胴部下半は幅広い回転ヘラ削りとなっている。また、底部付近にはヘラ削り以前の平行タタキの痕跡

が一部に残る。

器色は、外面胴部の肩部以下が淡灰色を呈し、口縁部内面が淡灰色となる。また、胴部内面は、明るい灰色を呈する。

胎上は密で、焼成は堅緻である。口径13.6cm、胴部最大径19.7cm、残存器高12.1cmを測る。

05405は、石室南側の検出面で出土した須恵器提瓶である。口縁部を欠く。底部の平坦面を含めて全体に灰をかぶっている。このため特に外縁部では、灰かぶり部分とかぶらない部分とが見られ、かぶっている部分は自然釉の垂れや他器種の器壁が固着して、光々しい器面となっている。器中央に2個一対の細い把手の痕跡がある。ブリッジ状になるものか、把手の間隔は中心で約5cmほどである。また、焼成は底部がやや焼きが悪いことから立てて焼成したものと考えられる。

器面調整は、胴部外面の全面に同心円状のカギ口を施す。器色は、外面が淡灰色で、内面は黒灰色を呈する。胎上は粗で、焼成は堅緻である。胴部最大径18.1cm、残存器高16.5cmを測る。

(装身具) (Fig. 76)

1は、石室内出土の銅地鍍金の耳環である。開閉部に僅かに鍍金が残る。器面の劣化が著しく、刺

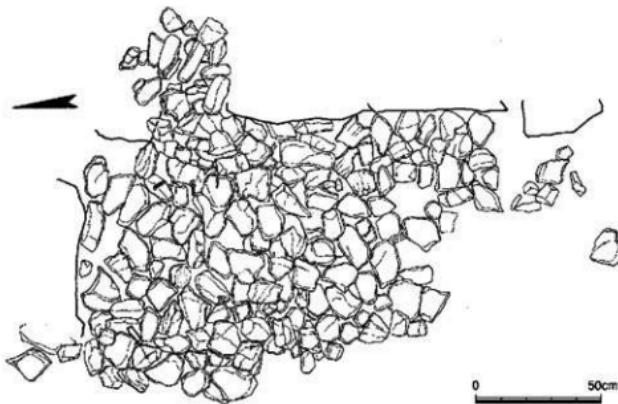


Fig. 74 吉武S群13号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)

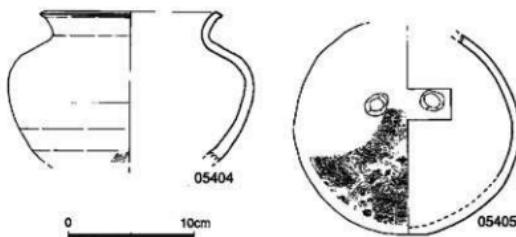


Fig. 75 吉武S群13号墳出土土器実測図 (1/4)

落した部分が多い。

また、開閉部は弱干ねじって作られている。サイズは、上下長1.8cm、左右長2.1cmを測り、径は4 mmの円形をなす。

2は、石室床面出土の鉄鎌先端破片である。鎌身部の途中から欠損している。

全体に錆びが多い製品である。先端中央部に鏽を有し、断面形も片面に鏽・反対面がやや平らな面を持った形態となる。また、図の左側刃部が刃をなすことから片刃の長頸式鎌と考えられる。

残存長3.2cm、先端部幅0.9cmを測る。

3は、石室床面の敷石上で出土した鉄鎌である。茎端部を失う。先端部には木質が付着する。

また、変形して茎部より曲がっている。

鎌身は、先端部三角形で、幅広い刃をもつが、詳細は錆びのため不詳である。先端部断面はいわゆる切刃断面となっている。

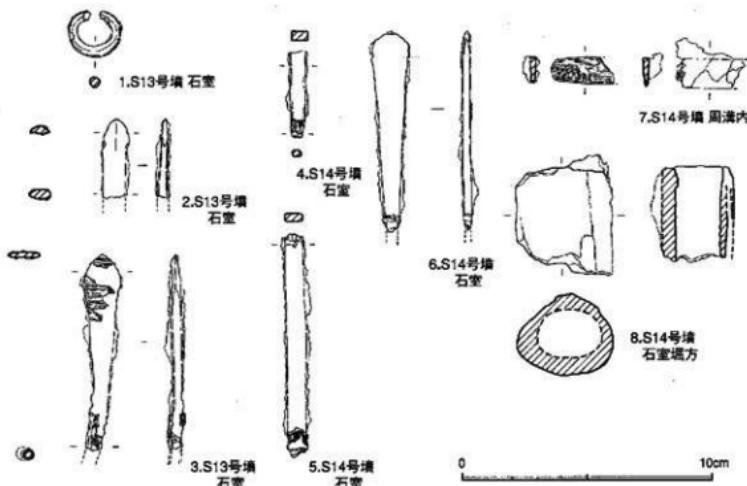


Fig. 76 吉武S群13・14号墳出土鉄器実測図 (1/2)

また、頭部には櫻皮の巻きが残り、鉄器本体と密着することから皮巻き後に矢柄を装着したものと考えられる。

鉄鎌は、残存全長7.9cm、鎌身部の全長が6.3cmを測る。

12. S群14号墳 (Fig. 77・78)

S14号墳は、S13号墳の東南側7~8mに隣接する古墳である。かなりの削平や石材の抜き取りがあったものと考えられ、現状でも原位置を保った石室の腰石は少ないと考えられる。また、周溝は該当する遺構が無く、すでに削平されたものと考えられる。

副葬遺物は、石室内から須恵器杯蓋、鉄鎌・石室掘り方から袋状鉄斧などが出土している。

① 周溝

S14号墳に伴う周溝は見つかっていない。

② 内部主体 (Fig. 77・78)

S13号墳の内部主体は、主軸を磁北から48度ほど西に振った方向にとる石室である。

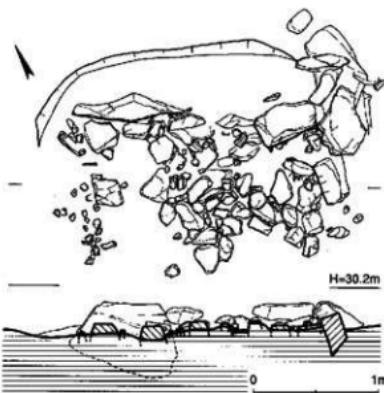


Fig. 77 吉武S群14号墳埋葬施設実測図(1/40)

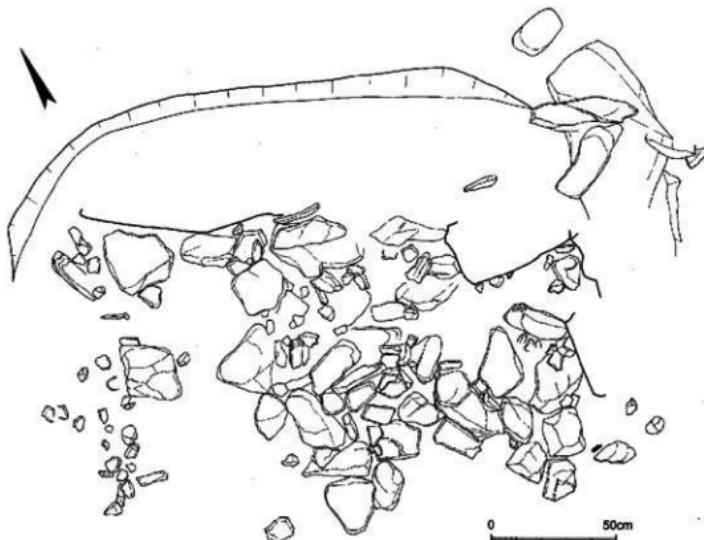


Fig. 78 吉武S群14号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)

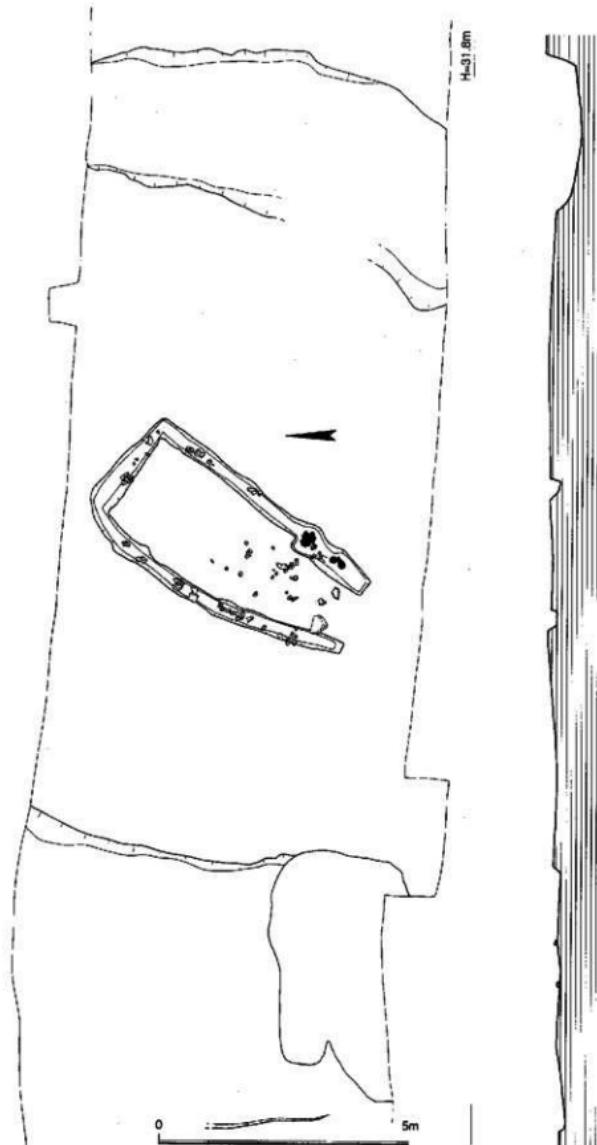


Fig. 79 吉武S群15号墳出土状況実測図(1/100)

された円墳である。石室掘り方のみを残し、周溝は東側で石室中央より6m、西側は同6~6.5m付近に周溝内径があたる。

石室は、出土状況図に見るように腰石で原位置をとどめているのは側壁北側の1石のみで、他に腰石と考えられる石材は3個があるが、多少とも移動している。石室規模は、長辺2m、短辺1.4m以上となる。床面敷石は、花崗岩を主とする角礫で、間を抜かれた状態である。

③ 出土遺物 (Fig. 76)

石室内出土の須恵器杯蓋は、器高の低い端部がやや聞く蓋で、天井部との境は低い段をなし、天井部の殆どにヘラ削りを加える。口径14.2cm、器高4.2cmを測る製品である。

また、鉄器類では、石室内山上の主頭斧箭式鐵鏃があり、先端部を欠くが、断面両丸で、茎付け根に櫻皮巻きの一端が残る。残存全長7.95cm、鏃身全長7.25cmを測る。

また、石室掘り方内出土の袋状鉄斧などこの他の鉄器類と共にFig. 76に実測図を掲載した。

13. S群15号墳

(Fig. 79~83, Pl. 23)

S15号墳は、M・N地区の北側を東西に走る1号幹線道路の路線上で検出

出土遺物は、石室掘り方と周溝内から出土している。

① 周溝 (Fig. 79)

S15号墳の周溝はほぼ路線内幅のみが調査された。東側周溝は、幅員が約3m、深さ0.6m、延長7mである。また、西側周溝は、外形が不明瞭で、深さも浅いもので東側のものと比較すると緩やかで不整な形状である。その規模は、幅5m・深さ0.1m前後で、延長は同じく7mである。緩く弧状を描くことから東側のものと対応すると思われる。他の古墳においても周溝の幅・深さが変移する傾向があるので本墳においても不都合は無いと考えられる。

② 内部主体 (Fig. 80・81)

S15号墳の内部主体は、石室であったと考え得るが、原位置をとどめる石材は殆どない状態であり、石材を埋置する掘り方のみが残る。

石室掘り方の主軸は、磁北より東へ50度程振った位置にある。掘り方は長方形で、南側が開いた「コ」字形となる。やや北側奥壁部に向かって幅員をます。

掘り方のサイズは、外側の東辺で5.25m、北辺0.36m、西辺5.9mを測り、西辺はやや弧状に弓なりとなる。

また、幅は、やや広い小口部を除けば約0.3m程度である。このような形状の掘り方は、通常後期古墳の横穴式石室墳のものに見られるタイプであり、他の殆どの石室の形状を窺うことのできる古墳のものとは明らかに区別できる。

この古墳に伴う遺物類は、掘り方内、周溝内などで土器類、鉄器類が出土した。特に鉄器類では、鍛造鉄斧・鍛造袋状鉄斧が注目される。

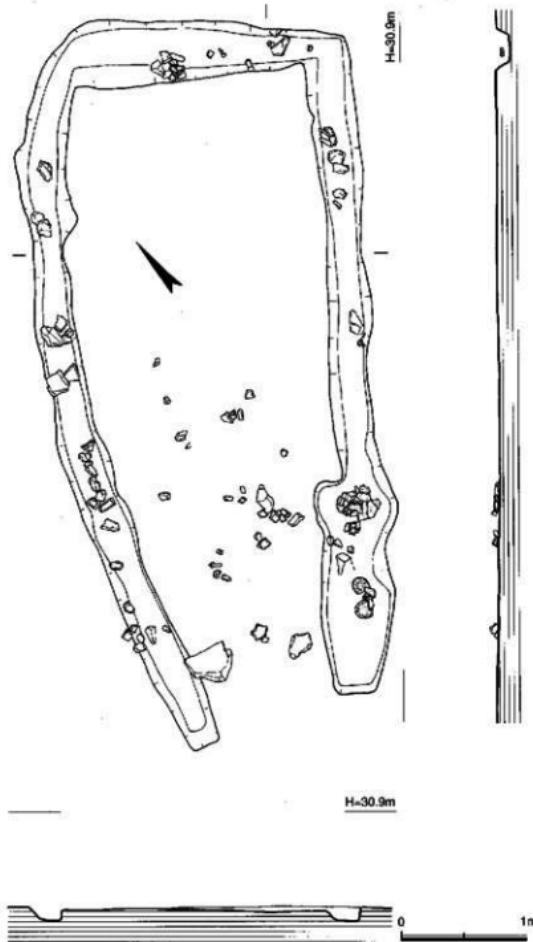


Fig. 80 吉武S群15号墳埋葬施設図(1/40)

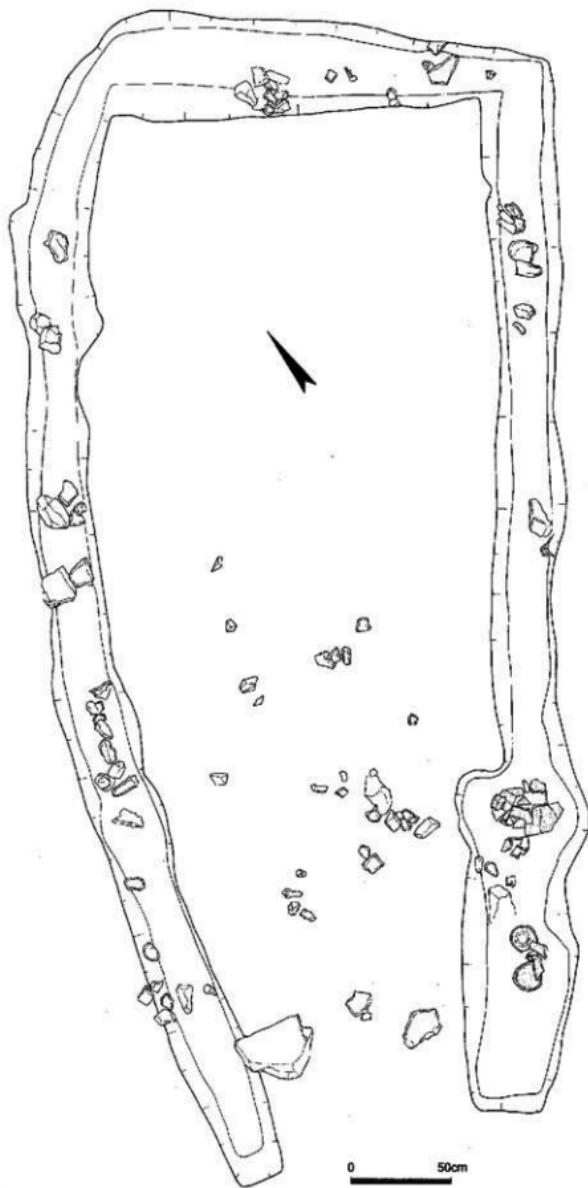


Fig. 81 吉武G群15号填副葬遺物出土状況実測図(1/25)

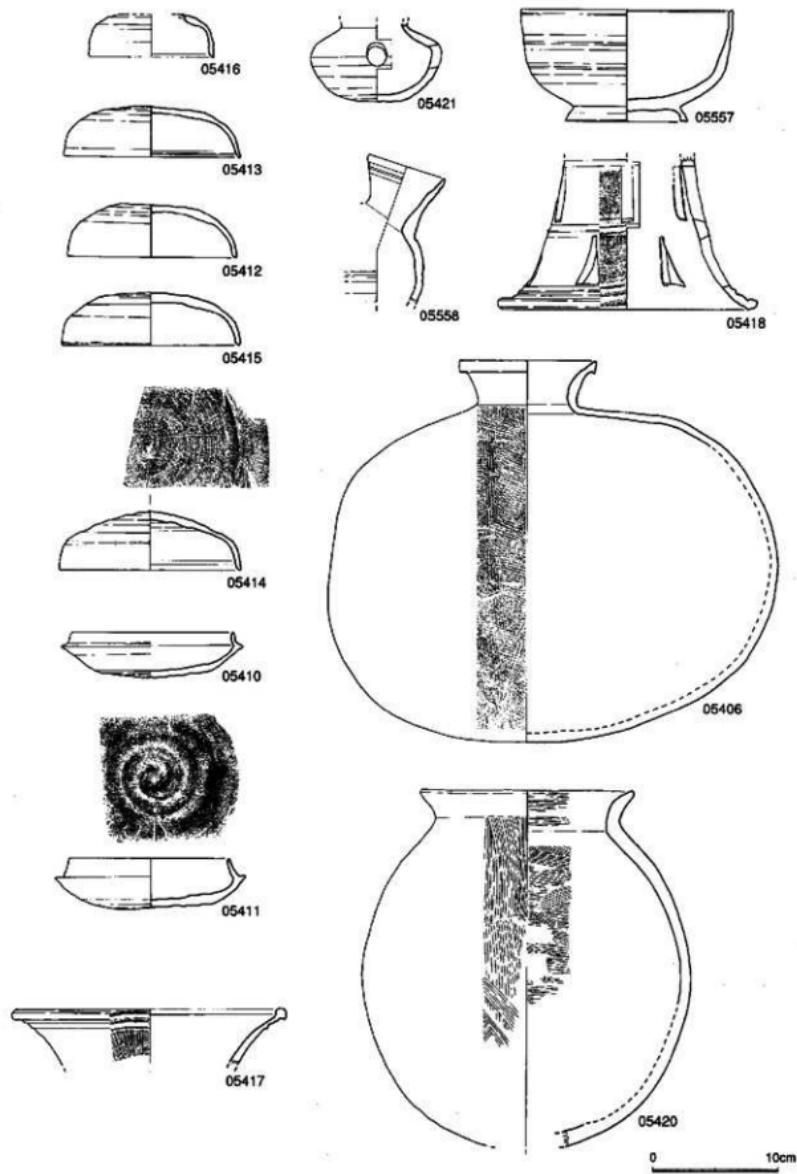


Fig. 82 吉武S群15号墳出土土器実測図(1/4)

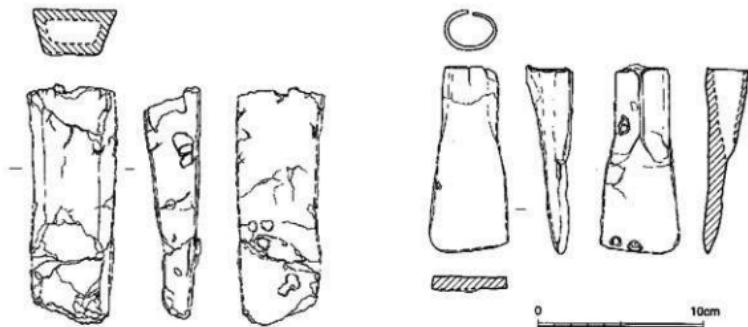


Fig. 83 吉武S群15号墳出土鉄器実測図(1/3)

③ 出土遺物 (Fig. 82・83Pl. 50・51)

(土器類) (Fig. 82)

05416は、石室掘り方出土の杯蓋である。小形の製品で、口縁部内面は稜をなし、天井部との境はやや窪み、不明瞭である。天井部の1/2へラ削り。口径10cm、器高3.4cmを測る。

05413は、石室掘り方出土の杯蓋である。浅い器形で、口縁部内壁に段を有する。へラ削りは天井部の約1/2程度である。器色は灰白色である。口径14cm、器高4cmを測る。

05412は、石室掘り方出土の杯蓋である。口縁端部は丸く、天井部の2/3に回転へラ削りを加える。他はナデ調査である。口径13.4cm、器高4.2cmを測る。

05415も石室掘り方出土の杯蓋である。口縁端部は丸く、天井部との境はやや広く窪む。天井部は1/2程へラ削りを施す。口径14.1cm、器高4.2cmを測る。

05414は、石室掘り方出土の天井部の尖る杯蓋である。天井部との境は緩い窪みとなる。天井部のへラ削りは2/3程度である。頂部に短直線のへラ記号がある。口径14.9cm、器高4.7cmを測る。

05410は、石室掘り方出土の低い器高の杯身である。全体に薄づくりである。立ち上がりは低く、受け部も小さい。器色は灰白色を呈する。口径12.8cm、器高3.6cmを測る。

05411は、石室掘り方出土の杯身である。立ち上がりには内傾するが、高くシャープなつくりである。器色は灰白色を呈する。内底部に矢印と交叉3直線のへラ記号がある。口径12.5cm、器高4.1cmを測る。

05421は、遺構確認面出土のハソウ胸部である。胸部下半にへラ削りが残り、他はヨコナデである。頸部径5.3cm、胸部最大径10.9cm、残存器高6.3cmを測る。

05558は、周溝内出土の横瓶である。胸部の殆どを欠く。口縁部に沈線2条、胸部にも沈線2条をめぐらす。胸部はへラ削りである。口径6.2cm、残存器高11.9cmを測る。

05557は、周溝出土の陶形上器である。大径で、高台は踏ん張り、畳みつきは平坦となる。碗外面には2ヶ所に2本単位の緩い沈線をめぐらし、底部の高台近くは強い回転ヨコナデを施す。高台外面は強いナデを施す。器色は、灰白色を呈する。口径17cm、器高8.9cmを量する。

05418は、石室掘り方出土の器台である。端部は正縁状に肥厚する。残存部の中央に低い突帯1条をめぐらし、下段が三角・上段長方形の透かしを6方に千鳥で配置する。また、透かしを切り出す前に

緩い波状文で全面を埋め尽くしている。器色は、灰白色である。脚径20.8cm、器高12.1cmを測る。

05406は、石室掘り方の確認面で出土した俵壺である。扁円形の胴部に小さいシャープな口縁部を付す。全面に自然釉がかかり、濃緑色～灰白色を呈する。器面調整は、外面が擬格子の平行タタキ後に縱方向のカキ目を施す。内面は青海波文を半ばすり消している。口径11.0cm、器高30.5cm、胴部最大径35.7cmを測る。

05417は、石室掘り方出土の須恵器壺口縁である。口縁端部は玉縁状に肥厚し、口縁下に1条突帯をめぐらす。突帯以下にはカキ目調整後原体による櫛齒状文が施される。口径20.6cm、器高4.5cmを測る。

05420は、周溝内出土の口縁部のよく絞まる土師器甕である。全体に肉厚である。器面調整は、外面口縁部がヨコナデで、胴部以下はナデの後に荒いタテハケメを施す。また、内面では、口縁部にヨコハケを施し、胴部上半は荒い斜め・ヨコ方向のハケメを施す。胴部下半はナデである。口径16.8cm、頸部径14.8cm、器高28.5cmを測る。

(鉄器類) (Fig. 83)

S15墳石室内出土の袋状鉄斧・鋤造鉄斧などの鉄器について図に示した。

14. S群24号墳 (Fig. 84～86, Pl. 26)

S24号墳は、S4号の南側、S11号の北側に位置し、不整な周溝と、極端に被覆を受けた石室の腰石5個を残すのみの古墳である。東半部は調査区外のために詳細を明らかにできない。

古墳の造営時期を示す遺物類は、殆どが石室西側周溝内のSK02内で出土している。

① 周溝 (Fig. 84)

S24号墳の周溝と考えられる溝造構は、いびつであり、西側で幅4m、北側で1.2m以上、また南側では1.3m以上となる。深さは最も深いところで0.3m程と浅く、西側の周溝内は浅い上塙状のくぼみが幾つも見られる。

また、西側の外縁部は他の土塹との重複が多く、外縁形がかなり乱れている。

② 内部主体 (Fig. 85)

S24号墳の内部主体は、西側側辺部に4個の腰石を残すのみの石室である。石室床面の敷石の遺存状況から見ると、側壁の最も南側の腰

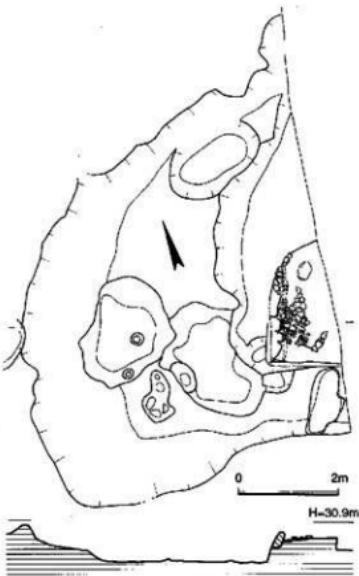


Fig. 84 吉武S群24号墳出土状況実測図(1/100)

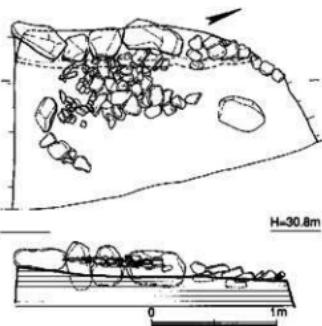


Fig. 85 吉武S群24号墳埋葬施設実測図(1/40)

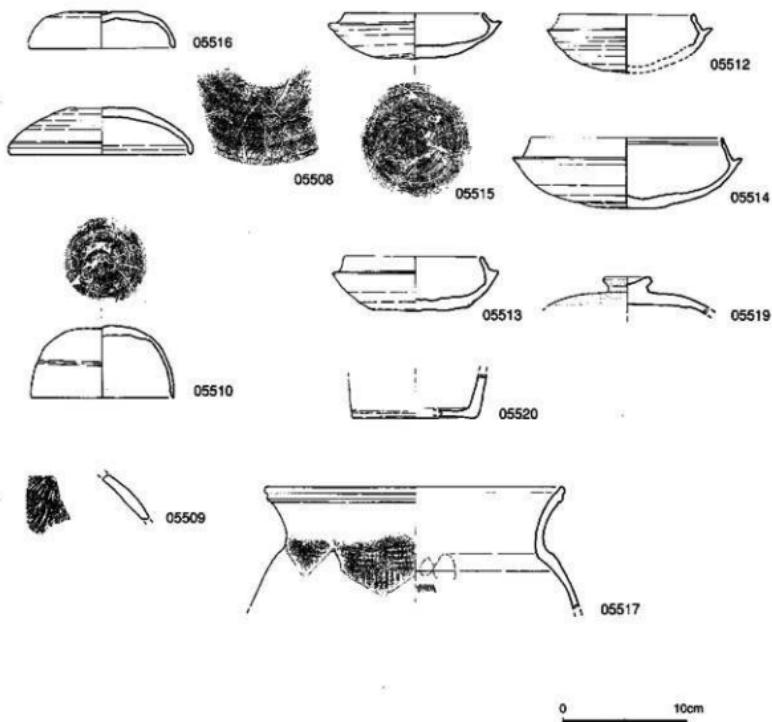


Fig. 86 吉武S群24号墳出土土器実測図(1/4)

石は動いており、寧ろ1右のみが残る南側壁とのコーナーにはまっていた石材であるとも考えられる。何れにせよ石室規模は、南北壁3.5m以上、東西壁1.7m以上のものであったと想定される。

石室床面の敷石は、西側壁近くがよく残っているが、床面で出土した副葬遺物は出土していない。

③ 出土遺物 (Fig. 86, Pl. 53)

05516は、周溝内(SK02)出土の杯蓋である。低い器形で、天井部のヘラ削りは小さく、他は内外ともにヨコナデである。器色は外面黒灰色で、内面淡灰色である。口径11.5cm、器高3cmを測る。

05508は、天井部の平らな杯蓋(Pl.)である。天井部のヘラ削りは広く、他はヨコナデである。矢印形のヘラ記号を描いている。器色は暗灰色である。口径14.4cm、器高3.7cmを測る。

05510は、図では逆となっているが、須恵器杯である。丸底で、胴部の中位に低い突帯1条をめぐらす。器色は外面暗灰色を呈する。底部に矢印形のヘラ記号を施す。口径11.6cm、器高5.8cmを測る。

05515は、立ち上がりが低く、内傾度が高い杯身である。底部ヘラ削りは広く、他はヨコナデである。器色は外面暗灰色を呈する。口径11.2cm、器高3.65cmを測る。

05513も底部の平らな杯身である。受け部に蓋・体部に他個体破片が固着する。器色は暗灰色である。全体に鈍いつくりの製品である。口径11.2cm、器高4.6cm前後を測る。

05512は、外面灰かぶりの杯身である。底部に「×」印のヘラ記号がある。器色は内面暗灰色を呈す

る。全体に焼けひずみが大きい。口径11.8cm、器高4.6cmを測る。

05514は、細身の大型杯身である。立ち上がりは細く、高い。底部のヘラ削りは2/3に及ぶ。器色は明灰色を呈する。口径14.4cm、器高5.6cmを測る。

05519は、中央部が瘤むつまみ付き蓋である。外面は丹塗である。内面にアテ貝痕が残る。

05520は、平底鉢(?)か。器色は外面黄灰色を呈する。焼成は軟質である。底部径10cmを測る。

05509は、須恵器壺か。外面に原体による刺突文を2段にめぐらす。器色は淡灰色である。

05517は、須恵器的に処理された口縁形態を有する七師器壺である。口縁部内外面はヨコナデで、胴部外面に擬格子タタキを加え、この後にヨコナデを施す。内面は平行のアテ貝痕が残る。器色は暗褐色である。口径23.4cm、残存器高9.6cmを測る。

15. S群25号墳 (Fig. 87・89, Pl. 27)

S25号墳は、S4号墳の西側に位置する小形の円墳である。

周溝はかなり不整な形で、北側と南側を失う。また、内部主体の石室が想定される部位には床面敷石の一端と考えられる角礫が散在していた。

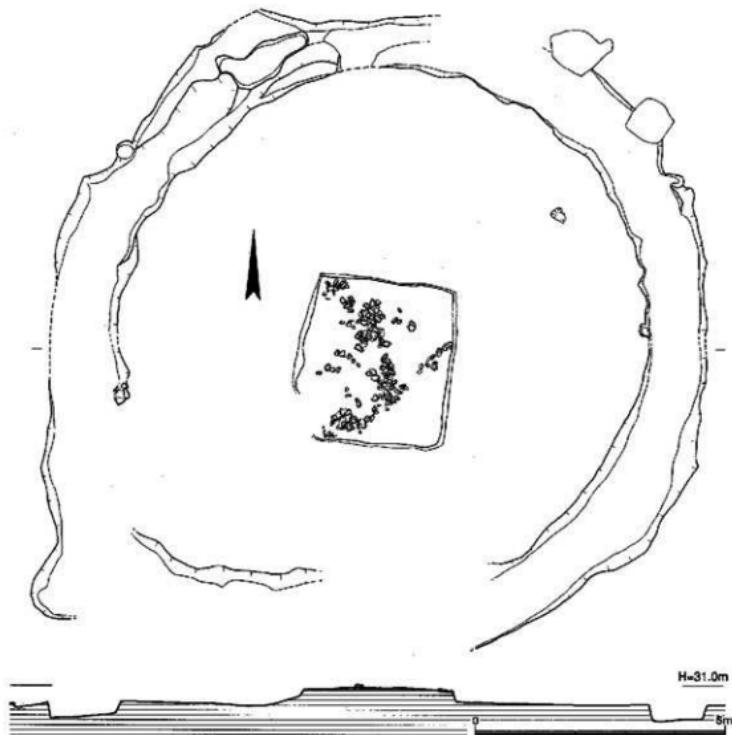


Fig. 87 吉武S群25号墳出土状況実測図(1/100)

① 周溝 (Fig. 87)

周溝は、外径で東西13m、南北でも13.1~13.5mを測る規模となる。幅員は、東側1.2m、西側1.6m、北側1m程度、南側1.2m程度を測り、南側では辺縁が円弧をなさず、直線的に掘削されている場所も見られる。また、深さは全体的に0.2~0.3mを測る浅いものである。

② 内部主体 (Fig. 87)

S25号墳の内部主体は、石室であったと考えられるが、腰石を埋置する掘り方や連続するピット群も完全に地下げされて残ってはいなかったが、周溝内中心部に南北3.3m、東西2.5mの範囲に扁平な角礫が塊状に残っている部分が確認できることからこの部分が石室床面の敷石であると想定できる。しかしながら石室規模については明らかにできない。

③ 出土遺物 (Fig. 88, Pl. 53)

05018は、周溝内出土の赤色軟質土器蓋である。天井部を欠失する。

外面口縁部と天井部との境は明瞭な高い突帯で区別され段が付く。また、口縁端部は急激に器壁が薄くなり、外側に聞く。一部に残る天井部も上部にしたがって器壁が薄くなる。天井部は横方向のケズリが見られる。

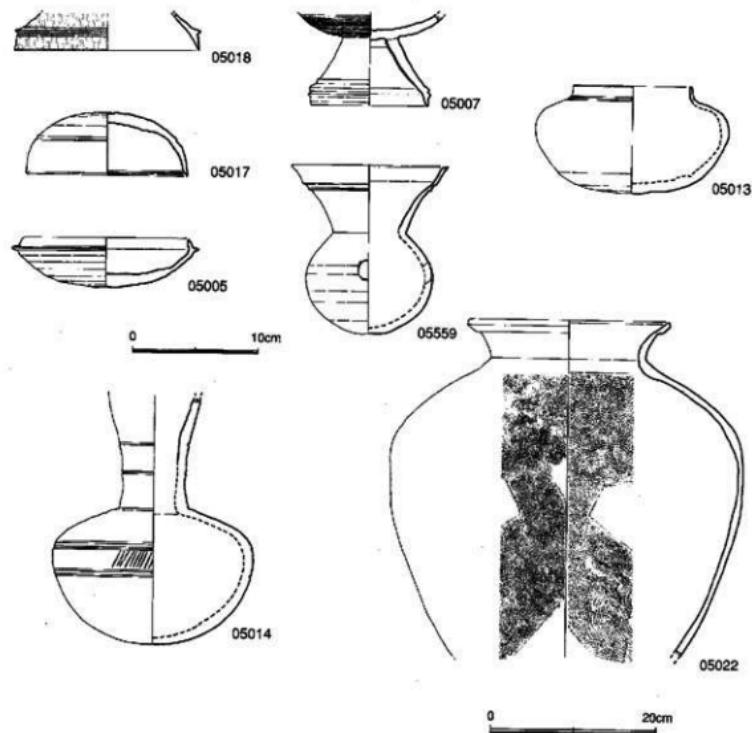


Fig. 88 吉武S群25号墳出土土器実測図(1/4・1/6)

器色は、外面が暗赤紫色で、内面赤褐色を呈する。そして外面には赤色顔料が塗布されている。口径14.8cm、残存器高2.9cm以上を測る。

05017は、周溝内出土の須恵器杯蓋である。丸い天井部と長い口縁部が特徴的製品である。口縁部と天井部との境はほぼ器高の中位のところにあり、沈線状の低い段をなしていない。天井部へラ削りはほぼ1/2程度である。他の内外面はヨコナデ調整を施すが天井部内側に一部アテ具痕が残る。また、口縁内端部は小さく窪んで段をなす。器色は内外面ともに淡灰色を呈する。口径13.6cm、器高5cmを測る。

05005は、周溝南側出土の須恵器杯身である。非常に立ち上がりが低く、高さ1cmに満たない。底部のヘラ削りは殆ど全面に及んでいる。他はヨコナデで、内底部はこの後ナデを行う。外面は灰かぶりである。内面は紫灰色を呈する。生地はセピア色を呈する。口径13.2cm、器高3.9cmを測る。

05007は、周溝南側で出土した須恵器高杯である。脚部は短く、裾部は2条突帯をめぐらし、やや直立する。長方形透かしを三方に開ける。杯部は上部を欠失する。杯底部付近は細かいカキ目調整を施しており、外底にはヘラ削りを加える。器色は、外面が淡灰～明灰色である。脚部径9.2cm、残存器高7.6cmを測る。

05559は、周溝内出土の須恵器ハソウである。頸部がやや絞った形態で、口縁端部は段をなす。内面および肩部は灰かぶりで、内面は自然釉となっている。胴部の中位以下は丁寧なヘラ削りを加える。また、外底部は不定方向のナデを施す。

器色は、外面の殆どが漆黒色で光沢を放ち、底部は焼きが悪く褐色を呈する。口径12.5cm、器高13.5cmを測る。

05013は、周溝内出土の須恵器直口壺である。肩の張る胴部にほぼ直立する短い口縁部を付する。底部付近にロクロ時計回りのヘラ削りを加える。底部は生焼けで、灰白色を呈する。他の器色は、淡灰色である。胎土は密で、焼成はやや軟質である。口径9.5cm、器高8.6cmを測る。

05014は、口縁部を欠く長頸壺である。内面の一部に灰かぶり。半球状の胴部に細い円筒状の頸部を付す。口縁部は径を増して広がっていく。胴部最大径付近には2条単位の沈線文を上下2ヶ所にめぐらし、この間を斜め方向の原体刺突文で埋めている。また、口縁部にも上下に2条の沈線文をめぐらしている。胴部下半にはヘラ削りを加える。器色は、淡灰色を呈する。頸部径5.6cm、胴部最大径16cm、器高19.8cm以上である。

05022は、周溝出土の須恵器壺である。やや肩の張る尖った胴部に短い外開する口縁部を付する。肩部および内面の一部に灰かぶりが見られる。

口縁部は、端部が平たい板状の断面をなし、内外面ともにヨコナデを施している。器面調査は、外面が細かい平行な櫛格子タタキを斜めに施した後、横方向のカキ目をめぐらせる。内面は直径が5cm程のアテ具痕が明瞭に残っている。

器色は、内外面ともに淡灰色を呈する。口径24cm、残存器高40.2cmを測る。

(装身具) (Fig. 89)

周溝内出土のガラス丸玉である。コバルトブルー色を呈する。径は7～8mmの長円形である。厚さは6mm程度である。



0 1cm

Fig. 89 吉武S群25号墳出土装身具
実測図(1/1)

16. S群26号墳 (Fig. 90・91、
Pl. 27)

S26号墳は、S25号の西側に隣接して造営された小円墳である。M・N地区の中でも切り合いを持たない独立した古墳である。

周溝は、北東側と南西側が直線的な外縁となり、他がやや長い円弧を描く形態となっており、北東側に幅1m程の陸橋が付くようである。

また、内部主体と考えられる石室はその痕跡が全く残されていない。周溝内に若干の扁平な角礫が落ち込んでいるのが確認できることからこれらが石室内の床面敷石材であった可能性が考えられる。

古墳の造営時期を示す土器類は、土器器を主に、須恵器少量が出土した。

① 周溝 (Fig. 90)

S26号墳の周溝は、南北9m、東西9.5m前後を測り、北東側に入出入口の障機が認められる。幅員は北側0.8m前後、南側1m程度、東側1.2m前後、西側0.8m程度とかなり幅狭いものである。

また、深さは0.2m程度と非常に浅いものである。

次に、周溝陸橋部には長・幅が2.65×0.5m規模の土壙墓SX02や周溝北西側の内壁に沿うように配置された上壙墓SX01などがあり、これらはS26号墳の石室の存在を意識して、配置されたと考えることができよう。これらは何れも頭部を南に向けて埋葬されており、副葬にも滑石製勾玉・小玉・平玉などを主とする玉類を数多く付けており、S26号墳の被葬者との関連が想定される。

② 内部主体

S26号墳の内部主体は、小形の石室と考えられるが存在を積極的に示す遺構は残っていない。

③ 出土遺物 (Fig. 91, Pl. 54)

05026は、周溝内出土の須恵器ジョッキ形上器である。口縁部及び把手を残さない。

内面は灰かぶりである。口縁下に1条の低く、頂部の丸い突起と底部端より2cm程上がった位置に低い、頂部が平坦な突起1条をめぐらす。

器面調整は、内外面ともに丁寧なヨコナデで、底部の外端には手持ちのヘラ削りを施している。器色は、外面黒灰色で、内面淡灰色を呈する。胎上は密で、焼成は堅緻である。底部径の復元値6cm、残存高5.1cmを測る。

05025は、周溝内出土の上師器高杯である。マリ形の杯部と中空の脚部からなる高杯である。

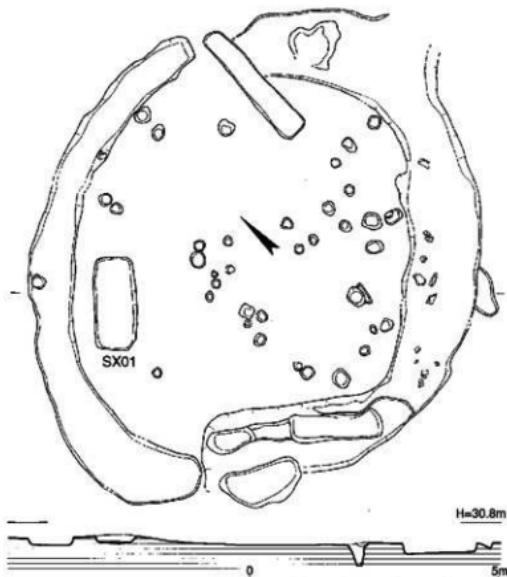


Fig. 90 吉武S群26号墳出土状況実測図(1/100)

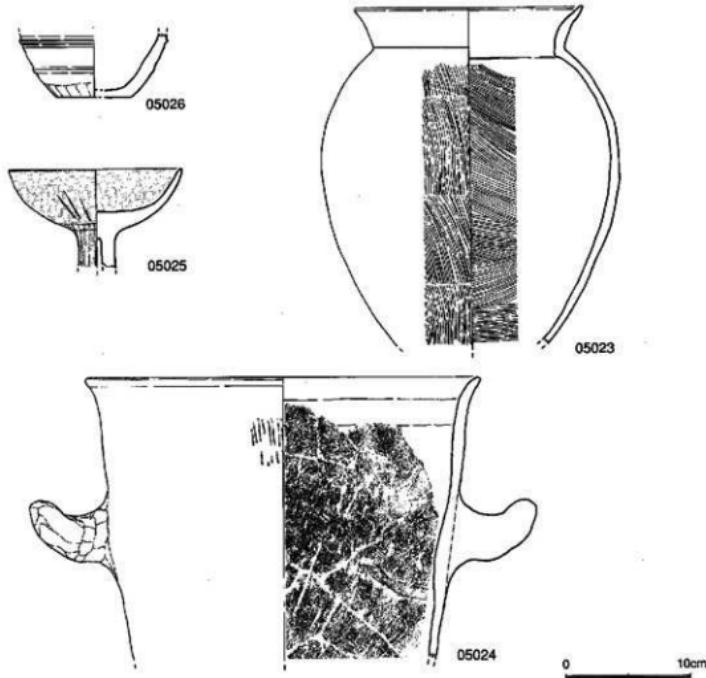


Fig. 91 吉武S群26号墳出土土器実測図(1/4)

器面調整は、杯下端から脚部にかけては縦方向のヘラ削りを施し、杯部内外面は丁寧な横方向のヘラミガキである。内外面ともに赤色顔料を塗布する。

05023は、周溝内から出土した口縁部の良く絞った長胴の壺である。口縁部は外開して、端部では内面中央がやや陥り、跳ね上げ状となる。全体に器壁の薄い製品である。

器面調整は、口縁部は内外面ともに丁寧なヨコナデで、脚部は外面が荒い縦ハケメ、内面が細かい斜めハケメが残る。肩部に焼成時の黒斑がある。

器色は、外面暗褐色で、内面淡褐色を呈する。胎土は砂質で粗、焼成はやや軟質である。口径18.2cm、残存器高26.9cmを測る。

05024は、周溝内出土の土師器壺である。大型の器である。底部を欠く大破片である。全体に器壁は薄く、口縁部は端部付近で緩く外開する。胴部把手はしっかりしたつくりで、牛角状にのし上がる。

器面調整は、外面に一部荒いタテハケメ調整が残る。また、内面は底部方向からケズリ挙げるヘラ削りが頗著である。胎土粗で、焼成もやや軟質である。口径31cm、残存器高22.6cmを測る。

17. 吉武S群27号墳 (Fig. 92~105, Pl. 34~38)

1. 検出状況

27・28号墳はS群の北西部、NL-14グリッドに位置する (Fig. 3)。2~26号墳の、南西部稜線上の主群との間には小谷が開析しており、29号墳と3基でこれらとは別の支群をなしている。

27・28号墳は9次調査の幅3mの2号排水路工事部西部(1区)で東西方向に並列して標高30mの水田下で検出された (Fig. 4)。凹墳の周溝北側のみが調査区にかかる状態であった。便宜上、東を1号墳(27号墳)、西を2号墳(28号墳)として取り扱った。

27号墳は調査区南端に主体部の一部が確認されたため、地元地権者・施工者の了解を得て石室主体部のみ調査区を拡張し、調査を実施している。

2. 墳丘の形状と規模 (Fig. 92)

27・28号墳とも、水田の開墾時に墳丘・石室主体部とともに削平され、水田下に埋もれ現況では全く痕跡を残さない状態であった。

27号墳は南南西に開口する单室両袖の横穴式石室を主体とする円墳と考えられる。調査区にかかつたのは古墳の北側4割程で、幅3m程の溝が北側に円弧を描いている。これから推定すると、周溝外径で径14.5m、周溝底からの墳丘の径約11mの円墳と考えられる。周溝の東部は一段高く、一部が1.5m程三角形に突出しており、陸橋部にあたる可能性が考えられる。周溝の上には、この周溝の深みを利用して東西方向の中世の溝が掘削され、西端には石組みが設けられている。墳丘盛土は全く残っていない。

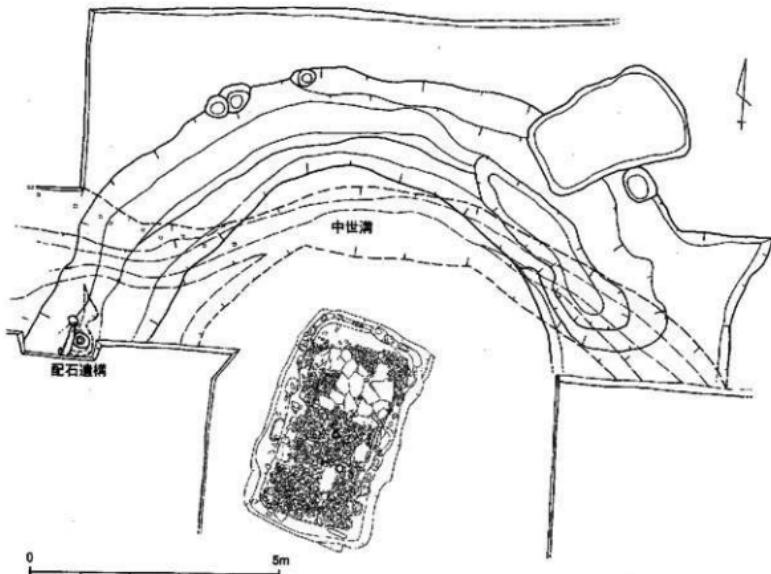


Fig. 92 吉武S群27号墳出土状況実測図(1/100)

3. 埋葬施設 (Fig. 93)

主体部は主軸をN-16°-Eにとり南南西に開口する単室両袖形の横穴式石室と思われる。残存状況は極めて悪く、水田開墾時の削平で石室腰石まで全て撤去され、玄室床面の敷石と石室掘方が残るのみである。

石室実測図を紛失しているため、平面図のみ、当時の発掘調査現地説明会のパンフレットより書き起こし、出土遺物の位置は出土状況の写真で可能な限り照合した。

場所は4.6×2.7mの長方形プランで、幅30cm程の溝を壁に沿ってめぐらし中に腰石を据えている。

石室は南側短辺の両側に一石ずつの石の抜き跡と、その間に0.8m程の空間があり、羨道部分と考えられ、また、羨道部分の掘り込みが無いため、羨道が一段高く、短く「ハ」字形に開く堅穴系横口式石室か古式の横穴式石室の可能性が高い。

玄室は床面と腰石の抜き跡から推定すると側壁長3.95m、奥壁側で幅1.96m、玄門側で幅1.8mと奥が若干広い。

腰石の抜き跡が多数であるため、奥壁を含めて、幅50cm程の小振りな石数個で一面の壁体を構築していた様である。

床面には5cm前後の円礫を敷き詰め、奥壁手前の1.7×1.3m程の横長の範囲には30cm程の扁平な角閃石の板石を敷き屍床をつくりだしている。

遺物の残存状況は比較的良好で、屍床の東部で玉類が検出され、頭位を思わせる。屍床の南東隅外側には斧・鎌・鐵等の鉄器が床直上で集中して検出される。殊に2セットずつの台形鋸造鉄斧と鎌の副葬は半島伽耶地方の葬制との関連を強く感じさせる。屍床を除いた床中央部の東西方向に、床から10cm程浮いて、一列に並ぶように須恵器の蓋と身が交互に検出されている。

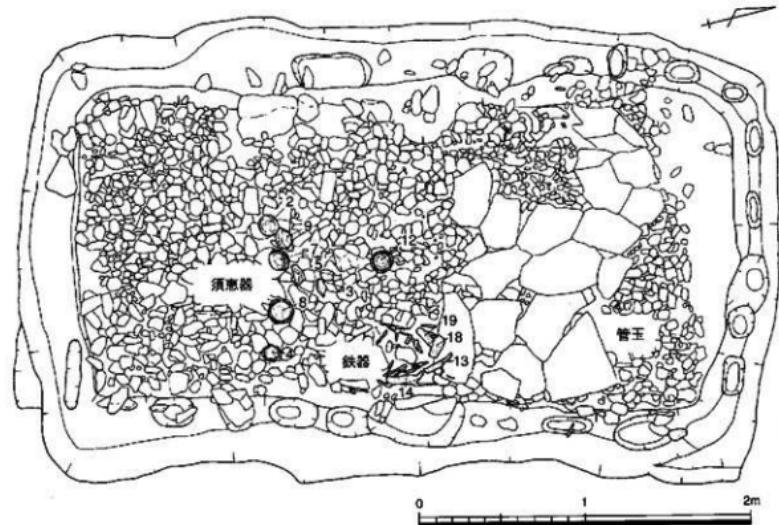


Fig. 93 吉武S群27号墳副葬遺物出土状況実測図 (1/30)

4. 周溝 (Fig. 92・99)

周溝は円周の北側の4割程が検出されている。幅2.2m～3.6mで東側が広くなる。円弧から推定すると外周で径14.5m内周で8.5mを計る。東部は溝が2段となり、また外側に1.5×2.3m程の三角形に一段高い突出部があり、墓道陸橋部の可能性が考えられる。溝の深さは状況写真からすると(PL. 29-4)、60～70cm程の深さで断面は幅広い底面の船底形となっている。遺物は須恵器を中心に、溝の北東部と北西部で破碎された状況で底から10～20cm浮いた状態で検出され、大甕は掘えられた状態で、高壺形器台は破碎されて東西2箇所に分離されて検出された。

5. 出土遺物 (Fig. 94～105)

① 石室内出土遺物 (Fig. 94～98)

土器 (Fig. 94) 1～6は須恵器坏蓋で、体部との境は段もしくは沈線となり、口縁内面の段は小さいか沈線と化している。天井部の回転削りは二分の一前後なされる。2・4・5・6は左回転、1・3・7は右回転である。口径と色調は1が14.8cm青灰色、2が13.9cm青灰色、3が15.2cm青灰～灰白色、4が12.4cm青灰～暗青灰色、天井に3×6本の格子目ヘラ記号があり、内面にヘラ削りの当具痕が残る。5は14.4cm青灰～暗青灰色、天井にヘラ記号がある。6は12.8cm青灰～灰色、7は13.5cm青灰～暗青灰色を呈する。

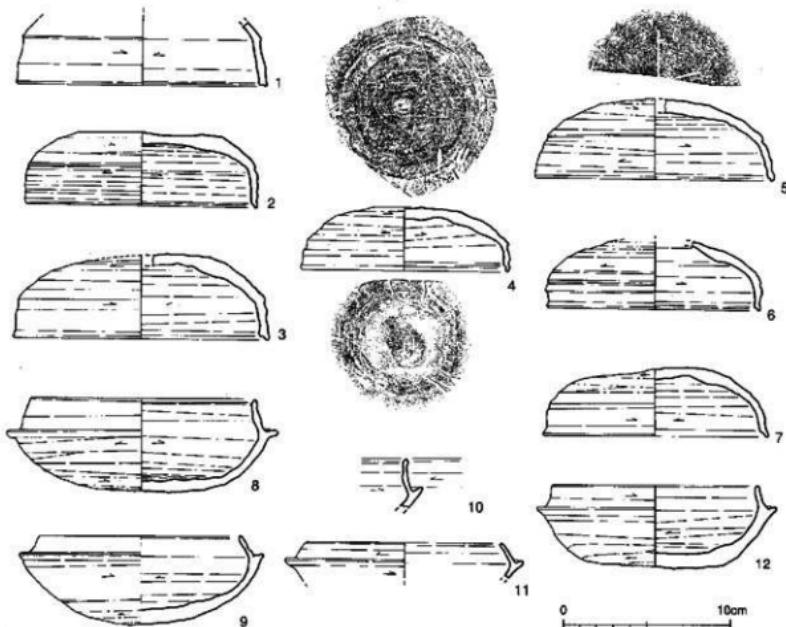


Fig. 94 吉武S群27号墳出土土器実測図(1/3)

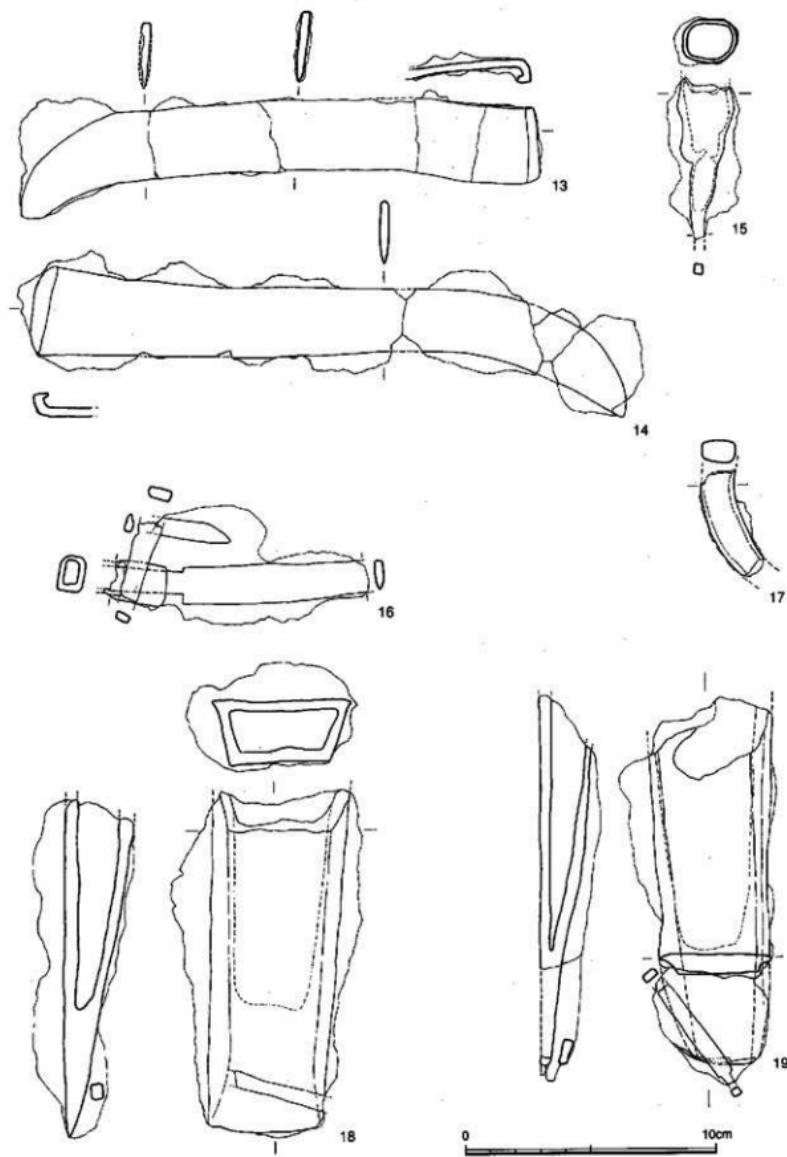


Fig. 95 吉武S群27号填出土铁器实测图(1) (1/2)

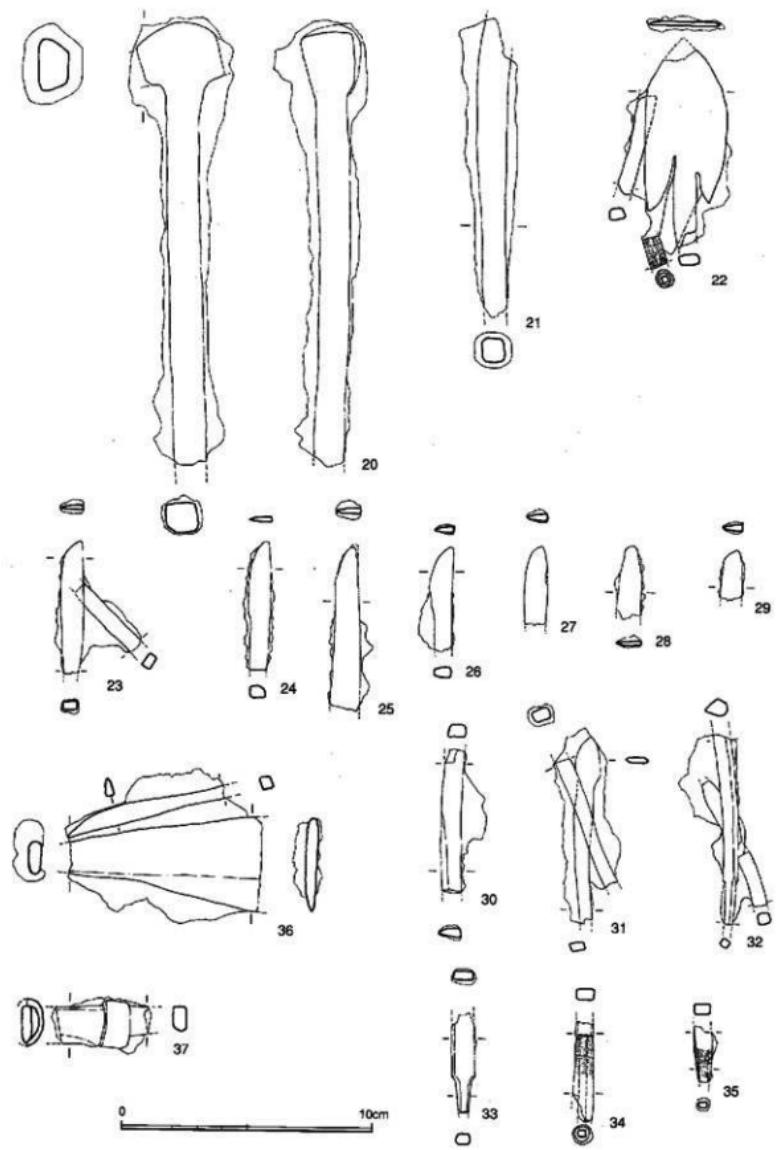


Fig. 96 吉武S群27号墳出土鉄器実測図(2)(1/2)

8~12は須恵器坏身で、口縁内面の段の小さい8・10と丸く收める9・11・12がある。体部の回転削りは二分の一前後なされる。8・10は左回転、9・11・12は右回転である。受部径と色調は8が16.2cm明青灰~青灰色で外面体部に自然釉が掛かり受部に重ね焼き痕がある。9は14.5cm青灰色で焼きが甘い。10は明青灰~青灰色で体部外面が灰を被る。11は14.2cmで青灰色、12は14.3cmで暗青灰~青灰色を呈する。皆Ⅲ△期の特徴を示す。

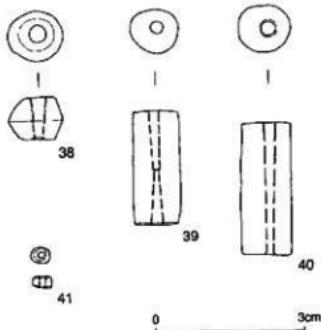


Fig. 97 吉武S群27号墳出土装身具実測図(1/1)

鉄器 (Fig. 95・96) 13・14は大型の曲刃鎌で、13は全長20.7cm刃渡り15cm刃幅2.8cm刃厚3.5mmを計る。右端の基部を幅1cm程矩形に折り曲げる。木質等の着柄痕はない。14は全長23.8cmで刃渡り19.5cm刃幅2.8cm刃厚3.5mmで、一回り大きい。逆に左端の基部を幅1cm程矩形に折り曲げる。同じく木質等の着柄痕はない。15は外見は径22mmの袋部を持つ石突き状を呈するが、基部は4mm角の茎となっており、棒状の先端に取り付けるソケットと考えられる。鉄器の断面及び外形は埋蔵文化財センターの透過X線画像より起こしている。16は刀子に鎌が銛着したもので残存長10.5cm刃幅1.5cmでが残る。17は断面9×13mmの円環状の一部で径14~

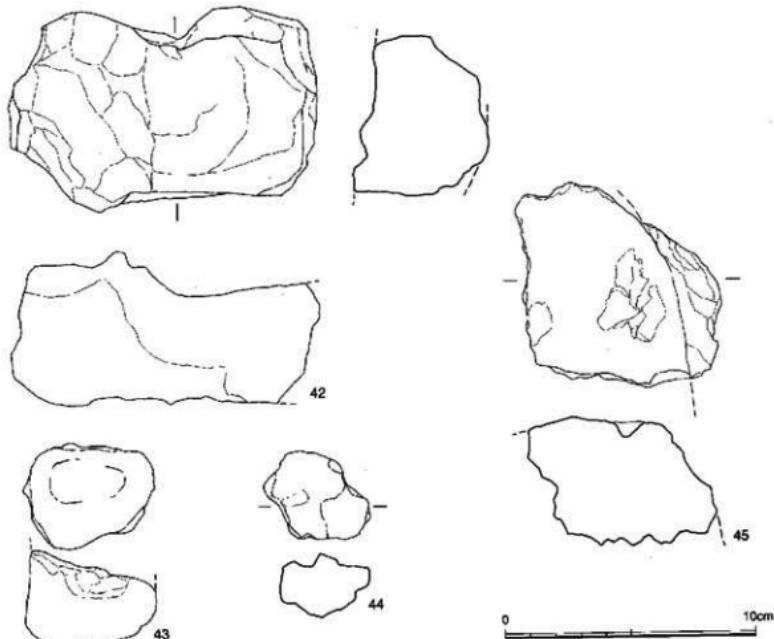


Fig. 98 吉武S群27号墳出土鉄津実測図(1/2)

15cm程で輪縁の可能性がある。18・19は断面台形の鋳造鉄斧で、18は残存長13.3cm刃幅4.5cm基部で長辺幅5.5短辺幅4厚2.7cmを計る。断面の長辺両側は縁取り状に2~3mm張り出しており長方形の鐵板に箱部分を鋲掛けた様な形状になっている。刃部には鍛革が銹着している。19も同型で残存長14.7cm刃幅3.5cm基部で長辺幅5短辺幅3.6厚2cmを計り、18より一回り小振りである。同じく刃部には鍛革が銹着している。20は「T」字状を呈する大型品で残存長18cm棒状部は13×16mmの断面方形、頭部は背厚20mm幅25mmの台形、側面は長32mmで脛が張る。21は9×9~12×12mmの断面方形の棒状品で20に接合する可能性がある。22は大型の儀器化された有翼の平根鐵で残存長8cm身幅3.2cm身厚2mmの扁平な造りである。頭部・茎片が銹着する。23~35は尖根鐵で最低10木は確認される。出土状況では全長15~16cm残っている。31の柳葉形以外は片刃鐵で、身長2.7~5cm身幅8~10mm背厚2~3mm、頭部断面は3.5~5×5~8mm、茎断面は3~5.5×3~4.5mmの方形で境に小さな闇を持つ。22~34には矢柄が残り径7~8mmを計る。22~35には模皮が、34には糸巻痕が残る。36は刀残片では幅3.7cm背厚5mmを計り、13×5mmの茎の間に闇は無い。片刃鐵が銹着している。37は刀子残片で、刃幅3.5cm背厚3.5mmを計る。19×12mmのハバキが残る。

玉類(Fig. 97) 38は水晶算盤玉で径9.7~10mm長8mm、片方から径1.8~1.5mmの孔を穿孔する。重量1.04g。39・40は碧玉製の管玉で、39は径9.1~9.3長23mmで上面から径1.9mmの穿孔を行う。色調は濃緑色で不透明。40は径9.5~9.6mm長26.4mm、片方から径2.6~0.8mmの孔を穿孔する。重量4.73g。色調は同様。41はガラス小玉で、径3~3.4長2.3mmを計る。色調は群青色で透明。

鉄滓(Fig. 98) 42は炉底滓で12.5×8cm重量107gを計る。色調は茶褐色~黒褐色。表面は小気泡を発しがさつく。半分程銹が覆う。裏面は中程度の気泡が多く木炭痕が少量ある。半分程銹が覆う。メタルに若干反応する。43は含鉄鉄滓で残存長3.8mm重量55gを計る。暗灰~黄褐色を呈し、小気泡が多く四分の三を銹が覆う。メタルが多く残存する。44はガラス質滓で3.65×4.2cm重量18gを計る。色調は暗灰~黒褐色で気泡が多く全体がガラス化している。片面に焼上・石英粒が多く付着する45は隅角の炉底滓。8.2×8.2cm重量302gを計る。色調は茶褐色~黒褐色。表面は凹凸が著しく気泡・木炭痕を多く含む。裏面は石英粒・炉底粘土が多く付着する。メタルに若干反応する。

②周溝出土土器(Fig. 100~105)

須恵器(Fig. 100~103) 1は高坏蓋で、鉗状の摘みを持ち体部との境の稜は突帯状に高く張る。大井部は丁寧に回転ケズリを施し体部にはカキメを施して全体にナデ調整を施す。口径12.4cm。色調は青灰~暗灰色。2は短頸壺の蓋で、小杯状の摘みをつける。口径13.1器高7.4cmで天井部が高い。体部との境には沈線を施し、口縁内面は浅い段をなす。色調明青灰~暗灰色。内面に灰を被る。3は不蓋で口径14cm。体部との境には沈線を施し、口縁内面は沈線と化している。内面に当具痕が残る。色調は青灰色。4~8は有蓋高坏で、4~7は池の上墳墓群出土土器に似て陶質土器の器形を強く残している。1の蓋同様稜は高く張り、体部は深く、丁寧に回転ケズリを施し脚際にはカキメを施して全体にナデ調整を施す。5・6の脚には低い三角突帯と幅1cm弱の細い方形透かしを5には3箇所、6には4箇所刀子で両側を切り抜き上端は折り取っている。7はこれらより一時期新しく、体部は低く脚の三角突帯は省略される。焼成は甘く瓦質である。8は須恵器の高坏で、受け部は内傾して端部は面取りする。それぞれ受け部と色調は4が14cmで明灰~暗灰断面紫灰色、5は13.8cmで受け部は灰色以下は暗灰色で蓋を被せて焼成している。断面紫灰色。6は14cmで受け部は明青灰以下は暗灰色で同じく蓋を被せて焼成している。7は14cmで外面灰黒内面灰黄色。8は15.6cmで灰~暗灰断面紫灰色。9は取手付の壺で、体部の後間に櫛描波状文を施す。底面は取手方向に手持ちヘラケズリを施す。口径11cm色調明青灰~灰色。内面が灰を被る。10は口径14.6cmの小型の壺で、薄ぐ端

正な口縁に、2条の三角突帯間に櫛描波状文を施す。胸中央にはカキメを施す。色調は青灰～灰色。内面が灰を被る。11は横瓶の体部で径16cm。外面は平行叩き後緩くナデる。焼成時には側面を下にしたため窓壁が付着する。12・13は高坏形器台で、12は口径37.6器高36.2cmを計る。口唇は肥厚して2条の凹線を施し、比較的浅い体部の2条単位の三角突帯間に上下2段の櫛描波状文を施す。底面には縦位から斜位の平行叩きを施し脚際には櫛歯列点文を施す。脚に2条単位の三角突帯を4段施し、その間に三角透かしを6箇所交互に設けこの上下と、口縁下脚端に櫛描波状文を施す。日徳寺古墳出土のものに近い。色調明青灰～暗青灰色。断面紫灰色。体部内面は底面の径10cm以外は灰を被っており、小品を重ね焼きしている。13は島田系の強い器形で、全体的に器壁は薄く、端正なつくりである。端部に沈線を施し短く屈曲する口縁部に深い体部が連なる。「コ」字突帯下の4段の間に櫛描波状文を施し、最下段にはヘラ書きの複線山形文を施している。口径33cm、色調は明灰～暗灰色。山隈塚・池の上墳墓群に類品がある。

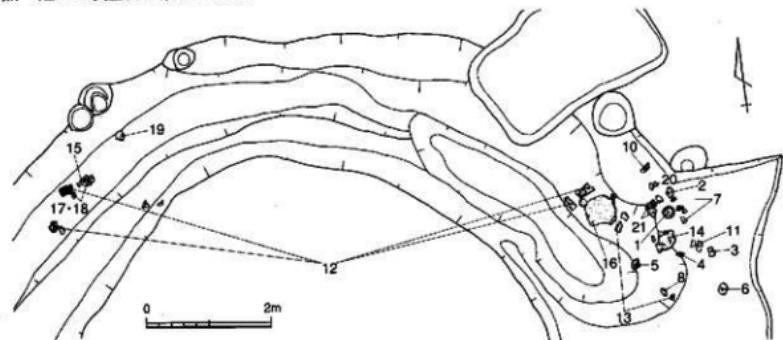


Fig. 99 吉武S群27号墳周溝内土器出土状況実測図(1/80)

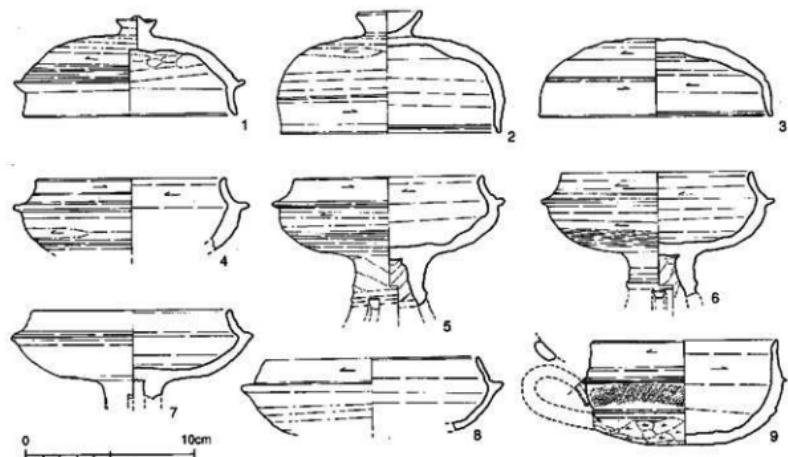


Fig. 100 吉武S群27号墳周溝内土器実測図(1)(1/3)

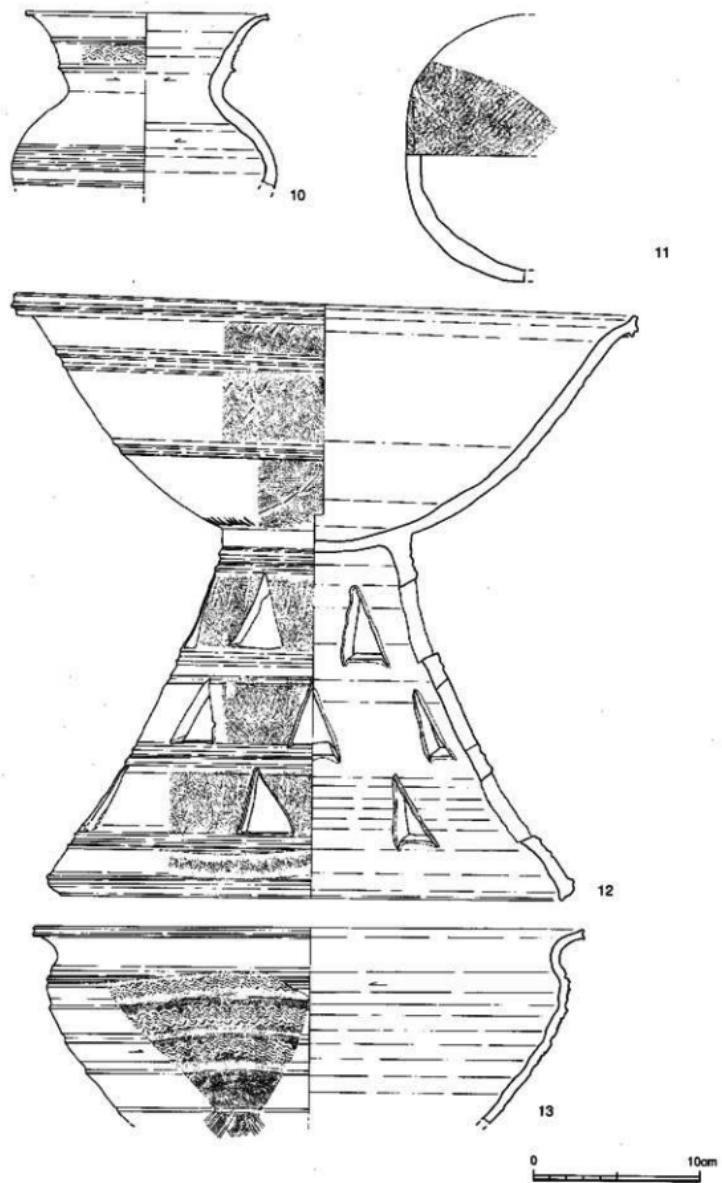


Fig. 101 吉武S群27号墳周溝内土器実測図(2) (1/3)

14～16は大・中・小それぞれの壺で、14は口径20.6胸径33.4器高35.5cmを計る。口縁は肥厚してゆるい玉縁状をなし、肩はやや肩が張る球形を呈する。胸外面上位は縦位の、中位はやや斜位の、下位は斜位の格子目叩きを施し内面の同心円当具痕の方向の変化もこれに対応しており、3段階に分け作製している。肩上位にはカキメを施す。底部には径5cm程の孔を並設して内面から穿っており、接合する破片が無い事から、他所で穿した後使用されている。色調は灰白を呈し、焼成は甘い。15は口径15.2胸径25.8器高23.5cmを計る。口縁は上端は肥厚してゆるい玉縁状をなし、下端は鋭利に作られる。頸部には1条の低い三角突帯を設け以下に櫛描波状文を施す。肩との境には小さな沈線を1条施す。口縁外面には丹の泥漿を塗布して黒く発色させている。肩は中位が張る偏球形を呈する。胸外面には縦位の木目直交平行叩きを施し上から三分の一程に1.5cm幅程のカキメを4条施す。内面は同心円当具痕を丁寧にナデ消している。16は口径34胸径64.5器高72.5cmを計る。口縁外面は肥厚して屈曲し各面に浅い凹線を施す。頸部外面にはカキメを施し、15同様泥漿を塗り黒く発色させる。胸部は強く肩が張り、外面には縦位の木目直交平行叩き後、全面にカキメを施す。内面の同心円当具痕は3段に渡り、14同様である。底部は14×20cmの円形に打ち欠いており、同じく接合する破片は無い。

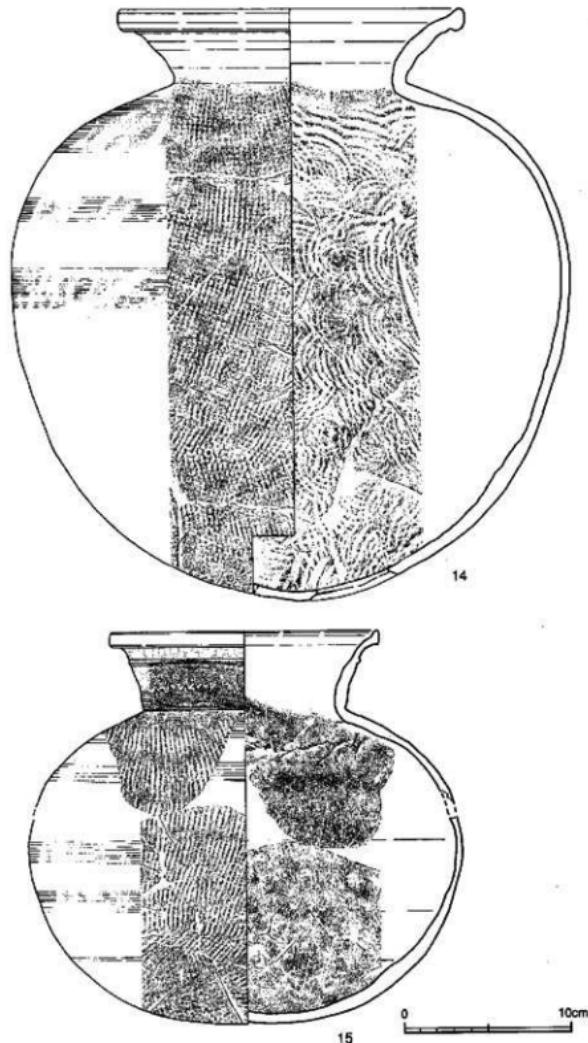


Fig. 102 吉武S群27号墳周溝内土器実測図(3)(1/3)

土師器 (Fig. 104) 17~20は高壺で、17は口径17.4器高13.5cmを計る。体部は三分の一程で屈曲して緩い段をなす。外面はナナメハケ後丁寧なナデ、内面はヨコハケ後研磨を施す。脚端は若干上方に外反する。色調は淡黄褐色を呈する。18は口径18.4器高12.6cmを計る。体部は口縁が緩く外反し屈曲部の段は沈線化している。短い脚は緩く張り、脚端は外方に直線的にのびる。色調は淡黄褐色を呈する。19は口径16.2cmの体部で、口縁は緩く外反し屈曲部は段をなしている。器壁は厚め。色調は淡赤褐色を呈する。20は黒色土器で脚のみが残る。直線的に広がり脚端は短く外方に屈曲する。径10.4cmで小さい。21は短頸・平底の特異な形態の甕で口径17胴径22.7復元器高28cmを計る。胴外面は上位は斜位に、以下に縦位に近い平行叩きを施し、内面は左上がりのケズリ後丁寧にナデる。一部

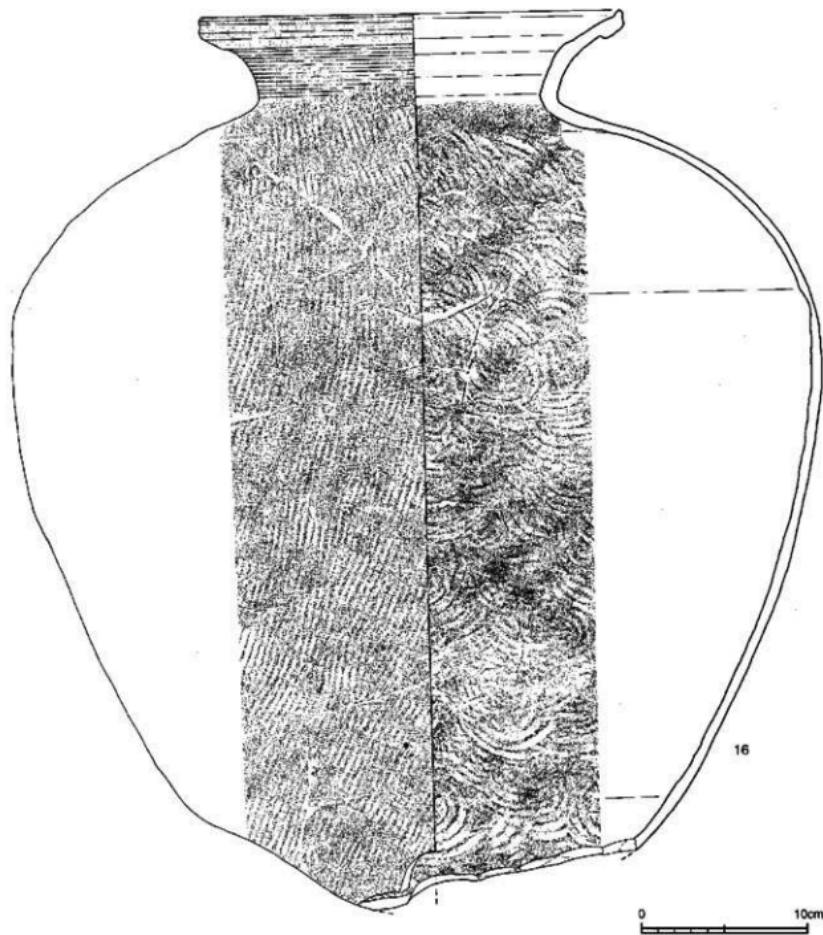


Fig. 103 吉武S群27号墳周溝内土器実測図(4)(1/3)

に鼠の咬痕跡が見られる。頸部下に径7mmの焼成前の円孔を穿ち、孔上位に紐ずれが認められるため、釣瓶として使用された可能性がある。

③検出時出土土器 (Fig. 105)

1は須恵器筒形器台で、脚下部の大半を欠くが口縁口径16.3残存長32.2cmを計る。口縁下に1条下位に2条単位の低い三角突帯を施し、頸部に径12mmの円孔を4箇所施す。胴部は径8.3～9.2cmと中位がやや膨らみ、2条単位の三角突帯を6段施しこの間に幅1cm前後の方形透かしを6箇所6段施す。脚部は突帯状の段を設けてラッパ状に広がり、1段目に方形と三角透かしを交互に8箇所穿孔する。口縁から脚までの空間には1～2段の櫛描波状文を施す。上位に自然釉が掛かり暗緑灰～灰色を呈する。貝徳寺古墳に類品がある。2は取手付の有蓋高杯で口径15.6cm。2条の突帯間に櫛描波状文を施す。体部下位には丁寧な回転ヘラケズリを施しナデる。脚には4箇所の方形透かしを施す。薄い端正な造作である。3は土師器の壺で、口径22.6cm。胴外面はタテハケ、内面はヨコ・ナナメハケ後綴いヨコナデを施す。色調は黄灰～暗灰褐色を呈する。

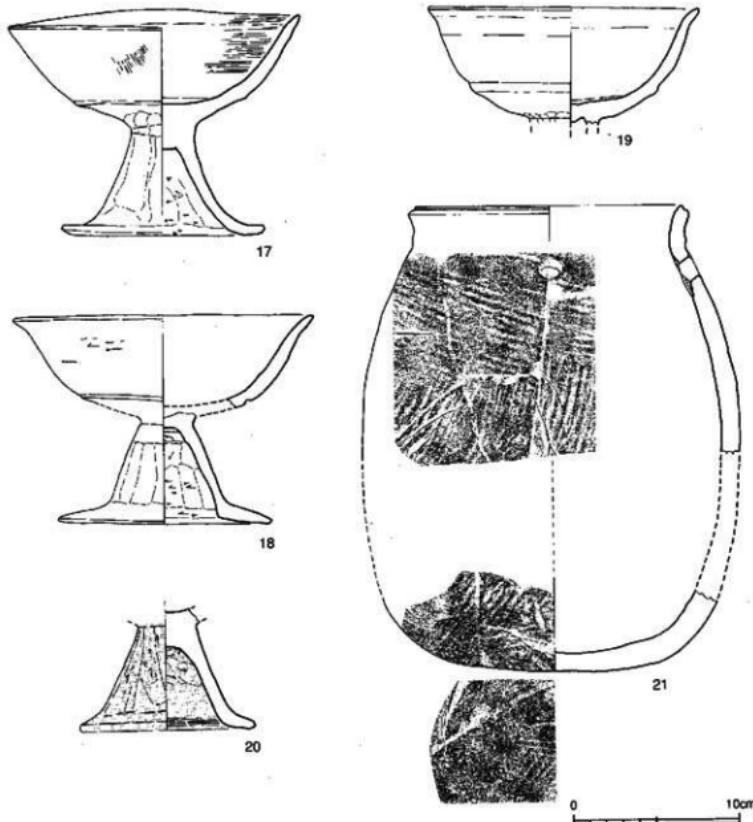


Fig. 104 吉武S群27号墳周溝内土器実測図(5)(1/3)

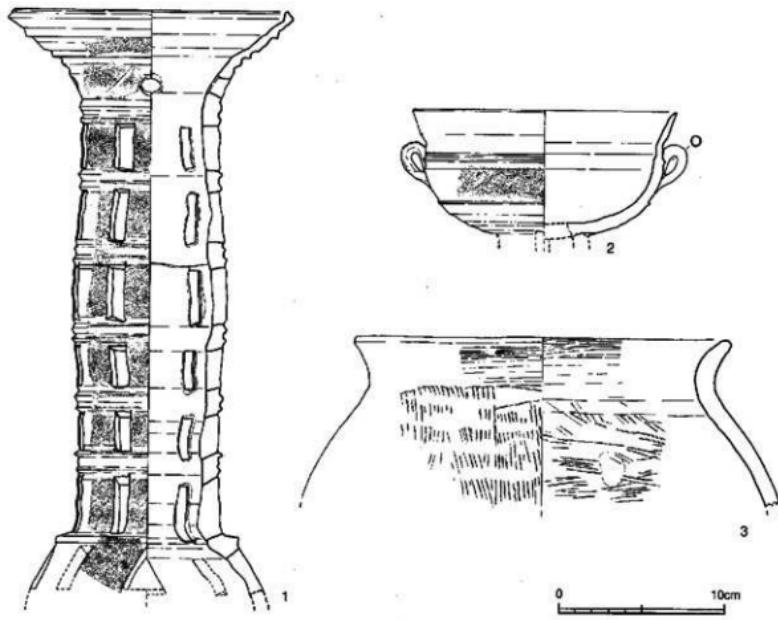


Fig. 105 吉武S群27号墳検出時土器実測図(1/3)

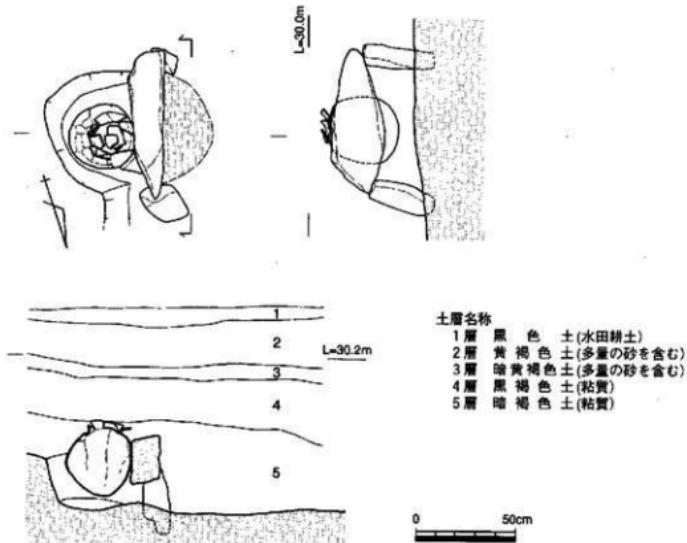


Fig. 106 吉武N14地区 1号配石追構出土状況実測図(1/25)

以上石室内はⅢA期が、周溝内資料はIA期以前の半島色の強い池の上墳墓群同期からIA期・IB期・II期・ⅢA期の少なくとも5時期の資料が確認される。石室内からⅢA期以前の土器は検出されない事から、追葬の度に以前の副葬品を石室内から取り出している可能性がある。

6. 配石遺構

配石遺構は西部の周溝上で検出された (Fig. 92)。東側を半径30cm程半円形に掘くぼめ、この前面に幅10cm前後長さ30cm程の亜角縫を10cmほど埋め込んで2石立て、上に長さ70cmの同亜角縫を架構している (Fig. 106)。この間から径29cmの赤焼きの壺の完形品と下から脚端を打ち欠いて支脚に転用した土師器高杯が検出された。半円形土壙と架構した石の内面は赤く焼け、前面に焼土と炭粒が円形に広がる。

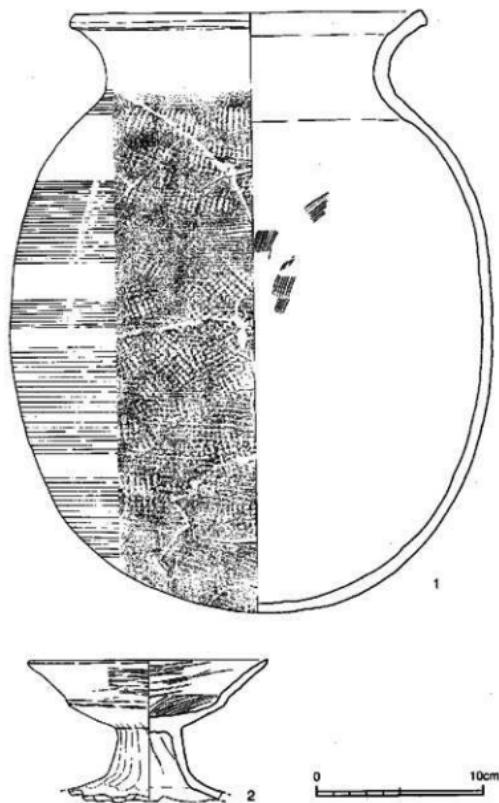


Fig. 107 吉武N14地区 1号配石遺構出土土器実測図(1/3)

土器も著しい火熱を受けており、堅穴住居に伴う壺の可能性が極めて高い。

出土土器 (Fig. 107) 1は赤焼き土器の完形の壺で、口径31.3胴径29器高36cmを計り、締まった頸部からやや長脛の球形の胴部がなだらかに連なる。胴部外面には木目直交の平行叩きを施し櫛格子状を呈している。更に全体の7割程にカキメを施す。内面には細かな平行弧の当具痕が残り、これを研磨に近い丁寧なナデで消している。器壁は比較的薄い。胴下半の三分の一程は直火により赤火し器壁があれ、頸部までは煤の付着で暗色を呈する。色調は暗灰～赤燈色を呈する。2は支脚に転用した土師器の高杯で、上下を反転して用いている。口径13.4残存高8.4cmを計る。体部はやや浅く、脣曲部に浅い沈線が途切れながらめぐる。体部には研磨を施し内面下半は暗文で溝状に施文する。脚端は全周を打ち欠いている。

周溝埋没後に設けられており、ⅢB期以降の時期が考えられる。

18. 吉武S群28号墳 (Fig. 108~110、Pl. 39)

1. 検出状況

28号墳は2号排水路西側調査区(1区)のN14グリッドに位置し、27号墳の西に隣接して検出された円墳で、周溝の北側のみが検出されている。しかし、測量図・実測図ともに無く、写真的記録にも残されていない。千分の一の測量図割付図に記入された周溝の位置(Fig. 4)と、出土遺物でその存在が知れるのみである。

この図から推測すると、周溝外径で11m内径で7m前後を計る、27号墳と同程度の円墳のようである。主体部は27号墳・29号墳の例からして、石室床面のみが調査区南に残存していると考えられる。後代の調査に期したい。

2. 出土遺物 (Fig. 108~110、Pl. 39)

出土遺物は全て周溝からの出土で、27号墳に比べ少量である。

出土須恵器 (Fig. 108) 1は壺蓋で、口径13.0~13.4cm器高3.8cmを計る。天井部と体部の境は明瞭でなく、浅い凹線がめぐるのみで、口縁端部は丸く收められ、内側に浅い沈線がめぐる。天井部は回転ケズリ放しでナデはおこなわれない。5条の平行線のヘラ記号がある。2は古式の端正で薄い造りの壺で、復元頸部径14cm胴部径29.3cmを計る。頸部には低い断面三角突帯を2条施し、その空間に櫛描波状文を2箇所施す。頸部には細い沈線を1条施し、中央が強く張る偏球状の刷になだらかに連なる。胴部外面には木目直交の平行叩きを斜位に施し、数条のカキメ状の回転ナデを施す。内面は回転ナデで丁寧に当具痕を消し、幅2mmほどのヘラ当痕が上半に数条残る。外面の一部に自然釉が掛かり暗緑灰~明灰色を呈する。3は人甕の口縁部で復元口径32.4cmを計る。口縁上下端部を強く張り出して肥厚させ、下端は鋭くつくり端部に2条の凹線を施す。外面にやや緩い低い断面三角突帯を3段4条施しこの間に2段の波状工具による連続刺突文を施す。口唇端部は泥漿を焼成で黒く発色させており他は青灰~暗青灰色を呈する。4は高环形器台で、口径37.2cm頸部径16.5cm脚端径30cm器高34.5cmを計り深い体部を大きな円筒にはめ込んだ半島系で27号墳出土の器台12より古式の形態を示している。口縁は短く外反し頸部内面は強く屈折する。端正な口唇の内面には三角突帯を1条施し、口縁から突出して特異な形態を示している。坏体部は斜位の木目直交の平行叩きで成形しこれを回転ナデで消しているが、下位と脚内面に残っている。外面には2条単位の三角突帯を3箇所施し、上段の空間2箇所に櫛描波状文を、下段に同施文具で幅12mm 6条単位のタテ櫛引文を12箇所施す。脚部外面には同様に2条単位の三角突帯を4箇所、端部近くに1条施し、3段の空間に櫛描波状文を施すさらに三角透かしを6箇所穿つ。3辺を切り抜いた後上端を折り取っており27号墳出土高坏の方形透かしと同じ手順である。外面の四分の一程と坏内面には自然釉が掛かり淡緑灰色を呈する。内面底部の径15cm程には釉が掛からず黒変して薺束がそのままガラス化して熔着しており、重ね焼きの剥離材として薺を丸めたものを用いた様である。他の部分は灰白~灰色を呈している。

出土土師器 (Fig. 109) 5は口径19.2cmを計るやや大振りの坏で、頸部がヨコケズリで緩い段を為し内面は稜を為して屈折する。口縁は外方に開き緩く内湾する。端部は锐利につくる。口縁はヨコ研磨他はナマエ研磨を施す。色調は赤褐色で断面は暗黄褐色を呈する。6は小型の平底の鉢で口径10.4cm器高8.8cmを計る。外面下半はヘラナデ、内面はヨコヘラケズリを施す。上半部は二次加熱を受け器壁があれ調整は明瞭でない。色調は灰褐色で被熱部分はぶい赤褐色を呈する。7は短頸の小型

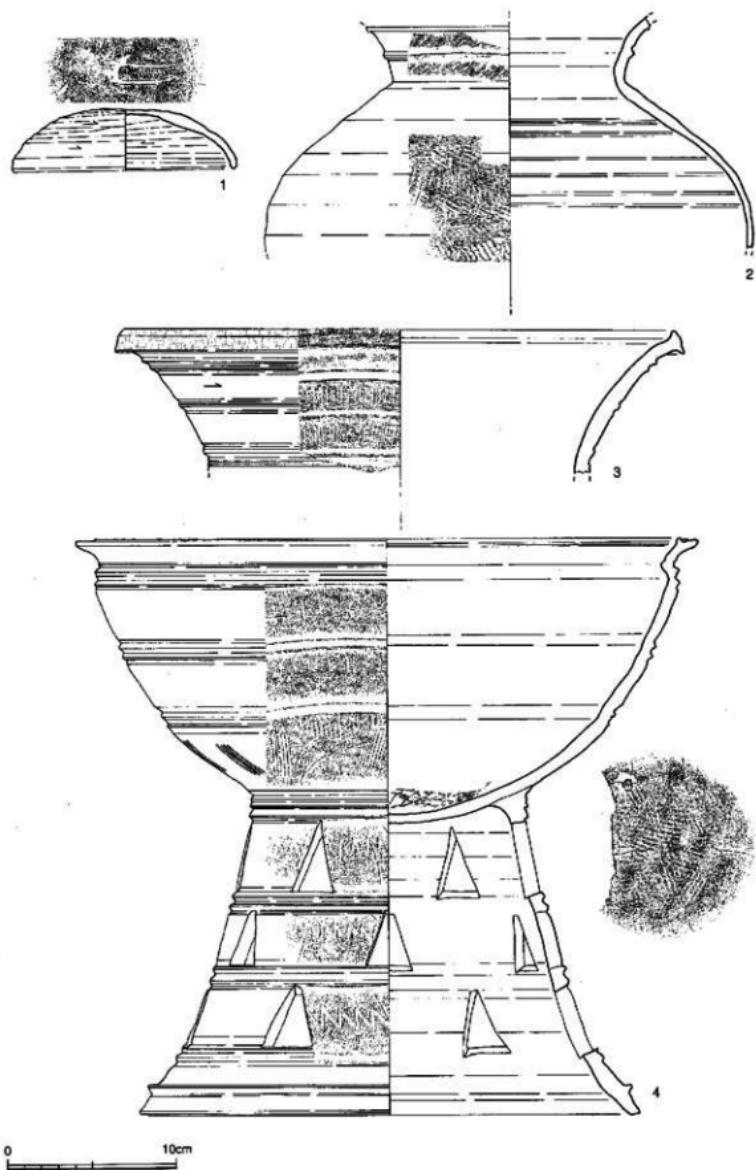


Fig. 108 吉武S群28号墳周溝出土土器実測図(1)(1/3)

の壺で口径13.4cm胴径19.5cmを計る。張る胴から締まった頸部になだらかに連なり、口縁が短く直口氣味に立ち上がる。口頸部はヨコナデ胴部内面は左上がりのヘラケズリを施す。外面は二次被熱を受け器壁があれ調整は明瞭でない。色調は淡黄褐色で被熱部分はにぶい淡赤褐色を呈する。8は口径20.6cmを計る壺である。直線的に外方に開く先鋭的な口縁から肥厚した頸部が屈曲して強く張る胴に連なる。内面頸部以下には左上がりのヘラケズリが見受けられる。色調は灰褐色で被熱部分はにぶい赤褐色を呈する。壺類は二次被熱を受けた実用品であり、周辺からの流れ込みの可能性が高い。

以上、IA・IB・II・IIIの少なくとも4時期の資料が見受けられ、築造時期は27号墳に後出するともわれる。

検出土出土地器 (Fig. 110, Pl. 39)

2号排水路1区の遺構検出時に出土した資料で、今回の古墳に関連すると思われる須恵器を図示した。1~4は有蓋高杯である。1~3は蓋と鉢状の柄を持つ同タイプの資料である。高い天井部にはカキメを施した後、緩く回転ナデ調整を加えるもので、何れも左回転である。体部との境は稜が高く突出し、口縁は緩く外反して端部は鋭く仕上げる。天井内面の当具痕は縦方向のナデで丁寧に消されている。法量と色調はそれぞれ、1は口径13cm器高5.3cmを計り灰~暗灰色、断面は淡紫灰色を呈する。2は口径12.4cmで、灰~黒灰色。3は口径13.4cmで、灰~暗灰色。外面天井部は何れも暗灰~黒灰色で暗色である。4は高身耳で、受部径15.6cm体部高5.2cmを計る。受け部は高く湾曲せずに直線的に延びて内傾し、口縁は鋭く仕上げる。体部との境は、稜が鋸状に高く外方に張り出す。体部外面は手持ちヘラケズリを施し、全面に回転ナデを施す。脚上端には低く稜の緩い三角突唇を1条施すが、以下は全周を打ち欠いており不明であるが、ラッパ状に開く脚に方形透かしを穿つものと思われる。色調は外面は暗灰色内面は灰色に暗灰色が斑状に広がる。断面は暗青灰色を呈する。5はジョッキ形と思われ口径12.4cmを計る。頸部下が張って口縁が短く外反し、頸部外面に低いケズリ出しの「コ」字突帯を3条施してその空間2段に櫛描波状文を施す。胴下位には縦方向の手持ちヘラナデを施す。器壁は薄く端正な作りである。色調は暗灰色断面は暗青灰色を呈する。

以上、27号墳周溝出土の池の上・古寺墳墓群タイプ (Fig. 100) より一時期時代が上りそうな様相が見えるが、内容的には27号墳に帰属する可能性が高い。

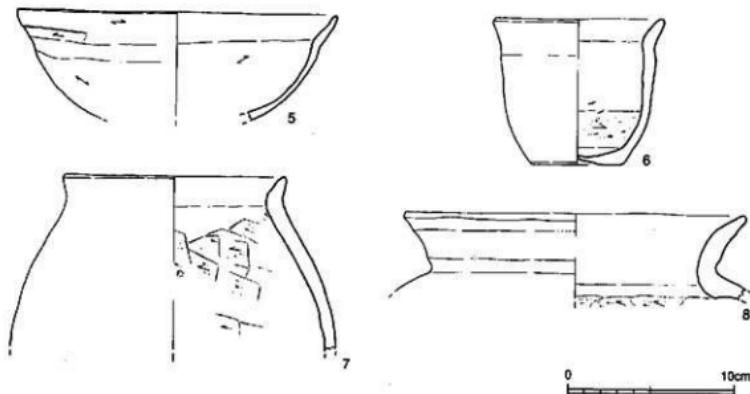


Fig. 109 吉武S群28号墳周溝出土土器実測図(2)(1/3)

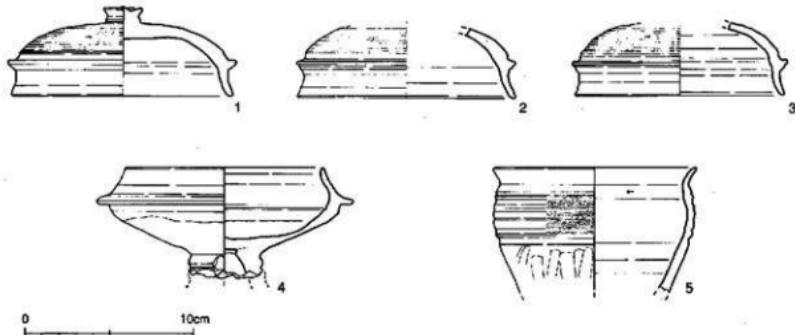


Fig. 110 吉武S群27・28号墳検出面出土土器実測図(1/3)



Fig. 111 吉武S群27・28号墳出土縄文土器実測図(1/3)

古墳出土縄文土器 (Fig. 111, Pl. 39)

古墳周溝等に混入して少量の縄文土器が検出されている。1・2は28号墳周溝出土。1は中期阿高式の鉢の口縁部片で、口唇端部の内外に交互に指頭大の列点を施文する。器壁は薄く、胎上に滑石を多量に含む。1・2次で調査検出された土壤群に関連する。2は後・晩期の粗製深鉢の口縁部片で、器壁は厚く内外面に条痕・ナデを施し調滑は粗い。胎土に石英粒を多く含み、色調は明灰褐色～黒褐色、断面黒灰色を呈する。3は晩期夜臼式の深鉢の口縁片で、口縁端外面は折り返して縁を作っている。内外面ともヨコナデ調整。色調は外面は灰褐色、内面は黒色を呈する。

小 結

9次調査では27・28号墳の2基の古墳が調査され、いずれも円墳北側の一部の検出であった。27号墳は周溝外径で約14.5m、石室壁体は失われているが、 $3.95 \times 1.96m$ 義道幅0.8m程の竪穴系横口式石室とおもわれ、IA式以前の5世紀初頭池の上・古寺墳墓群タイプの時期からIII A期まで追葬が行われ、鐵器はクエゾノ古墳群5号墳に通じる、台形鋸造鉄斧・鎌の2セットが検出され、極めて半島色の強い様相を示している。

28号墳は27号墳の西側に隣接し、同程度の周溝が検出されている。出土した土器から、27号墳に後続してIA期に製作されII期まで追葬が行われた可能性がある。

第二節 吉武S群D・E・F地区の調査

調査概要 D・E・F地区
は、L・M・N地区の
東方350m程の位置に
ある吉武S古墳群の支
群である。

この地区は、中間に
浅い谷を挟んでおり、
独立した丘陵をなし
ている。

丘陵は、南西から北
東方向に傾斜してお
り、その中央部で人為
的な段をなしている。
古墳群はこの段落ち
に沿うS16～19号墳と
段落ちした東側の縁
辺にあるS20・21号墳
の計6基である。

古墳は、何れも墳丘
を失い、内部主体や周
溝も削平の影響が大
きく周溝の一部のみ
の占墳も多く見られ
る。

1. S群16号墳 (Fig. 113 ~ 115)

S16号墳は、丘陵縁
辺に位置し、全体の削
平のために南東側の
周溝を失っている。
また、内部主体の痕跡
も見ることができな
い。

周溝は、北東側に出入口の陸橋が認められる。

① 周溝 (Fig. 113)

S16号墳の周溝は、前記のように南東側が削平のために消失するが、他は円墳の形状を窺うことがで

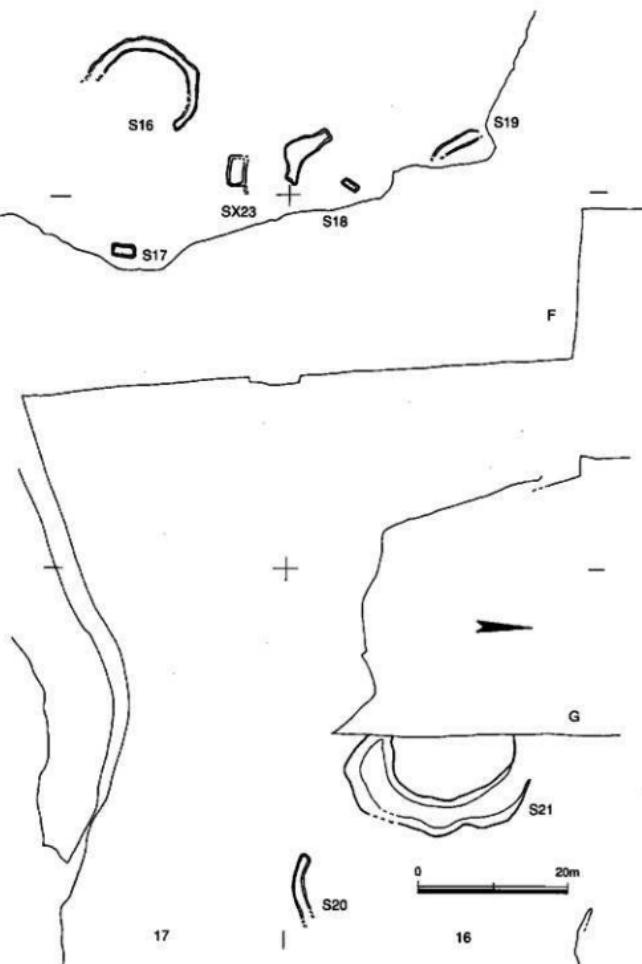


Fig. 112 吉武S群D・E・F地区古墳・土壤出土状況全体図



Fig. 113 吉武S群16号墳出土状況実測図(1/100)

きる。周溝は、北東側に幅2.5m程の陸橋を設けている。

周溝規模は、東西の外径で17.5m前後、南北17m前後を測る。幅員は、東側1.3m前後、西側1.8m前後、北側1.5~1m程度、南側1.5m前後のものである。幅員の形状は一定せず、不整なものとなっている。また、深さは、0.3~0.4m程度を測る。周溝内から出土した遺物も少量で、実測に耐える土器類は少ない。

② 内部主体

S16号墳の内部主体は、周溝内の中心位置に掘り方の痕跡もなく、周溝内にも石室構築に使用されたと考えることのできる石材も出土しないことから完全に破壊されていると思われる。



Fig. 114 吉武S群16号墳出土状況断面実測図 (1/100)

しかしながら、不整な周溝の形状と規模、陸橋をもつ構造から考えると他の長方形石室を内部主体とする古墳であると考えられよう。

③ 出土遺物 (Fig. 115)

05425は、周溝内で出土した数少ない図化のできた杯蓋である。



器は、器高が低く、口縁部は器壁が極端に薄く、反転気味に外開する。天井部との境は、薄く跳ね上げ状になる突帯をめぐらす。天井部は、回転ヘラ削りを全面に加えた後
に、突帯部をヨコナデする。また、内面は丁寧なヨコナデである。

器色は、外面が暗褐色～黒褐色で、内面は暗褐色を呈する。口径13.4cm、器高2.6cmを測る。

2. S群17号墳 (Fig. 116~119、Pl. 24・25)

S17号墳は、S16号の東側に隣接して営まれた古墳である。周溝は、明確に伴うと考え得るものではなく、内部主体のみの遺存である。

内部主体は、長方形の石室である。腰石は全周が残り、規模・構造がよく分かる。

副葬遺物は、全て土器類で、石室北側の小口部付近で須恵器ハソウ、南西側コーナーで須恵器壺・櫛形ハソウ・壺破片、土師器マリ・平底甕がセットをなして出土した。

① 周溝 (Fig. 116)

周溝は、前記の通り該当する遺構が見あたらないが、他の古墳例に見られる様に、周溝の幅員が不安定で、形状が不整な凹形を呈するものであると想定できよう。

② 内部主体 (Fig. 117・118)

S17号墳の内部主体は、長方形の掘り方内に花崗岩角礫を使用した腰石を配置した石室である。石室掘り方は南側小口部よりも北側の小口部幅が若干広く、北側が奥墳であると思われる。

(石室構造) (Fig. 117)

石室は、主軸が磁北から東へ15度程振った方向に向いており、ほぼ南北方向に向いた石室である。石室の腰石は、花崗岩を半体とした石材を用いている。各石室辺に使用された石材は南壁小口で2個、北壁小口で3個、東側側壁で7個、西側側壁で7個である。

その石材の長・幅サイズは、南小口で西から $0.35 \times 0.2m$ ・ $0.55 \times 0.1m$ ・ $0.25 \times 0.1m$ 、北小口で西から $0.42 \times 0.1m$ ・ $0.65 \times 0.15m$ 、東側壁部で南から $0.37 \times 0.15m$ ・ $0.45 \times 0.2m$ ・ $0.4 \times 0.2m$ ・ $0.35 \times$

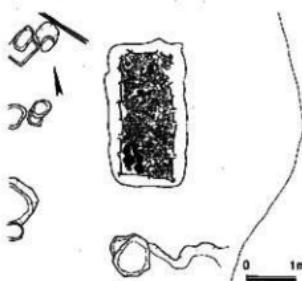


Fig. 116 吉武S群17号墳出土状況断面実測図 (1/100)

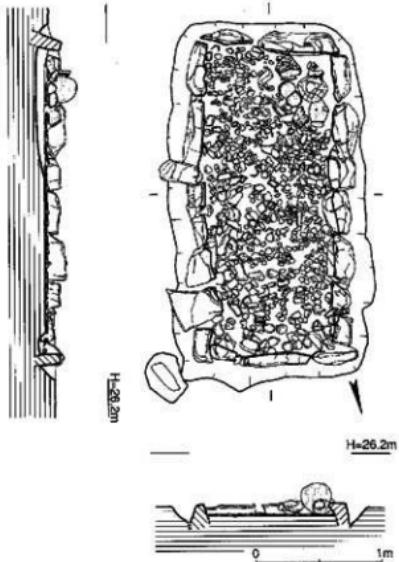


Fig. 117 吉武S群17号墳埋葬施設実測図(1/40)

散漫で、副葬土器の下部などでは殆ど散かれていない。

また、石室を埋置した掘り方は、北側短辺長で1.45m、南側辺長で1.25m、東側辺長で2.83m、西側辺長で2.75m程度の規模で隅丸長方形を呈する土壙で、深さは0.2m程度かと考えられる。

(副葬遺物の配列状態) (Fig. 118)

S17号墳の副葬遺物は、前記のように土器のみの出土である。

まず北側小口部の腰石から30cmの位置に須恵器ハソウ(05427)が置かれていた。さらに、南側小口と西側側壁のコーナーに須恵器2点(壺・樽形ハソウ)、土師器3点(平底壺・マリ2)が一括して置かれていた。その配列は、まず奥壁コーナーに須恵器中型壺(05426)を据え、次にその手前の西側壁側に樽形ハソウ(05428)を置いている。さらに須恵器壺の東隣に土師器の平底壺(05430)を据えて、その手前に2個のマリ(05431・05432)を重ねて置いている。

③ 出土遺物 (Fig. 119, Pl. 51)

S17号墳では、石室内で原位置をとどめて出土したのは須恵器ハソウ・壺・樽形ハソウ、土師器平底壺・マリ2点の6点である。この他に石室内出土土器に須恵器高台破片(05429)がある。また、周辺の遺構検出面から須恵器壺口縁部破片(05433)や須恵器鉢(?) (05434)などが出土している。

(土師器マリ)

05432は、石室内奥壁近くで出土した土師器マリ(P2-2)である。

口縁部付近でやや屈曲して立ち上がる特徴を持つ。口縁端部は直口する。底部はやや尖り気味である。器面調整は、内外面とともに磨滅が著しく不明であるが、ヘラ磨き調整であろう。器色は、内外面ともに淡赤褐色を呈する。胎土は密で、焼成は軟質である。口径14cm、器高5.5cmを測る。

0.2m・0.45×0.23m・0.22×0.15m・0.22×0.15mを測る。

また、西小口部では、南から0.42~0.15m・0.62×0.15m・0.2×0.15m・0.25×0.1m・0.3×0.25m・0.25×0.4m・0.27×0.12mを測る。

このように使用された石材は、それほど大型のものではなく、長・幅のサイズが大きくても長辺0.7m未満、短辺0.25m前後のものであり、一人で十分持ち上げられる重量のものである。

石室の平面規模は、東側壁長2.4m、西側側壁長2.4m、北側小口幅1m、南側小口幅1mを測る。

また、小口部では、北側の腰石がやや小振りであり、石室南隅に副葬土器が置かれることから北側が奥壁と考えられる。

石室床面には、花崗岩の扁平礫を使用して敷石が置かれるが、全体に

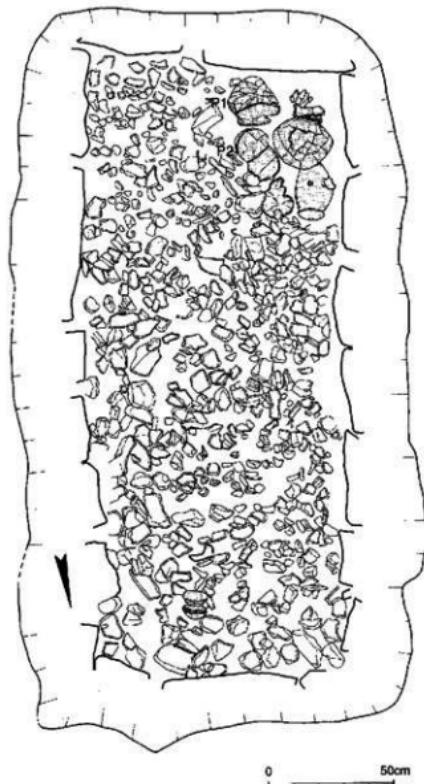


Fig. 118 吉武S群17号墳副葬遺物出土状況実測図(1/20)

05431も石室内奥壁近くで出土した土師器マリ(P2-1)である。

05432マリとほぼ同一の器形であるが、底部に緩い段を持つ。器面調整は、同様に磨滅によって不明であるが、ヘラ磨き調整と考えられる。器色は、外面淡赤褐色で、内面が淡赤褐～赤白色である。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径14cm、器高5.4cmを測る。

(土師器壺)

05430は、奥壁のコーナー近くで出土した安定した平底の底部を持つ土師器壺(P1)である。

内外面ともに荒れが著しく、胴部内面に荒いヘラ削りが認められる以外は器面調整が不明である。

平底底部は外面の中央部がやや浅く座む。口縁部は短く、急激に外開して内面に稜をなす。器色は、暗褐色を呈する。胎土は粗で、焼成は軟質である。口径19.4cm、器高16.8cm前後を測る。

(須恵器ハソウ)

05427は、石室内北側小口付近の床面で出土した須恵器小形ハソウである。

外面は殆ど灰かぶりである。半球状の胴部に外開する口縁部を付する。口縁端部は緩い段をなす。

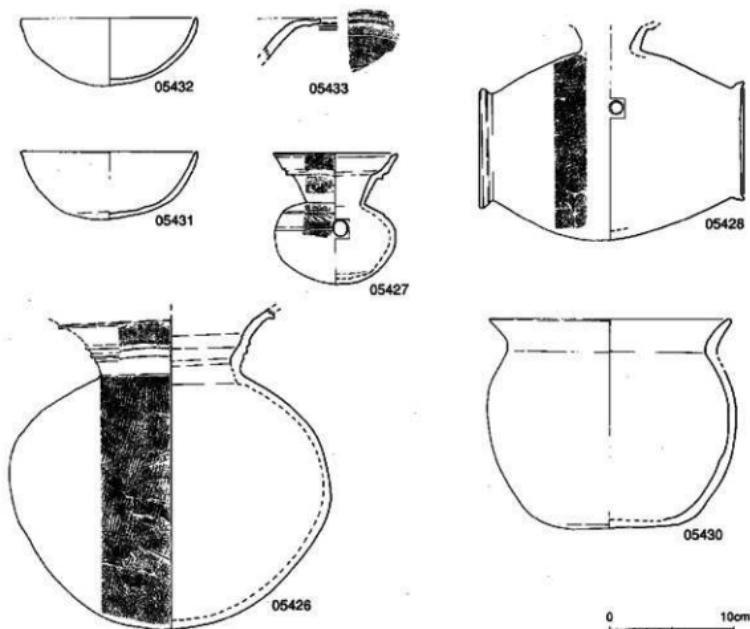


Fig. 119 吉武S群17号坑出土土器実測図(1/4)

口縁端部付近に細かい波状文を施す。また、頸部との境に1条空帯をめぐらし、この直下にも細かい波状文をめぐらす。胴部最大径にも2条の沈線をめぐらし、この間を斜めの原体制突文で埋める。器色は褐色を帯びた黒灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径9.9cm、器高10.4cmを測る。

05428は、石室内奥壁付近出土の樽形ハソウである。

口縁端部を除いて完形の小形精品である。全体に器面調整が丁寧に施され、殆ど光沢を放つ程である。体部の中央には縦方向に帯状の平行タタキの痕跡が僅かに残る。口縁部周辺をナデ回す他は縦方向の丁寧なヨコナデが全面に施されている。穿孔は9mm程度と小さい。

器色は、体部が暗灰～黒灰色を呈し、側辺は黒灰色～淡灰色である。胎土は密で、焼成は非常に堅緻である。頸部径5cm、側辺最大径21.2cm、残存器高17cmを測る。

(須恵器壺)

05433は、石室周辺の検出面で出土した須恵器壺口縁部破片である。

全体に薄づくりで、外開する口縁端部は垂れて突帯をなし、上端は跳ね上げ状となる。

口縁部突帯下にはヨコナデ後に、2条の横沈線をめぐらし、この間を波長の長い細かい波状文で埋める。口縁部内面は灰かぶりである。

器色は、外面淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成は非常に堅緻である。

05426は、石室内奥壁のコーナーで出土した須恵器壺である。

口縁端部を欠く完形品である。頸部の良く絞った壺で、胴部の中位が最大径となっている。

口縁部は、直に外開する形態と考えられる。端部よりやや下がった位置に上端が平らな突帯を1条、さらに頸部近くに上端部がやや鈍い三角突帯2条をめぐらす。

器面調査は、頸部の外面には丁寧なヨコナデが施されている。また、頸部以下の胴部には縦方向の細かい平行タタキを施し、胴部中位以下ではタタキが交叉する。胴部では、内底部付近にオサエの指痕痕が顕著に残る。他は部分的にナデが認められる。頸部内面は強いヨコナデによって接合部分が強い稜をなす。また、頸部突帯下には均整な、深い波状文をめぐらす。

器色は、淡灰色を呈する。また、生地は暗赤褐色である。頸部径11.3cm、胴部最大径25.5cm、残存器高25.6cmを測る。

3. S群18号墳 (Fig. 120~122)

S18号墳は、S17号の北側に隣接して営まれた古墳である。南側に不整な周溝と考えられる溝遺構が残り、北側に残る石棺が内部主体であろう。石棺は、殆ど棺材を抜かれ、僅かに小口部に使われた板石が残る。周溝内から須恵器杯類が出土している。

① 周溝 (Fig. 120)

石棺墓から南側7m程にある不整形な溝で、幅3.2m、延長11mを測り、僅かに弧状をなす溝遺構である。石棺墓との相関性は確定できない。周溝内からは、須恵器蓋杯が出土した。

② 内部主体 (Fig. 121)

S18号墳の内部主体と考えている石棺墓は、主軸が磁北から40度程東に振れる位置にある。石棺掘り方は、北側小口が長く0.8m、南側小口で0.7m、東側側辺で1.7m、西側側辺2mの規模である。また、石棺本体は、南側小口に2枚の板石を残すのみで、幅0.5mを測る。また北側小口は0.6m程度の幅と考えられる。北側の溝状遺構と伴うものは確定できない。

③ 出土遺物 (Fig. 122, Pl. 52)

S18号墳の周溝と考えられる溝状遺構内からは、須恵器杯身(05435~05438)、同杯蓋(05439)が出土している。

05439は、須恵器杯蓋である。口縁部は直立し、天井部との境が鋭い突帯をなす。口縁内端部は、窪んで、明瞭な段をなす。天井部は2/3が丁寧なヘラ削りである。また、天井部の内面にはアゲ具痕を残す。口縁部外面は灰かぶりである。

器色は、外面が淡灰~明灰色で、内面は明灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅敏である。口径11.2cm、器高3.9cmを測る。

05436は、底部の平らな須恵器杯身である。立ち上がりは高く、端部は内面が窪んで段をなす。

受け部も細いながらしっかりしたつくりである。底部の1/2をヘラ削りする。他は丁寧なヨコナデである。

器色は、外面が暗灰~淡灰色で、内面は暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅敏である。口径10.8cm、器高4.2cmを測る。

05437は、立ち上がりが直立する須恵器杯身である。

受け部への強いヨコナデによって口縁部は立ち、内面も底部への屈曲で鋭い稜をなしている。

底部のヘラ削りは、殆ど受け部の直下近くまで行われ、ロクロは逆時計回りである。口縁部外面および内面は丁寧なヨコナデである。

器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。

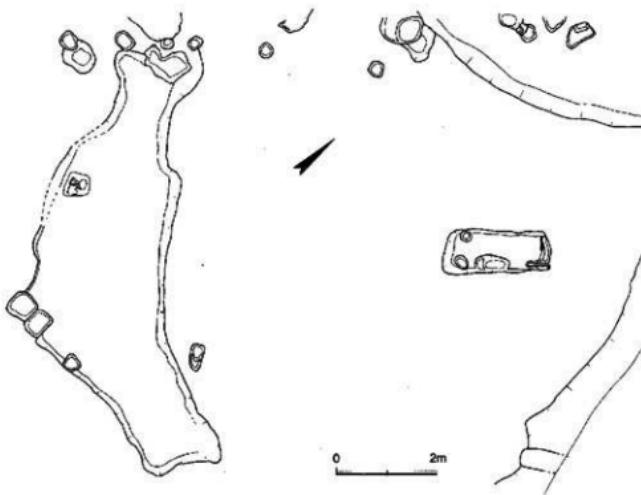


Fig. 120 吉武S群18号墳出土状況実測図 (1/100)

胎土は密で、焼成も堅緻である。口径11.6cm、器高5cmを測る。

05435は、薄つくりの須恵器杯身である。底部はやや膨らみをもち、口縁部立ち上がりは均整なつくりとなる。また、受け部は異常に小さいものである。

底部の回転ヘラ削りは、ロクロ時計回りで約1/2程度に施している。

底部はよく火が回っておらず、生焼け状態である。他は、全て丁寧なヨコナデ調整であるが、内底部はこの後にナデを加える。器色は、内外面ともに黒灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。

口径10.5cm、器高5cmを測る。

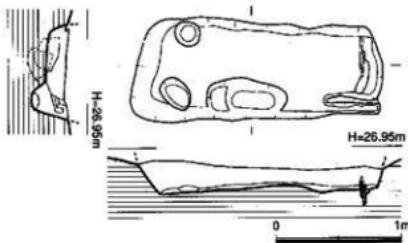


Fig. 121 吉武S群18号墳埋葬施設実測図 (1/40)

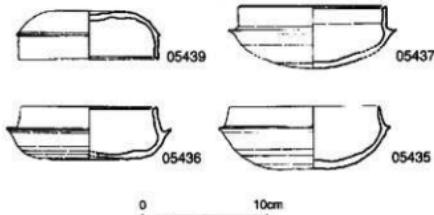


Fig. 122 吉武S群18号墳出土土器実測図 (1/4)

4. S群19号墳 (Fig. 123・124)

S19号墳は、S18号の北側に見つかった周溝の一部を残すのみの小円墳である。

残存規模は、幅2m、延長7mで、南東から北西方向に円弧を描く。

溝内から、土師器脚部と杯部破片が出土した。

(出土遺物) (Fig. 124, Pl. 52)

05440は、内面中空の高杯脚部破片である。

筒部はやや膨らみをもち、根部はゆるやかに開く。内面は、横へラ削り調整。器色は、外面淡赤褐色を呈する。脚径12.5cmを測る。

05441は、土師器杯部破片である。内外面ともに磨滅が著しい。器色は、暗褐色を呈する。脚は細く、大きく外開する杯部となる。胎土は粗で、焼成は軟質である。杯部最大径11.6cmを測る。

5. S群20号墳

(Fig. 125・126)

S20号墳は、S19号墳などの群集する丘陵中央部から東側に約60mほどの丘陵縁辺に位置する。

調査で検出された関連施設は、周溝の一部のみである。

周溝は、南西から北東方向に円弧を描き、西側の立ち上がる形状から、出入り口の陸橋部にあたると考えられる。残存する規模は、幅1.5~1.8m、延長10.5m前後である。また、深さは0.2~0.25mと非常に浅い。

溝内からは須恵器ハソウや高杯脚の小破片が出土した。

(出土遺物) (Fig. 126, Pl. 52)

05442は、周溝内出土の須恵器ハソウである。

半球形の胴部に急激に外開する口縁部を付する。胴肩部は灰かぶりとなっている。

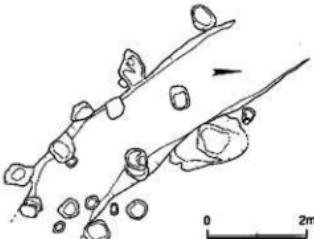


Fig. 123 吉武S群19号墳出土状況実測図 (1/100)

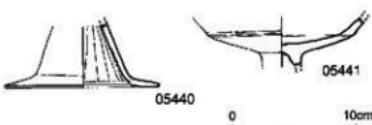


Fig. 124 吉武S群19号墳出土土器実測図 (1/4)

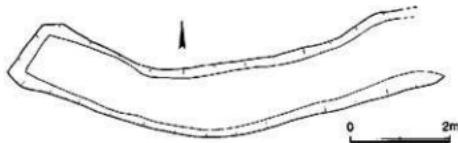


Fig. 125 吉武S群20号墳出土状況実測図 (1/100)

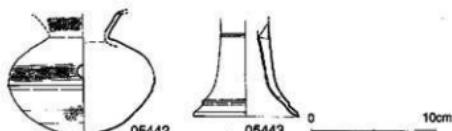


Fig. 126 吉武S群20号墳出土土器実測図 (1/4)

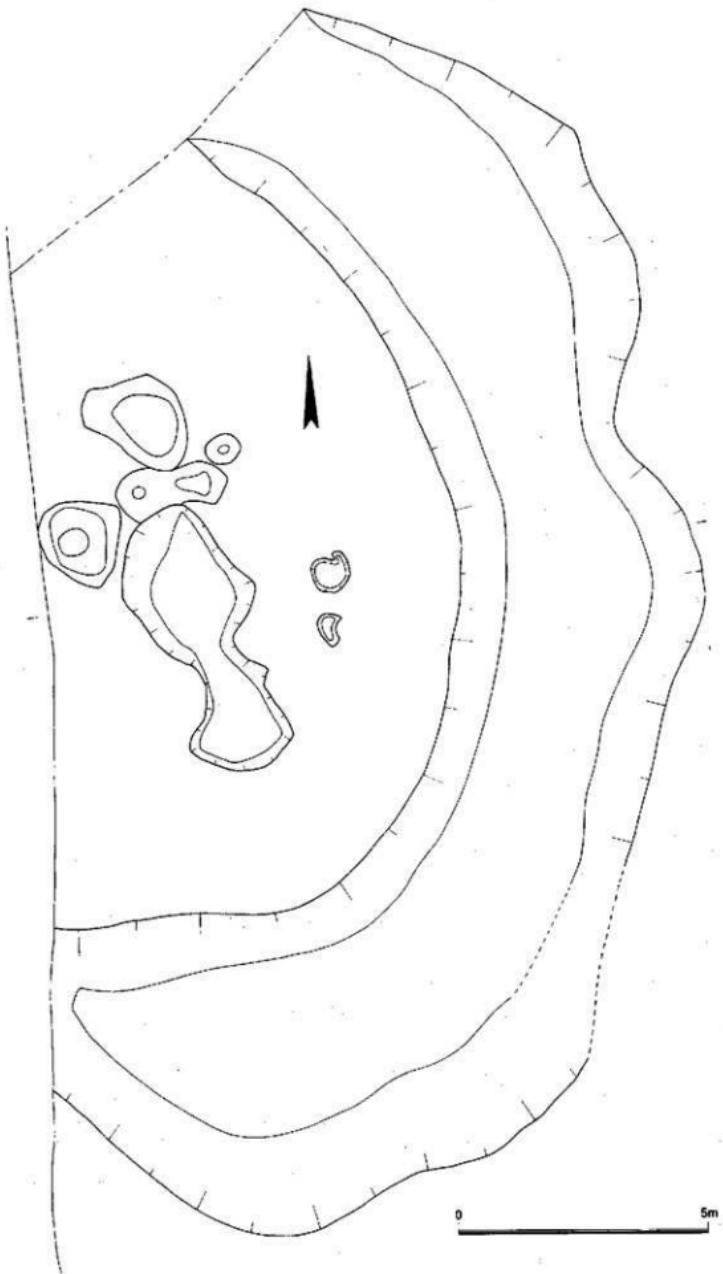


Fig. 127 吉武S群21号墳出土状況実測図 (1/100)



Fig. 128 吉武S群21号墳出土状況断面実測図 (1/100)

胸部の最大径部に2条の平行する沈線文をめぐらし、この間を非常に緩い波長の細かい波状文で埋める。また、口縁部直下の頸部にも波長の小さい細かい波状文を施す。

器面調整は、胸部下半に回転ヘラ削りを施し、外底部には一部に縱方向のタタキ痕跡が残る。

器色は、胸部が黒灰色で、頸部付近淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。胸部最大径11.6cm、器高9.9cmを測る。

05443は、周溝内出土の須恵器高杯脚である。小破片のために円筒部の復元径がやや大きいかと思われる。筒部突帯以下に三方に長方形透かしを施す。また、脚端近くには上端が丸い突帯1条をめぐらす。器色は、黒灰色を呈する。胎土密で、焼成も堅緻である。脚径8.5cmを測る。

6. S群21号墳 (Fig. 127~129)

S21号墳は、S20号の北側に位置する円墳で、西側の半分が未調査である。

調査で検出できたのは周溝部分のみである。内部主体の痕跡も見つかっていない。

出土遺物も少なく、須恵器の大甕破片のみである。

① 周溝 (Fig. 127)

S21号墳の周溝は、外径で東西長12.7m以上、南北長22mを測る。形状は南北方向にゆがんだ円形を呈するようであるが、墳丘部にあたる部分でも後世の攪乱による削平が大きく、III状をよく把握することが困難である。東側の外縁には幅5~8m・深さ0.6m程度の周溝状の溝がめぐっており、この溝が、本墳の周溝と考えられよう。

② 出土遺物 (Fig. 129)

05444は、周溝内出土の須恵器大甕頸部破片である。外面に沈線状の条線をめぐらす。器色は、暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。

小 結

D・E・F地区では、7基の小円墳群を報告した。しかしながら非常な削平の結果、古墳群の旧状を十分に明らかにできなかったが、このうちS17号では良好な須恵器と土師器のセット関係が明らかになったと言える。

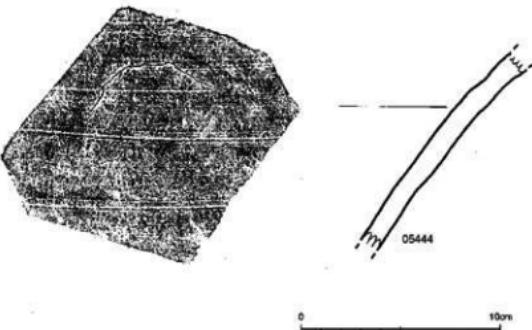


Fig. 129 吉武S群21号墳出土土器実測図 (1/4)

第三節 吉武F・G・H10～12地区の調査

調査概要 F・G・H10～12地区は、吉武S古墳群の北東端にあたるS1・2・22・23号墳の分布する地区である。

この地区的古墳群は、1983年(昭和58)度に緊急調査を行った。

南西から北東方向にのびる扇状地の先端近くに造営されたS1号墳(樋渡古墳)(帆立貝式前方後円墳)やその北側にS2号墳(方墳)が知られ、この2基の古墳については昨年度に報告を行った。

(「吉武遺跡群 XIV」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第731集 2002年) 今回報告する古墳は、S1号墳の南西側30mに位置するS22号墳と東側10mに隣接するS23号である。両古墳は何れも周溝のみを残す小円墳である。また、内部主体を示す痕跡は全く見あたらない。S22号墳周溝からは、須恵器杯蓋や無蓋高杯が出土しており、石室墳の可能性が高い。S23号墳は出土土師器からやや古式の古墳であろう。

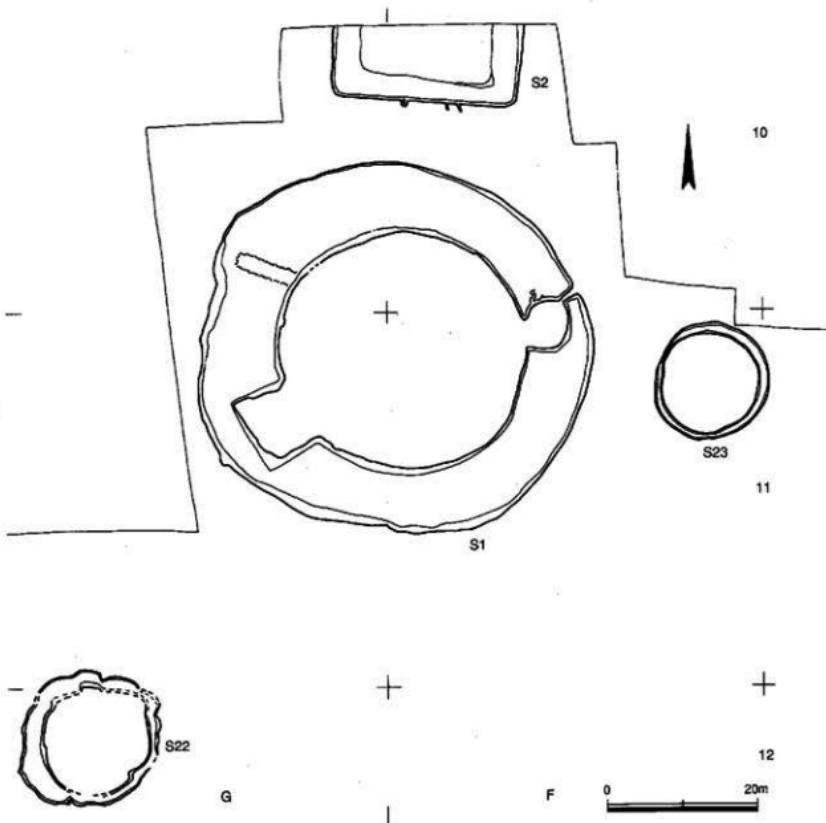


Fig. 130 吉武S群F・G・H10～12地区古墳出土状況全体図

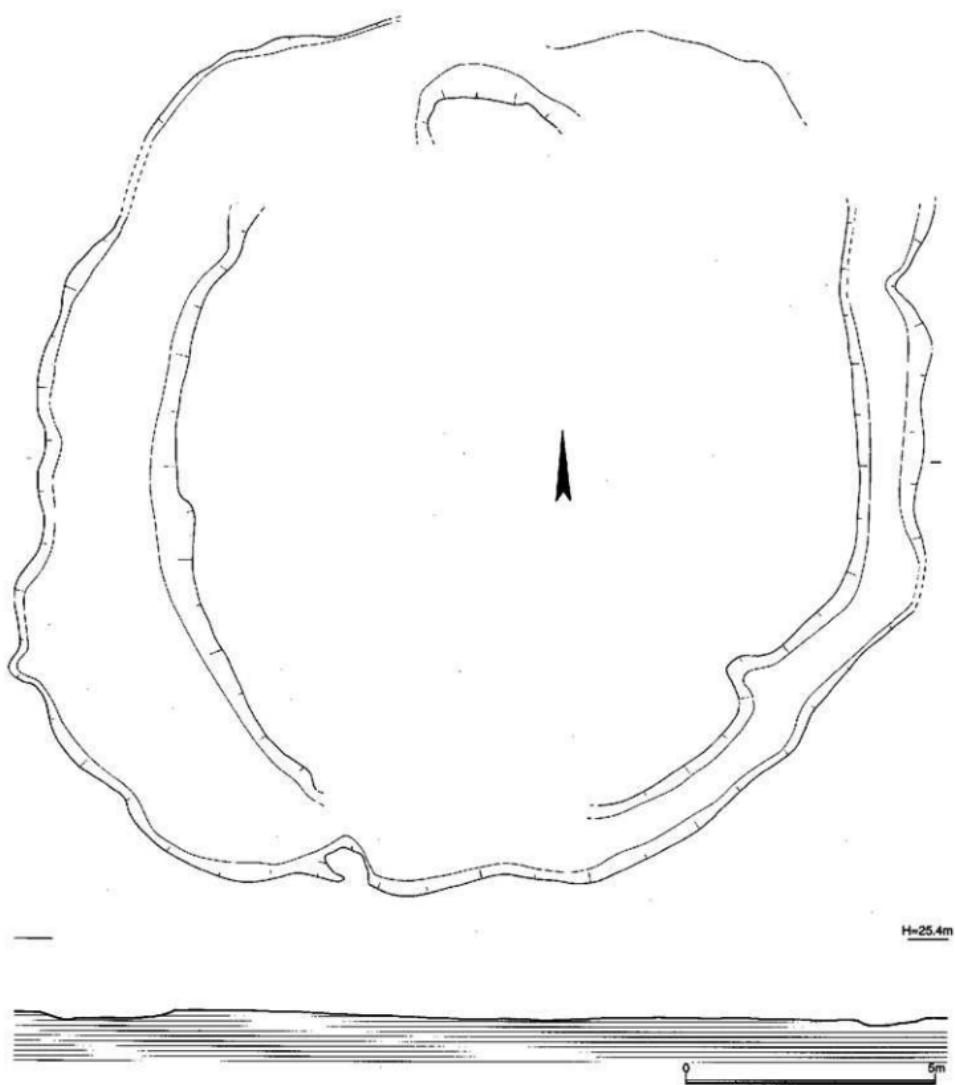


Fig. 131 吉武S群22号墳出土状況実測図(1/100)

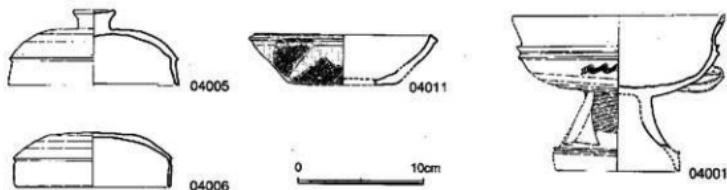


Fig. 132 吉武S群22号墳出土土器実測図(1/4)

1. S群22号墳 (Fig. 131・132、Pl. 25)

S22号墳は、周溝のみを残す円墳と考えられる。削平のため北側・東側の縁辺を失っているが、かろうじて周溝の形状・規模を知ることができる。

① 周溝 (Fig. 131)

S22号墳の周溝は、外径で東西長18m、南北長17.5m前後を測る。また、幅員は、東側1.5m前後、西側3m前後、北側2m前後、南側1.5~2.8mとかなり不整な形状となっている。深さは全体に0.1m程度と浅いものである。

周溝内からは、須恵器杯蓋・高杯、土師器鉢などが出土した。

② 出土遺物 (Fig. 132, Pl. 52)

04005は、須恵器杯蓋である。口縁部はしっかりしたつくりで、やや踏ん張るように外方に開く。口縁端部は浅い段をなす。天井部との境は、高い突帯をめぐらしている。天井部は灰かぶりとなっている。天井部のヘラ削りは約1/2程度の範囲である。また、頂上部のつまみも均整なつくりである。

器色は、暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径13.8cm、器高6cmを測る。

04006は、全体が薄づくりの杯蓋である。口縁部は殆ど直立し、天井部との境は鋭い段となる。天井部のヘラ削りはほぼ全面におよぶ。天井部内面にアテ具痕が残る。他は、全て丁寧なヨコナデである。

器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径12.4cm、器高4.3cm前後を測る。

04011は、外面に斜め方向の擬格子タタキを施した上師質土器鉢である。口縁端部は須恵器に似る形状である。外面には赤色顔料を塗布する。

内壁の底部付近には、回転による磨滅によって胎土に混入した砂礫がはげ落ちている部位がみられる。器色は内面が淡赤褐色を呈する。胎土は密で、焼成は軟質である。口径15cm、器高4cmを測る。

04001は、須恵器無盡短脚高杯である。杯の下部についた耳を付ける。杯部は大きく、外側する口縁との境に2条の突帯をめぐらす。

また、脚部は、裾部に高い突帯をめぐらし、端部は折れて直立する。脚内外面は灰かぶりとなる。

杯部は突帯の下部に波長が1.3~1.4cmの波状文をめぐらす。また、脚筒部はカキ目調整後に三角形の透かし孔を三方に穿つ。器色は、杯部外面が黒灰色で、内面は暗い褐色を帯びた灰色である。

胎土は密で、焼成も堅緻である。口径17cm、器高12.3~12.5cm、脚径7.8cmを測る。

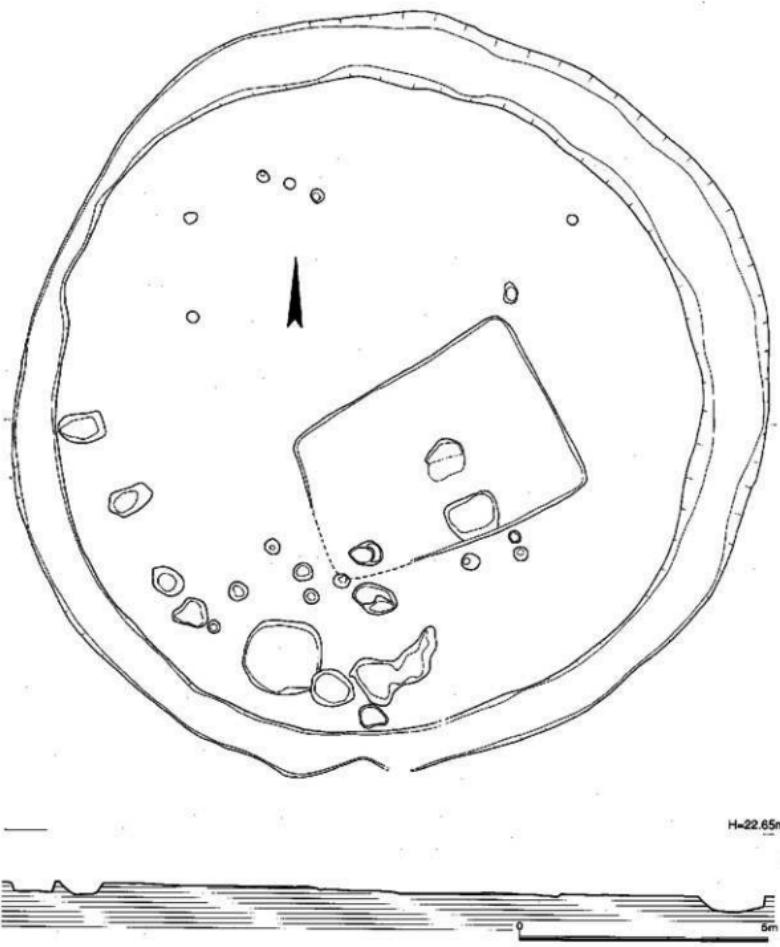


Fig. 133 吉武S群23号墳出土状況実測図(1/100)

2. S群23号墳 (Fig. 133・134、Pl. 26)

S23号墳は、S1号墳の東側に近接する小形の円墳と考えられる。周辺部に弥生時代後期の生活遺構が多く、周溝内にはこれらの土器類が多く混入しており、古墳造営期の上師器が少量出土した。

① 周溝 (Fig. 133)

S23号墳周溝は、外径で南北長15m前後、東西長15mのほぼ円形を呈する。幅員は、東・北側がやや広く1.5m、西・南側1mの規模である。また、深さは0.2~0.3m程度の浅いものである。溝内から多くの弥生後期土器と共に上師器が出土している。

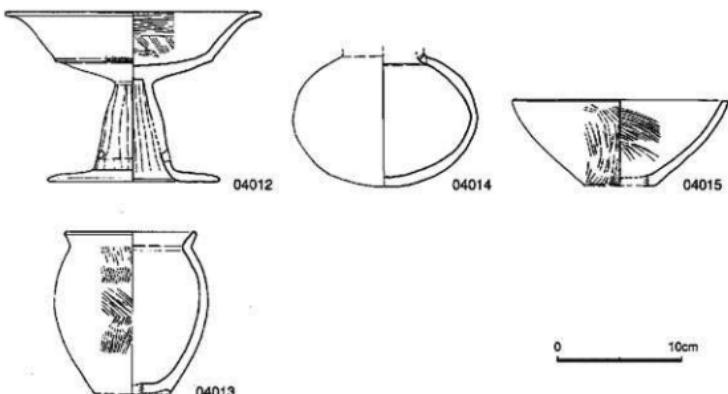


Fig. 134 吉武S群23号墳出土土器実測図(1/4)

② 出土遺物 (Fig. 134, Pl. 52)

04012は、周溝内出土の十師器高杯である。

浅く口縁部が外開する杯部に中空の筒部がやや膨らむ脚を付する。杯部は口縁がヨコナデで、内面横ハケ・斜めハケ調整が残る。脚部は外面ともにヘラ削り後に丁寧なヨコナデを加える。

器色は、外面が暗褐～淡褐色を呈する。また、内面は器面の剥落が著しい。胎土は密で、焼成は軟質である。口径23cm、器高13.6cm、脚径13.6cmを測る。

04014は、中型の土師器丸底盃である。胴部中位に最大径がある。崩滅のため調整は不明である。内面の局所に指オサエが見られる。器色は、外面ともに赤褐色を呈する。胎土は密で、焼成は軟質である。胴部最大径14.8cmを測る。

04015は、周溝内出土の弥生時代後期鉢である。

内外面ともに荒いハケメ調整を施す。器色は、外面暗褐～淡赤褐色で、内面淡赤褐色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径17cm、器高6.9cm、底部径5.6cmを測る。

04013は、周溝内出土の弥生時代後期の小形壺である。外面に荒いハケメを施す。小さい「く」字形口縁を持つ。器色は、外面黒色～暗褐色で、内面淡褐色を呈する。

胎土は密で、焼成も堅緻である。口径10.2cm、器高13cmを測る。

第四節 古墳時代土壙墓・石棺墓・甕棺墓などの調査

調査概要 古墳時代の埋葬遺構で、石室を内部主体にする古墳以外の遺構は、吉武S古墳群の南西側のL・M・N地区の石室墳周辺を中心に見つかっている。

これらの埋葬遺構は、土壙墓9基(SX01・02・04・05・06・07・08・09・10)、石棺墓2基(SX12・13)、甕棺墓6基(SX14～19)、その他2基(SX22・23)などである。

その分布は、古墳周溝内にあって、周溝埋没後につくられたものや、古墳周溝を意識した配置になっている遺構もみられる。

これらの埋葬遺構内で出土する副葬遺物は、石室墳と共通する・土器類や玉類などが見られるが、玉類は殆どが滑石製品であり、殆どが小規模の施設であり、散在的な分布となっている。

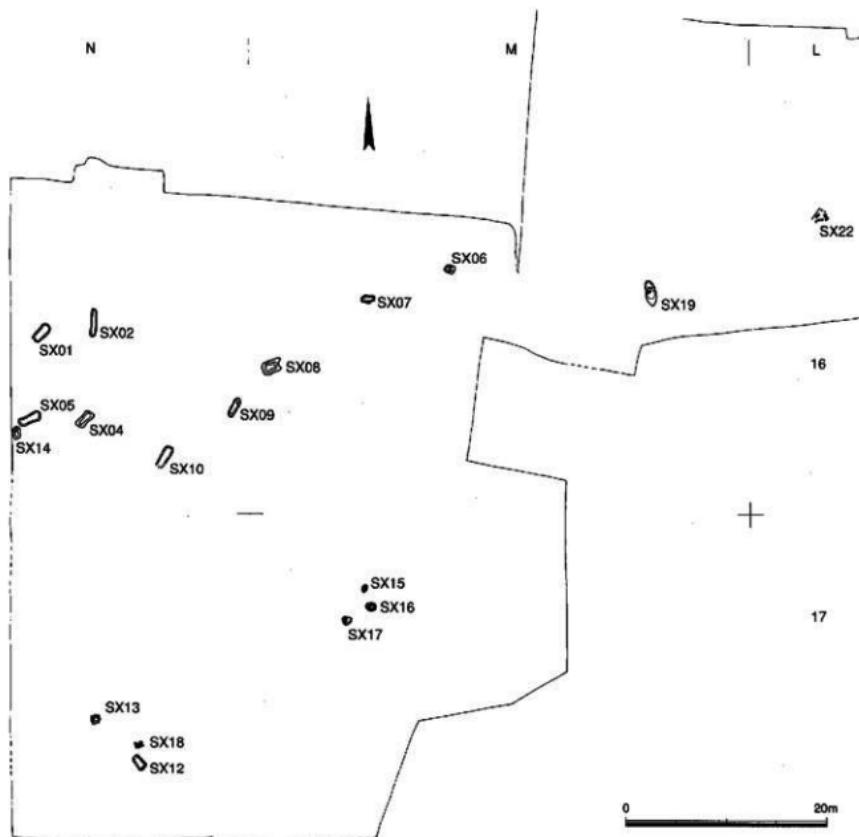


Fig. 135 吉武遺跡群 6次調査土壙群出土状況全体図

1. SX01土壤墓 (Fig. 136~139、Pl. 31)

SX01土壤墓は、S26号墳の西側周溝の内側に位置し、上軸を磁北から46度程東に振る。

その平面形は、ほぼ長方形を呈し、南側小口部がやや幅広くなる。

規模は、北辺長0.7m、南辺長0.75m前後、東辺長1.86m前後、西辺長1.8m前後を測り、隅部は丸い形状となる。

また、土壤墓の深さは0.15m程度しか残っていない。副葬遺物は、南側小口部の近くに集中して出土した。それらは玉類と鉄製刀子であり、南小口部が遺体頭部にあたると考えられる。

副葬の状況は、全長14cm程の鉄刀子が先端を南側に向け、この刀子の東側と西側に位置して勾玉2個、管玉、小玉類多数が出土している。出土状況図には全ての玉類の位置を記録できていないが、大多数の小玉類も刀子周辺より出土している。

(出土遺物) (Fig. 137~139)

(鉄刀子) (Fig. 137)

出土時は、先端部を若干欠失するが、全長14cmを測るサイズの刀子である。茎の残りもよく、身部で幅1.5cm前後を測る。

(玉類) (Fig. 138・139)

玉類は、碧玉製勾玉2点・凝灰岩製管玉11点・ガラス製小玉4点、滑石製小玉類14点である。これらは石室墳で出土した玉類の構成と比較すると滑石製小玉類が圧倒的に多く、違いは明らかである。

(勾玉) 2点が出土している。非常に類似する形状で、濃い緑色をした碧玉を使用する。いずれも片面穿孔の製品である。

(管玉) 凝灰岩製の製品11点が出土している。石材は非常に軟質で、触ると手に剥落した微粉が付く状態である。両端部を完全に残す製品はない。

(ガラス小玉) 僅か4点の出土である。色合は、コバルトブルー1点・淡い水色2点、深い水色1点である。コバルトブルー色のものは破壊している。

(滑石製小玉類) 全体に扁平な平玉様の製品が多く、色調も青灰色～黒灰色を呈する石材のものが多く見られる。

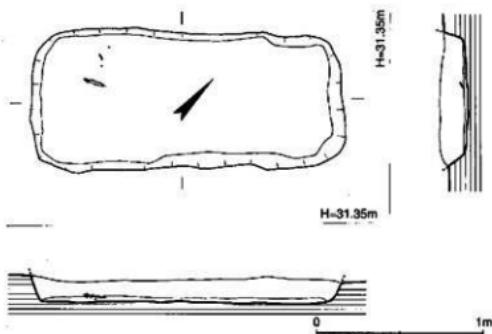


Fig. 136 6次調査SX01土壤墓出土状況実測図(1/30)

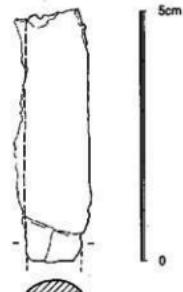


Fig. 137 6次調査SX01土壤墓出土鉄器実測図(1/1)

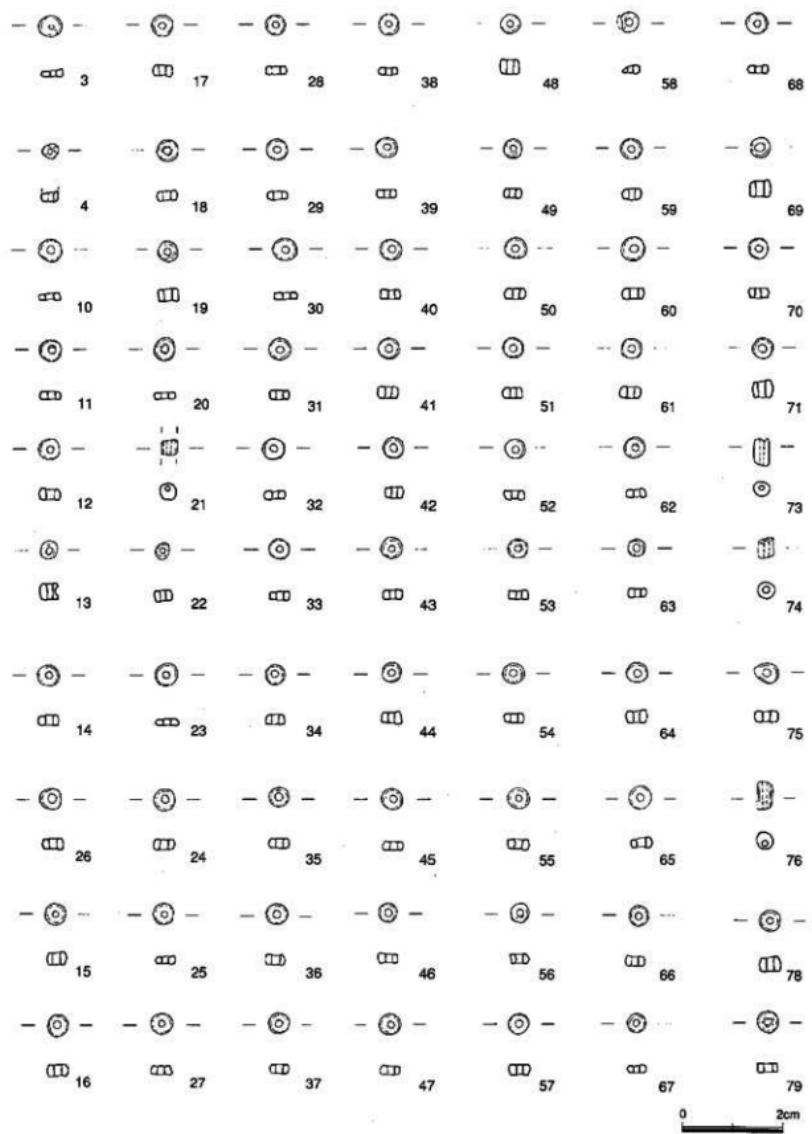


Fig. 138 6次調査SX01土墳墓出土装身具実測図(1)(1/1)

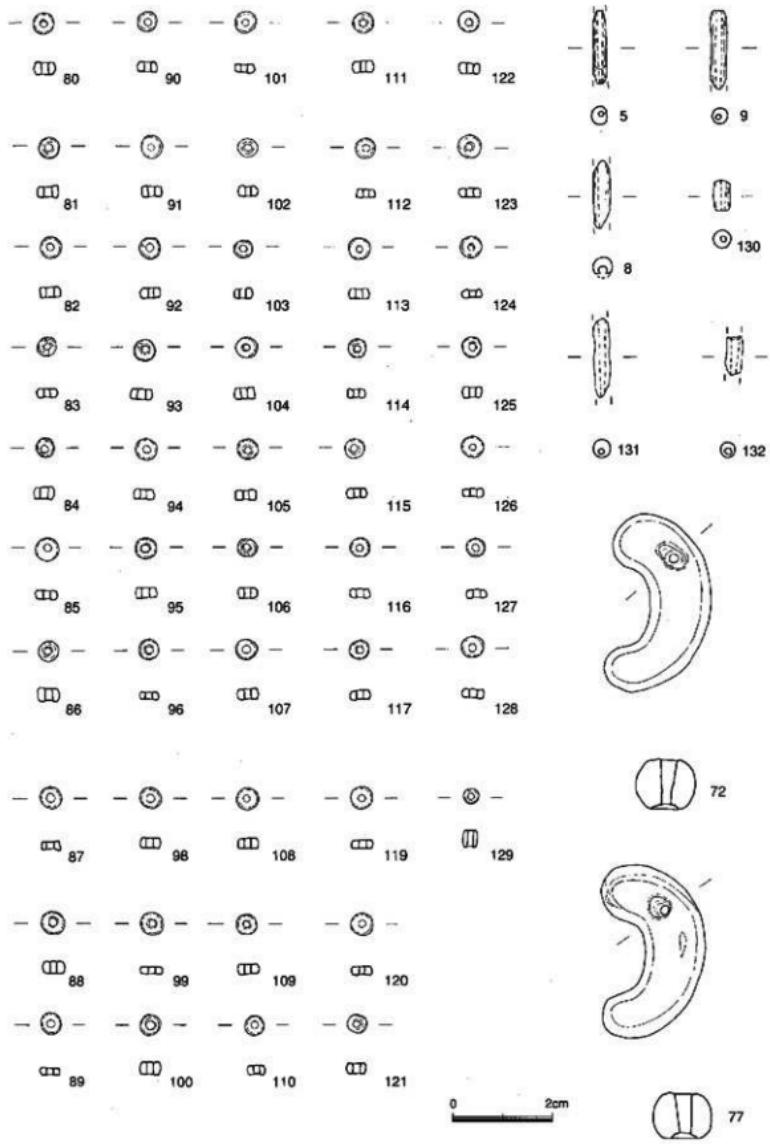


Fig. 139 6次調査SX01土壤墓出土装身具実測図(2)(1/1)

番号	形状	法量(cm)			66	平玉	2	4	1.4
		長	直径	孔径	67	平玉	1.5	3.8	1.4
1	丸玉	—	—	—	68	平玉	1.4	4.3	1.3
2	平玉	1	4	1.2	69	小玉	3.8	4.1	1.5
3	平玉	1	4	1.2	70	平玉	2	4	1.3
4	平玉	—	—	—	71	小玉	4	4	1.6
5	管玉	1.45+ α	3.5	1.5	72	勾玉	34.8	10.5	0.8
6	管玉	—	—	—	73	管玉	5.3	3.8	0.8
7	管玉	—	—	—	74	管玉	3.5	3.2	1
8	管玉	10.55+ α	3	1.5	75	小玉	2.2	4.5	1.5
9	管玉	13.5+ α	3	1.2~2	76	管玉	5.3	3.1	1
10	平玉	1.2	4.2	1.5	77	勾玉	30.4	9.3	0.8
11	平玉	1.8	4.2	1.3	78	平玉	3	4.3	1.5
12	平玉	2	4.2	1.3	79	平玉	1.9	4.3	1.3
13	小玉	3.5	3.5	1.2~1.5	80	平玉	2.2	4.2	1.6
14	平玉	2	4.2	1.2	81	平玉	2.5	4.2	1.4
15	平玉	2.2	4.3	1.3	82	平玉	2.1	4.4	1.4
16	平玉	2.2	4.3	1.2	83	平玉	1.8	4	1.7
17	平玉	2	4.2	1.2	84	平玉	2.5	4	1.4
18	平玉	1.8	4.3	1.2	85	平玉	1.8	4.5	1.1
19	平玉	2.3	4	1.5	86	平玉	2.5	3.8	1.2
20	平玉	1.2	4.2	1.3	87	平玉	1.5	4.3	1.3
21	管玉	3.3+ α	3.5	0.8~1	88	平玉	2.2	4.3	1.3
22	小玉	2	3	1.3	89	平玉	1.3	4.2	1.5
23	平玉	1.3	4.5	1.5	90	平玉	2	3.8	1.3
24	平玉	2	4.1	1.5	91	平玉	2.1	4.3	1.5
25	平玉	1.5	4.5	1.3	92	平玉	2	4	1.4
26	平玉	2.1	4.3	1	93	平玉	2	4.5	1.5
27	平玉	1.7	4.2	1.3	94	平玉	2	4.4	1.5
28	平玉	1.6	4	1.3	95	平玉	2	4.3	1.5
29	平玉	1.5	4.2	1.4	96	平玉	1.5	4	1.2
30	平玉	1.3	4.7	1.2	97	—	—	—	—
31	平玉	1.8	4.3	1.2	98	平玉	2	4.2	1.4
32	平玉	1.7	4.2	1.5	99	平玉	1.2	4.3	1.4
33	平玉	1.7	4	1.6	100	平玉	2.3	4.1	1.5
34	平玉	2	4	1.2	101	平玉	1.7	4.4	1.4
35	平玉	2	4	1.2	102	平玉	2.3	3.7	1.3
36	平玉	2	4	1.3	103	平玉	2	3.8	1.5
37	平玉	1.7	4.2	1.4	104	平玉	2.2	4.4	1.3
38	平玉	1.6	4	1.5	105	平玉	2	4.2	1.4
39	平玉	1.7	4	1.5	106	平玉	2	3.7	1.4
40	平玉	2	4.1	1.2	107	平玉	2.1	4.2	1.5
41	平玉	2.2	4.2	1.3	108	平玉	2	4.1	1.4
42	平玉	2.2	4.2	1.3	109	平玉	2	4.2	1.4
43	平玉	1.8	4.2	1.6	110	平玉	1.8	3.8	1.3
44	平玉	2.3	4	1.2	111	平玉	2.2	4.2	1.4
45	平玉	1.9	4	1.2	112	平玉	1.7	4	1.5
46	平玉	1.9	4.1	1.3	113	平玉	2	4.2	1.3
47	平玉	1.8	4	1.5	114	平玉	1.8	3.8	1.5
48	平玉	3	4	1.5	115	平玉	1.8	4	1.3
49	平玉	2	3.8	1	116	平玉	1.7	3.9	1.3
50	平玉	2.2	4.2	1.2	117	平玉	2.2	4	1.5
51	平玉	2	4	1.4	118	平玉	2	4.2	1.2
52	平玉	1.8	4.2	1.2	119	平玉	1.8	4.5	1.4
53	平玉	1.8	3.9	1.4	120	平玉	1.8	4.4	1.5
54	平玉	2	4.3	1.4	121	平玉	2.1	3.8	1.4
55	平玉	1.7	4.4	1.2	122	平玉	2.2	4.3	1.3
56	平玉	1.7	3.8	1.3	123	平玉	1.7	4.4	1.5
57	平玉	2	4.3	1.3	124	平玉	1.4	4.2	1.4
58	平玉	1.5	4.2	1.5	125	平玉	2.1	3.9	1.5
59	平玉	2	4.2	1.5	126	平玉	1.7	4.4	1.5
60	平玉	2.1	4.5	1.3	127	平玉	1.6	3.8	1.5
61	平玉	2.2	4.2	1.3	128	平玉	1.9	4.2	1.3
62	平玉	1.8	4.1	1.5	129	小玉	2.3	3.1	1.2
63	平玉	2	3.8	1	130	管玉	6	3.5	0.8~1
64	平玉	2.7	4	1.8	131	管玉	16.3+ α	3.7	1.5
65	平玉	2	4.4	1.3	132	管玉	7.8	2.8	1.2

Tab. 4 M-N16地区SX01土壤层出土装身具一覽

2. SX02土壤墓 (Fig. 140~142, Pl. 32)

SX02土壤墓は、S26号墳の北側に設けられた陸橋部に位置し、主軸をほぼ南北にとる。

土壤墓の平面形は、細長い隅丸の長方形を呈する。その規模は、中央部で全長2.62m、南小口部で0.53m、北小口部で0.38mを測り、南側小口部が幅広い。土壤の深さは、0.18~0.15m程度で、床面は殆ど平坦である。

副葬遺物は、南小口部の0.5m四方の範囲に集中して出土しており、こちらが遺体の頭部であったと考えられる。

南側小口部の玉類の出土状況は、土壤の東側壁近くに0.25mの間隔をもって滑石製勾玉2個が出土しており、このうち北側の勾玉には長方形のペンダント状製品が作うことから、玉類は2連であったと考えることができる。

(出土遺物) (Fig. 141・142)

出土遺物は、全て玉類である。前記のように玉類は2連であったと考えることができるが、出土状況図に示していない玉類も多く、総数で198点が出土した。

その構成は、勾玉2点、長方形のペンダント状製品1点、扁平な平玉様の小玉195点であり、何れも滑石製である。

(勾玉) 青灰色を呈する滑石を使用する2点が出土している。

何れも腹側に両側からのケズリで稜を残し、研磨による平滑作業は施されていない。穿孔は片面からである。

(長方形ペンダント) 黒灰色の滑石を使用した製品である。やや幅が広がる長方形をなし、各辺ともに面取りがなされる。勾玉・小玉類と組み合い一連をなす。

(小玉類) 青灰色~黒灰色を呈する滑石を使用する製品である。直徑に対して厚みの小さい平玉様のものが多く、切断による大量製作を示している。玉側辺部は何れも滑らかに研磨され、丸味をもつ製品も少なくない。

SX02土壤墓では、2連と考えられる玉類が出土したが、全てが滑石製品であり、これらが葬送儀礼にともなって準備されたものである可能性が考えられる。

また、SX01においても碧玉製勾玉や凝灰岩製管玉などの石材使用の玉類とともに多くの滑石製玉類が出土しており、こちらも合わせて連をなすか或いは別の連として準備された可能性がある。

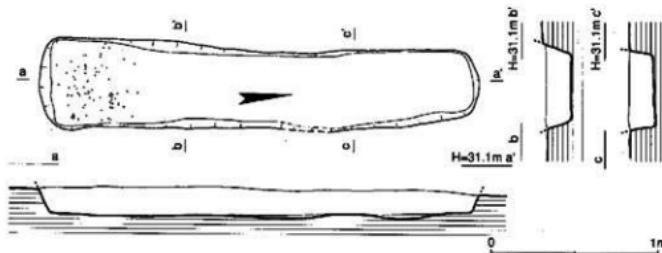


Fig. 140 6次調査SX02土壤墓出土状況実測図(1/30)

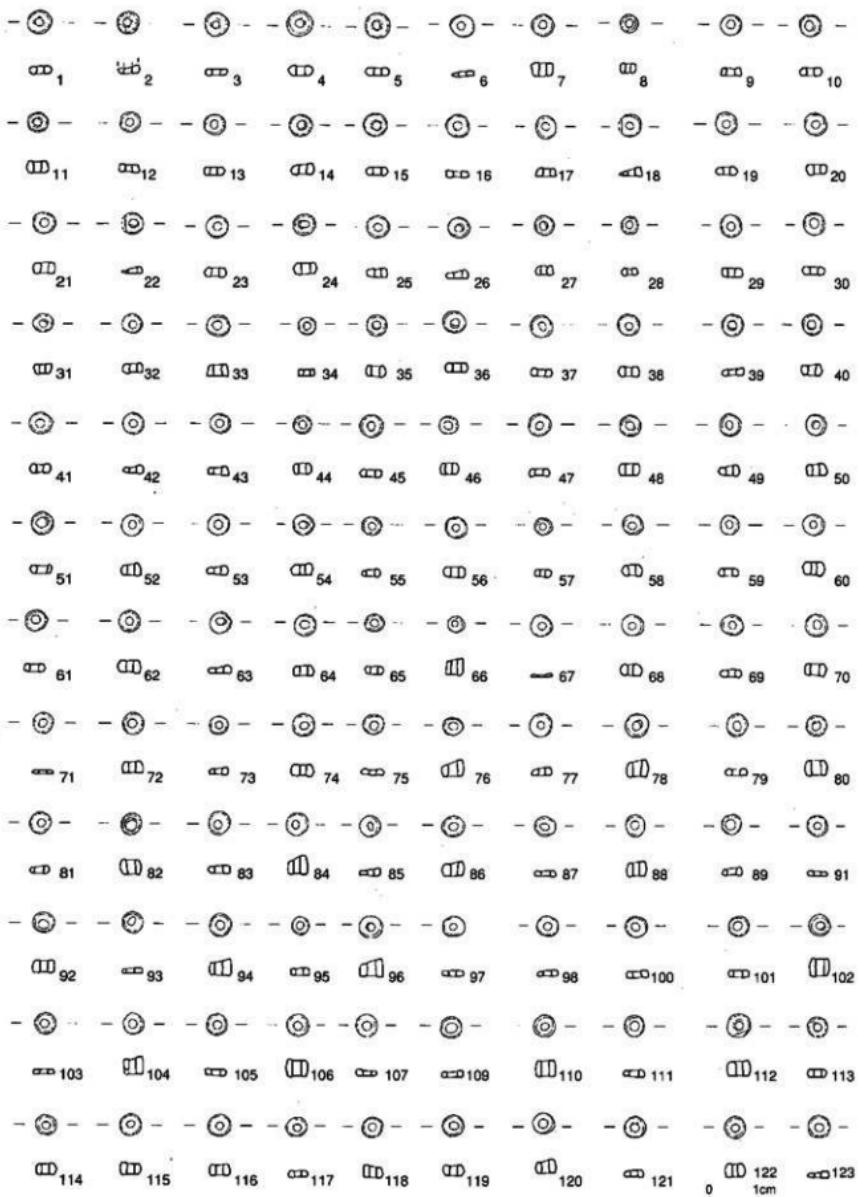


Fig. 141 6次調査SX02土壤墓出土装身具実測図(1)(1/1)

- ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ -
 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133
 - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ -
 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143
 - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ -
 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153
 - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ -
 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163
 - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ -
 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173
 - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ -
 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183
 - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ -
 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193
 - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ - - ◎ -
 194 195 196 197 198

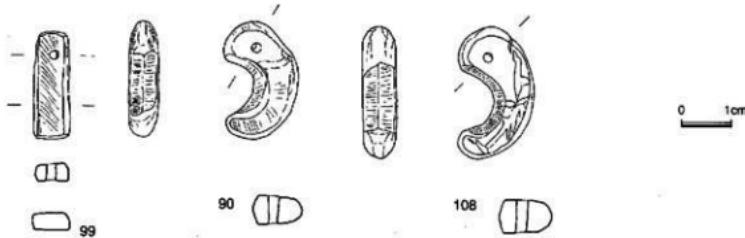


Fig. 142 6次調査SX02土壤基出土器身具実測図(2)(1/1)

番号	形状	法量(mm)			66	小玉	3.5	3.8	1.5	133	平玉	1.2	4	2
		長	直径	孔径										
1	平玉	1.2	4.4	1.5	68	平玉	0.8	4.2	1	134	小玉	2.2	4	1.7
2	平玉	1.8	4.2	1.5	69	平玉	1.5	4.3	1.5	135	平玉	2	4.3	1.4
3	平玉	1.4	4.5	1.5	70	小玉	2.2	4.4	1.5	136	小玉	2.6	4	1.5
4	平玉	2	4.8	1.5	71	平玉	0.7	4	1.2	138	小玉	2.5	4	1.5
5	平玉	1.8	4.7	1.5	72	小玉	2.3	4.5	1.6	139	平玉	1.3	4.2	1.5
6	平玉	1.2	4.5	1.5	73	平玉	1.2	3.8	1.4	140	小玉	2.7	4.2	1.5
7	小玉	2.3	4.8	1.8	74	小玉	2.3	4.3	1.4	141	平玉	1.8	4	1.7
8	平玉	2	3.8	1.5	75	平玉	1.2	4.2	1.6	142	小玉	2.2	4.2	1.8
9	平玉	1.8	4	1.5	76	小玉	3.2	3.9	1.5	143	平玉	1.5	4	1.8
10	平玉	1.6	4.2	1.8	77	平玉	1.5	4.2	1.6	144	小玉	2.2	4.5	1.7
11	小玉	2.5	4	1.5	78	小玉	3.2	4.5	1.5	145	平玉	1.5	4.3	1.3
12	平玉	1.5	4.2	1.5	79	平玉	1.2	4.2	1.5	146	小玉	2.2	4.2	1.2
13	平玉	1.8	4.2	1.5	80	小玉	3	4.2	1.5	147	平玉	1.9	3.8	1.6
14	小玉	2.3	4.3	1.5	81	平玉	1.5	4.2	1.8	148	小玉	2.5	4.5	1.2
15	平玉	1.6	4.5	1.3	82	小玉	3	4.1	2	149	平玉	1.6	4.2	1.5
16	平玉	1.3	4.2	1.4	83	平玉	1.6	4.2	1.5	150	小玉	2.2	3.8	1.2
17	平玉	1.8	4.3	1.5	84	小玉	3.8	4.2	1.6	151	平玉	1.5	4.2	1.2
18	平玉	1.5	4.2	1.2	85	平玉	1.5	4.2	1.5	152	平玉	1.8	4.2	1.5
19	平玉	1.8	4.5	1.5	86	小玉	3	4.2	1.5	153	平玉	1.5	4.2	1.5
20	平玉	2	4.2	1.3	87	平玉	1.2	4.2	1.6	154	平玉	2.1	4.2	1.5
21	平玉	2.1	4.2	1.4	88	小玉	2.9	4	1.3	155	平玉	2.1	4.7	1.5
22	平玉	1.2	4.1	1.2	89	平玉	1.5	4	2	156	平玉	2	4.3	1.8
23	平玉	2	4.2	1.3	90	勾玉	232	8	1.8	157	平玉	2	4	1.4
24	平玉	2.2	4.3	2.3	91	平玉	1	4.2	1.8	158	平玉	2.1	4.3	1.5
25	平玉	1.8	4.2	1.5	92	小玉	2.5	4.2	1.8	159	平玉	1.3	4.1	1.5
26	平玉	1.8	4.2	1.6	93	平玉	1.2	4.2	1.7	160	平玉	1.2	4.2	1.5
27	平玉	2	3.8	1.5	94	小玉	3.2	4.2	1.5	161	平玉	1.7	4.3	1.5
28	平玉	1.5	3.7	1.3	95	平玉	1.4	3.5	1.5	162	平玉	1.8	4.4	1.5
29	平玉	1.8	4.3	1.3	96	小玉	3.2	4.5	1.3	163	平玉	1.6	4.4	1.4
30	平玉	1.6	4.3	1.5	97	平玉	1.2	4	1.5	164	平玉	1.5	4.3	1.5
31	平玉	2	3.8	1.5	98	平玉	1.2	4.2	1.5	165	平玉	2	4.2	1.5
32	平玉	2.2	4	1.8	99	長方形ペンドント	212	3.8	1.5	166	平玉	2.1	4	1.6
33	平玉	2.1	4.2	1.8	100	平玉	1.2	4.2	1.7	167	平玉	2	4.4	1.5
34	平玉	1.5	3.6	1.5	101	平玉	1.3	4.2	1.5	168	平玉	1.8	4.8	1.6
35	平玉	2	4	1.5	102	小玉	3.5	4.2	1.8	169	平玉	2.3	4.4	1.6
36	平玉	2	4	1.8	103	平玉	1	3.9	1.7	170	平玉	1.8	3.8	1.4
37	平玉	1.8	4.3	1.5	104	小玉	3.4	4	1.8	171	平玉	2.1	4.3	1.5
38	平玉	2	4.3	1.3	105	平玉	1.2	4	1.6	172	平玉	1.8	3.8	1.6
39	平玉	1.7	4.3	1.5	106	小玉	3.2	4.2	1.8	173	平玉	1.5	4.3	1.5
40	平玉	2.2	4.1	1.5	107	平玉	1	4.2	1.6	174	平玉	1.7	3.8	1.6
41	平玉	1.8	4.2	1.5	108	勾玉	30.5	6.5	1.3	175	平玉	1.7	4.3	1.8
42	平玉	1.8	4.2	1.5	109	平玉	1.4	4.5	1.6	176	平玉	2.1	4.2	1.5
43	平玉	1.8	4	1.5	110	小玉	3.2	4.5	1.5	177	平玉	1.8	4.2	1.6
44	平玉	2.2	3.5	1.5	111	平玉	1.3	4	1.5	178	平玉	1.2	4	1.4
45	平玉	1.3	4.2	1.6	112	小玉	3.2	4.7	1.7	179	平玉	1.6	4.3	1.5
46	小玉	2.5	3.8	1.5	113	平玉	1.5	4.2	1.6	180	平玉	1.7	3.8	1.7
47	平玉	1.5	4.2	1.2	114	小玉	2.2	4.3	1.8	181	平玉	1.7	4.2	1.6
48	小玉	2.5	4	1.5	115	平玉	1.3	4.3	1.7	182	平玉	1.7	4.1	1.4
49	平玉	2	4.2	1.8	116	小玉	2.3	4.4	1.5	183	平玉	1.1	4.1	1.4
50	小玉	2.5	4.2	1.4	117	平玉	1.3	4.2	1.3	184	平玉	1.3	4.3	1.4
51	平玉	1.8	4.2	2	118	小玉	2.5	4.2	1.6	185	平玉	2	4.2	1.6
52	平玉	2.3	4.2	1.2	119	平玉	2	4.2	1.4	186	小玉	3	4.2	1.4
53	平玉	1.9	4.3	1.5	120	小玉	2.8	4.3	1.2	187	平玉	1.7	4.3	1.6
54	小玉	2.3	4.2	1.3	121	平玉	1.4	4.4	1.5	188	平玉	2.4	3.6	1.5
55	平玉	1.6	3.9	1.5	122	小玉	2.6	4.3	1.5	189	小玉	2.5	3.9	1.3
56	小玉	2.2	4.3	1.5	123	平玉	1.2	4.5	1.5	190	平玉	1	3.9	1.5
57	平玉	1.5	3.5	1.3	124	小玉	2.5	4.1	1.5	191	小玉	2.5	4.8	1.5
58	小玉	2.2	4.3	1.5	125	平玉	1.5	4.5	1.5	192	小玉	2.9	4.3	1.8
59	平玉	1.4	3.7	1.5	126	小玉	3.2	4.2	1.5	193	平玉	1.3	3.5	1.6
60	小玉	2.8	4.1	1.6	127	平玉	1.2	4.1	1.4	194	平玉	1.4	4.2	1.7
61	平玉	1.4	4.2	1.5	128	小玉	2.2	4.7	1.5	195	平玉	1.9	4.5	1.6
62	小玉	2.5	4.2	1.5	129	平玉	2	4.2	1.5	196	平玉	2.2	4.2	1.5
63	平玉	1.3	4.2	1.5	130	小玉	2.5	3.8	1.5	197	平玉	2	4.3	1.5
64	小玉	2	4.3	1	131	平玉	2	4.1	1.4	198	平玉	1.4	4.1	1.7
65	平玉	1.5	3.5	1.5	132	小玉	2.5	3.9	1.2					

Tab. 5 M・N16地区SX02土壤墓出土装身具一覧

3. SX04土壙墓 (Fig. 143, Pl. 33)

SX04は、M・N16地区のS26号墳南側で検出された土壙墓である。土壙は主軸を、磁北から40度ほど東側に振っている。

土壙の平面プランは、北側がやや幅広い隅丸の長方形をなす。土壙の規模は、長辺で3.65m、北側小口幅0.82m、南小口幅0.64m程度を測り、北小口側が底面においても広がっており、頭位を求めるにすれば北側であったと思われる。残存する深さは、0.3~0.4mを測る。

土壙内からは原位置を保った副葬遺物は出土していないが、覆土内から土師器の甕・壺の破片が出土していることから古墳時代後期の土壙墓と考えてよいと思われる。

4. SX05土壙墓 (Fig. 144)

SX05土壙墓は、S26号墳の南西側に位置

し、主軸を磁北から80度程度東に振った方向にとり、ほぼ東西方向に向いている。

土壙の平面プランは、隅丸のいびつな長方形をなす。東側の小口部は形状が不安定で、西側小口部は直線的にまとまっている。

土壙のサイズは、長軸長2.25m、東小口部幅0.7m、西小口部幅0.7mを測り、残存する深さは0.2m程度である。底面は、西側がやや高く、東側にしたがって緩く傾斜する。

土壙覆土内からの副葬品は土器類を含めて出土していないが、時期不詳の土器片が少量出土したにとどまった。また、棺内床面から胸骨・手骨・足骨などの破片が出土している。

5. SX06土壙墓 (Fig. 145, Pl. 33)

SX06土壙墓は、S4号墳の周溝内側のII墳丘内に位置し、主軸は磁北から80度ほど西に振れる。土壙の平面プランは、しっかりした隅丸の長方形をなす。中央部にある小ピットは上部から掘り込まれた新しい時期のものである。土壙の壁面はほぼ垂直で、掘り方にも手慣れた様子が窺える。

土壙の規模は、北辺長0.8m、南辺長0.95m、東辺長0.57m、西辺長0.54mを測り、残存する深さは、

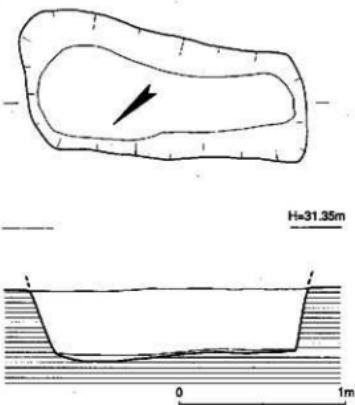


Fig. 143 6次調査SX04土壙墓出土状況実測図(1/30)

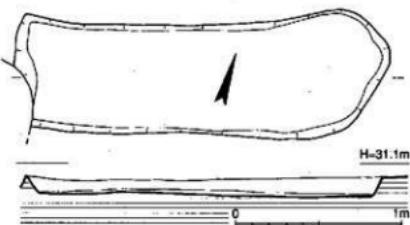


Fig. 144 6次調査SX05土壙墓出土状況実測図(1/30)

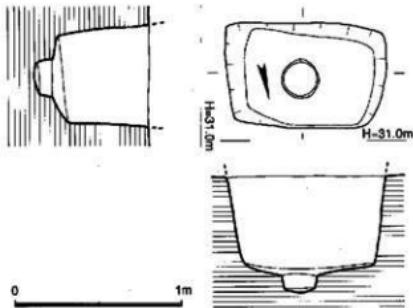


Fig. 145 6次調査SX06土壙墓出土状況実測図(1/30)

6. SX07土壙墓 (Fig. 146)

SX07土壙墓は、S4号墳の陸橋部に位置し、主軸を磁北から東に80度強振り、ほぼ東西方向に向いている。

土壙の平面プランは、隅丸の長方形をなす。土壙の規模は、長軸線長が1.37mで、東側小口幅0.5m前後、西側小口幅0.43mを測る。また、残存する深さは、0.5~0.55m程度である。

土壙内からの副葬品は出土していないが、覆土内から土師器・須恵器の壺・壺・ハソウなどの細片が出土しており、古墳時代後期遺構と考えて良いと思われる。

7. SX08土壙墓 (Fig. 147)

SX08土壙墓は、S25号墳の南側に位置し、主軸を磁北から70度ほど東に振る。

土壙の平面プランは、東側の小口部分を失っているが、やや西側の小口幅が広い隅丸長方形をなすと考えられる。

土壙の規模は、残存長軸長2.003m以上、西側小口幅1m、東側小口部に近い部分で0.85mを測り、残存する深さは0.85m強程度である。東側小口部は、弥生時代堀塁墓掘り方との重複があり、形状は不詳である。

土壙掘り方の壁面はかなり斜めに傾斜しており、底面は平坦である。また、底面も西側の小口部が広く、頭位を求めれば西側と考えることができる。

0.55m前後である。埋葬遺構としてはやや小規模である。

上壙内からの副葬遺物は全く見つかっていないが、覆土中より土師器・須恵器の壺や杯の小破片が出土しており、古墳時代遺構として考えることができ。

SX06土壙墓と次に述べるSX07との位置関係は、前のSX01・02がS26号墳の周溝内側と陸橋部に位置していることと類似し、共通する配置であるかも知れない。

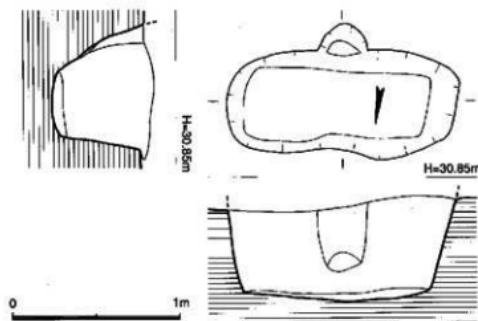


Fig. 146 6次調査SX07土壙墓出土状況実測図(1/30)

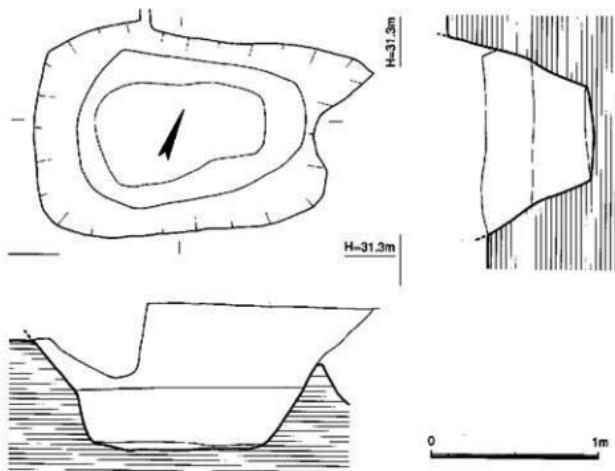


Fig. 147 6次調査SX08土壙墓出土状況実測図(1/30)

8. SX09十壙墓 (Fig. 148)

SX09上壙墓は、S3号墳の北側に位置し、主軸を磁北から28度程東に振った方向にとる。上壙の平面プランは、両小口が直線をなさず、やや尖る形状となる長方形である。土壙の規模は、長軸長2.04m、北側小口幅0.6m、南側0.5mを測り、残存する深さは0.35~0.4mである。また、土壙内の両小口部には花崗岩礫が置かれ、南側小口では壁に密着して置かれる。

これらは他の出土例から木棺を据える棺台の役割を持った施設であろう。

棺内からは副葬遺物は出土していない。

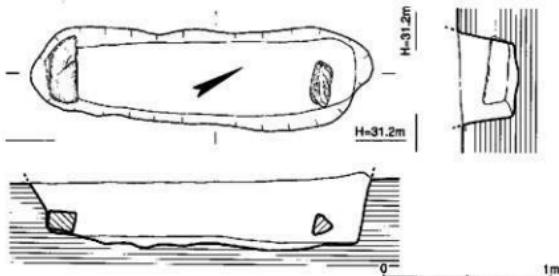
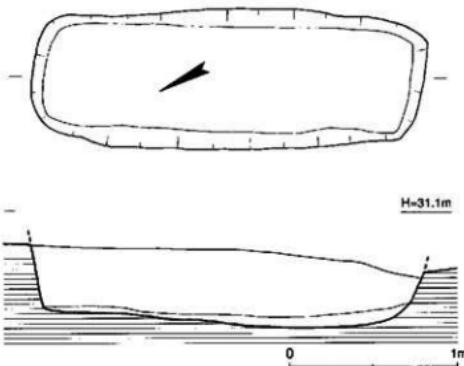


Fig. 148 6次調査SX09土壙墓出土状況実測図(1/30)

9. SX10土壙墓 (Fig. 149, Pl. 34)

SX10土壙墓は、S3号墳の北西側に位置し、主軸を磁北から30度ほど西側に振った方向にとる。上壙の平面プランは、均整な長方形である。土壙の規模は、長軸長が2.34m、北側小口幅が0.7m、南側小口幅が0.65mを測り、残存する深さは0.35~0.4m程度である。

土壙掘り方の壁面は、南側小口部では緩く、北側では直線的な掘り方となっている。このことから



埋葬の頭位を求めるにすれば北側となろう。

土壇内からは副葬された遺物は出土していないが、覆土内から土師器・須恵器の壺・壺・ハソウの鱗片が出土していることから、古墳時代後期頃の土壇墓と考えられよう。

Fig. 149 6次調査SX10土壇墓出土状況実測図(1/30)

10. SX12石棺墓 (Fig. 150・151、Pl. 34)

SX12石棺墓は、S8号墳の周溝西側に位置し、主軸は磁北から西へ42度ほど振った方向にとる。石棺墓は、南側の小口および東側壁の石材を残すのみである。

南側小口と東側壁との隅部および北側隅には白色粘土を詰めている。

石棺墓は、掘り方が南側小口が広く、北側の狭いバチ形を呈する。その規模は、長軸長1.5m、南小口幅0.85m、北小口幅0.7mであり、底面に石材埋置のための幅0.15~0.20m程度の溝がめぐる。棺材の残る東側壁は2石を使用し、変成岩系の板石である。石棺南東隅の白色粘土上から須恵器破片が出土している。

(出土遺物) (Fig. 151)

05523は、石棺内から出土した須恵器杯蓋の破片である。大井部を欠失する。天井部の一部は灰かぶり。口縁部はほぼ直立し、端部が折れて外側にはみ出る。また、内端部は、緩く齊んで、明瞭な段をなす。大井部との境は、緩く沈線状に盛んで、段をなす。

また、口縁部内端部付近はヘラ削りを加える。

器色は、外面が黒灰色で、内面暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も緻密である。口径15.6cm、残存器高4.4cmを測る。

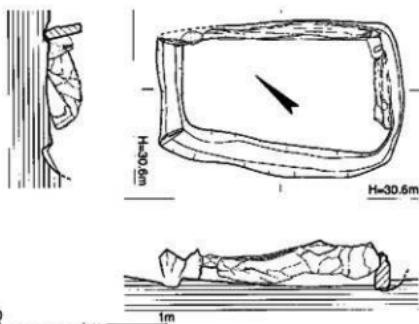


Fig. 150 6次調査SX12石棺墓出土状況実測図(1/30)



Fig. 151 6次調査SX12石棺墓出土
土器実測図(1/4)

11. SX13石棺墓 (Fig. 152・153、Pl. 35)

SX13石棺墓は、S9号墳の南側周溝内に位置し、主軸をほぼ東西方向にとる小形の石棺である。蓋石を失うが、北壁が2石、南壁1石、東西小口がそれぞれ1石で構築され、床にも板石1枚を敷いている。北側壁には2段目の石材が残る。

内部の規模は、東西長0.7m、南北長0.45m、深さ0.25mほどのもので、北壁寄りの床面から副葬品と考えられる須恵器直口壺1個が出土した。

(出土遺物) (Fig. 153)

05524は、石棺内床面出土の須恵器直口壺である。肩の張る胴部に短い直立する口縁部を付する。口縁端部内面は小さい段をなす。

外面口縁部～胴肩部および胴部内面にヨコナデで、胴部最大径以下は回転ヘラ削りである。器色は、内外面ともに淡灰色を呈する。

胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径7.2cm前後、器高8.2cm前後を測る。

12. SX14甕棺墓 (Fig. 154・155)

SX14甕棺墓は、S9号墳の南側周溝の外縁に位置する。甕棺墓は、ほぼ南北方向に掘られた長辺0.95m、短辺0.7mを測る隅丸長方形の墓壙内に大型平底甕と口縁打ち欠きの組み合わせで呑口式に埋置されている。

口縁打ち欠きの上臺の横には角櫛が添えられている。

(出土甕) (Fig. 155)

(上 横) 05525は、口縁部を完全に打ち欠いた土師器甕である。全体に薄づくりで、底部はやや尖り気味である。約1/2が残る。

器面調整は、外面に非常に細かいハケメ調整を施し、内面は底部から削る丁寧なヘラ削りである。また、外面は全面に赤色顔料を塗布する。頸部付近に黒斑が見られる。胎土は密で焼成も緻密である。胴部最大径27cm、器高23.7cmを測る。

(下 横) 05526は、全体に重量感のある厚手の土師器甕である。

胴部は肩の位置が高く、内湾気味に外開する分厚い口縁部を有する。また、底部は器壁が3cmを超える分厚いもので、不安定な平底をなし、中央部は緩く窪む。

器面調整は、口縁部内外面ともにヨコナデで、胴部外面は短く、細かいハケメを全面に施す。また、内面は、胴部中位の一部に荒い斜め方向のハケメを残すが、他はヘラ状のものでナデ調整を施す。

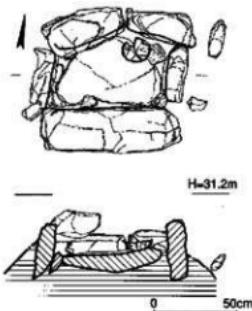


Fig. 152 6次調査SX13石棺墓
出土状況実測図(1/30)

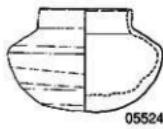


Fig. 153 6次調査SX13出土
土器実測図(1/40)

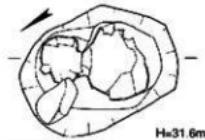


Fig. 154 6次調査SX14甕棺墓
出土状況実測図(1/30)

器壁が厚いためか内底部には全面にオサエの指頭痕がびっしりと残る。

器色は、外面が暗褐～暗赤褐色を呈し、内面は黒灰色である。胴部の肩以下には焼成時の大黒斑が見られる。生地は黒色で、焼成時の火が回っていない。胎土は粗で、焼成も軟質である。口径25.2cm、頸部径21cm、胴部最大径45.8cm、底部径14cm、器高51cmを測る。

13. SX15壺棺墓 (Fig. 156・157, Pl. 35)

SX15壺棺墓は、S11号古墳の西側周溝内で検出された。

壺棺墓は、主軸を磁北から東へ22度ほど振った方向にとる。

壺棺墓は、かなりの削平を受けているが、南北長が0.6m、東西長が0.4mを測る長楕円形の墓壇に下壇に長脛の壺、上壇に小形壺を呑口にしてほぼ水平に埋置している。

このSX15壺棺墓の南側には近接してSX16・17の2基の壺棺があり、

S11号周溝内での一群を形成しているものと考えられる。

(上 棺) 05527は、口縁部が殆ど外方に開かず、殆ど直立し、重心の低い上部器蓋である。

底部は不安定な平底ををなし、中央部に向かって浅く斜む形態となる。

器面調整は、口縁部の内外面が丁寧なヨコナデ調整である。また、外面の頸部以下では下方に向かっ

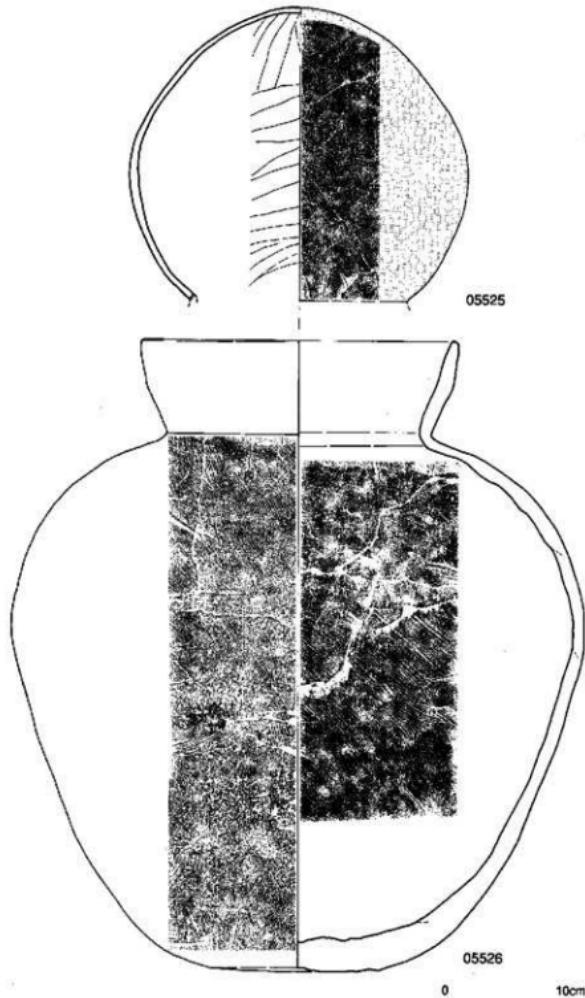


Fig. 155 6次調査SX14壺棺実測図(1/4)

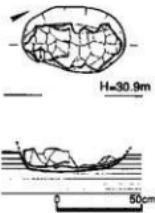


Fig. 156 6次調査SX15号棺墓
出土状況実測図(1/30)

ての細かいヘラ削りを施し、底部附近では斜め方向のやや大振りなヘラ削りとなる。

また、外底部にはオサエの指頭痕が残る。胴部内面は、底部から上方に向かって削り上げる粗めのヘラ削りを加える。器色は、外表面が黒褐色～暗赤褐色を呈し、内面は暗褐色となる。

また、外底部を除く内外面全体には黒色顔料の塗布が認められる。これは土器を立てた状態で顔料を塗布したこと示している。胎土は、密で、焼成も堅緻である。口径16.4cm、頸部径14.5cm、底部径6.5cm、器高23.5～23.8cmを測る。

(下 棺) 05528は、胴部の膨らみの小さい土師器壺である。底部を欠失する。口縁部は、緩く外方に開き、頸部と胴部との境は非常に不明瞭である。胴部の下半に外面から二次穿孔が見られる。

器面調整は、口縁部の内外面に丁寧なヨコナデが施される。また、胴部外表面は頸部以下をヘラ状の工具を使って丁寧にナデ調整を加え、器面を平滑に仕上げている。また、胴部内面は底部から上方に向かって削り上げる幅広のヘラ削りを加えている。

器色は、胴部外表面の肩部が赤褐色を呈する以外は全面に淡黄褐色である。また、頸部付近には小さい黒斑が多く見られる。内面は淡褐色を呈する。胎土は、やや粗で、焼成も堅緻である。口径20.4cm、残存器高35.2cmを測る。

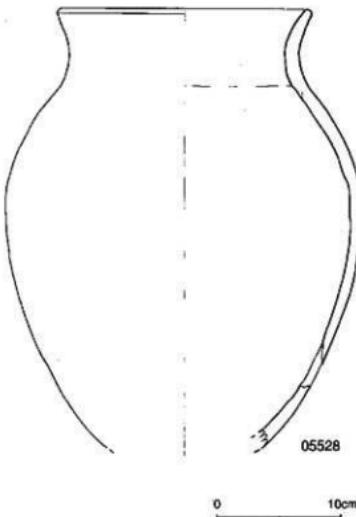
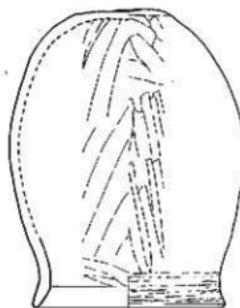


Fig. 157 6次調査SX15号棺実測図(1/4)

14. SX16壺棺墓 (Fig. 158・159)

SX16壺棺墓は、S11号墳の西側周溝内に位置し、SX15壺棺墓の南に隣接する。壺棺は、ほぼ東西方向にむく 0.92×0.76 m 規模の長円形墓壙内に上棺に把手付き壺、下棺に平底の長胴壺を使用して覆口式に合わせて埋置する。

棺に使用する土器の埋置にあたっては、墓壙の底面に径が 0.1 ~ 0.15m 程度の縁を底面径に沿って並べており、いわば棺台の施設であろう。墓壙は削平をかなり受けているが、現状では 2 段の掘り方となっている。

(壺 棺) (Fig. 159)

(上 棺) 05529は、緩く外開する口縁部に不安定な平底をもつ土師器壺で、胴部中位に上向きの把手を付する。外面は殆ど全面の器壁が剥落しているが、ヘラナデを施している加能性が高い。内面は底部からのヘラによるナデ上げが見られる。器色は、内外面ともに暗褐色を呈する。胎土は粗で、焼成は軟質である。口径 26cm、器高 20.5cm を測る。

(下 棺) 05530は、緩く開く口縁部と不安定な小さい底部をもつ土師器壺である。胴部の中位に外からの二次穿孔が見られる。器面調整は、口縁部内外面がヨコナデで、胴部は底部下端までヘラ状工具による縦方向の丁寧なナデ調整である。また、胸部内面も底部方向からのヘラナデで器面を平滑に仕上げる。器色は、外面暗褐色で、内面は赤褐色を呈する。胎土は粗で、焼成も軟質である。口径 20cm、器高 37.7cm 前後を測る。

15. SX17壺棺墓

(Fig. 160・161, Pl. 36)

SX17壺棺墓は、S11号墳の西側周溝内に位置し、SX15・16壺棺墓

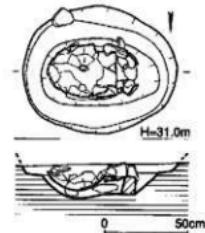


Fig. 158 6次調査SX16壺棺墓出土状況実測図(1/30)

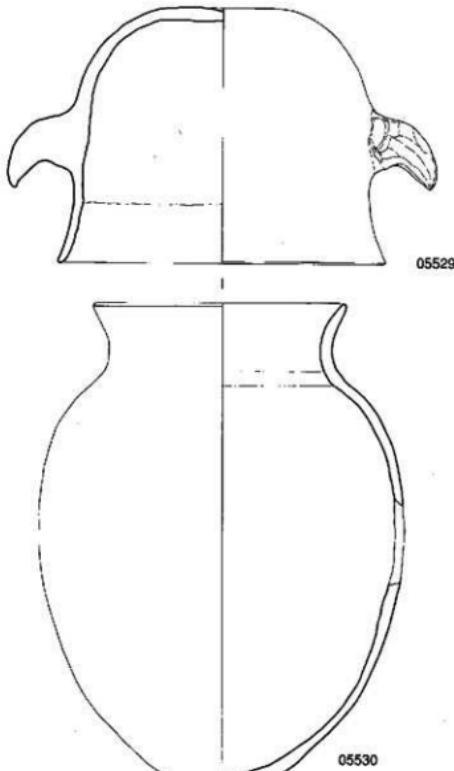


Fig. 159 6次調査SX16壺棺実測図(1/4)

とも近接する。壺棺は、ほぼ南北方向に主軸をとる 0.65×0.4 m規模の長円形墓壙内に口縁部を打ち欠いた小形壺を上棺に、胸部の張る壺を下棺として接口式に合わせて埋置している。

(壺 棺) (Fig. 161)

(上 棺) 05531は、二次焼成による器面の剥落が著しい上部器壺である。外面は擬格子タタキで、内面には平行する細かいアテ具痕が残る。器色は、外面が暗褐色～暗赤褐色、内面暗褐色を呈する。胸部最大径15.6cmを測る。

(下 棺) 05532は、緩く外開する口縁端部が須恵器に似る土師器壺である。

器面調整は、口縁部内外面ともにヨコナデで、外面は擬格子タタキ後にカキ目を施す。また、内面には荒い平行のアテ具痕が明瞭に残る。底部付近に内面からの二次穿孔が見られる。器色は、口縁部付近が赤褐色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径22cm、器高35.5cmを測る。

16. SX18壺棺墓 (Fig. 162・163、Pl. 36)

SX18壺棺墓は、S 9号墳の南側周溝の外縁付近に位置する。

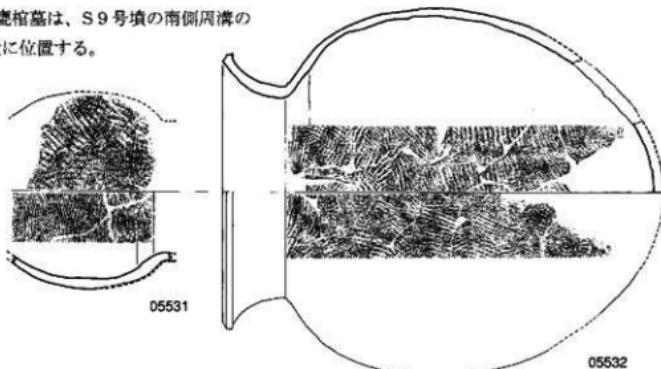


Fig. 161 6次調査SX17壺棺実測図(1/4)

壺棺は、墓壙の掘り方が明瞭ではないが、ほぼ同型の壺を接口式に合わせて埋置しており、周辺には安定のための礫が副葬されている。また、丸底の小壺が副葬されている。

(壺 棺) (Fig. 163) 上棺の05533・下棺の05534の土師器壺は口縁部が立ち、器面調整もヘラ状工具で外面をナデ、内面は底部からのヘラ削りと共通する特徴をもつ。また、上下棺共に外面に黒色顔料を塗布している。

(副葬土器) 05688は、扁球状の胸部に緩く立ち上がる長い口縁をもつハソウ様の小壺である。胸部下半にはヘラ削りを施す。



Fig. 160 6次調査SX17壺棺
出土状況実測図(1/30)

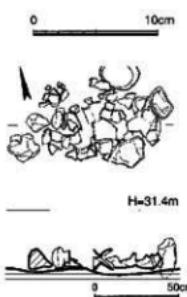


Fig. 162 6次調査SX18壺棺墓
出土状況実測図(1/30)

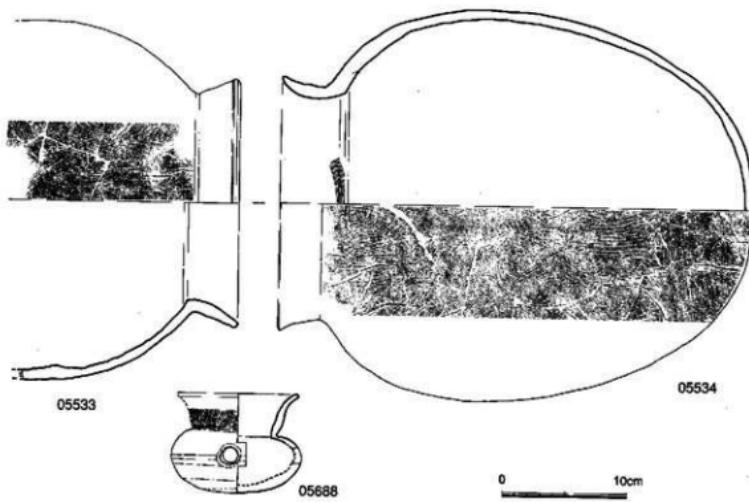


Fig. 163 6次調査SX18壺棺・副葬土器実測図(1/4)

外面および口縁部内面には黒色顔料を塗布する。口縁部外面には波状文の習作であろうか棒状の器具で上下方向に短直線帯がめぐる。口径9.6cm、器高8cmを測る。

17. SX19壺棺墓 (Fig. 164・165)

SX19壺棺墓は、L16地区の弥生時代中期のK269号壺棺墓壙内に墓壙が掘り込まれた古墳時代の壺棺である。現在は単独棺であるが複棺であった可能性が高い。

(壺棺) (Fig. 165)

05535は、重心の低い不安定な平底の土師器壺である。頸部は比較的絞まり、外開する口縁部は端部が薄くなり、内面が窪む。器面調整は、外面が丁寧なヘラナデで、内面も一部に指オサエを残し、他はナデ調整である。

器色は、外面底部付近が鉄分が付着しており、暗褐色を呈し、口縁部付近は淡褐色となる。

また、内面は口縁部が淡黄褐色、胸部中位が暗赤褐色、底部付近が明褐色を呈する。胎土は密で、焼成は堅練である。口径24.2cm、頸部径20cm、器高41.6cm前後を測る。

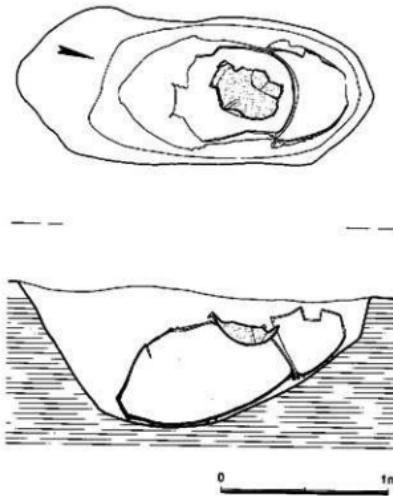


Fig. 164 6次調査SX19壺棺墓出土状況実測図(1/30)

18. SX22遺構 (Fig. 166・167)

SX22は、L・M16地区で検出された遺構で、須恵器蓋杯類を主にした土器類が集中して置かれているもので、土器群の東西側に平行する溝状の遺構が伴うことから古墳周溝の残骸かとも考えられるが、ここでは出土遺物類の紹介にとどめておきたい。

(出土遺物) (Fig. 167)

05677は、器高の低い須恵器杯蓋である。口縁部は非常に小さく、内面は段をなして窪む。天井部との境は鋭い稜をなす。

天井部のヘラ削りはほぼ1/2に及んでいる。天井部内面はヨコナデ後にナデを施す。

器色は、外表面が褐色を帯びた淡灰色で、内面は淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成はやや軟質である。口径12.2cm、器高2.3cmを測る。

05678は、器高の低い須恵器杯蓋である。口縁端部は肥厚し、天井部との境は緩く窪む。

天井部のヘラ削りは、ほぼ1/2程度である。器色は、外表面が暗赤褐色～赤紫色で、内面は淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径12.4cm、器高2.5cmを測る。

05679は、口縁端部が尖って内面に稜をなす須恵器杯蓋である。口縁部と天井部の境は緩い段をもつのみである。天井部のヘラ削りは小さい範囲となる。天井部内面は、ヨコナデ調整後にナデを加える。

器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。胎土は粗で、焼成は堅緻である。口径14.2cm、器高4.2cmを測る。

05675も器高の低い杯蓋の破片である。

口縁端部は外方に開き、天井部との境は純い段をなす。

天井部のヘラ削りはほぼ全面に及んでいる。口縁部内面はヨコナデ調整である。

器色は、内外面ともに暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径14.6cm、残存器高2.4cmを測る。

05080は、口径の小さい須恵器杯である。立ち

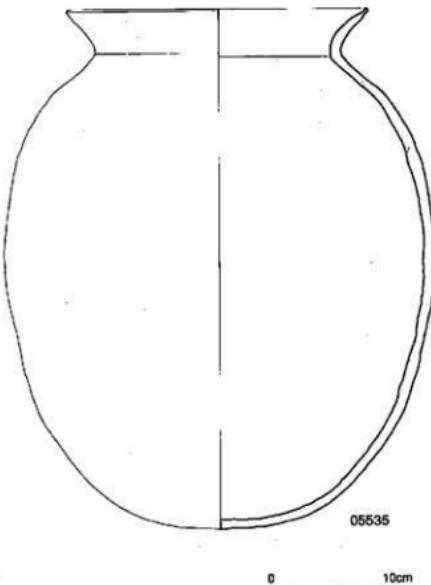


Fig. 165 6次調査SX19要棺実測図(1/4)

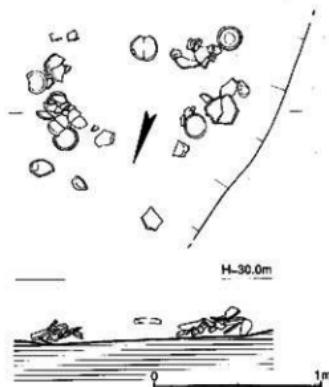


Fig. 166 6次調査SX22出土状況実測図(1/30)

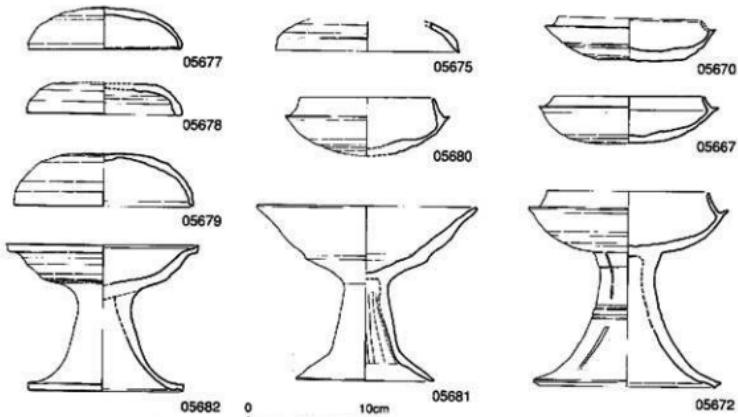


Fig. 167 6次調査SX22出土土器実測図(1/4)

上がりはやや内傾するが、比較的高い。底部は中央部が分厚く、受け部の直下付近は非常に薄い器壁となっている。底部ヘラ削りはほぼ1/2に及んでいる。

器色は、口縁部及び内面が淡灰色で、外面底部は暗灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径10.6cm、器高4.5cmを測る。

05670は、器高が低く底部が平坦な須恵器杯である。

口縁部の立ち上がりは低く、内傾度も著しい。底部のヘラ削りも非常に狭い範囲となっている。底部内面はヨコナデ後に中央部にナデを加える。

器色は、外面が暗灰色で、内面は青灰色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径11.6cm、器高3.4cm前後を測る。05667は、口縁部の立ち上がりが小さい須恵器杯である。

底部のヘラ削り範囲は非常に狭いものとなっている。また、内底部は、ヨコナデ後にナデを加える。器色は、口縁部及び内面が淡灰色で、底部外面は暗灰色を呈する。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。口径12cm、器高3.7cmを測る。

05682は、浅い杯部に裾がよく広がる脚部をもつ高杯である。杯部口縁の端部は跳ね上げ状となつて内面が窪む。また、脚端部は嘴状に立ち、内面が窪む。器面調整は、外面脚部がヨコナデか。杯部下端にはカキ目を施す。また、杯部内面はヨコナデで、内底部にはナデを加える。

器色は、外面が赤褐色で、杯部内面淡赤褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。須恵器のように堅い焼きである。口径14.2cm、器高11.7cm、器高13cmを測る。

05681は、杯部が直線的に外方に開く土師器高杯である。杯部下端付近には緩い段を設けるが、器壁が厚いこともある。脚部付け根は良く絞まる。脚裾は円筒部から急に外方に開く。

全体に器面の磨詰がはげしく調整を観察できないが、円筒部内面には回転のヘラ削りが施される。

器色は、内外面ともに赤褐色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。口径17.7cm、器高14cm、脚径11cmを測る。

05672は、長脚の2段長方形透かしをもつ須恵器高杯である。杯部はやや浅いが、端正なつくりで、口縁部立ち上がりも高い。脚部は筒部中央に2条の沈線文をめぐらし、この上下に内面まで切り込み

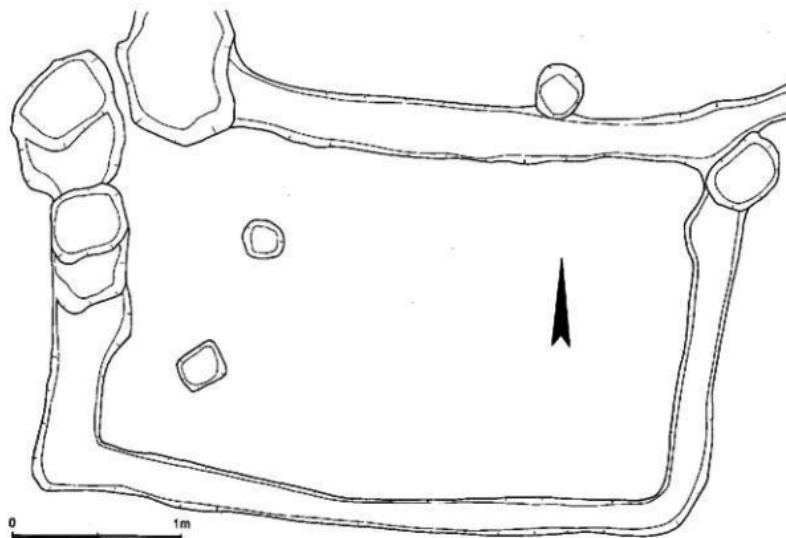


Fig. 168 6次調査SX23出土状況実測図(1/30)

が及ばない形骸化した長方形透かしを三方に施している。杯部内面にはアテ共痕が残る。また底部のヘラ削りはほぼ1/2に及んでいる。器色は、外面が黒灰色で、杯内面は淡灰色を呈する。胎土は密で、焼成は堅緻である。口径13.1cm、器高15.6cm、脚径14.2cmを測る。

19. SX23遺構 (Fig. 168)

SX23は、F・G-16・17地区で検出された長方形に溝のめぐる遺構である。溝の規模は、外径で東西長が4m前後、南北長2.5m前後のもので、溝幅は0.2~0.3mを測る。石室などの存在を示す石材などは全く出土しなかったが、溝内から須恵器Ⅲb期の須恵器杯身や蓋の破片が出土していることから古墳と関連する遺構である可能性はある。この場合溝の規模からは同地区にあるS17号墳などと近いことも考えられよう。

第五節 試掘調査出土遺物 (Fig. 169~172, Pl. 54~57)

今回出土遺物として掲載したのは、昭和59年度調査(1984. 7~1985. 3月)(第4次調査)に先立って行われた試掘調査によって出土した須恵器を主とする土器類である。試掘調査は、主に切り土工事の多いL・M・N16地区を中心に行われ、同地区的古墳群分布地域からのものが大半であり、一部に本調査時の検出面出土遺物も合わせて掲載した。以下簡単に説明を加える。

(杯 蓋) 05456は、器高の低い杯蓋で、直立する口縁端部は折れて外に飛び出し、内面は段をなす。天井部との境は、明瞭な段をなす。天井部ケズリは大きい。口径12cm、器高4cmを測る。

05489は、口縁部が丸味をもった蓋である。口縁端部は薄くなり、嘴状にとがる。天井部との境は緩い稜となる。天井部のケズリは約1/2で、頂部は平らである。口径15cm、器高4.3cmを測る。

05457は、器高の低い杯蓋である。短い口縁部の端部は内面が明瞭に窪む。天井部との境は、沈線をめぐらし、天井部ケズリはいびつで、広い。口径13.2cm、器高4.5cmを測る。試掘出土。

05488は、非常に器高の低い杯蓋である。口縁部と天井部の境は明瞭でなく、緩く窪んでいる。天井部のケズリは約2/3の範囲である。口径14cm、器高3.7cmを測る。古墳検出トレチ出土。

05461は、口縁部外面の器面凹凸が著しい杯蓋である。天井部との境は鋭くかぶるような突帯となる。天井部のケズリは、約1/2の範囲である。口径13cm、器高4.3cmを測る。試掘出土。

05454は、全体に丸味をもった杯蓋である。口縁は直口し、天井部との境は不明瞭である。天井部ケズリは、約1/2の範囲に及ぶ。口径12.4cm、器高4.3cmを測る。試掘調査出土。

(杯 身) 05458は、口縁部立ち上がりの高い杯身である。口縁は内傾するが、高く、端部内面は沈線状に窪む。底部のケズリは、約1/2程度である。口径11cm、器高5.5cmを測る。試掘調査出土。

05484は、器高の低い、底部の安定した杯身である。口縁部立ち上がりは低いが、均整がとれている。底部のケズリは2/3に及ぶ。口径12.6cm、器高4.1cmを測る。古墳検出トレチ出土。

05459は、やや口径の大きい杯身である。底部の大半を欠くが、口縁部立ち上がりは長く、内傾度も大きい製品である。口径11.6cm、器高3.2cm以上を測る。試掘調査出土。05453は、全体が細身の浅い杯身である。口縁部の立ち上がりは低く、内傾化も著しい。底部のケズリは2/3に及ぶ。口径11.8cm、器高4.9cmを測る。試掘調査出土。05487は、口縁部立ち上がりが細く、尖い杯身である。底部のヘラ削りは、下半部の約1/2に及ぶ。他は外外面とともにヨコナデである。口径13.6cm、器高4.6cmを測る。古墳検出トレチ出土。05486は、底部の不安定な小形の杯身である。口縁部立ち上がりは、緩く内傾する。底部は平坦となり、ヘラ削りは小さい範囲である。口径10.7cm、器高4.2cmを測る。古墳検出トレチ出土。

(その他の蓋類) 05465は、天井部に宝珠つまみをもつ蓋である。器高は低く、口縁・天井部の境は高い上向きの突帯となる。外面ヨコナデを施す。口径13.9cm、器高3.8cmを測る。試掘出土。

05466は、口縁が反転するようにふんばる蓋で、天井部との境は高い、たれ気味の突帯となる。口径14.8cm、器高4cmを測る。試掘出土。05455は、天井部に直立する小さいつまみをもつ蓋である。口縁部は外開し、天井部との境は高い段をなし、直上はヘラ削り調整。口径14.6cm、器高5.3cmを測る。試掘出土。05464は、宝珠つまみをもち、器高の低い蓋である。低く踏ん張る口縁部を有し、天井部との境は太い段をなす。天井部には平行するカキ目間に斜めの刺突文をめぐらす。口径13cm、器高4.1cmを測る。

(高 杯) 05468は、小形高杯脚部で、付け根と中位に低い突帯をめぐらす。脚径10cmを測る。

05490は、太い脚部に、四方に長方形透かしを施した有蓋高杯である。杯部は中位で段をなし、口縁

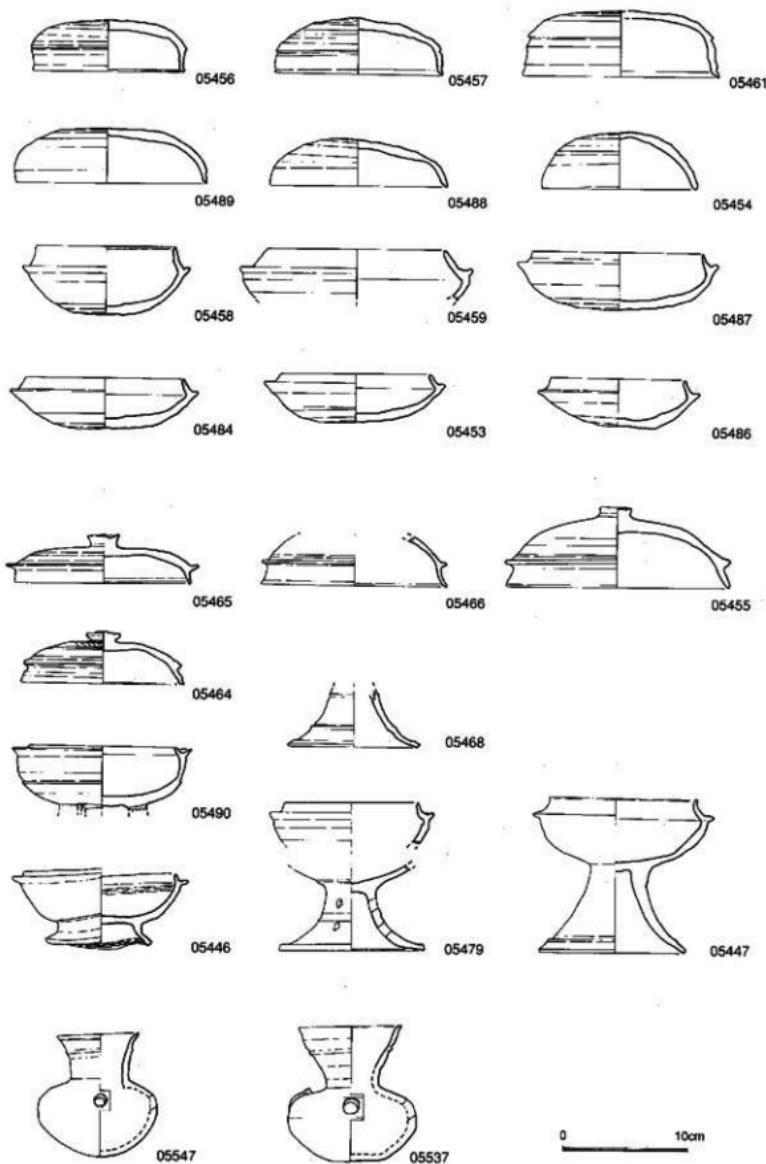


Fig. 169 6次試掘調査出土遺物実測図(1)(1/4)

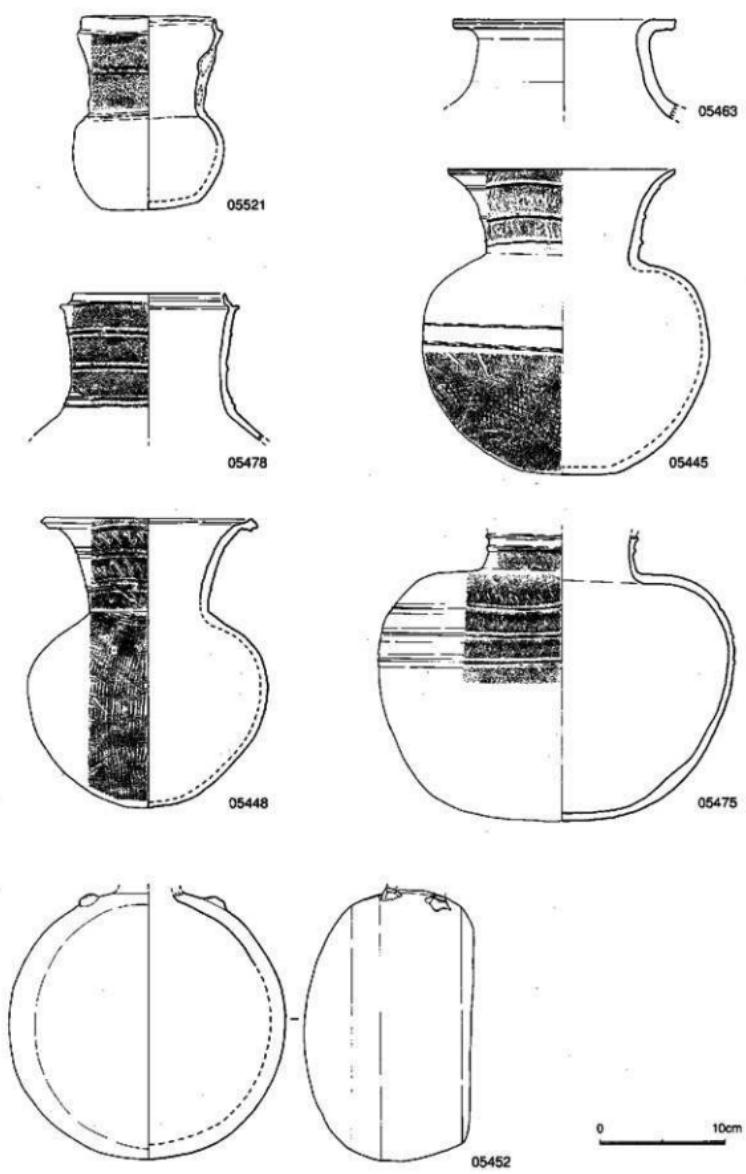


Fig. 170 6次試掘調査出土遺物実測図(2)(1/4)

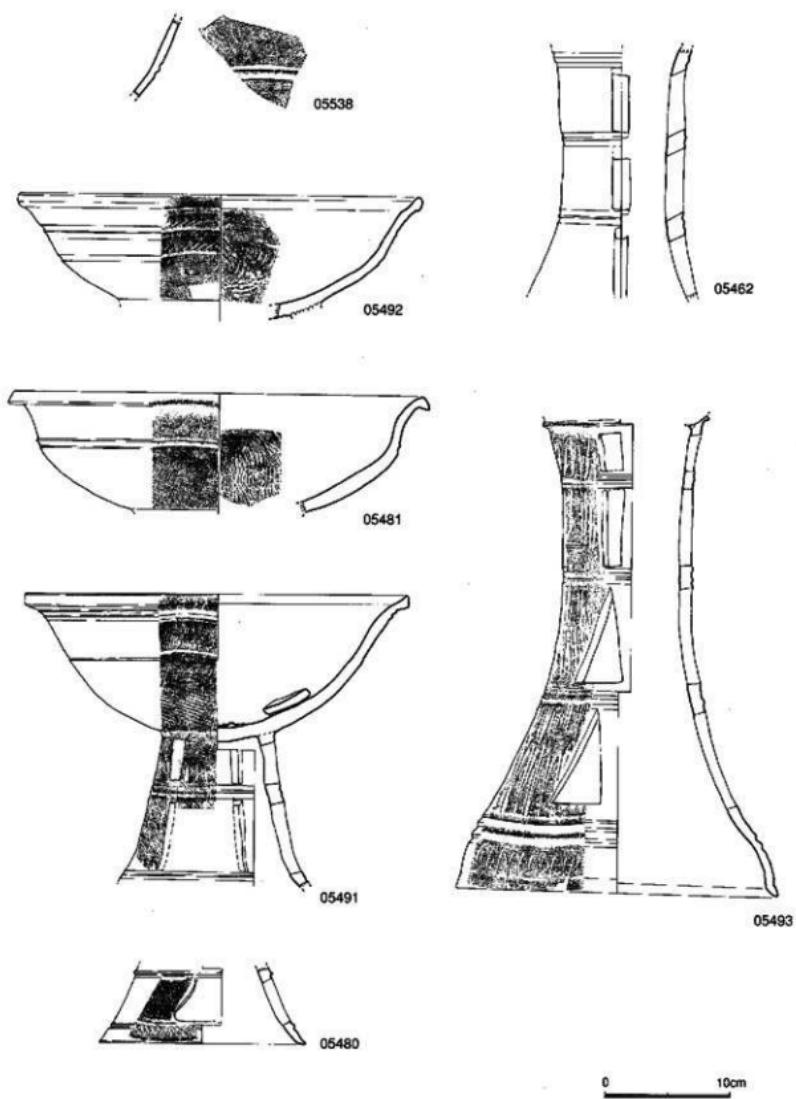


Fig. 171 6次試掘調査出土遺物実測図(3) (1/4)

部立ち上がりは低い。内外面ともに回転ナデを施す。口径11.6cm、残存器高5.1cmを測る。

05446は、高台付き蓋杯と言うべきか。高台は中位で折れて外開する。また、杯部口縁立ち上がりは低い。脚端内面・杯内面にケズリ状の条痕が残る。口径12.2cm、器高6.5cm、高台径8cmを測る。

05479は、有蓋高杯である。同一個体であろう。口縁部立ち上がりは内傾して、低い。また、脚部には突帯を境に上下に菱形の透かし孔5個(?)を施す。口径10.6cm、脚径11.7cmを測る。

05447は、杯受け部と立ち上がりに特徴のある有蓋高杯である。胸部裾には1条の突帯をめぐらす。口径12cm、脚付け根径4.7cm、脚径11.5cm、器高12.4cmを測る。試掘出土。

(ハソウ) 05547は、口縁部の開きが小さく、胸部肩の位置が高い小形ハソウである。口縁下に突帯をめぐらす。器面調整はナデである。口径5.4cm、器高9.9cmを測る。1号幹線確認面出土。

05537は、平底の小形ハソウである。口縁下に上部が平らな突帯をめぐらす。肩部に鉄器が付着しており、古墳副葬品か。口径8.1cm、器高10.9cmを測る。1号幹線道路確認面出土。

(壺) 05231は、焼け膨れが見える平底の有蓋長頸壺である。口縁中位に突帯をめぐらしこの上下に均整な、深い細かな波状文を施す。全体に自然釉がかかる。口径9.3~10cm、頸部径9.2cm、器高15.3cmを測る。古墳出土。出土古墳不明。05478は、有蓋長頸壺である。口縁端部は「く」字に折れ、内面に沈線をめぐらす。ほぼ直立する頸部には上端が平らな突帯をめぐらし、この間を均整な波状文で埋める。器色は黒灰~黒色を呈し、焼成は非常に堅敏である。生地は暗赤紫色を呈する。口径12cm、残存器高12cmを測る。古墳検出トレンチ出土。05448は、外開する口縁をもつ中型壺である。頸部に2条沈線をめぐらし、この間に荒い波状文を施す。胴部外面は擬格子の平行タタキ後にカキ目を施す。口径16.5cm、器高23cmを測る。05463は、口縁端部が平坦となる壺で、瓦質である。磨滅が著しい。口径18cmを測る。05445は、不安定な平底に重心の低い胴部をもつ壺である。口縁は素直に外開する。口縁には上端が鈍い突脊3条をめぐらし、この間を波長の短い波状文で埋める。底部に斜格子タタキを残す。口径18.4cm、頸部径12.4cm、器高21.3cmを測る。試掘出土。05475は、扁球形の胴部に直立気味の口縁を付す壺である。やや焼けひずみがある。肩部近くに上端部の鈍い突脊3条を施し、この間を均整な波状文で埋める。また、最上部突帯の上部に原体刺突文をめぐらす。口縁部には2条の鈍い突帯をめぐらし、頸部にも均整な波状文を施す。頸部径12.5cm、残存器高23cmを測る。古墳検出トレンチ出土。

(提 瓶) 全体に器面の摩耗が著しい提瓶である。口縁部両側に環状把手一対を付す。胸部最大径22cm、器高13.3cmを測る。試掘出土。

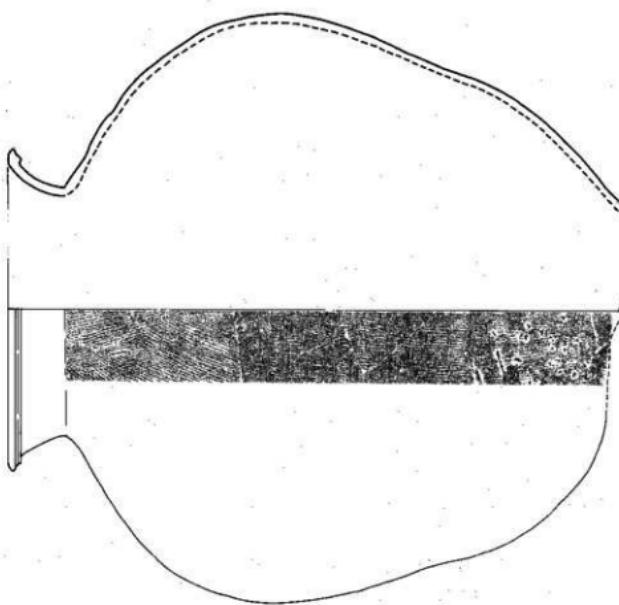
(器 台) 05538は、端正な波状文をめぐらす杯部破片。器色は黒色を呈する。1号幹線道路確認面出土。05492は、浅い杯部で、脚05493と同一個体と考えられる。試掘出土。05481は、浅い杯部である。古墳検出トレンチ出土。05491は、試掘+SK14土壤出土。05462は、上下端を失う。3段に長方形透かしをめぐらす。試掘出土。05493は、カキ目調整後に荒い波状文を施し、円筒部に4段透かしを三方にめぐらす。上の二段が長方形で、下二段が三角形である。試掘出土。05480は、裾部に三角形透かしをめぐらす脚部である。古墳検出トレンチ出土。

(大 壺) 05539は、外面の全面に擬格子タタキを施す大壺で、半たい口縁端部の直下に突帯1条をめぐらす。口径25cm、器高54.8cmを測る。1号幹線道路検出面出土。05551は、底部が焼けひずむ大壺である。胴部全面に平行タタキを施し、その後胴最大径部以下に密集するカキ目を施す。口径23.5cm、器高50.4cmを測る。

以上第4次の本調査以前に実施された試掘調査の土器類について述べたが、土器資料はさらに多く出土しており、特徴的なものを選別して紹介した。

0 10cm

05551



05539

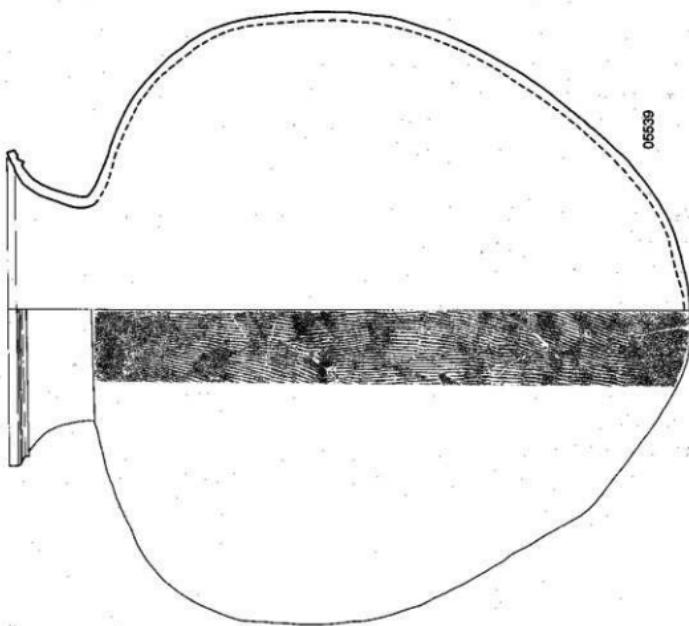


Fig. 172 6次試掘調査出土遺物実測図(4) (1/4)

第四章 おわりに

これまで第4・6次調査で調査した古墳時代の26基の円墳群および土塙墓・石棺墓・焼塙墓などの埋葬施設について報告を行ったが、以下では調査成果の要点について簡略にまとめることにしたい。

① 吉武S古墳群の造営時期について

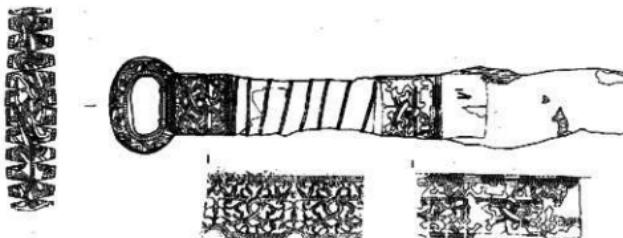
吉武S古墳群は、円筒埴輪資料から、石室の残っていない帆立貝式前方後円墳のS1号墳(樋渡古墳)を草創期(5世紀前半頃か)として、同様に石室の残らないS2号墳の方墳がこれに遡る時期の造営と考えられる。また、S3~29号の各古墳は、前述のように全体に墳丘・石室の遺存状態が非常に悪いものが多い。古墳の造営と使用期間の指標となる副葬須恵器類では、S8・9・11・27号墳の石室内で出土している最終期に伴う須恵器がⅢ期の製品を主としながら、一部にⅡ期の製品を含むことから古墳の造営開始は6世紀前半期に遡るものもあると思われる。また、各古墳では多器種・多量の須恵器類が周溝内から出土しているが、S3~5号墳、10号墳、16~18号墳、25号墳などでは多くのⅢ期須恵器に混じてⅡ期の製品が出土することから追跡時に副葬土器類の整理がなされたのではないかと考えられる。S27号墳では最終期に伴う須恵器と周溝内出土須恵器とが型式的に全く連続しない様相が見られる。S群は、これまでの調査でL・M・N地区(S4~15・27~29号)15基以上、D・E・F地区(S19~21号)6基以上、G・H10~2地区(S21~22号)2基以上の3支群が区別できる。さらにL・M・N地区ではS27~29号墳周辺の1支群が想定され、27・28号墳がこの中でも最も最初に造営された可能性が高い。

② 副葬鉄器類について

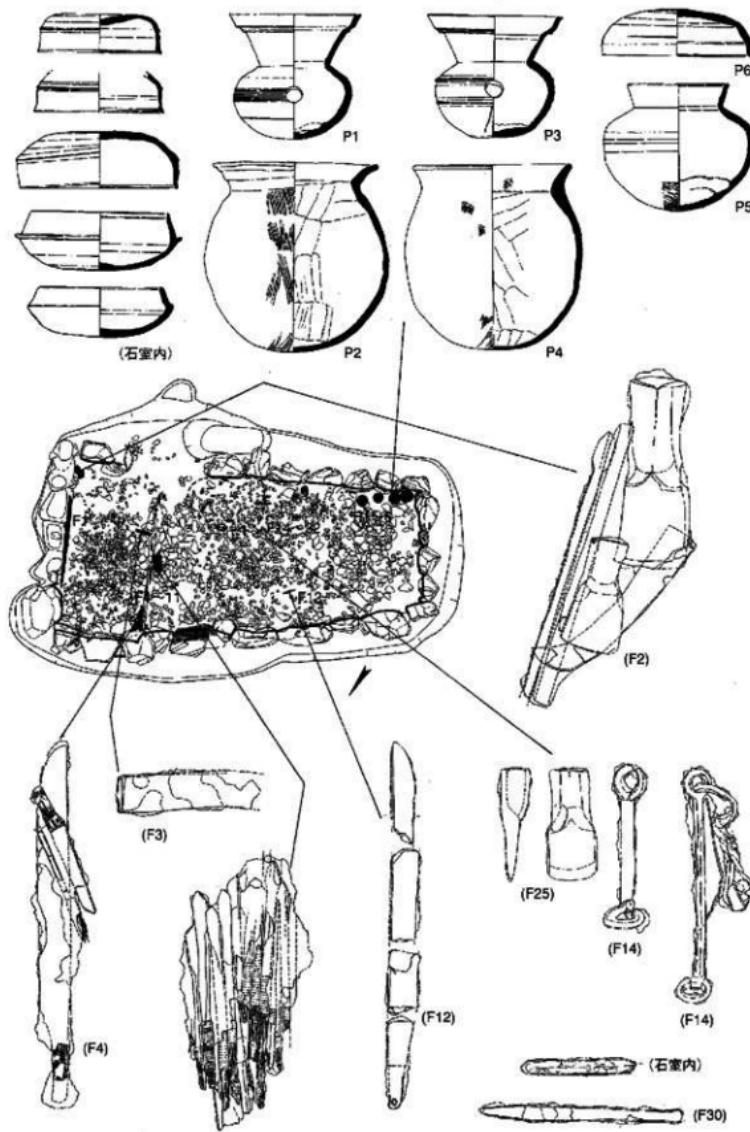
出土した鋳造鉄斧ではS9・11号墳で同サイズの2個をセットとした例があり、何れも器の表面と裏面を重ねて副葬する。また、鍛造袋状鉄斧は大小の鍛造したセットがあり、小形全長10cm、袋部幅3.3cm、刃部幅3.2cm・大型全長16.5cm、袋部幅6.6cm、刃部幅3cm程度の製品である。単独しか出土していない古墳においてもセットとして副葬が意識されていた可能性は高い。

③ 副葬龍文太刀について

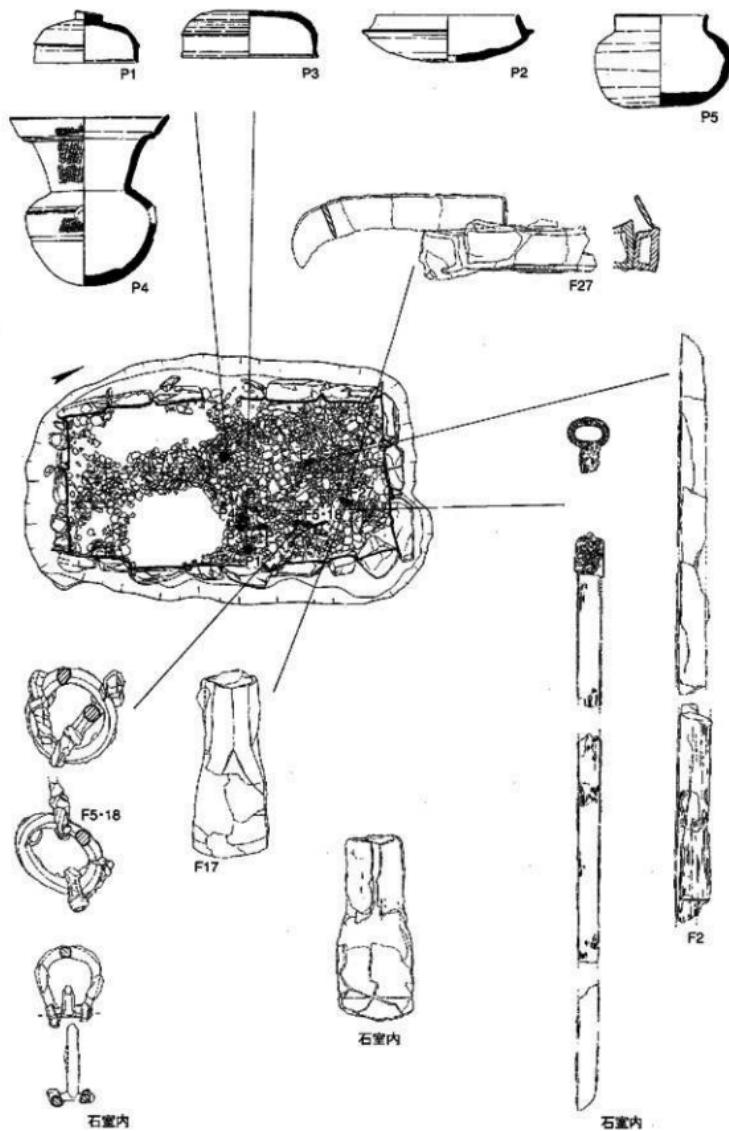
S9号墳出土の金銅製龍文環頭太刀は、全長71cm以上・刃幅2.7cm程度の身幅の狭い太刀である。環頭には対向する2頭の龍を両面に彫る。また、はばきには頭部が交叉する2頭の龍文を切先側に向けて装着する。類例の太刀は、韓国伽耶地方の多羅國の古墳である玉田M3号墳(慶尚南道陜川郡双岩面城山里玉田)出土の「龍文装環頭太刀」(全長82.2cm・刃身長64.1cm・刃身幅3.8cm・環外徑5.1×3.5cm) 制玉田M3號 韓大韓民族聯合博物館蔵 1990 韓国博物館や同安羅國の古墳である安羅古墳群木伊山古墳群54号墳(慶尚南道伽耶邑道項里)出土の環頭太刀「龍文装環頭太刀」(全長82.2cm・刃身長64.1cm・刃身幅3.8cm) 1998 韓国博物館蔵などが知られる。



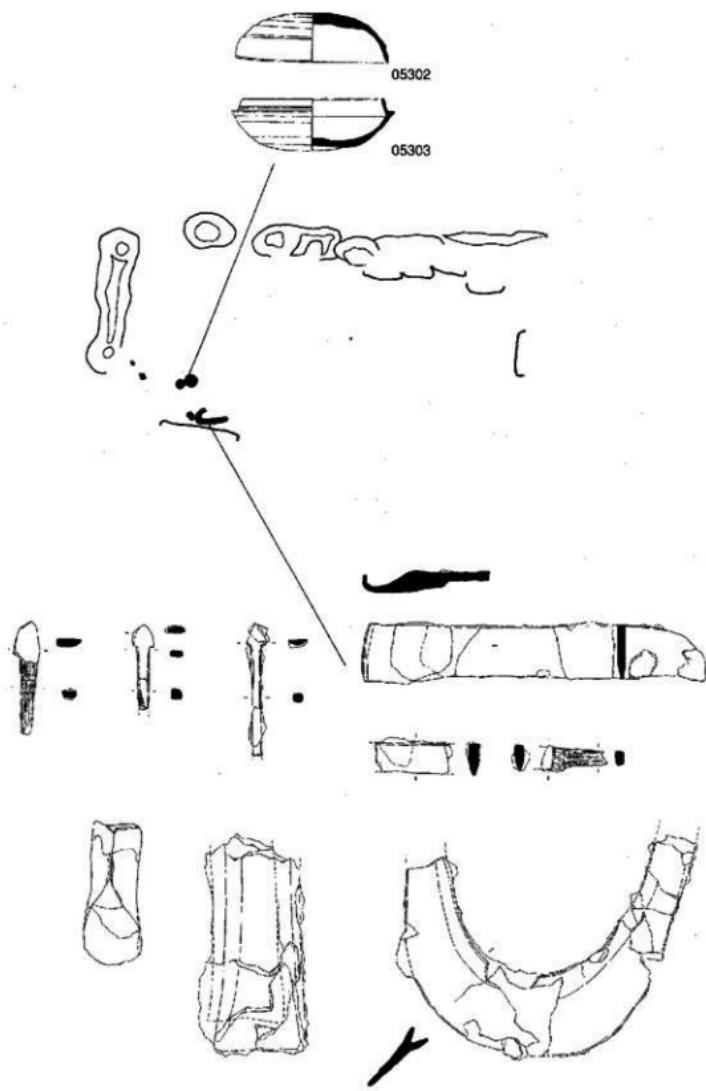
玉田M3号墳出土の龍文装環頭太刀図



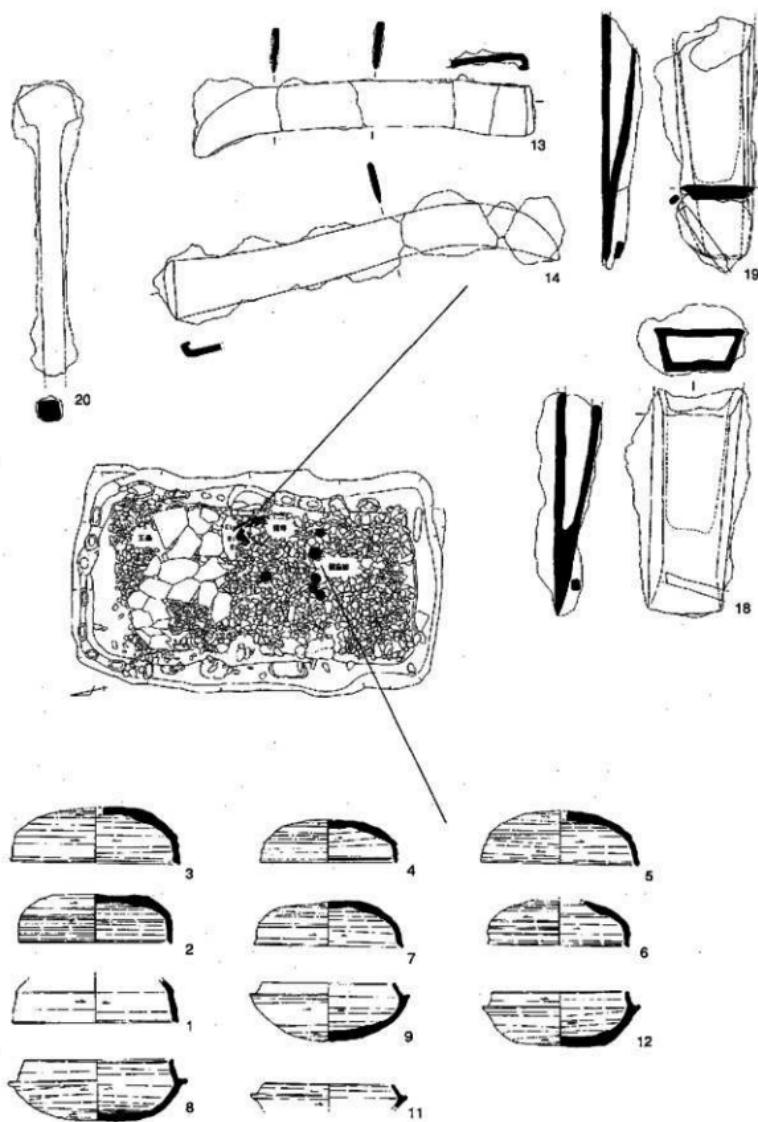
—S8号墳石室内出土の主要鉄器と伴出土器類—



—S9号墳石室内出土的主要鉄器と伴出土器類—



—S11号墳石室内出土の主要鉄器と伴出土器類—



—S27号墳石室内出土の主要鐵器と伴出土器類—

개요

金武古墳群吉武S群은, 福岡市西部早良平野의 簾状台地上에 형성된 古墳時代 중기부 터 후기에 걸친 고분군이다.

이 古墳群은 農地改良事業에 수반해서 1983~1985년에 発掘調査가 행해지고, 帆立貝式前方後円墳 1基 (全長 51m), 方墳 1基 (一边 17m), 円墳 27基 가 調査되었다. 각 古墳은 이전의 農地化事業에 의해 거의가 墓丘를 잃었지만, 内部主体로서는 石室最下部만 遺存되어 있는 것들이 있고, 副葬時 遺物配列이 알 수 있는 古墳도 보인다. 本円墳群은、分布狀況에서 보아 대략 3支群에 구별된다. 그 중 古墳群 南西側 (L·M·N地区)에 분포되는 一群은 東西 약 100m, 南北 약 200m의範圍에 17基 (S3~15号墳 · S27~29号墳) 確認되어, 未調査区를 포함하면 20~25基程度로 群을 構成하고 있던 가능성이 있다. 이 円墳群은、石室上部構造가 분명하지 않은 砥실분이며, 直径 10~20m程度의 얕은 周溝를 수반한다. 또한 南端部에서는 周溝가 중복되는 민큼 각 古墳이 근접해서 좁은 범위에 축조되었다. 内部로의 출입구인 陸櫓를 수반하는 것도 볼 수 있다. 이 円墳群 造営時期를 나타내는 土器類는 石室内에 비교해서 周溝内에서 많이出土되는데出土須惠器에서 보면 6世紀初부터 後半期의 것이라고 생각된다. 이 南西側 円墳群중 第 8·9号墳은 比較的 石室이 잘 남아 있고, 石室의 깊이와 넓이의 規模가 4·5×2m (8号墳) 내지 4×2m (9号墳) 인 長方形을 나타낸다. 副葬品으로서는 須惠器等 土器類나 유리小玉·碧玉製管玉等 裝身具 이외에 鐵製農工具의出土가 매우 특징적이다. 8号墳石室内에서는 鐵鎌 6·鐵刀 6 (全長 111cm의 長刀를 포함함) · 刀子 5 · 袋狀鉄斧 3 (大·小) · 鐵 1~2 · 칠새기개 (鐵鉋) 2 · 鐵鍊 2 · 鐵淬 1 등이出土되었는데, 袋狀鉄斧·鐵鍊·鑿·칠새기개 (鐵鉋)는, 一群가 녹에 의해 부착되어, 세트관계를 살 나타내고 있었다. 또 9号墳石室에서는 鐵鎌 3·鐵刀 5 (金銅製竜文素環頭太刀들 포함함) · 馬具 5 (環狀鏡板付轡을 포함함) · 耳環 3 (金·銀製) · 刀子 2 · 袋狀鉄斧 2 · 鑄造鉄斧 2 · 鐵鍊 1 등이出土되었다. 이러한 副葬品으로서의 袋狀鉄斧와 鑄造鉄斧의 세트가 11号墳 (袋狀鉄斧 1 · 鑄造鉄斧 2) 과 15号墳 (袋狀·鑄造鉄斧各 1)에서도 볼 수 있고, 獨立의 경우에서도 3号墳 (袋狀鉄斧 1) · 6号墳 (鑄造鉄斧 1) · 14号墳 (袋狀鉄斧 1)에서出土되었다. 또 円墳群北端 27号墳에서도 鑄造鉄斧 2 · 鐵鍊 2 · 鐵鎌 8以上 · 鐵刀 · 刀子 · 馬具 · 精練淬 4以上등이出土되어, 鑄造袋狀鉄斧·鑄造鉄斧 및 鐵製農工具의 세트가 이 円墳群에서는 共通되는 副葬品이 되어 있다. 이 밖에出土된 土器類중에는 少數이었지만 韓半島陶質土器가 있고, 招來된 鉄斧類와 함께 6世紀前半期경 韓半島와 北部九州의 文化交流 実態를 생각하는 데 있어서 重要한 古墳群이라고 말할 수 있겠다.

図 版

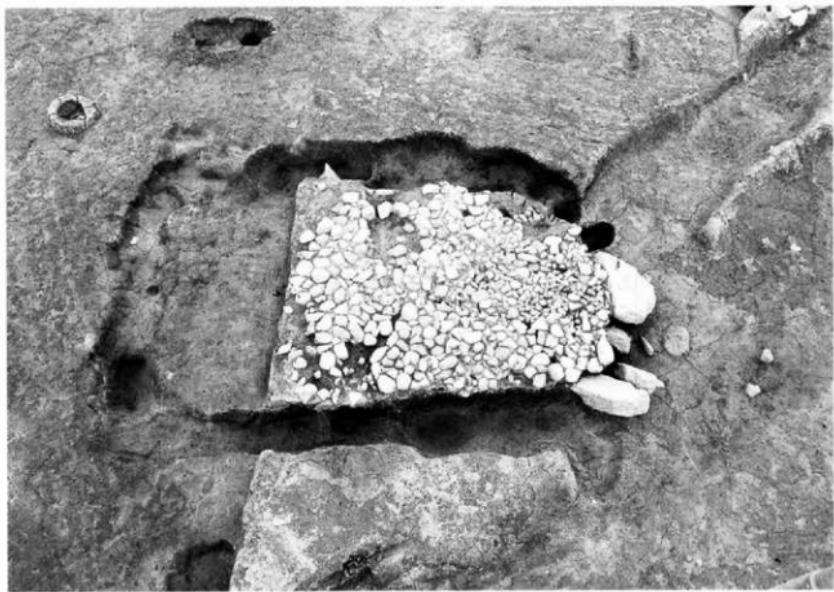
PLATES



吉武S群M・N地区古墳出土状況全景（西から）



1. 吉武S群M・N 16 地区古墳出土状況全景（東から）



2. 吉武S群3号古墳石室出土状況（西から）



1. 吉武S群5号古墳出土状況（西から）



2. 吉武S群5号古墳石室出土状況（東から）



1. 吉武S群6号古墳出土状況全景（南から）



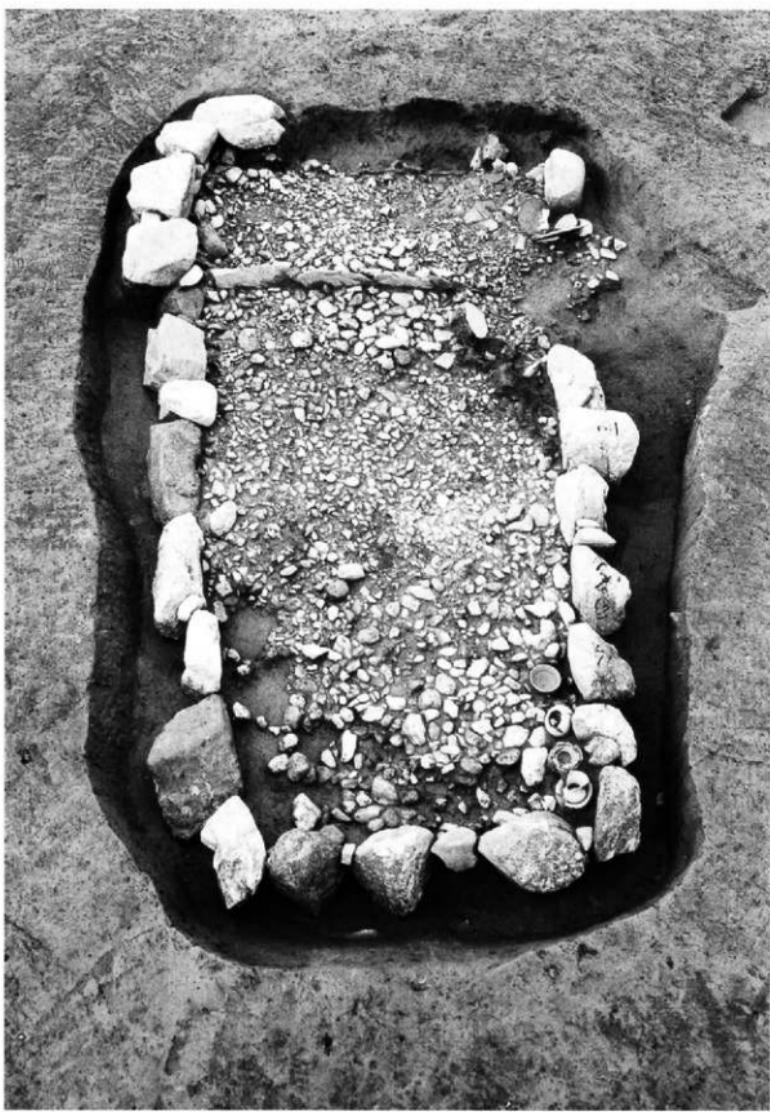
2. 吉武S群6号古墳石室出土状況（南から）



吉武S群7号古墳出土状況全景（東から）



吉武S群8・12号古墳出土状況全景（東から）



吉武S群8号古墳石室出土状況（南西から）



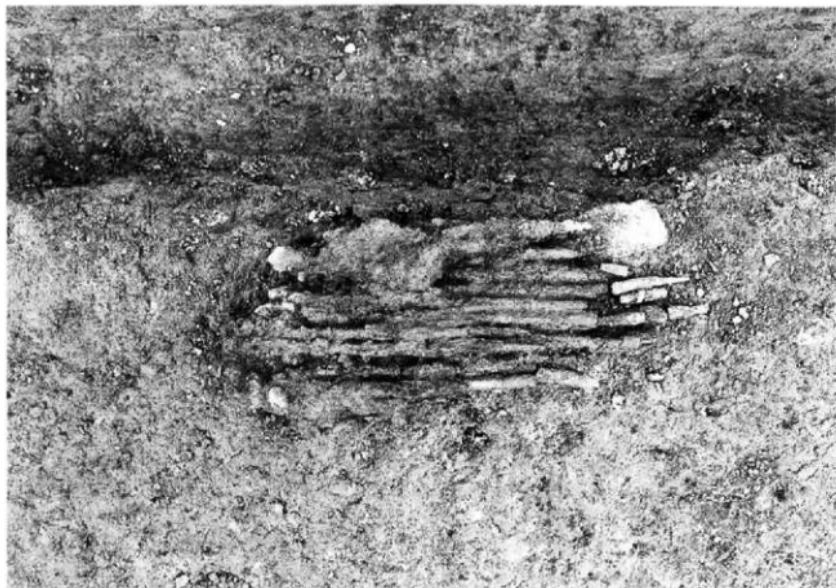
1. 吉武S群8号古墳石室奥壁部副葬鉄器出土状況（南東から）



2. 吉武S群8号古墳石室奥壁部副葬鉄器出土状況（南東から）



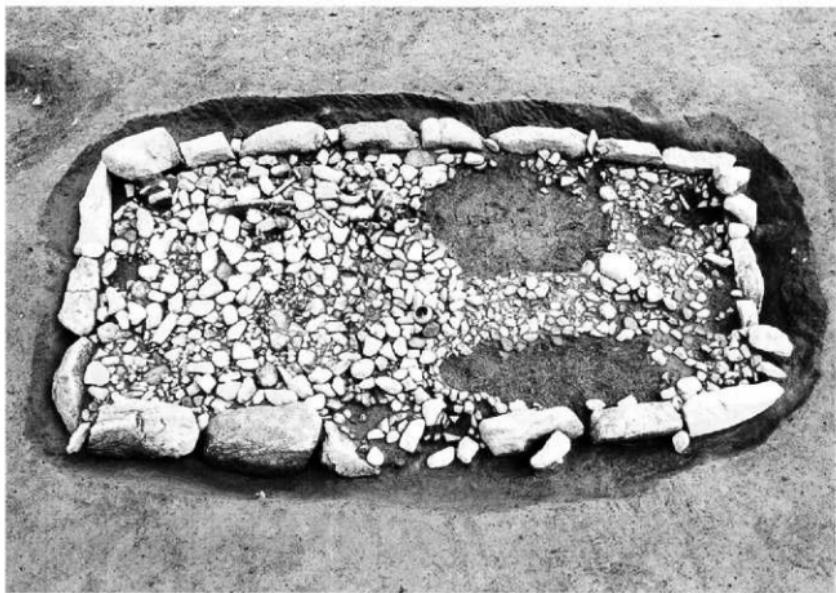
1. 吉武S群8号古墳石室副葬須恵器出土状況（南から）



2. 吉武S群8号古墳石室副葬鉄器出土状況（南西から）



吉武S群9号古墳出土状況全景（北東から）



1. 吉武S群9号古墳石室出土状況（西から）



2. 吉武S群9号古墳石室発掘状況（南から）



1. 吉武S群9号古墳石室内副葬遺物出土状況



2. 吉武S群9号古墳石室内副葬遺物出土状況



1. 吉武S群9号古墳石室内副葬龍文太刀出土状况



2. 吉武S群9号古墳石室内副葬鐵刀・鎧出土状况



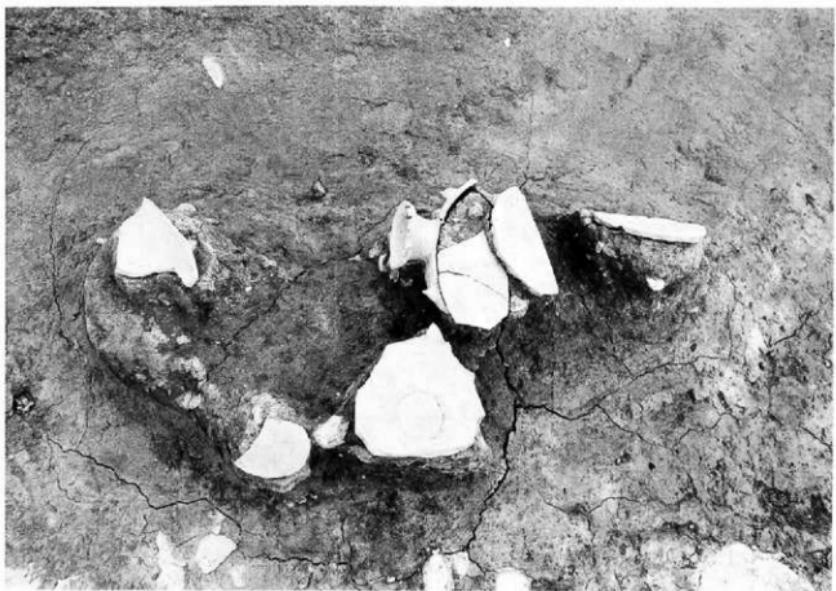
1. 吉武S群9号古墳石室内副葬龍文環頭太刀出土状况



2. 吉武S群9号古墳石室内副葬玉類出土状况



1. 吉武S群9号古墳石室内副葬遺物出土状況



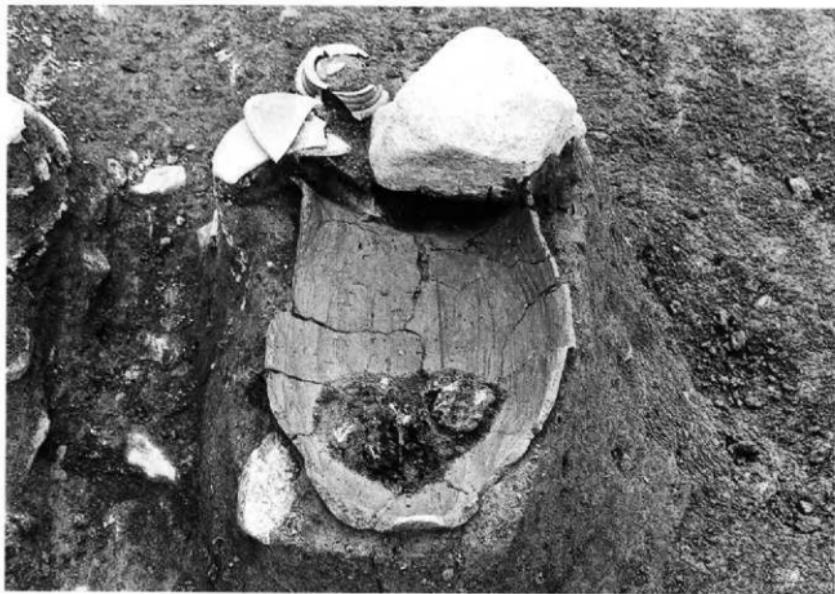
2. 吉武S群9号古墳石室内副葬遺物出土状況



1. 吉武S群9号古墳周溝内遺物出土状況 (P18)



2. 吉武S群9号古墳周溝内遺物出土状況 (P1 ~ 24)



1. 吉武S群9号古墳周溝内土師棺出土状况 (P18)



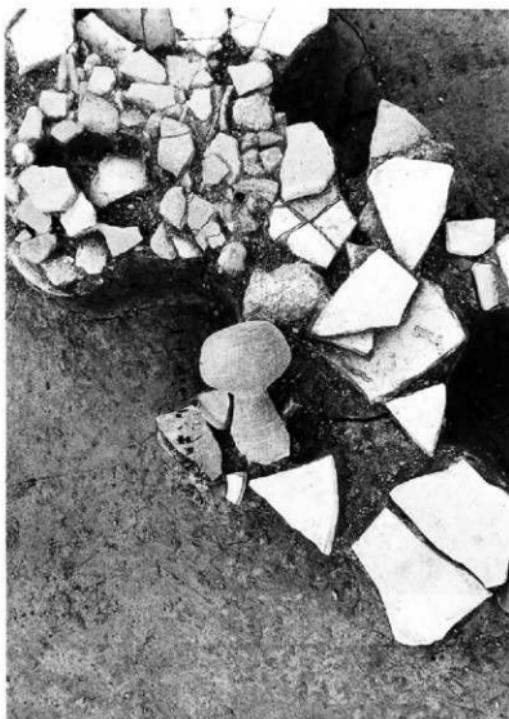
2. 吉武S群9号古墳周溝内土師棺人骨出土状况 (P18)



1. 吉武S群9号古墳周溝内遺物出土状況



2. 吉武S群9号古墳周溝内遺物出土状況



1. 吉武S群9号古填周溝内遺物出土状况



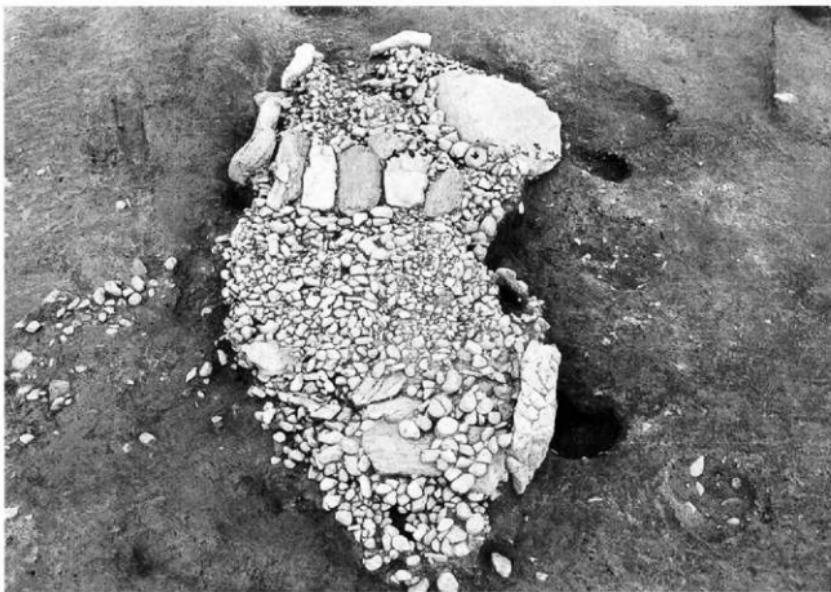
2. 吉武S群9号古填周溝内遺物出土状况



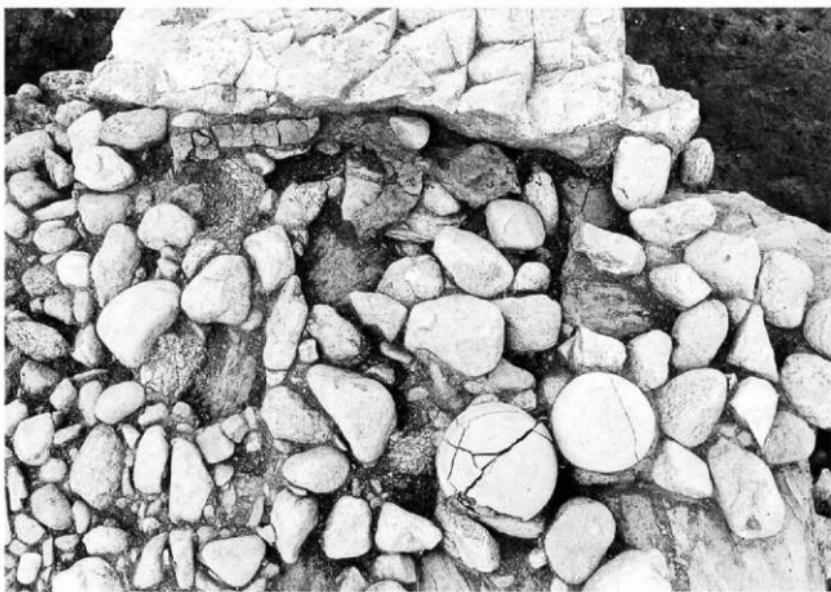
1. 吉武S群 10号古墳出土状況全景（南から）



2. 吉武S群 11号古墳出土状況全景（南から）



1. 吉武S群 11号古墳出土状況全景（北東から）



2. 吉武S群 11号古墳石室副葬遺物出土状況



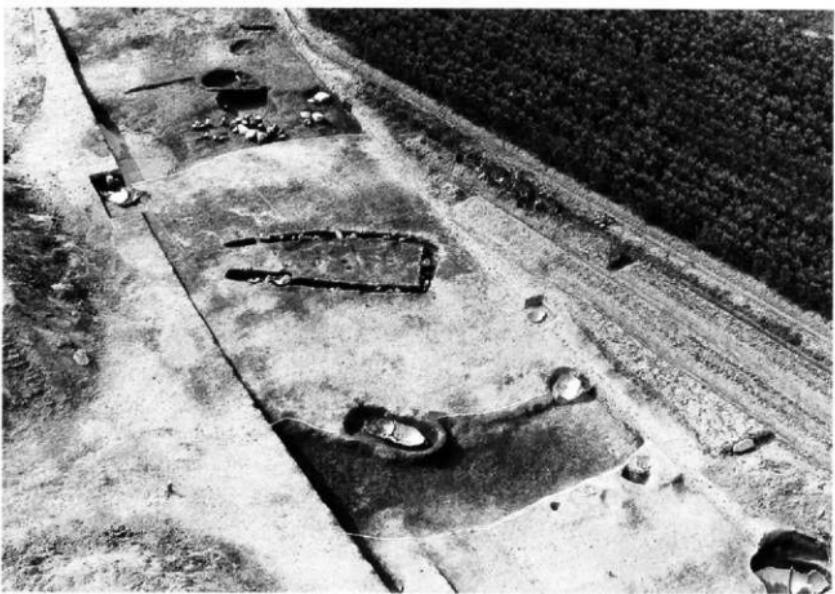
1. 吉武S群 12号古墳石室出土状況（南から）



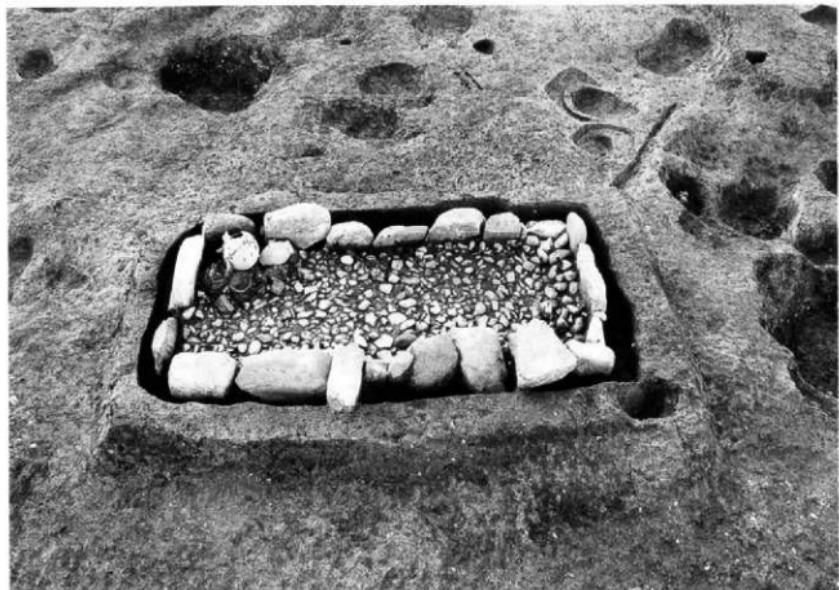
2. 吉武S群 12号古墳石室出土状況（南から）



1. 吉武S群 13号古墳副葬遺物出土状況



2. 吉武S群 15号古墳出土状況全景（東から）



1. 吉武S群 17号古墳石室出土状況（西から）



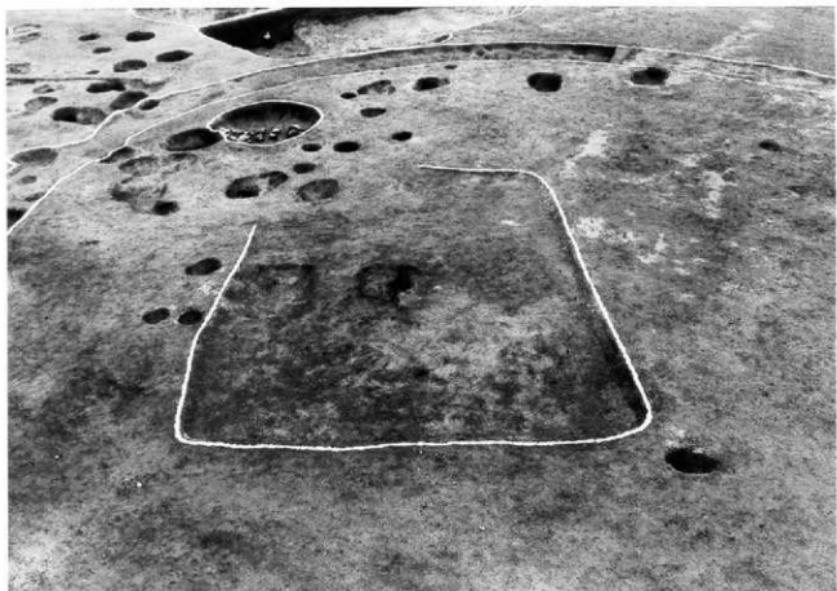
2. 吉武S群 17号古墳副葬須恵器出土状況（西から）



1. 吉武S群 17号古墳副葬須恵器出土状況（東から）



2. 吉武S群 22号古墳出土状況全景（南から）



1. 吉武S群 23号古墳出土状況全景（南から）



2. 吉武S群 24号古墳石室出土状況（北から）



1. 吉武S群 25号古墳石室出土状況（北から）



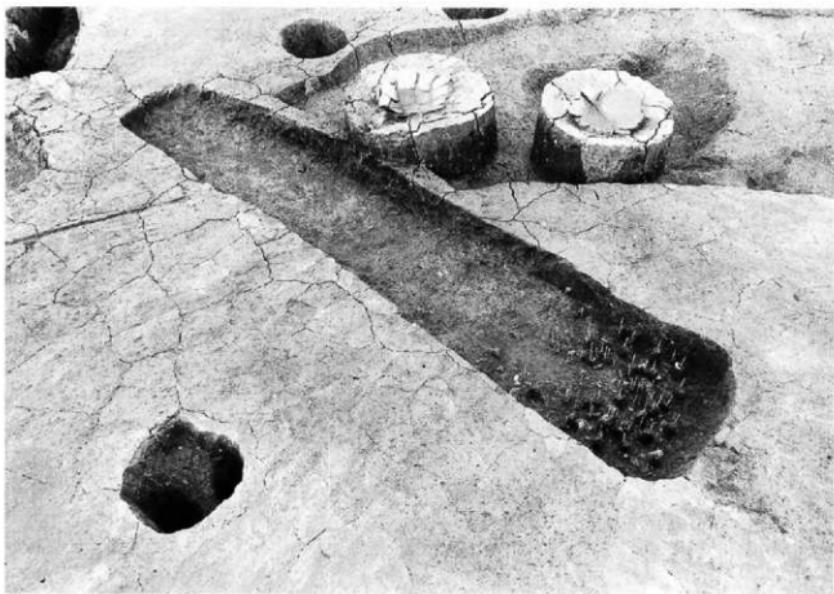
2. 吉武S群 26号古墳石室出土状況（北から）



1. SX 01 土壙墓出土状況（北東から）



2. SX 01 土壙墓鉄器・玉類出土状況（南西から）



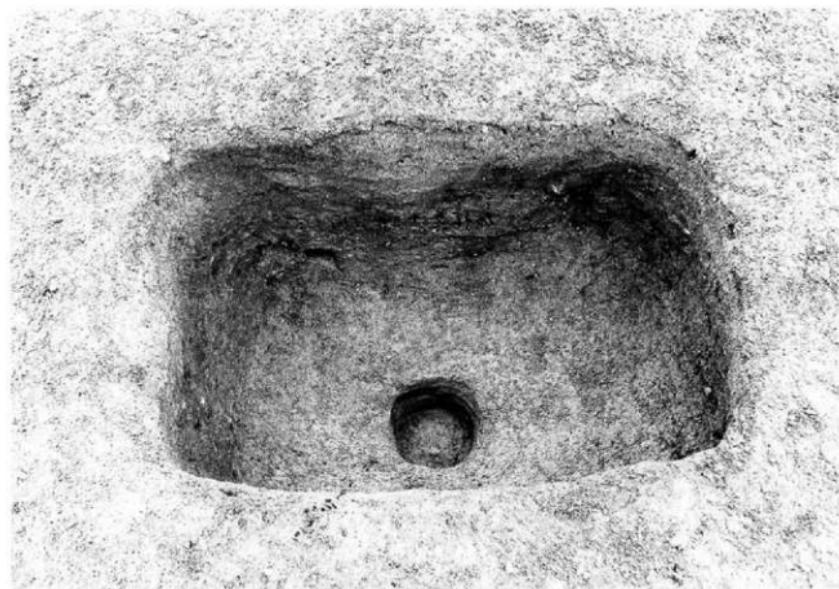
1. SX 02 土壙墓出土状況（北から）



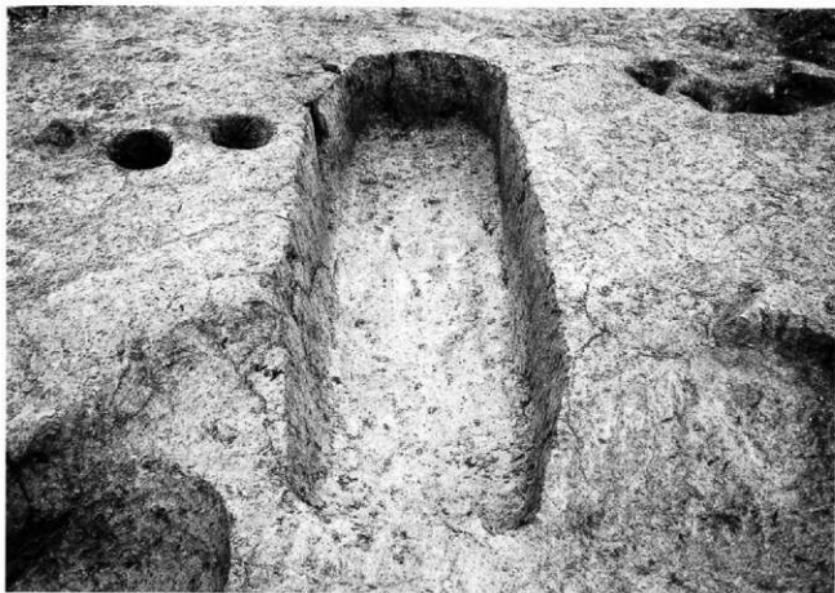
2. SX 02 土壙墓玉類出土状況（南から）



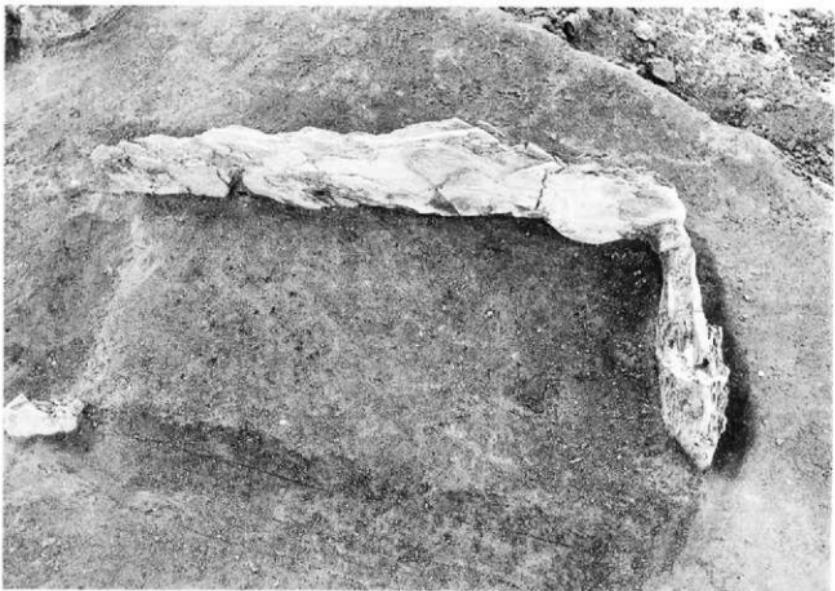
1. SX 04 土壌墓出土状況（南西から）



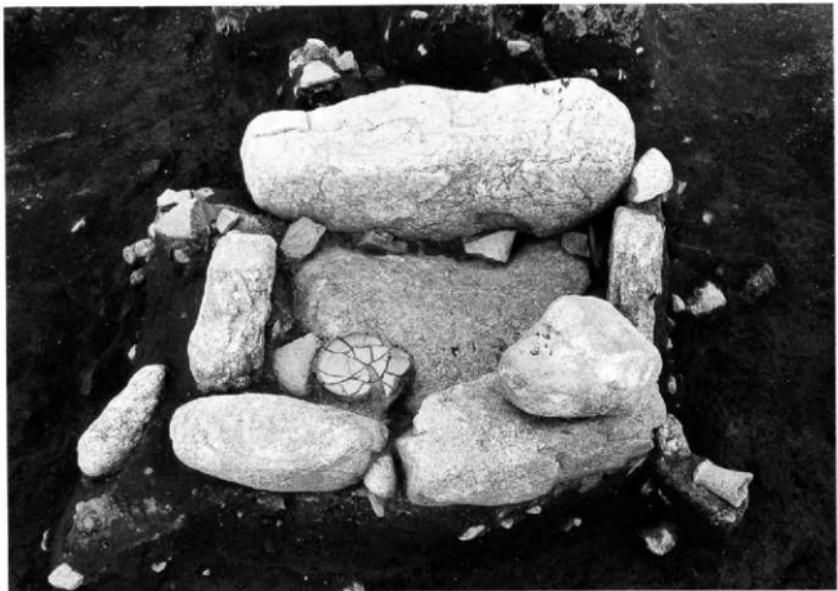
2. SX 06 土壌墓出土状況（北から）



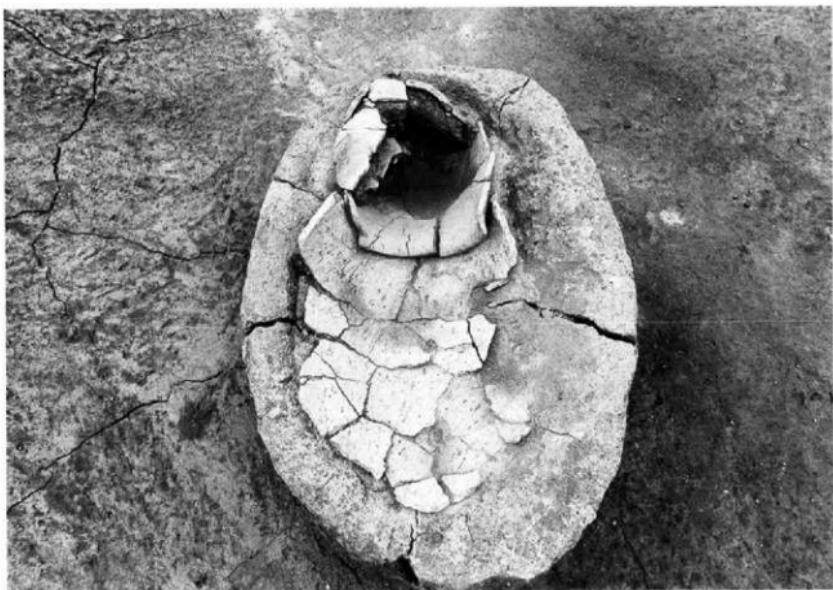
1. SX 10 土壙墓出土状況（北東から）



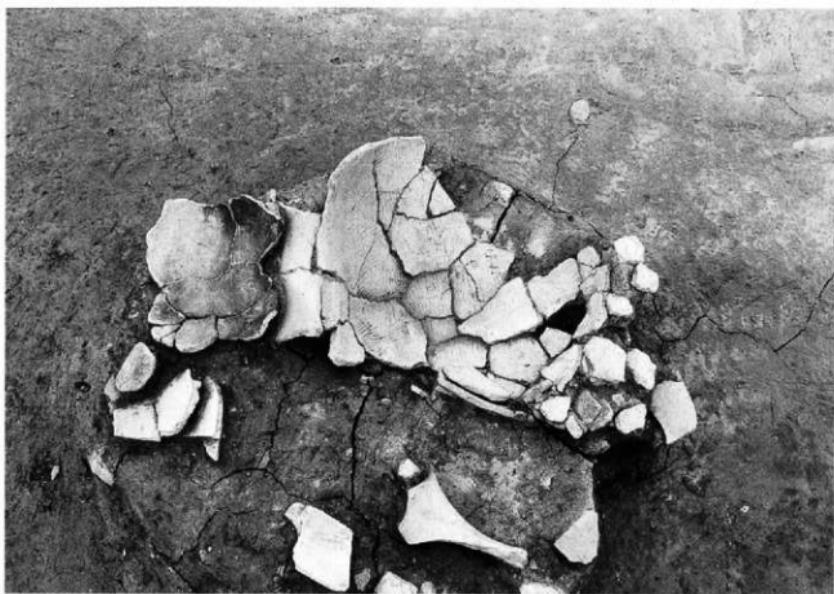
2. SX 12 石棺墓出土状況（西から）



1. SX 13 石棺墓出土状況（北から）



2. SX 15 石棺墓出土状況（北東から）



1. SX 17 墓出土状況（東から）



2. SX 18 墓出土状況（北東から）



1. 吉武S群 27号墳出土状況全景（南から）



2. 吉武S群 27号墳石室出土状況（南から）



3. 吉武S群 27号墳石室内副葬器出土状況（西から）



4. 吉武S群 27号墳周溝内遺物出土状況（北から）



1. 吉武S群 27号墳石室内副葬遺物出土状況（南東から）



2. 吉武S群 27号墳石室内副葬土器出土状況（南から）



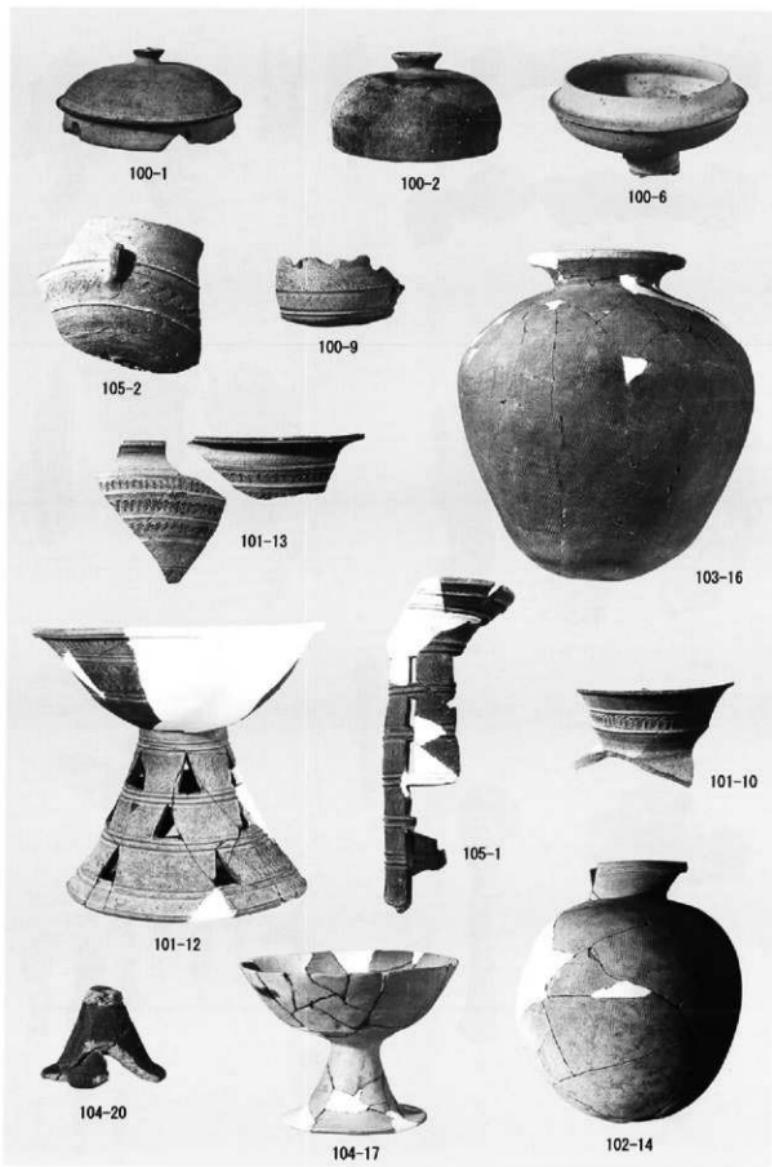
1. 1号石組み出土状況（南東から）



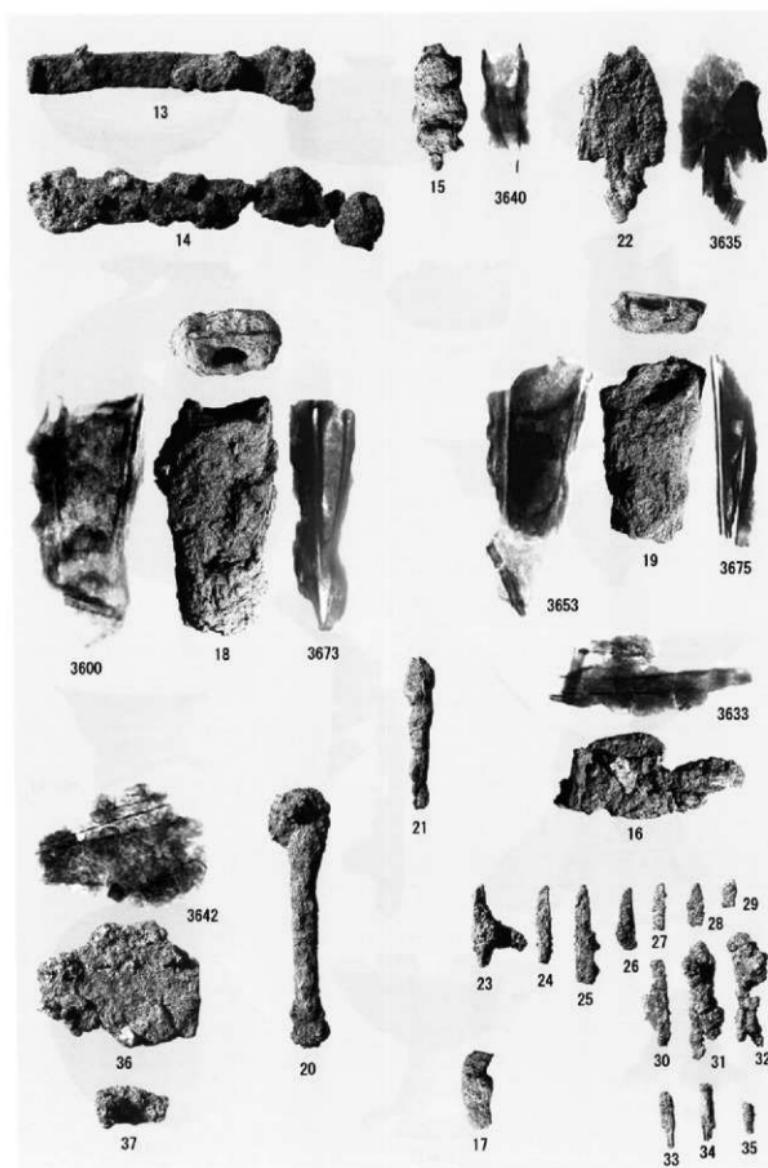
2. 1号石組み出土状況（北から）



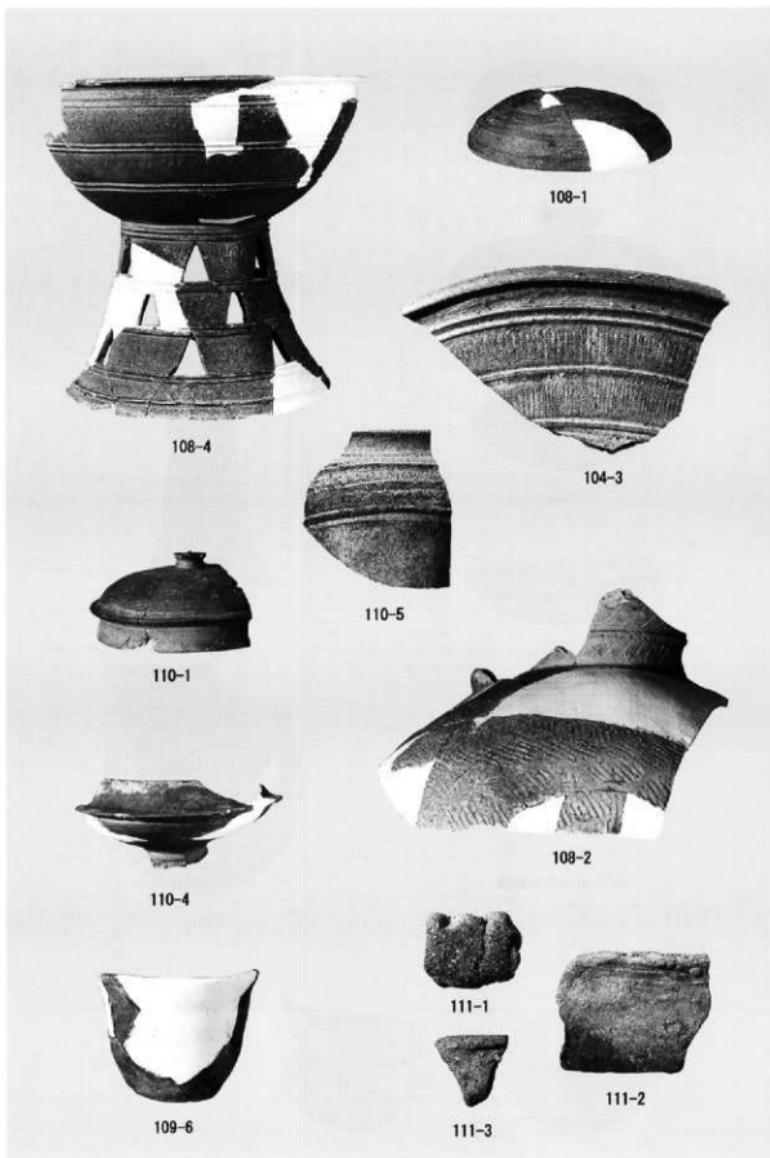
3. 1号石組み出土土器



S 27 号墳出土土器類



S 27号墳出土鐵器類



S 28 号填周溝内出土土器類



1. S3号填出土器類

05045

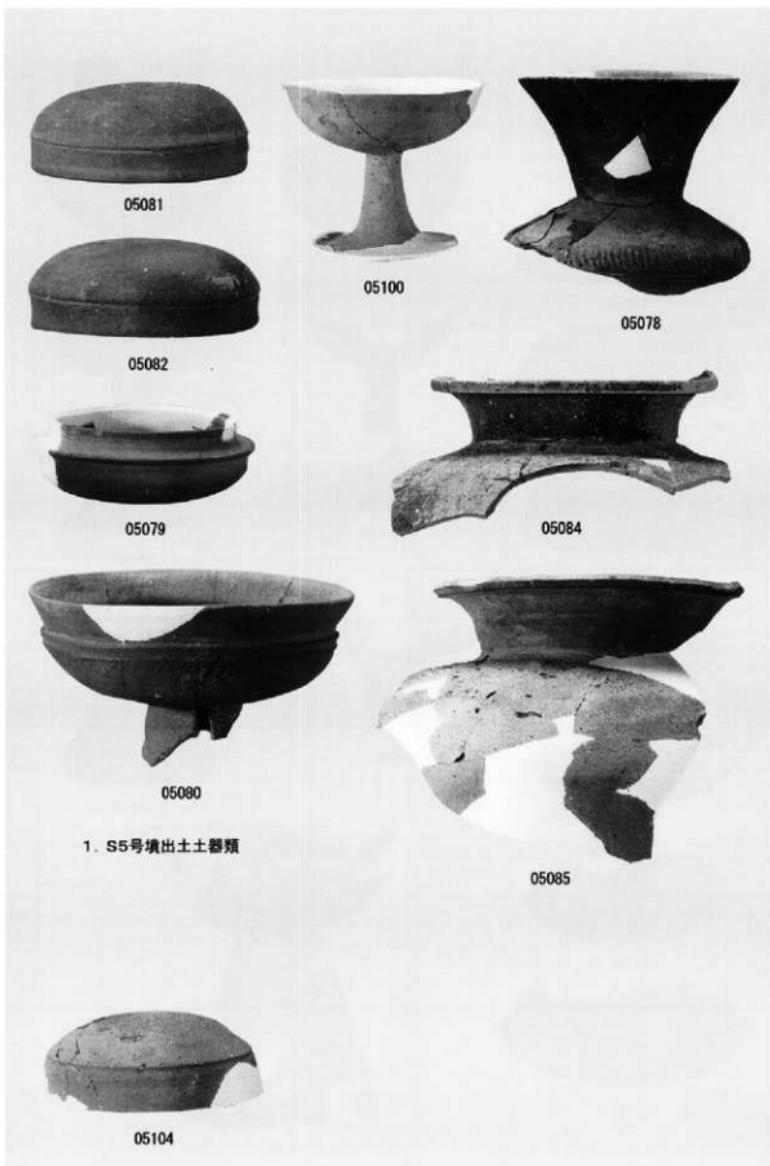


05073



05507

2. S4号填出土器類



1. S5号填出土器類

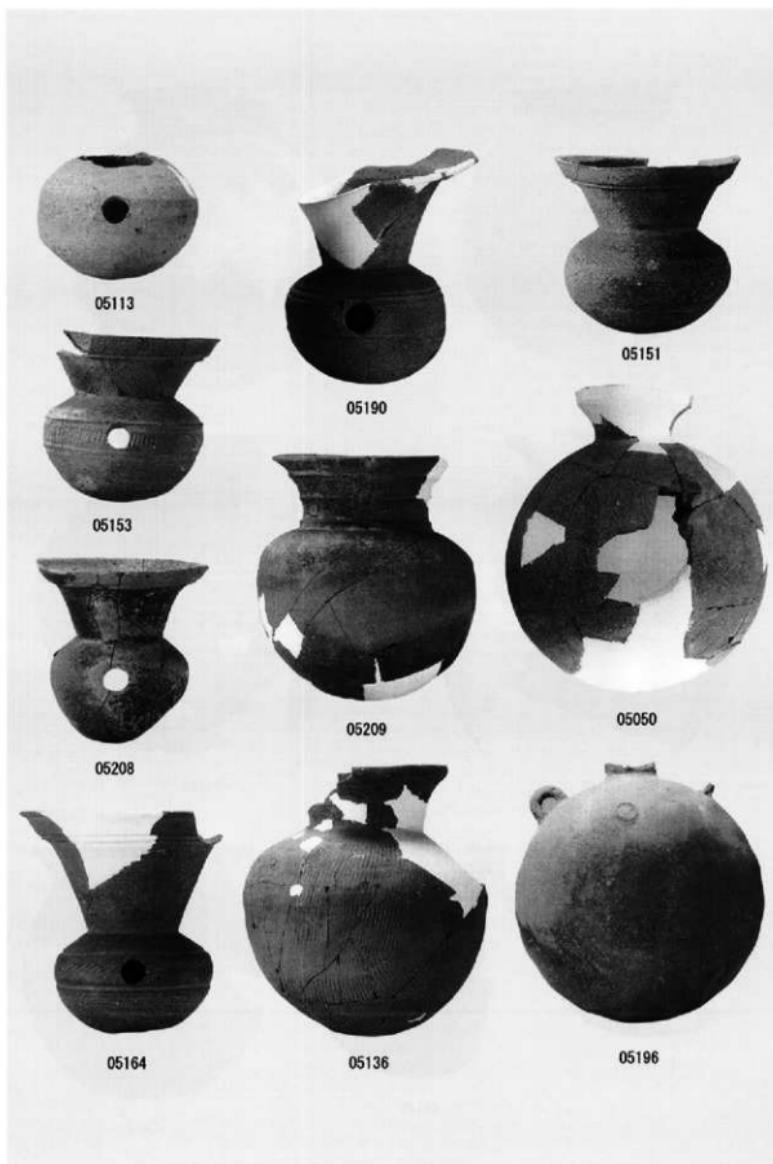
05085

05104

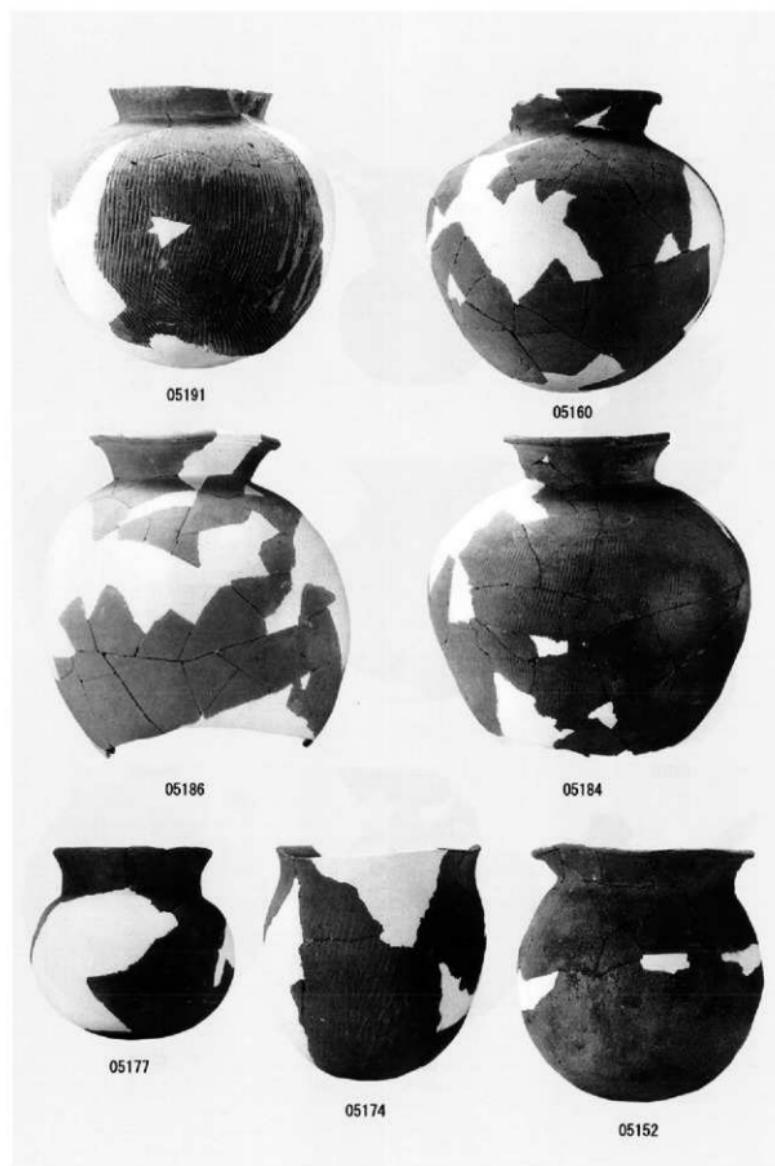
2. S6号填出土器類



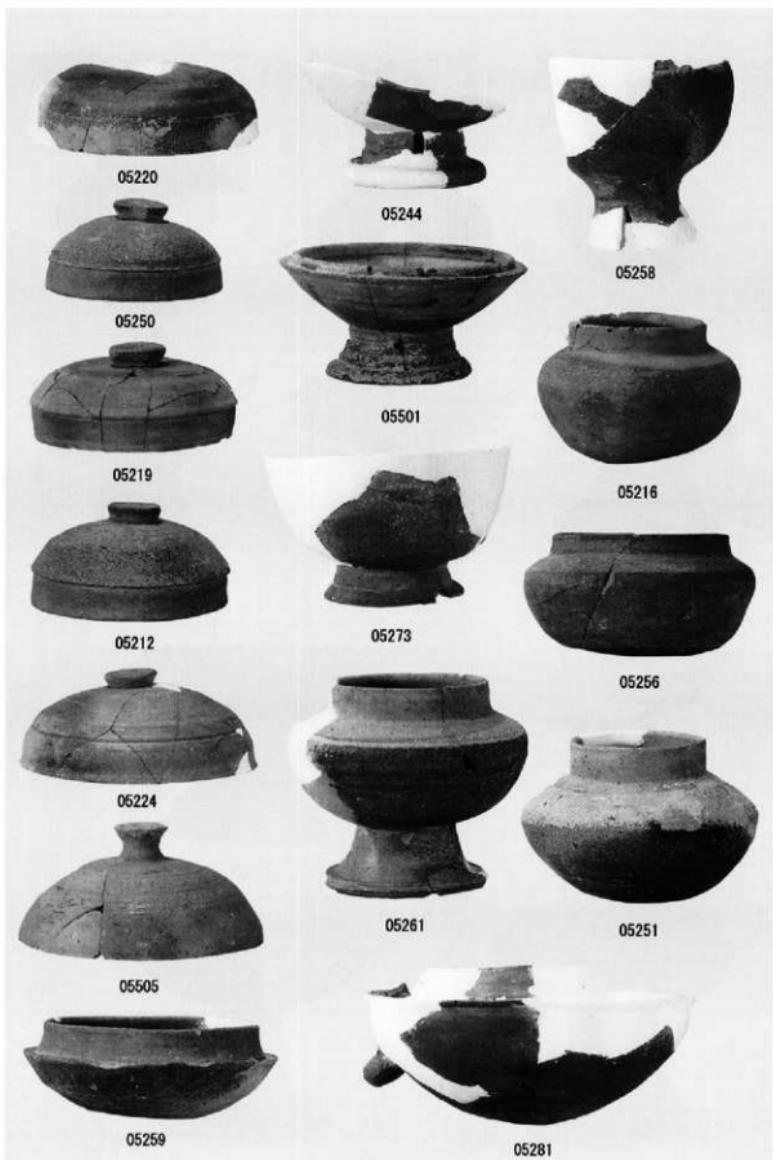
S3-6-8号墳出土土器類 (1)



S3·6·8号墳出土土器類 (2)



S8号填出土器類 (3)



S9号填出土土器類 (1)



S9号墳出土土器類 (2)

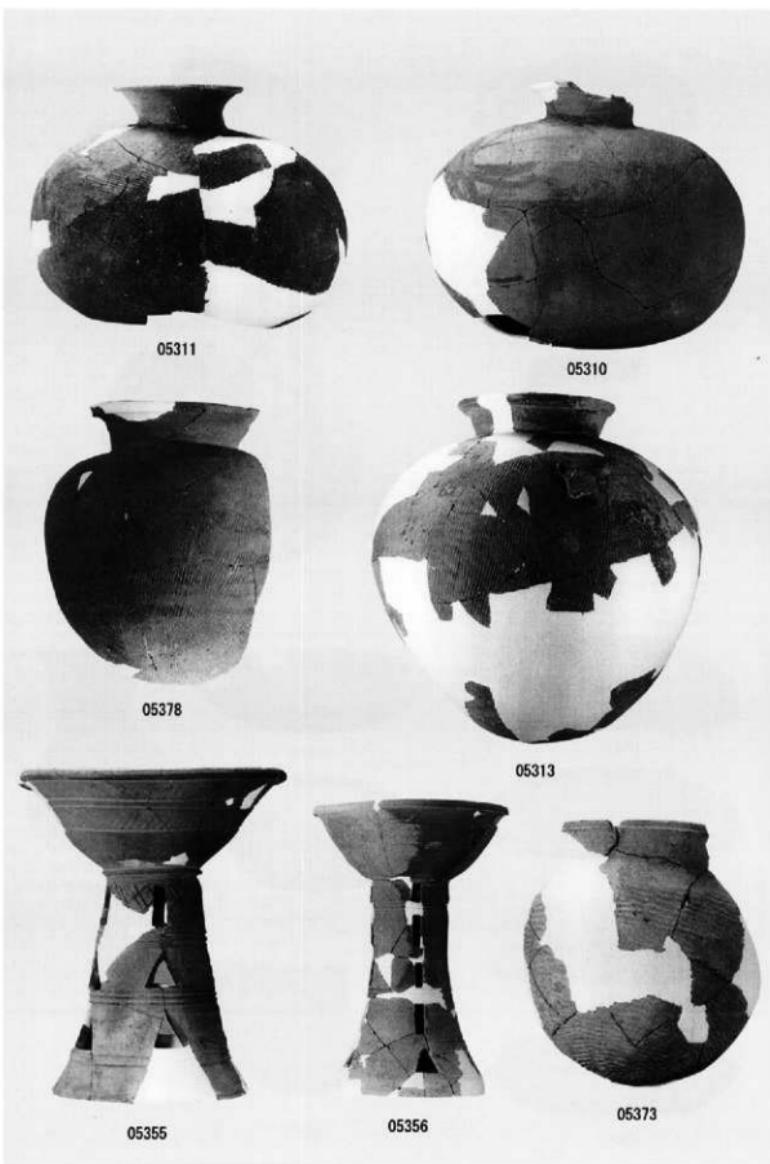


1. S9号墳出土土器類 (3)

2. S10号墳出土土器類



S 11 号出土土器類 (1)



S 11号墓出土土器類 (2)



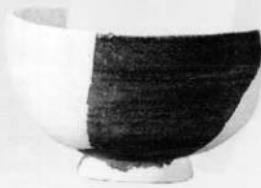
1. S 12 号填出土土器類



2. S 13 号填出土土器類



05415



3. S 15 号填出土土器類



1. S 15 号填出土土器類

05430

05432

05431

05420

05418

05406

2. S 17 号填出土土器類

05428



05427



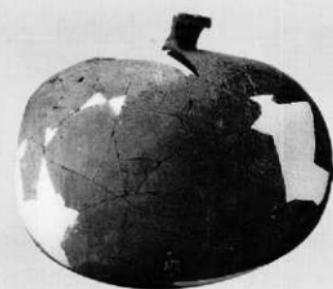
05426



05432



05431





5. S 23 号填出土器類



1. S 24 号填出土器類

05508
05512
05516
05515
05510
05513

05514
05520

05018

05017

05007

05559

05014

05022

05013

2. S 25 号填出土器類



05025



05023



05456



05486



05457



05453



05488



05484



05454



05458



05489



05487



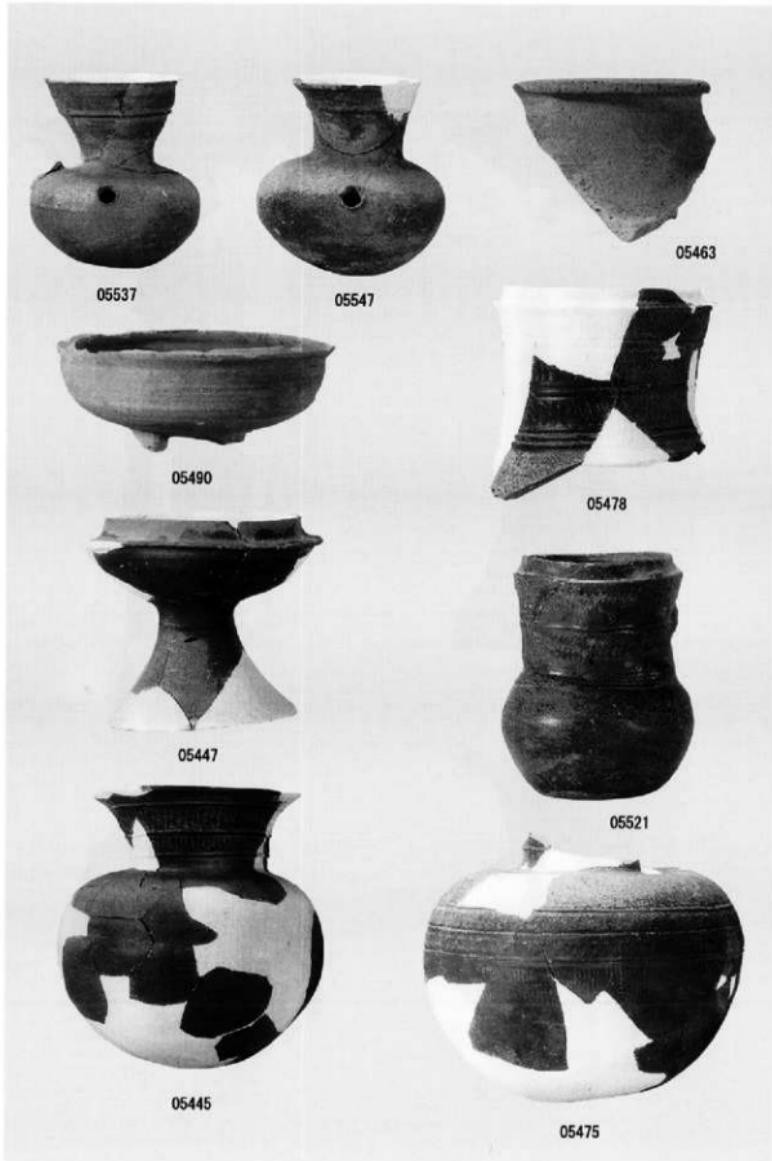
05455



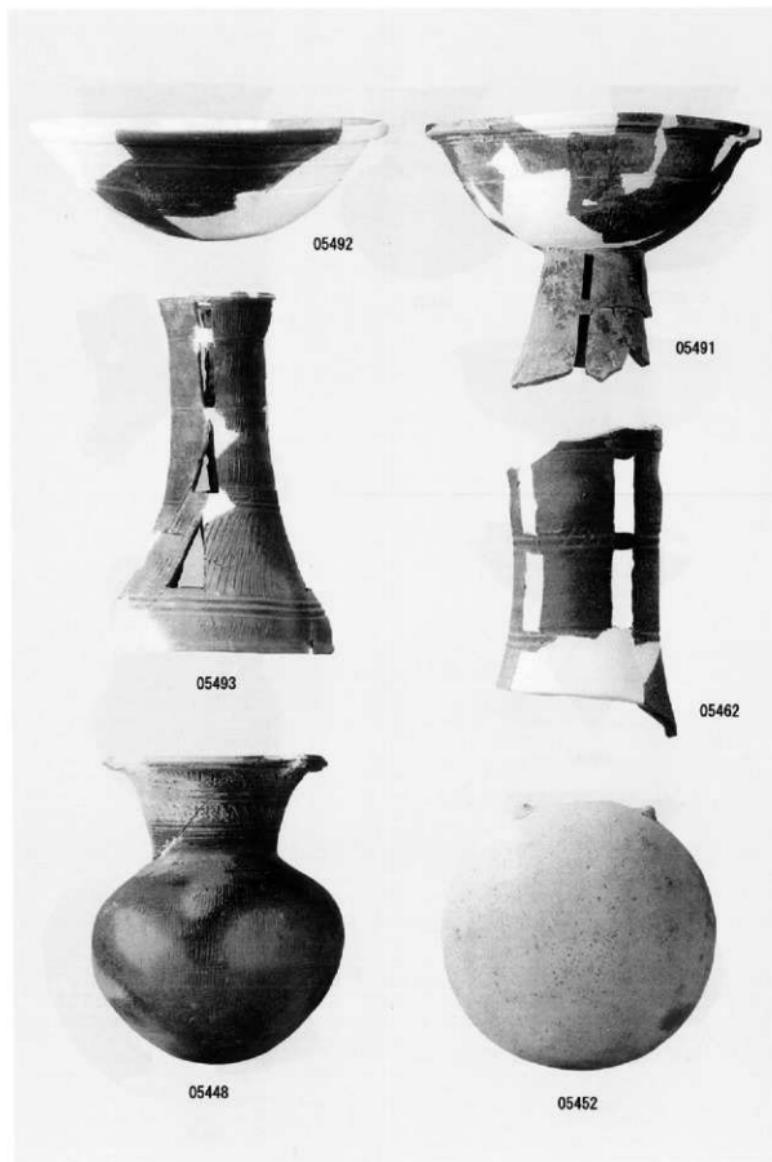
05446

1. S 26 号填出土器類

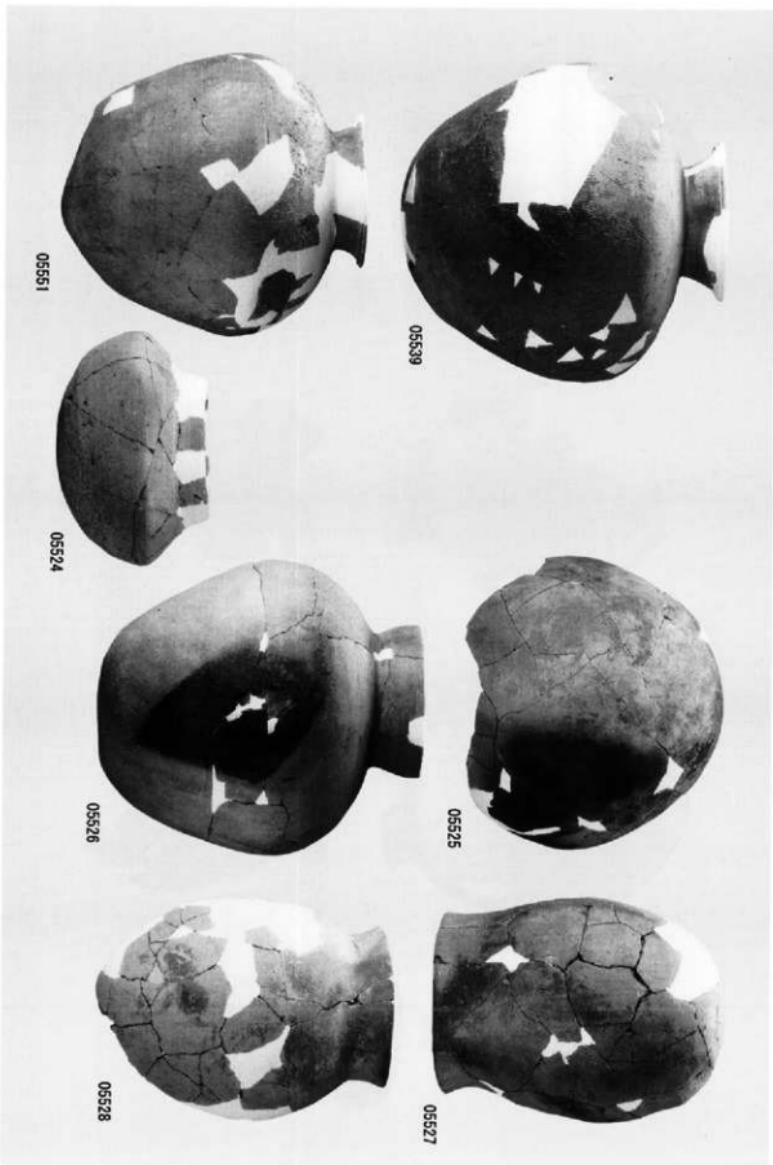
2. 試掘調査出土土器類 (1)



試掘調查出土土器類 (2)



試掘調查出土土器類 (3)



1. 残器皿出土土器 (4)

2. SX 13箱内副制土器

3. SX 14号箱使用土器

4. SX 15号箱使用土器

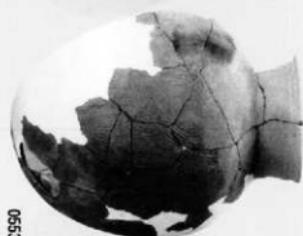
1. SX 16 塗相使用土器



05530



05529



05532



05531



05534



05533



05689

2. SX 17 塗相使用土器

3. SX 18 塗相使用土器および副葬土器

1. SX 19 壺棺使用土器



05535



05679



05667



05670



05672



05682



05681

2. SX 22 出土土器



吉武S古墳群出土鐵器類 (1)



吉武S古墳群出土鐵器類 (2)



S11号墳(石室内)

S11号墳(石室内)

S11号墳(石室内)

S11号墳(石室内)

吉武S古墳群出土鐵器類 (3)

吉武遺跡群 XV

飯盛・吉武園場整備事業関係調査報告書 9

福岡市埋蔵文化財調査報告書第775集

—西区金武古墳群吉武S群3～28号墳等調査報告—

2003年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 森田印刷所

福岡市中央区大手門2丁目1-21